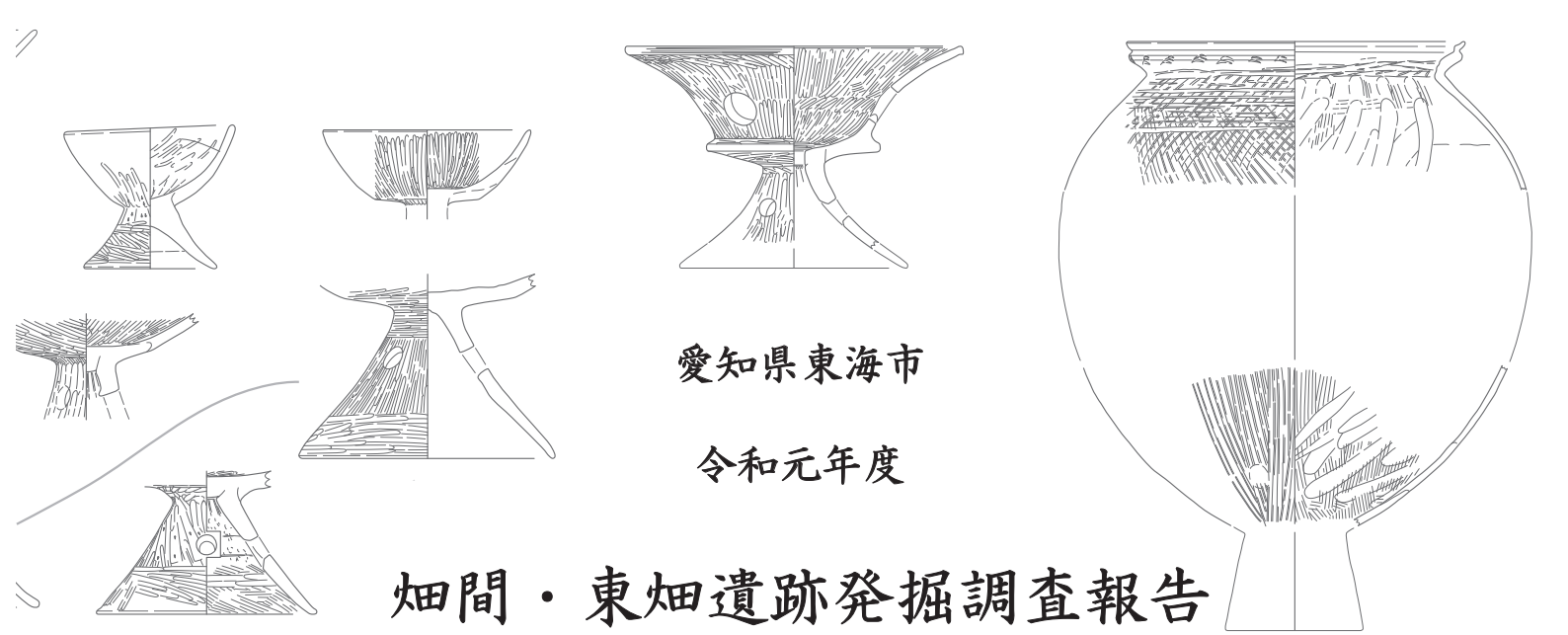
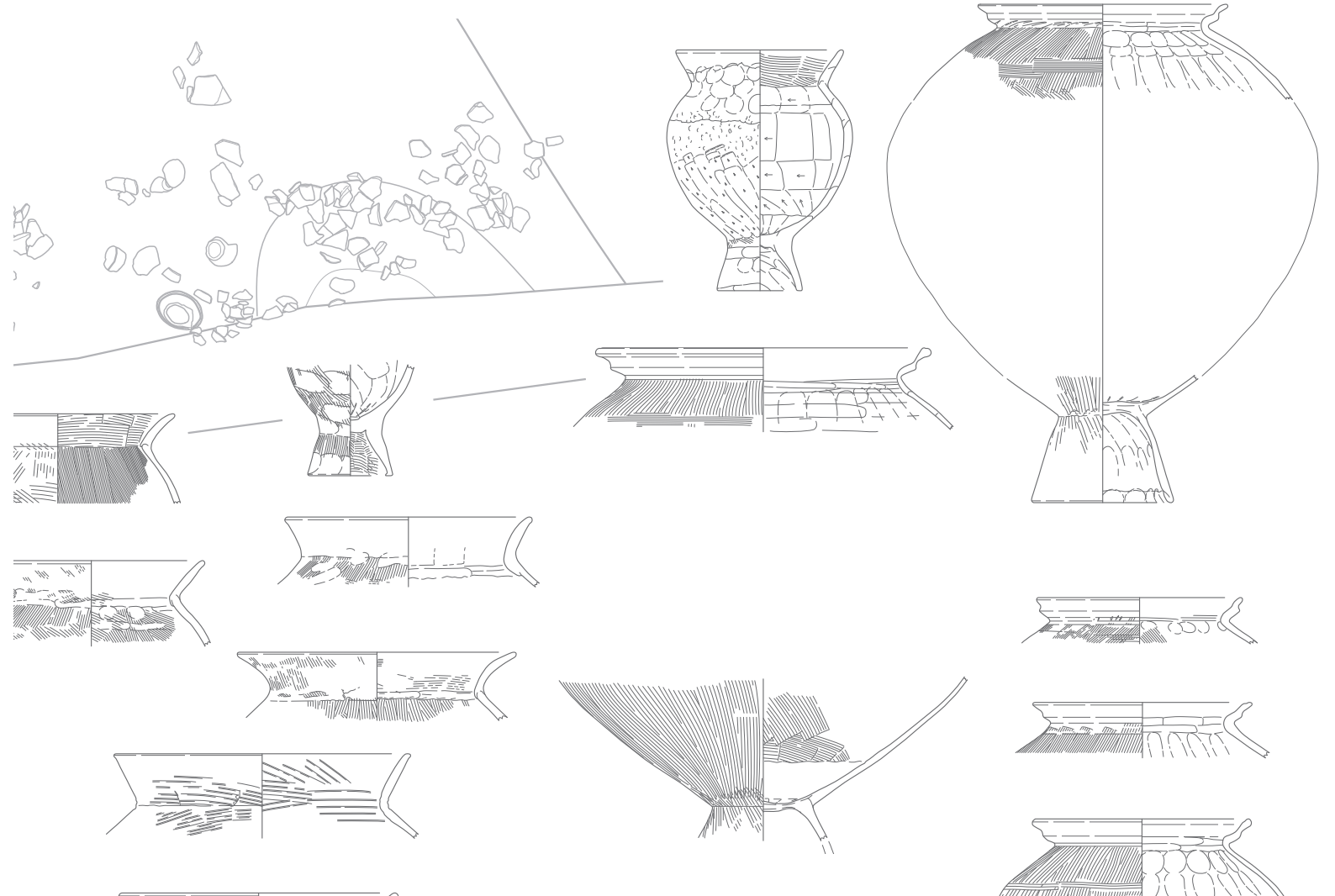


愛知県東海市

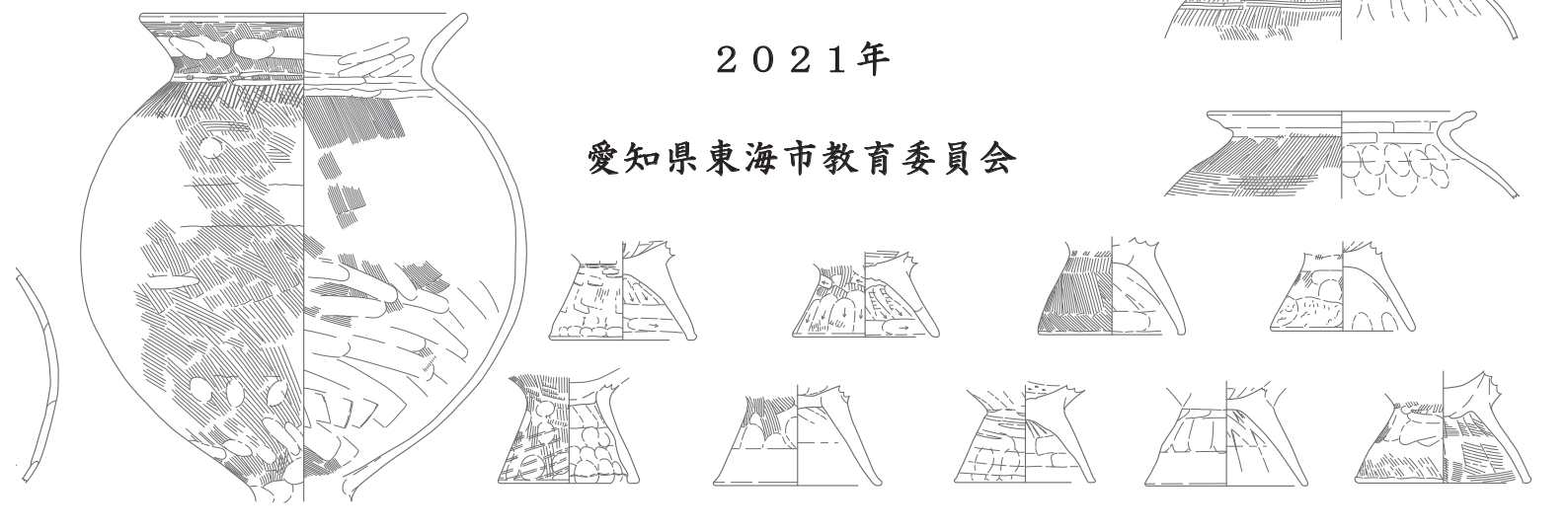
令和元年度

畑間・東畑遺跡発掘調査報告



２０２１年

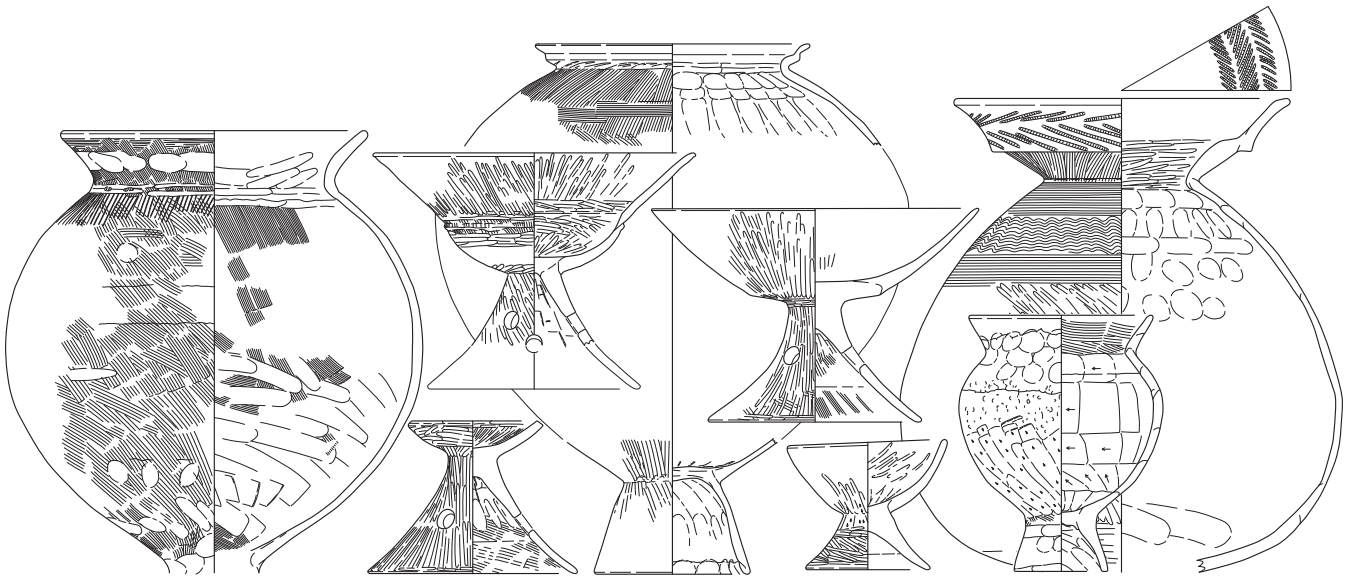
愛知県東海市教育委員会



愛知県東海市

令和元年度

畑間（はたま）・東畑（ひがしはた）遺跡発掘調査報告



２０２１年

愛知県東海市教育委員会

1 地点　027SU 土器集積

１地点全景（西から）

001 土製品

084 器台

027SU 遺物出土状況（部分）

016 複合口縁壺

027SU 土器集積

027 く字甕

017 壺の赤彩

083 器台

049 S 字甕

101 S 字甕

巻頭図版第４

129SU 土器集積検出状況

035SI 住居址完掘状況

035SI 出土の須恵器

015 土器棺検出状況

001SM 貝層検出状況

d-287 井戸検出状況

063SK 地山層における皿状構造の様子

２地点　001SX 粘土貼り遺構検出状況

２地点　016SK 粘土貼り遺構断面

２地点　015SK 粘土貼り遺構検出状況

巻頭図版第６

２地点全景（太田川駅方面の展望）

３地点全景（木田方面の展望）

３地点からの展望

序

伊勢湾に面した知多半島西岸の付け根に、私どもの愛知県東海市は位置しています。はるか昔には、あゆち潟と呼ばれた遠浅の海が広がり、その沿岸には多くの先人たちの暮らしがありました。現在、あゆち潟はわが国有数の工業地帯へとその姿を変え、海との関わり方も漁業から工業へと移ろいましたが、本市にとって海との繋がりは、現在でも切ってもきれないものです。

こうした海との関わりの中で形成された先人たちの暮らしの跡は埋蔵文化財という形で現在も残されています。

東海市では名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成４年度（１９９２年度）から土地区画整理事業を実施してきました。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成１１年度（１９９９年度）から記録保存を目的とした発掘調査を実施しています。

本書ではこの土地区画整理事業に伴う令和元年度（２０１９年度）の畑間・東畑遺跡における発掘調査成果について報告します。この調査では、古墳時代初頭の祭祀に伴う土器集積跡を確認することが出来ました。一括性が高く、学術的価値の高い資料として今後の活用が期待できると共に、土器を使い、祈りを捧げた当時の人々の思いを感じることができるかも知れません。

今後、本書が既刊の報告書と合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和３年（２０２１年）３月

愛知県東海市教育委員会
教育長　加　藤　千　博

例　言

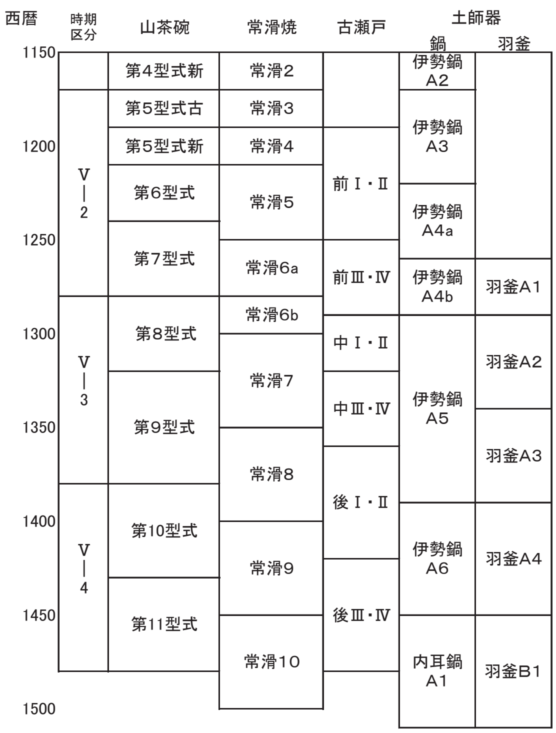
1. 本書は愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡、東畑（ひがしはた）遺跡の発掘報告書である。
2. 本調査は、知多都市計画事業東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市より依頼を受け実施した。調査に際しては、株式会社四門名古屋支店に「畑間・東畑遺跡発掘調査業務委託」として業務委託の上、実施した。
3. 本事業は、現地での発掘調査を令和元年（2019 年）９月２日から同年 12 月 15 日まで実施した。出土遺物の洗浄や注記などの一次整理作業は発掘調査期間の後半から現場事務所で開始し、復元・実測作業や資料分析を中心とした二次整理作業は、令和２年（2020 年）５月 15 日から株式会社四門清須支店において発掘調査報告書の作成作業と同時に行い、本書の刊行をもって終了した。

   各地点の調査面積は以下のとおりである。

   １地点：（東畑遺跡地内、HH19-1）：　326㎡
   ２地点：（畑間遺跡地内、HM19-2）：　223㎡
   ３地点：（畑間遺跡地内、HM19-3）：　191㎡
   合計調査面積　740㎡
4. 現地調査は、東海市教育委員会社会教育課統括主任宮澤浩司・同主事早川由香里の監督の下、株式会社四門清須支店主任調査員坂野俊哉、現場代理人・施工管理技士山崎弘勝・川口洋次郎、調査補助員兼測量技師樋田泰之が担当した。
5. 調査の実施にあたり東海市中心街整備事務所、愛知県教育委員会（当時）、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、知多古文化研究会など、関係各位の御協力を賜った。
6. 自然科学分析のうち、各地点から採集した貝層の貝種同定を名古屋大学博物館新美倫子氏に、プラントオパールや微粒炭をターゲットにした土壌分析および各種サンプルの放射性炭素年代測定等を（株）パレオ・ラボに依頼した。
7. 調査および報告書作成にあたっては、青木　修、赤塚次郎、石黒立人、小栗康寛、鈴木敏則、立松　彰の各氏にさまざまな助言および協力を頂戴した。ここに記して御礼申し上げる次第である。
8. 発掘調査における諸作業と現場事務所における出土遺物の水洗および、一次・二次整理作業は、
   石黒立人、井上由子、勝野真弓、久野武志、下谷雅子、神野攻一、土橋六男、藤井恵美子、平野昌子、
   山崎久生らの尽力によってなし得たものである。ここに名前を記し、感謝申し上げる次第である。
9. 出土遺物の実測・採拓・復元およびデジタルトレース作業は、植松早苗、塚本和弘、西村晴巳、藤森紀子、
   水島絵理（以上、株式会社四門）・宮坂晶子が行った。
10. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は、坂野俊哉が行った。
11. 今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および各種資料はすべて東海市教育委員会で保管している。
12. 本書の執筆・編集は坂野俊哉（株式会社四門）を中心に、第１章第１節～第３節を早川由香里（東海市教育委員会）が、第２章の１地点 035SI と 143SK を石黒立人氏が、３地点を樋田泰之（株式会社四門）が行った。なお、第３章自然科学分析に関しては、各節の分析項目冒頭に執筆者と所属機関を記してある。これらの他に、本遺跡で特徴的にみられる「く」字状口縁台付甕に関する論考を、調査参加者である石黒立人氏から寄稿いただいた。ここに記して感謝の意を表する次第である。
13. 表紙・裏表紙は今回の調査で検出された土器集積の遺物実測図集成図を使用した。

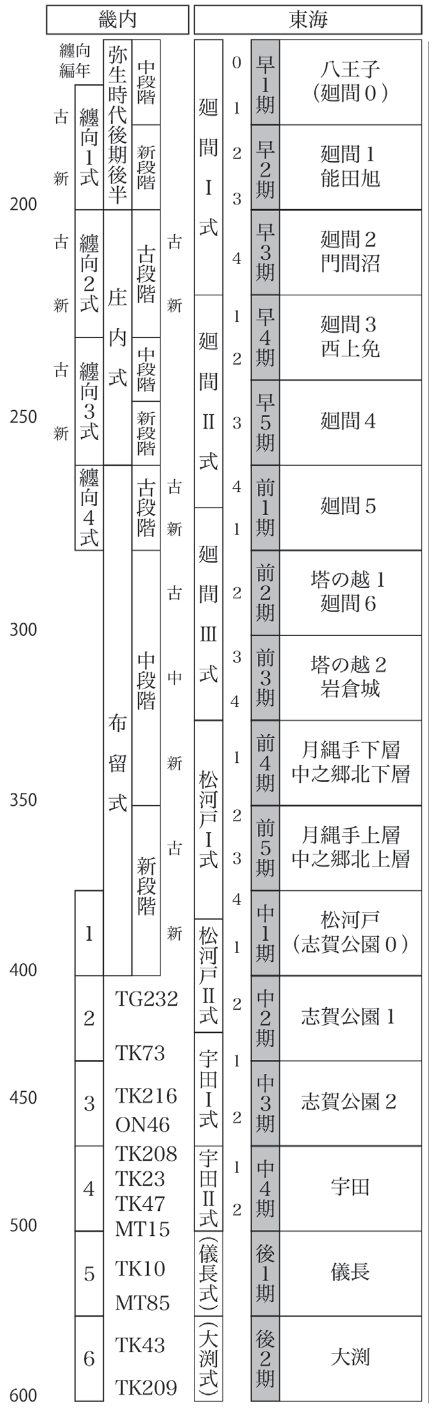
凡　　例

1. 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系にて表記している。メートル(m)単位での表記を基本とするが、文中では必要に応じてセンチメートル(cm)を用いている。
2. 標高は全てT.P.＝東京湾平均海面高度による。
3. 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2007年版)を用いた。
4. 本書で使用する遺構番号は、種類種別に関係なく各地点毎に完結した通し番号を与え、番号の後ろにその属性記号を表記してある。遺物番号は遺物実測図の通番を基本に、地点上げ遺物の場合は出土地点を表す「d」を先に記し、そのあとに通し番号(例：d-001、d-123など)を付した。
5. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
6. 参考文献目録は必要に応じて本文脚注などに記したものもあるが、あらためて巻末にも一括して掲載した。



中世遺物編年対照表

＊中村　毅『平成28年度畑間遺跡発掘調査報告』2018より転載



弥生土器・土師器編年対照表

早野浩二「知多式以前」
『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第14号』2013より部分転載

目　　次

巻頭図版
序
例言・凡例

第１章　調査の経緯と遺跡の環境……1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と地理的歴史的環境 …… 2
　第３節　畑間・東畑遺跡における既往の調査 …… 4
　第４節　発掘調査の方法 …… 8
　第５節　調査経過 …… 10

第２章　畑間遺跡（2 地点・3 地点）、東畑遺跡（1 地点）の調査 …… 15
　第１節　１地点（HH19-1）の調査 …… 15
　第２節　２地点（HM19-2）の調査 …… 53
　第３節　３地点（HM19-3）の調査 …… 74

第３章　自然科学分析 …… 84
　第１節　貝層分析の結果 …… 84
　第２節　東畑遺跡のプラント・オパール分析と微粒炭分析 …… 88
　第３節　東畑遺跡の放射性炭素年代測定 …… 92
　第４節　東畑遺跡出土土器胎土内の塊状赤色物の成分分析 …… 94
　第５節　東畑遺跡出土のＳ字状口縁台付甕の胎土分析 …… 97

第４章　まとめ …… 104
　1　古墳時代前期の土器集積 027SU について …… 104
　2　粘土貼り遺構の問題 …… 106
　3　複合遺跡としての在り方と地域の独自性について …… 110

引用・参考文献 …… 114

付載　畑間・東畑遺跡 (令和 1 年度 1 地点) 出土の「く」字状口縁台付甕をめぐって …… 1

図版 (遺構観察表・遺物実測図・遺物観察表・遺物写真)

挿図目次

第1図　畑間・東畑遺跡の位置 …… 1
第2図　周辺遺跡配置図 …… 3
第3図　遺跡分布図（詳細） …… 4
第4図　調査区位置図 …… 6
第5図　調査区グリッド図 …… 7
第6図　基本層序模式図 …… 9
第7図　1地点セクション位置（1/400）…… 15
第8図　1地点平面図（西半） …… 17
第9図　1地点平面図（東半） …… 19
第10図　1地点南セクション図 …… 21
第11図　1地点東セクション図 …… 23
第12図　131・132SI　住居址 …… 24
第13図　027SU 出土土器集成図 …… 25
第14図　027SU 土器集積遺物分布図 …… 27
第15図　129SU 土器集積遺物出土状況図 …… 30
第16図　120SI　住居址 …… 31
第17図　035SI・143SK 平面図および出土遺物実測図 …… 33
第18図　023SD　溝 …… 34
第19図　023SD 出土遺物実測図 …… 35
第20図　028・029SK　土坑 …… 36
第21図　030・032・034・037・041SK　土坑 37
第22図　033SK　土坑　036SD　溝 …… 38
第23図　060・062・063・075・076SK　土坑 39
第24図　089・092SK　土坑　090SD　溝 …… 40
第25図　1地点条痕文土器と剥片の出土分布図 43
第26図　土錘・陶丸の出土分布図 …… 45
第27図　古銭の出土分布図 …… 46
第28図　1地点遺物出土分布図（西半） …… 49
第29図　1地点遺物出土分布図（東半） …… 51
第30図　2地点セクション位置（1/400）…… 53
第31図　2地点平面図 …… 55
第32図　2地点大区北・東セクション図 …… 57
第33図　2地点小区北・東セクション図 …… 59
第34図　001SX　用途不明の粘土貼り遺構 …… 60
第35図　016SK　粘土貼り遺構 …… 61
第36図　015SK 粘土貼り遺構 …… 63
第37図　003SK　土坑 …… 64
第38図　002SK・012SK・031SK …… 65
第39図　021SK・032SD・023SK・025SK・027SK・019SM …… 67
第40図　017SK・010SK …… 68
第41図　2地点大区遺物出土分布図 …… 69
第42図　小区遺物出土分布図 …… 71
第43図　3地点セクション位置（1/400）…… 74
第44図　3地点平面図 …… 75
第45図　3地点南セクション図 …… 76
第46図　3地点東セクション図 …… 77
第47図　002SK　土坑 …… 78
第48図　003SK　土坑 …… 78
第49図　009SK・017SK　土坑 …… 80
第50図　011SK・012SK　土坑 …… 81
第51図　3地点遺物出土分布図 …… 83
第52図　植物珪酸体分布図 …… 89
第53図　暦年較正結果 …… 93
第54図　赤色物のX線回析分析結果 …… 96
第55図　粗製小型土器実測図 …… 105
第56図　東畑地区における遺構の時期的変化 107
第57図　知多半島北部西岸航空写真 …… 111

付表目次

第1表　既刊報告書一覧 …… 5
第2表　027SU 土器集積の器種構成推定値 …… 23
第3表　出土貝類種名 …… 86
第4表　貝類出土内容 …… 87
第5表　貝類出土最小個体数 …… 87
第6表　分析資料一覧 …… 88
第7表　試料1g当りのプラント・オパール個数 89
第8表　微粒炭分析に用いた試料の計量値と微粒炭数 …… 89
第9表　測定試料および処理 …… 92
第10表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 93
第11表　蛍光X線半定量分析結果（mass%）… 95
第12表　分析試料の詳細 …… 97
第13表　胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載 …… 100
第14表　胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表 100
第15表　岩石片の起源と組み合わせ …… 101

写 真 目 次

写真１　貝類写真（約 3/4）…… 86
写真２　035SI から産出した植物珪酸体と
　　微粒炭分析のプレパラート写真…… 90
写真３　土器胎土内塊状赤色物の成分分析…… 94
写真４　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真…… 103

付載挿図・付表目次

第１図　今回報告分く字甕の法量分布 ……1
第１表　今回報告分く字甕の属性 ……2
第２図　畑間・東畑遺跡の甕 a に関連する資料 …3
第２表　甕出土比較 ……4
第３図　畑間・東畑遺跡の甕 a
　　その後に関連する資料……5
第４図　宇田甕の世界 ……6
第５図　関連遺跡分布図 ……7

巻頭図版目次

巻頭図版第１　１地点　027SU 土器集積
巻頭図版第２　１地点全景（西から）
　　027SU 遺物出土状況（部分）
　　001 土製品
　　084 器台
　　016 複合口縁壺
　　027SU 土器集積
巻頭図版第３　027 く字甕
　　017 壺の赤彩
　　083 器台
　　049 S 字甕
　　101 S 字甕
巻頭図版第４　129SU 土器集積検出状況
　　035SI 住居址完掘状況
　　035SI 出土の須恵器
　　015 土器棺検出状況
　　001SM 貝層検出状況
巻頭図版第５　d-287 井戸検出状況
　　063SK 地山層における皿状構造の様子
　　２地点　001SX 粘土貼り遺構検出状況
　　２地点　016SK 粘土貼り遺構断面
　　２地点　015SK 粘土貼り遺構検出状況
巻頭図版第６　２地点全景（太田川駅方面の展望）
　　３地点全景（木田方面の展望）
　　３地点からの展望

図 版 目 次

図版第１　１地点遺構観察表（１）
図版第２　１地点遺構観察表（２）
図版第３　１地点遺構観察表（３）
図版第４　１地点出土遺物実測図（１）
図版第５　１地点出土遺物実測図（２）
図版第６　１地点出土遺物実測図（３）
図版第７　１地点出土遺物実測図（４）
図版第８　１地点出土遺物実測図（５）
図版第９　１地点出土遺物実測図（６）
図版第 10　１地点出土遺物実測図（７）
図版第 11　１地点出土遺物実測図（８）
図版第 12　１地点出土遺物実測図（９）
図版第 13　１地点出土遺物実測図（10）
図版第 14　１地点出土遺物実測図（11）
図版第 15　１地点出土遺物実測図（12）
図版第 16　１地点遺物観察表（１）
図版第 17　１地点遺物観察表（２）
図版第 18　１地点遺物観察表（３）
図版第 19　１地点遺物観察表（４）、
　　１地点出土石器観察表
図版第 20 ～ 37　１地点出土土器・石器写真
図版第 38　２地点遺構観察表
図版第 39　２地点出土遺物実測図（１）
図版第 40　２地点出土遺物実測図（２）
図版第 41　２地点出土遺物実測図（３）
図版第 42　２地点遺物観察表（１）
図版第 43　２地点遺物観察表（２）、
　　２地点出土石器観察表
図版第 44 ～ 46　２地点出土土器・石器写真
図版第 47　３地点遺構観察表
図版第 48　３地点出土遺物実測図、遺物観察表

第 1 章　調査の経緯と遺跡の環境

第 1 節　調査にいたる経緯

畑間・東畑遺跡は愛知県東海市大田町に所在する（第 1 図）。平成 8 年度から同 10 年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査[1)]によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけて、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

第 1 図　畑間・東畑遺跡の位置

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成 4 年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の三つの事業を実施している。これら事業のうち、土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するため、平成 8 年度に試掘調査を実施した[2)]。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することを確認した（第 2 図）。試掘調査の結果に基づき、土地区画整理事業担当部局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成 11 年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。令和元年度末時点での調査済面積は 27,350㎡である。

令和元年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成 31 年 2 月 14 日付けにて文化財保護法第 94 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、平成 31 年 3 月 6 日付け 30 教生第 3958 号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。畑間・東畑遺跡範囲内の計 2 地点 380㎡については、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成 31 年 4 月 22 日付け中第 8 号にて発掘調査依頼があった。令和元年 5 月 30 日付け社第 84 号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する旨回答し、現地調査業務及び 1 次整理作業について、令和元年 7 月 9 日に株式会社四門名古屋支店と業務委託契約を締結した。

現地調査は梅雨などの影響で令和元年 9 月 2 日より着手し、社会教育課職員の監督の下、2 地点、1 地点、3 地点の順に調査を実施した。令和元年 12 月 15 日に現地調査は終了し、その後、現場事務所にて 1 次整理作業を実施し、令和 2 年 3 月 19 日付けで成果品の納入を受けた。

令和２年度には報告書作成を行った。現地調査を受託した株式会社四門名古屋支店と２次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を令和２年５月14日に締結した。その後、社会教育課職員の監督の下、２次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。

第２節　遺跡の位置と地理的歴史的環境

畑間・東畑遺跡は知多半島西岸の伊勢湾に面した海岸平地に展開する砂堆（さたい）上に立地する遺跡である。知多半島西岸部には海岸部に向けて開けた海岸平地がいくつか展開するが、畑間・東畑遺跡の立地する東海市大田町周辺から、知多市北部の寺本にかけて南北に延びる海岸平地はその中でも最大のものである。この平地を構成する地層は沖積層であり、縄文海進の時期には水面下にあったとみられる。その証左として、畑間・東畑・郷中遺跡の東側に延びる丘陵上に展開する高ノ御前遺跡がある。高ノ御前遺跡の現在の海抜高は12ｍ程であり、市内最古の縄文時代前期の土器が出土している。畑間・東畑遺跡周辺が陸地化したのは、海水面が後退する縄文時代中期から後期にかけてとみられ、東畑遺跡からは当該期の縄文土器が少なからず出土する。縄文時代中期から後期には砂堆と呼ばれる砂の高まりが形成され、現在遺跡の範囲として捉えている海岸平地が陸地化していたと考えられる。

砂堆とは、伊勢湾を河口に持つ木曽川や、知多半島の丘陵部から流れる小河川や、波による陸地の浸食など､様々な作用によって供給された砂が､伊勢湾の沿岸流などによって運ばれて海岸に沿って堆積したものと考えられており、その形成時期の違いによって本遺跡周辺では３条の砂堆列がみられる。最も海岸から奥の砂堆列から順に第１、第２、第３砂堆と呼んでおり、畑間・東畑遺跡は第１砂堆に位置する。この第１砂堆は最も東西幅が広く大規模であるが、南北方向は丘陵部に規制され、１ｋｍ程にとどまる。この丘陵部は北側の丘陵上に真言宗の古刹である弥勒寺が、南側丘陵上に天台宗の古刹である観福寺が所在しており、両者に挟まれた位置に畑間・東畑遺跡の集落が展開することは示唆的である。この他第１砂堆状には、最も北側の弥勒寺が立地する丘陵山裾に王塚古墳（古墳時代・滅失)、神宮前遺跡（古墳～中世）が所在する。王塚古墳は、昭和初期の道路拡幅の際に石室などが出土したと伝えられ、出土遺物の一部（須恵器短頸壺・坏蓋）が東海市立郷土資料館に所蔵されている他は詳らかではない。同じく神宮前遺跡についても遺物散布地として知られてはいるが、発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。なお、王塚古墳、神宮前遺跡の両遺跡のすぐ南を流れる大田川は、江戸時代初期に尾張藩２代藩主徳川光友により、横須賀御殿の建築に際して新たに開削された流路である。現在では大田川によって切断されているものの、王塚古墳などは近世までは畑間・東畑遺跡と同じ砂堆上にあったものであり、一体の遺跡群としてとらえる必要があろう。

第２砂堆は第１砂堆と比べて幅が狭く小規模である。名鉄太田川駅の辺りから北側の大宮神社辺りまで広がっている。この砂堆上には後田遺跡（古墳～平安）が位置する。後田遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、製塩土器が採集されており、後述する上浜田遺跡、下浜田遺跡と密接に関連した遺跡であると考えられる。この砂堆の北端に位置する大宮神社は創建時期が不詳であるが、『東海

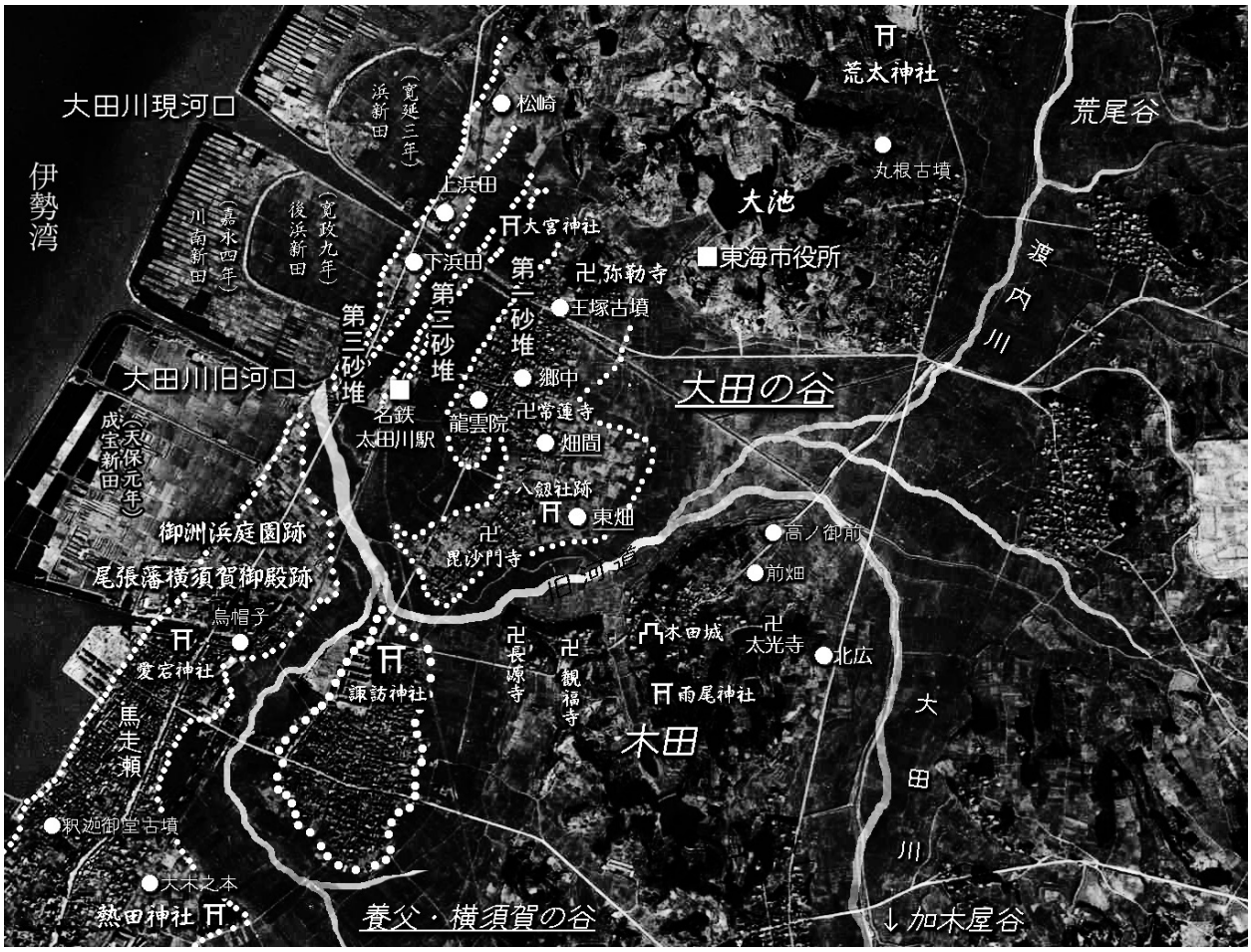
市史』によると平安時代に大郷郷（大田町周辺）が熱田神宮の荘園となるに伴って、荘園鎮守神として熱田から勧請されたと推定されている。

第３砂堆は形成時期が最も新しいが、最も規模が大きく、旧海岸線沿いに知多市北部まで延びている。知多市域ではこの第３砂堆上に弥生時代以降大規模な集落が形成された。本市域では古墳時代中期以降に著名な製塩遺跡として知られる松崎遺跡（古墳～平安）や上浜田遺跡（古墳～平安）、下浜田遺跡（奈良～平安）が存在する。

概観すると、畑間・東畑・郷中遺跡の所在する大田町周辺では、最も奥側の第１砂堆上に中心的な集落が立地し、第２、第３砂堆が積極的に利用されるのは古墳時代以降ということになる。これは第３砂堆上に弥生集落が展開する知多市などとは様相を異にする。その理由としては、大田

36 浜新田堤防	46 峰畑貝塚	55 庄之脇遺跡	116 上前田遺跡	133 丸根古墳
37 松崎遺跡	47 北屋敷遺跡	56 木田城跡	117 西広 1 号遺跡	134 大池北貝塚
41 後浜新田堤防	**50 畑間遺跡**	57 木田遺跡	118 西広 2 号遺跡	135 上浜田遺跡
42 下浜田遺跡	51 龍雲院遺跡	58 下畑遺跡	119 山畑遺跡	136 御州浜庭園跡
43 後田遺跡	**52 東畑遺跡**	59 前畑遺跡	121 横須賀御殿跡	140 川南新田堤防
44 神宮前遺跡	53 高ノ御前遺跡	60 北広遺跡	122 郷中遺跡	143 滝川半斎屋敷
45 王塚古墳	54 太田川第 3 踏切貝塚	62 烏帽子遺跡	123 弥勒寺遺跡	144 横須賀代官所

第２図　周辺遺跡配置図



第３図　遺跡分布図（詳細）

町周辺では内陸側に奥まった、いわば谷状地形であったことから、第１砂堆が大きく発達し、居住に適していたことが考えられる。

この大田町周辺には上記の遺跡の他、主に弥生時代の集落である烏帽子遺跡（縄文～近世）、尾張藩２代藩主徳川光友の浜御殿である横須賀御殿跡などの遺跡が所在する。また、近世には第３砂堆の海岸部が新田開発されて埋め立てられた。川北新田、川南新田、浜新田がそれである。中でも浜新田からは圃場整備に伴って新田堤防の臼（いり）が出土している。こうした近世の新田開発や大田川の付け替えに加え、現代の埋立によって遺跡が形成された当時の景観は失われているが、遺跡の分布や僅かに残る砂堆の痕跡などから、かつての環境を復元することができる。

第３節　畑間・東畑遺跡における既往の調査

畑間・東畑遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて発掘調査は実施されていなかった。初めて調査が実施されたのは、第１節のとおり平成８年度の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査では、土地区画整理事業の予定区域内に 20 箇所のトレンチを設定して行った。このうち畑間・東畑遺跡に関係するトレンチは 12 箇所に上る。この試掘調査によって分布範囲が不明であった各遺跡について、概略ではある

が範囲を特定することができた。当時、各遺跡の時期については畑間遺跡が中世から近世、東畑遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期と古代から中世であることが推測された。

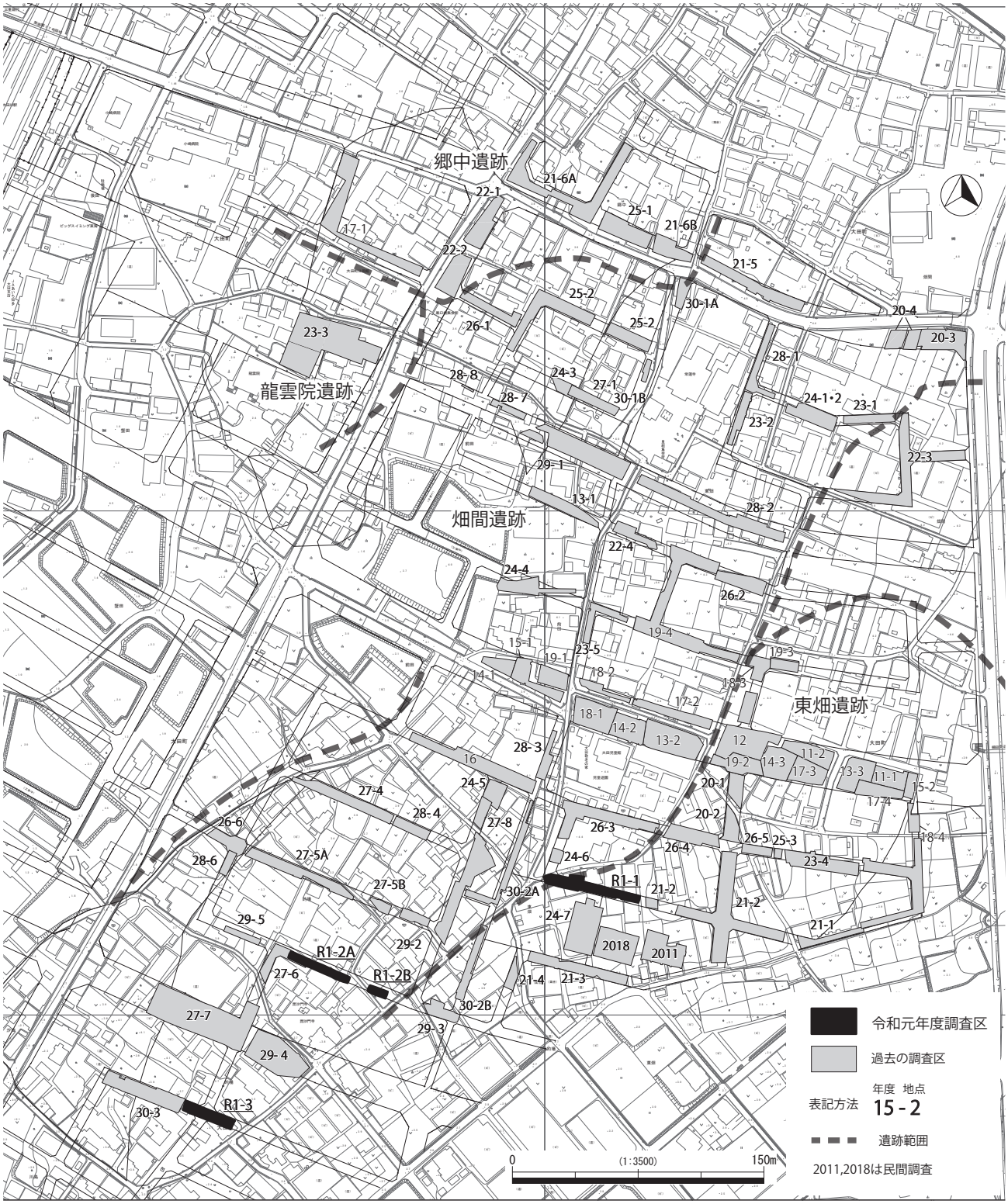
その後は平成 11 年度からの本調査によって、畑間・東畑遺跡それぞれの遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第 4 図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗状況に応じて調査を実施しており、移転が進んでいなかった初期段階の調査は小規模なものとならざるを得なかった。このため調査当初は遺跡全体の様相のみならず、近隣調査区の遺構との整合を図ることすら困難であった。

発掘調査は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に着手し始めたことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に横断して調査する形となった。その後は周辺の街区道路の調査を順次実施している。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺構・遺物を確認している。特筆すべき事項としては、1 点目に縄文時代後期以降の縄文土器がまとまって出土したことである。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。2 点目に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期毎の生活域が分かってきたことが挙げられる。近年は街区道路部分の調査も進んできており、遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

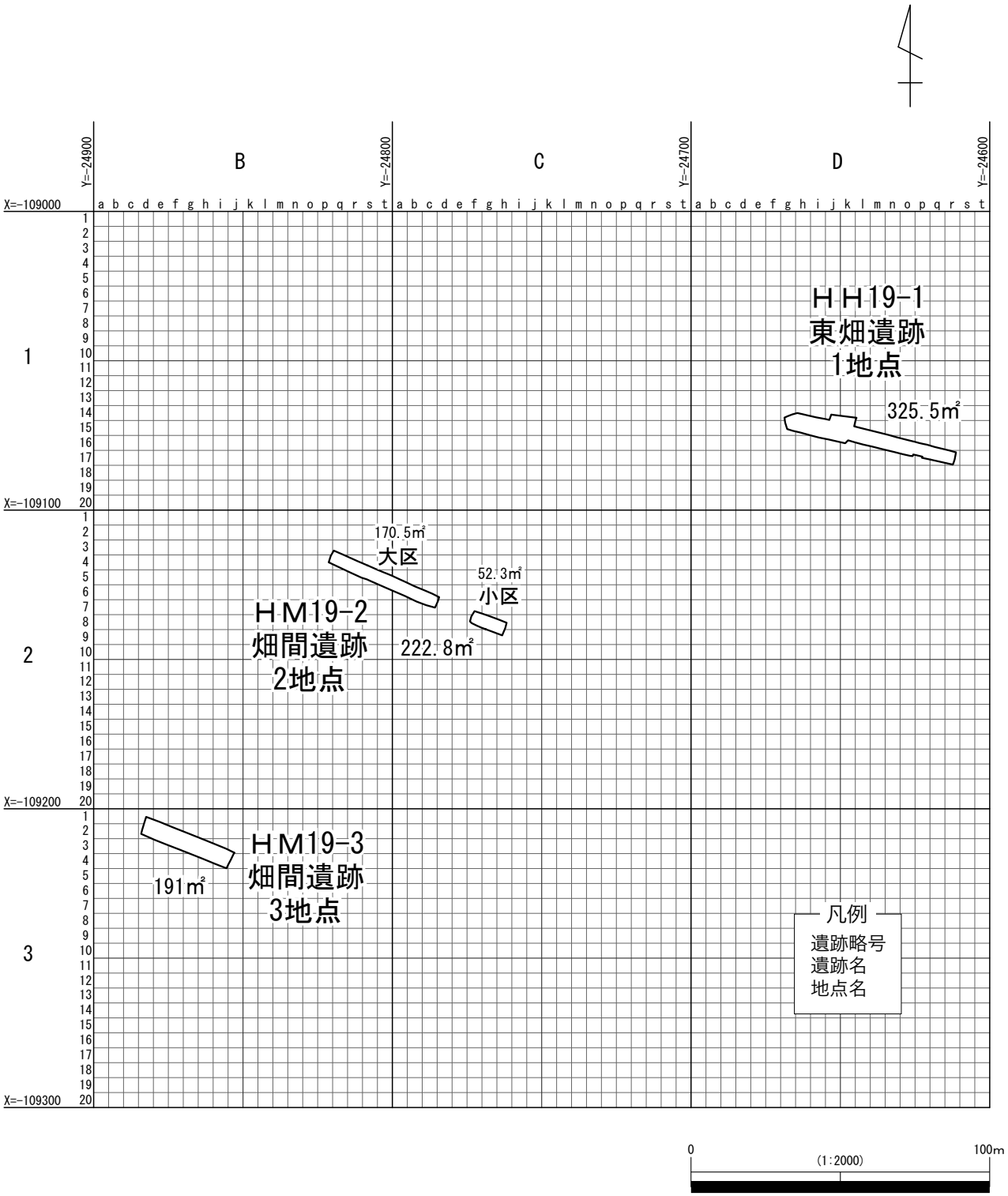
なお､調査開始時の平成 11 年度から平成 19 年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告 [3] と並行して整理作業を実施し、平成 25 年度に報告書を刊行している [4]。平成 20 年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査及び報告書の刊行を行い、平成 30 年度には民間の開発に伴う調査が行われている。これまでに刊行した発掘調査報告書は第 1 表のとおりである。

調査年次	書名	発行機関	編集機関	発行年
平成 8 年度	愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告	東海市教育委員会	東海市教育委員会	平成　9 年（1997 年）
平成 13 年度	愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	東海市教育委員会	平成 16 年（2004 年）
平成 11 年度 ～ 19 年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告 －平成 11 ～ 19（1999 ～ 2007）年度調査－	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成 26 年（2014 年）
平成 20 年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	平成 21 年（2009 年）
平成 21 年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	平成 24 年（2012 年）
平成 22 年度	愛知県東海市平成 22 年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成 24 年（2012 年）
平成 23 年度	愛知県東海市畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成 25 年（2013 年）
平成 24 年度	愛知県東海市平成 24 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成 26 年（2014 年）
平成 25 年度	愛知県東海市平成 25 年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告書	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	平成 27 年（2015 年）
平成 26 年度	愛知県東海市平成 26 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社中部支店	平成 28 年（2016 年）
平成 27 年度	愛知県東海市平成 27 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成 29 年（2017 年）
平成 28 年度	愛知県東海市平成 28 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	平成 30 年（2018 年）
平成 29 年度	愛知県東海市平成 29 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社中部支店	平成 31 年（2019 年）
平成 30 年度	愛知県東海市平成 30 年度東畑遺跡発掘調査報告 －マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－	沼澤工業株式会社	株式会社アコード名古屋営業所	平成 31 年（2019 年）
平成 30 年度	愛知県東海市平成 30 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	令和　2 年（2020 年）

第 1 表　既刊報告書一覧


郷中遺跡
龍雲院遺跡
畑間遺跡
東畑遺跡
R1-1
R1-2A
R1-2B
R1-3
2018
2011
令和元年度調査区
過去の調査区
表記方法
年度 地点
15 - 2
遺跡範囲
2011,2018は民間調査
0
(1:3500)
150m

第４図　調査区位置図



第５図　調査区グリッド図

1：『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』 愛知県教育委員会　1999
2：『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』 東海市教育委員会　1997
3：「伊勢湾を望む海辺の遺跡－東畑遺跡等発掘調査概報－」東海市教育委員会（永井伸明・宮澤浩司）
『研究報告とうかい』創刊号　東海市教育委員会　2007
「伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）－平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要－」東海市教育委員会
（宮澤浩司）『研究報告とうかい』第２号　東海市教育委員会　2009
4：『愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告－平成 11 ～ 19 年度調査－』東海市教育委員会　2014

第４節　発掘調査の方法

今回の発掘調査は従来同様、土地区画整理に伴う市道建設箇所の発掘調査であり、畑間遺跡地内２箇所と、東畑遺跡地内１箇所の計３箇所の地点に分かれている。

各地点における調査用グリッドについては、愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財センター基本マニュアル 2019』に基づき、１辺５ｍの小グリッドを最小単位として設定した。

すなわち、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系にて表記している。メートル（m）単位での表記を基本としている。

実際の発掘調査は、各地点周辺の調査データや現況の観察を元に、重機を用い表土および攪乱層を掘削除去後、人力による掘削を実施した。

遺跡の記号については、畑間遺跡：HM（２地点、３地点)、東畑遺跡：HH（１地点）とした。例えば HH19-1 は 2019 年度東畑遺跡１地点､HM19-2 は同じく畑間遺跡２地点という意味である。

主な遺構の種類は、以下の略号を用いた。

SI：住居址、SD：溝、SK：土坑、SM：貝塚または貝層、SU：土器などの集積遺構、SX：その他の遺構

重要遺物や特定の遺物に関しては地点上げ遺物として、各調査区ごとに d-001 から番号を付し、トータルステーションを用いて出土地点を記録した。この成果は遺物の分布状況把握に極めて有用である。d 番号は遺物観察表と実測図でも共通で使用している。

各調査区は高所作業車またはドローンを用い、完掘状況の全景写真を撮影した。今回３地点で初めてドローンによる空撮を試みた。使用資格及び許可をクリアできれば、高所作業車の機械的物理的制約から解放される部分も多く、また撮影画像や映像の画質も飛躍的に向上していることなどから、今後遺跡での活躍が大いに期待できるものである。

基本層序

本遺跡の基本層序は第一砂堆上に存在する各調査区にほぼ共通するものである。

Ⅰ層：一般に現代の表土や耕作土、整地土、工事などでもたらされた客土や、現代を中心とした攪乱層も含まれている。

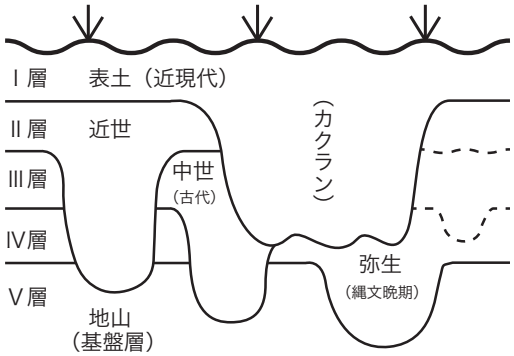
Ⅱ層：近世の遺物包含層や整地土、それらにともなう遺構埋土などであり、昭和前半以前の大田の集落が展開していた部分に広く存在する。

Ⅲ層：主に中世の遺物包含層で、しばしば古代の遺物が混在するが、上下層との明確な分離は難しい。

Ⅳ層：弥生時代から古代前半の遺物包含層であり、しばしば強い黒色を呈する。とりわけ住居址や周溝埋土に顕著に見られる。地区によっては縄文土器を含むこともある。

Ⅴ層：一般に地山と呼ばれる遺跡の基盤層である。粗粒砂～中粒砂を中心に周辺の丘陵由来の鬼板片、更に下層の基盤層由来のシルトブロックや亜炭片を交えることもある。

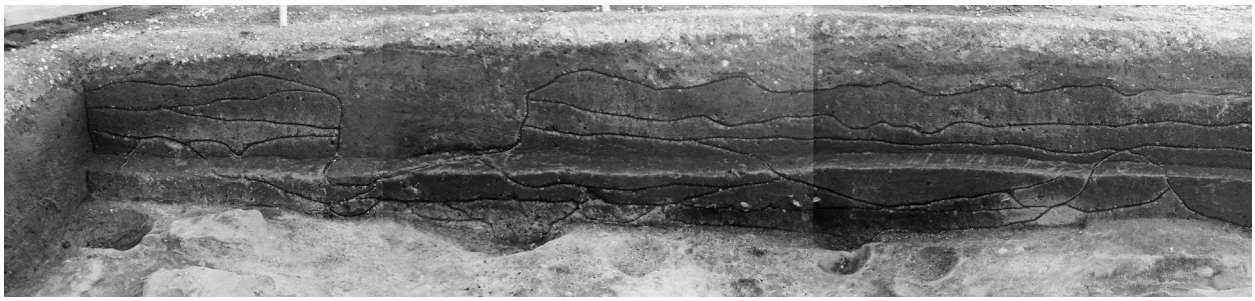
これらの各層は第一砂堆のほぼ全域に普遍的に存在するものではなく、それぞれの地点で様相を異にする。今回の３地点では、表土除去とほぼ同時に地山層が露出する部分もあり、２地点では表



第６図　基本層序模式図

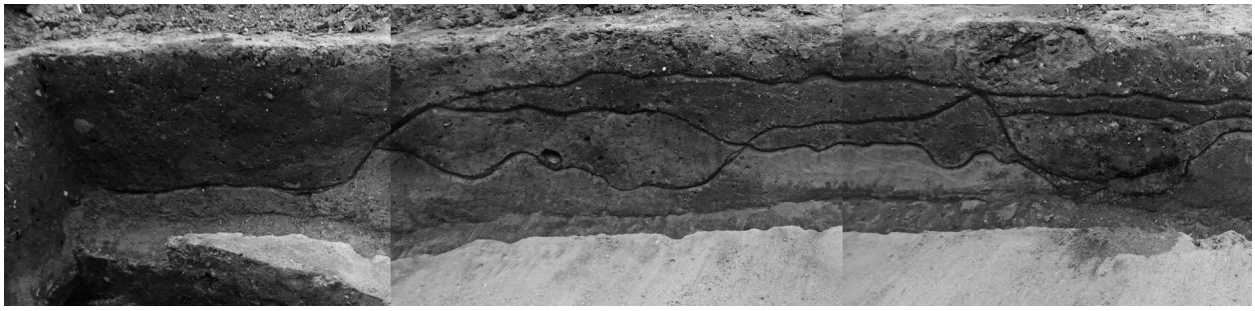
土と近世の大規模貝層がほぼ一体となり地山層まで掘削されていた。

このような状況は、隣接した郷中も含み畑間・東畑地域が古くから人が住み続け歴代遺跡を形成してきた事情によるものである。周辺の丘陵部からもたらされた一部の客土を除き、遺物包含層の大半が均質性の高い海成砂層であることや、居住域がほぼ同一でいつの時代にも常に開墾や地業・整地がおこなわれてきた結果、このような遺跡の構造が形成されたものと推測できる。



東畑遺跡１地点　南セクション東端部

畑間遺跡２地点　大区　北セクション



畑間遺跡３地点　東セクション東端部

第５節　調査経過

畑間・東畑遺跡の発掘調査は令和元年 (2019 年)7 月 9 日に業務委託契約を締結し、２地点から発掘調査を開始した。主な作業工程は以下の如くである。（調査日誌抄録を兼ねる）

2019 年

8 月 19 日（月）：1 地点・2 地点の調査予定地草刈り作業終了。
2 地点に重機（0.45+0.1㎥）搬入

8 月 21 日（水）：仮設事務所・仮設トイレ設置。作業員に対する作業内容説明をおこなう

8 月 22 日（木）：2 地点を取り囲むスチールフェンス設置作業開始

8 月 26 日（月）:2 地点調査区西端部にて表土部分を試掘→攪乱層の様相。現場事務所周辺整備作業

8 月 28 日（水）：新規入場者教育および書類手続

8 月 29 日（木）：2 地点ネットフェンス設置

9 月 2 日（月）：2 地点、重機による表土掘削開始。同時に作業員による清掃作業を開始

9 月 3 日（火）：作業員による調査区清掃作業を継続

9 月 4 日（水）：調査区北壁にトレンチを設定し、掘削開始。調査区東端は大規模貝塚の様相

9 月 5 日（木）：小区の表土掘削を開始

9 月 6 日（金）：小区清掃作業、遺構検出、トレンチ掘削

9 月 9 日（月）：小区のほぼ全面に破砕された貝殻を含む整地層を確認。001SX 粘土貼り遺構確認

9 月 10 日（火）:001SX サブトレンチ設定し掘削。地山層到達前に湧水し、水没。測量ほか

9 月 11 日（水）：セクション分層し土層注記作業ほか

9 月 12 日（木）：小区完掘状況を撮影。大区の遺構検出及び遺構掘削を開始

9 月 13 日（金）：大区東半の遺構検出及び遺構掘削を継続

9 月 17 日（火）：大区東半は複数の大型土坑が切り合い、大量の貝を含んだ埋土で整地された様相を確認。こちらも地山直前で湧水有り

9 月 18 日（水）：複数の粘土貼り遺構を確認。大量の貝殻を充填。湧水レベルが標高 2.4m 前後と判明

9 月 19 日（木）：粘土貼り遺構はいずれも近世と推定。大型遺構の断面を南壁で撮影・実測・土層注記

9 月 20 日（金）：大区中央部の遺構検出＋遺構掘削に移行。西端部攪乱部分の深さを確認→地山層まで攪乱が達していた

9 月 24 日（火）：大区西端部攪乱部分を整地。中部で検出した遺構掘削および測量

9 月 25 日（水）：大区東半で残りの遺構掘削および測量後清掃をおこない調査はほぼ終了

9 月 26 日（木）：調査区測量および清掃作業

9 月 27 日（金）：午前中は調査区清掃の続き。午後は現場事務所で安全大会をおこなう

9 月 30 日（月）：空撮のための準備作業

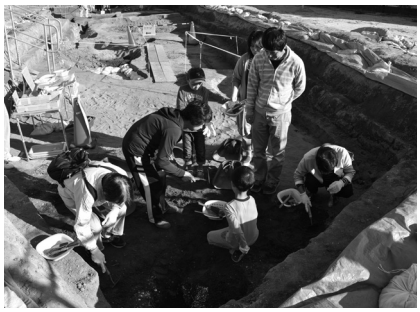
10 月 1 日（火）：高所作業車 22m から空撮。撮影後はスチールフェンス

解体や資材運搬準備作業
10 月 2 日（水）：2 地点からの資材引き上げ。一部出土遺物の水洗を開始
10 月 3 日（木）：重機回送（2 地点→ 1 地点）。1 地点周囲のスチールフェンス設置作業開始
10 月 4 日（金）：遺物水洗作業および道具類の整備作業ほか
10 月 7 日（月）：1 地点東端部より表土掘削開始。早々に古墳時代前期の遺物包含層を確認
10 月 8 日（火）：調査区西端部では表土層浅くなる。調査区全体の成形および壁面清掃作業
10 月 9 日（水）：トレンチ掘削と西端部整地層（近世以降）の掘削
10 月 10 日(木)：調査区東端部と中央部西寄りの数カ所に黒色砂層を確認。古代以前の遺物を包含
10 月 11 日（金）：トレンチ掘削と遺構検出のための掘削を同時進行。台風対策を開始
10 月 15 日（火）：調査区中央部は南北両側にトレンチを設定。黒色砂層の広がりを確認
10 月 16 日（水）：中央部のトレンチ掘削と遺構検出のための掘削。中央部では小型土錘を多く検出
10 月 17 日（木）：調査区東半のトレンチ掘削と遺構検出のための掘削。東端部では長胴甕や須恵器が検出され、古代の住居址残欠と確認
10 月 23 日（水）：東端部南壁側で廻間式期住居址の存在を確認。土器集積を伴う。中央部は中世層の存在を把握
10 月 24 日（木）：調査区東端部の黒色砂範囲を南側に 50cm 拡張。西部方面は中近世の遺構掘削を開始
10 月 28 日（月）：調査区西部 001SM ほぼ純貝層の帯状分布を確認。中世遺物を含む。中央部分は中近世整地層が分厚く分布
10 月 30 日（水）：調査区中央部分は地山面での遺構検出を開始。023SD は中世後半の溝で、埋土からアカニシや馬の歯、常滑・瀬戸製品や焼け石などを検出
10 月 31 日（木）：023SD の他、東部では 026SD を検出。条痕文土器のまとまりは土器棺残欠と推定
11 月 1 日（金）：東端部土器集積の範囲を確認。西端部は地山面にて遺構検出。
11 月 5 日（火）：調査区全域で遺構検出および遺構掘削を継続。現地説明会資料打合せ
11 月 6 日（水）：遺構検出および遺構掘削。西側の階段設備取り付け
11 月 7 日（木）：午前中遺構掘削作業。午後は現地説明会用足場板の設置作業
11 月 8 日（金）：現地説明会準備作業（リハーサルも含む）
11 月 9 日（土）：13 時より現地説明会を開催。約 60 名が来場
11 月 11 日(月)：東端部土器集積写真撮影及び測量。井戸筒 1 段目取り上げ。古代住居址掘削
11 月 12 日（火）：井戸筒 2 段目取り上げ。遺構掘削を継続
11 月 13 日（水）：遺構掘削を継続。027SU 土器集積はブロックごとに遺物取り上げ
11 月 14 日（木）：西部黒色土の土器集積取り上げ。東部中世溝掘削完了
11 月 15 日（金）：遺構掘削および壁面清掃開始。東端部住居址セクション土層注記
11 月 18 日（月）：井戸筒 3 段目取り上げ。4 段目は重機バケットにて掘削し取り上げ（直ちに湧水）。古代住居址内土坑で須恵器群検出

11 月 19 日（火）：東端部遺構掘削完了。古代住居址セクションベルト土層注記ほか
11 月 20 日（水）：ほぼ全域で遺構掘削完了
11 月 21 日（木）：調査区清掃及び各種空撮準備作業
11 月 22 日（金）：高所作業車 22m から完掘状況を撮影
11 月 25 日（月）：南北セクション分層および写真撮影。スチールフェンス解体開始
11 月 26 日（火）：1 地点補足調査及び土層注記作業。3 地点調査区周囲にフェンス設置開始
11 月 27 日（水）：1 地点壁面の補足調査。土層注記作業継続。出土遺物洗浄作業ほか
11 月 28 日（木）：1 地点から 3 地点へ重機回送
11 月 29 日（金）：3 地点に告知看板類設置。1 地点土嚢解体作業開始。遺物洗浄作業
12 月 2 日（月）：3 地点基準点測量作業
12 月 3 日（火）：3 地点へ道具類運搬。表土掘削開始。表土はほぼ地山レベル。遺物洗浄作業
12 月 4 日（水）：表土掘削および排土養生作業。作業員による調査区清掃作業開始。遺物洗浄作業
12 月 5 日（木）：トレンチ掘削開始。大規模攪乱多いが地山面で中近世の遺構を検出
12 月 6 日（金）：遺構検出および遺構掘削を継続。深い柱穴を複数検出
12 月 9 日（月）：遺構掘削を継続。南セクションと東セクションを清掃
12 月 10 日（火）：セクション撮影後土層注記作業。排土整備。遺物および 1 地点採集の黒色砂層を水洗
12 月 11 日（水）：調査区内及び周辺の清掃作業
12 月 12 日（木）：ドローンによる空撮。午後安全大会
12 月 13 日（金）：1 地点安全ネット撤去し道路工事施工業者に引き渡し。遺物洗浄作業。備品整備作業
12 月 15 日（日）：3 地点埋め戻し（完了）
12 月 16 日（月）：3 地点スチールフェンス解体。仮設資材搬出準備。遺物洗浄作業
12 月 17 日（火）：3 地点仮設資材搬出及び重機搬出。遺物洗浄作業ほか
12 月 18 日（水）：遺物洗浄作業～ 20 日（金）遺物洗浄終了
12 月 23 日（月）～現場事務所にて一次整理作業開始
2020 年
1 月 20 日（月）：注記マシーン導入
3 月 23 日（月）：仮設事務所プレハブ撤去。跡地整備および産廃処理後現場撤収

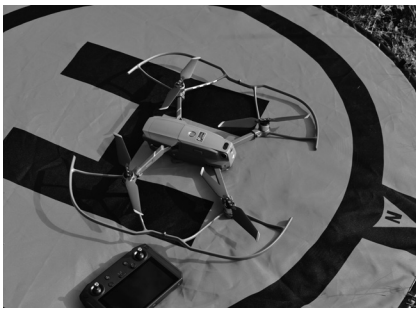
5 月 15 日（金）：『畑間・東畑遺跡発掘調査報告書作成業務委託』として発注を受ける。
5 月 18 日（月）：（株）四門清須支店にて報告書作成業務に着手。

2021 年
3 月 31 日（水）：本書刊行



ドローン撮影機材仕様

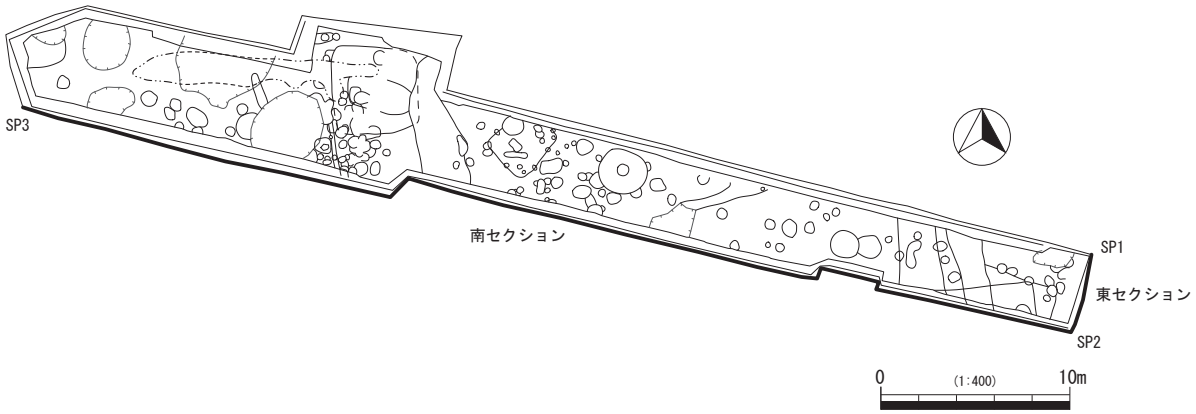
DJI 社製
Mavic　2　Pro
有効画素数：１９９６万画素
全長：３２２× ２４２× ８２mm
重量：９０７ｇ



第２章　畑間遺跡（２地点・３地点）、東畑遺跡（１地点）の調査

第１節　１地点（HH19-1）の調査

１　１地点の概要と遺跡の構造



第７図　１地点セクション位置（1/400）

令和元年（2019）10月７日、東端部より表土掘削を開始し、同時に遺構検出を開始。11月９日に現地説明会を実施。11月20日には全域で調査を終え、11月22日に高所作業車（22ｍ）からの空撮をおこない、土層注記や一部の壁面の補足調査を経て、11月27日に調査を終了した（直ちに道路工事が入るため、協議の結果、埋め戻しは実施せず）。

調査面積は拡張部分も含め325.5㎡である。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土層。現代の耕作土や客土で、調査直前まで存在した住宅に関係した攪乱部分と、一部住宅に付属した耕作土を含む。

Ⅱ層：近世の遺物包含層であるが、調査区のほぼ全域で表土掘削後直ちに出現するのがこの層である。１地点の場合、調査区中央部で検出された井戸（４段積み）などは本層に属し、調査区西半にかけて広く存在した破砕された貝殻を多く含む整地層もⅡ層に属するものと考えている。少なくとも近世以後、継続して居住が続けられてきた痕跡であろう。

Ⅲ層：中世の遺物包含層だが地山面まで及ぶ溝などの遺構埋土や、一部の整地層として存在するのみである。本層は、砂堆上の遺跡であるためか、Ⅱ層のように広く層位的に存在していない。このため、１地点では、東西幅が50m以上にも及ぶことから、どの部分にも安定したⅢ層が存在するわけではない。

Ⅳ層：基本層序の項目では弥生時代以前の遺物包含層として説明しているが、１地点では便宜上

古墳時代前半の遺構埋土も含めて本層と把握した。中世以後の遺物包含層と違い、しばしば極めて濃い黒色を呈するため、地山層との相違は明確である。また、この層は往々にして中世の攪乱や削平による整地を受けることも多いが、未攪乱の場合は色調などから上層との分離は比較的容易である。1 地点では調査区東端部の土器集積周辺、中央部の古代住居址および小規模土器集積周辺に顕著に存在した。

調査前の地表標高は調査区東端部で 4.3m 前後、西端部で 4.6m 前後と僅かに高くなっていた。これは近世以後の大田集落のほぼ中央を南北に貫く往還道が調査区西端部に接し存在していたことに由来する。地山面の平均的な標高は 3.5m である。

1 地点の周辺には過去の調査区が多く存在し、平成 24 年度 7 地点では弥生中期以降で廻間式期の再利用が考えられる方形周溝墓が、2011 年と 2018 年の民間調査や平成 21 年度 2 地点では弥生後期から廻間式期にかけての住居址がまとまって検出されており、今回も予想通り、同時期の遺構・遺物を検出することができた。

また、調査区西半では地山面近くのレベルで弥生前期水神平式の条痕文土器片が多く出土し、この様相は調査区北側に存在する平成 26 年度 3 地点と共通するものである。今回の調査では、同期の土器棺残欠（015）も検出され、両調査区周辺に弥生時代前期の生活面が展開していた可能性を示唆するものである。

２　主な遺構

132SI：住居址（131SI）および 027SU 土器集積（第 12・13・14 図、巻頭図版第 1 ～ 3）

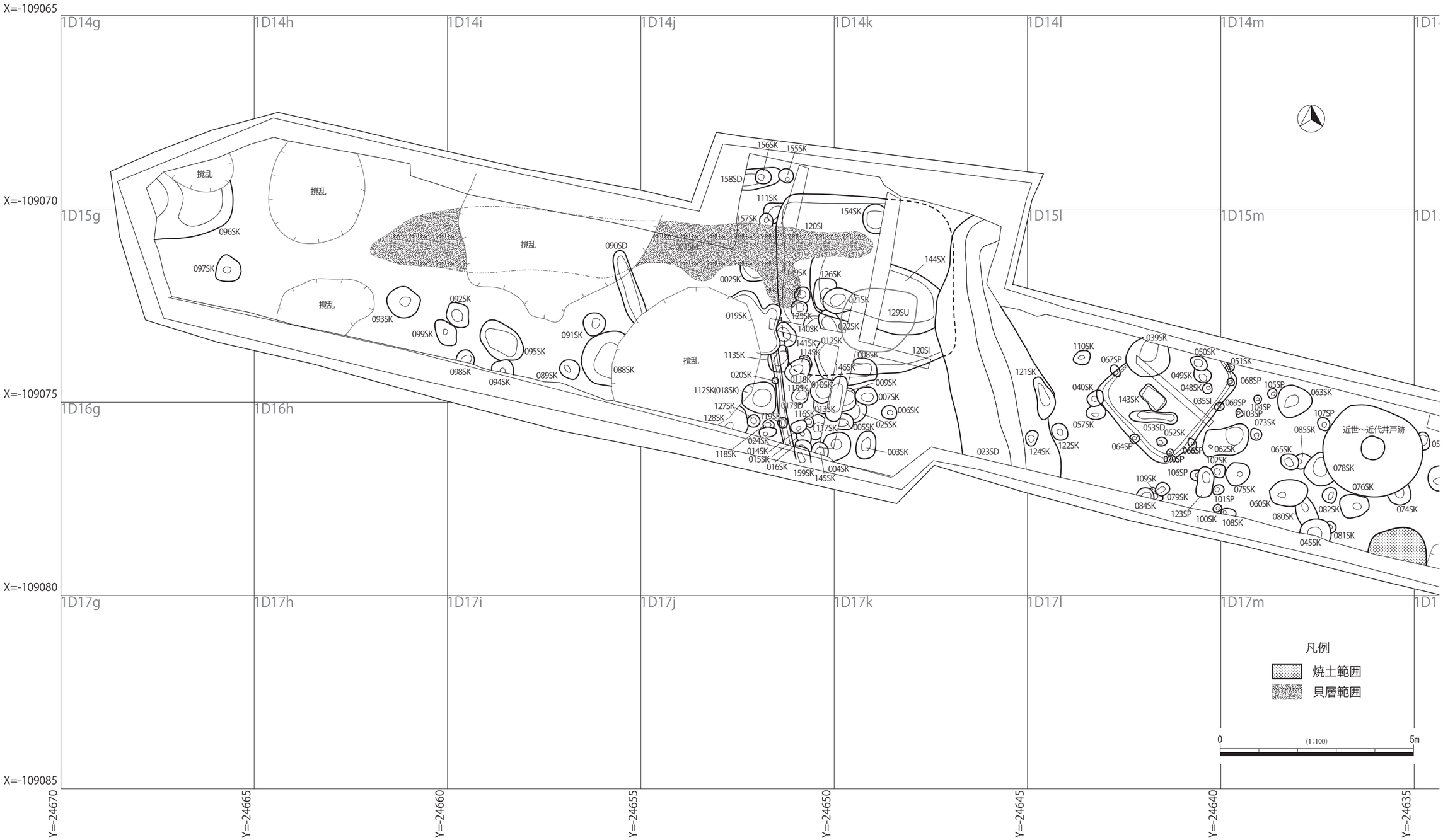
132SI は調査区東端部で検出された古墳時代前期の住居址で、027SU は住居址の廃絶後に廃棄された土器集積である。131SI 住居址は 132SI の上面に主軸を変えて短期間存在したと思われる住居址または何らかの遺構と考えられるが、すぐ北側に重層して存在した古代の住居址による削平を受けており、今回図示したプランは便宜的なものである。いずれにせよ出土遺物で見る限り、この２つの遺構にほとんど時間差は無い。以下は主に 132SI 住居址について述べる。

調査区内で検出した竪穴住居址の面積は 6 ㎡弱であり、仮に一辺 5m ほどの住居址であったと想定すれば全体の約 5 分の 1 に、一辺 4m 規模であれば約 4 分の 1 に過ぎない。大量の遺物の大半はセクション図に示した 6 層と 7 層から出土しており、層厚は 20 ～ 40cm である。

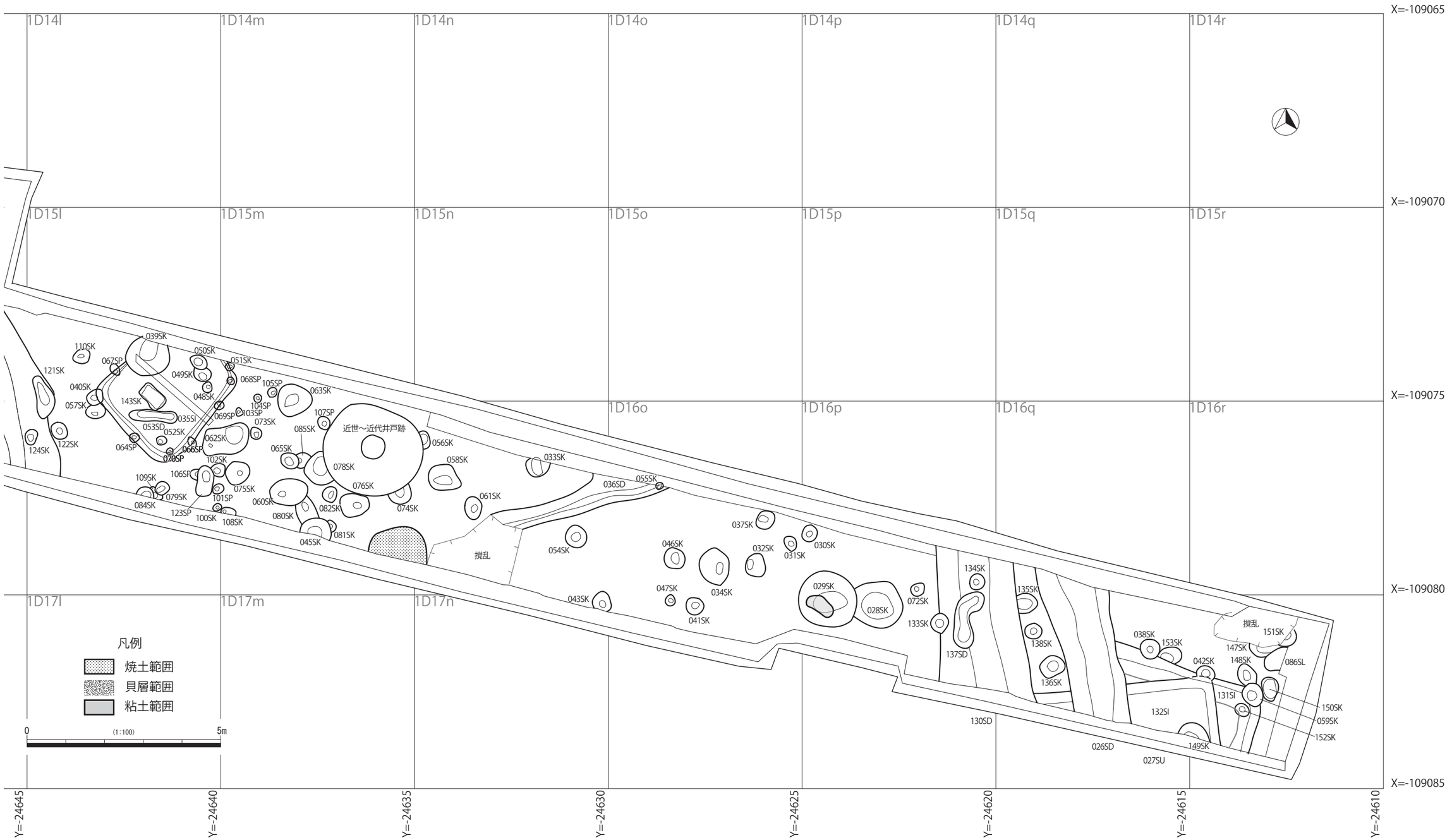
土器集積を含んだ遺物包含層は漆黒と言っても過言でないほどの黒色を呈する砂層（10YR3/2 ～ 2/3）で、過去の知見などから大量の微粒炭が含まれていることが推定された。土壌分析の結果は第 3 章を参照していただきたいが、埋土中からはタケ亜科の機動細胞珪酸体と微粒炭が大量に検出されており、当時の周辺環境を復元する上で重要な情報となった。

大量の土器を順次取り上げた後、いったん床面と想定したレベルでの遺構検出を試みたが、ごく浅い土坑が数基確認されたのみで粘土やシルトを使った貼り床なども見られず、また柱穴など住居遺構の構造に関わるような施設は検出できなかった。

黒色砂は凹凸ある地山面まで達していたが、粗粒砂主体の地山層を手懸かりにした完掘後の様相は竪穴住居の掘り方そのものであった。隅丸方形と推定される住居址の直線的な外形は良く残されていたが、黒色砂の下半以下にはほとんど遺物がみられなかった。

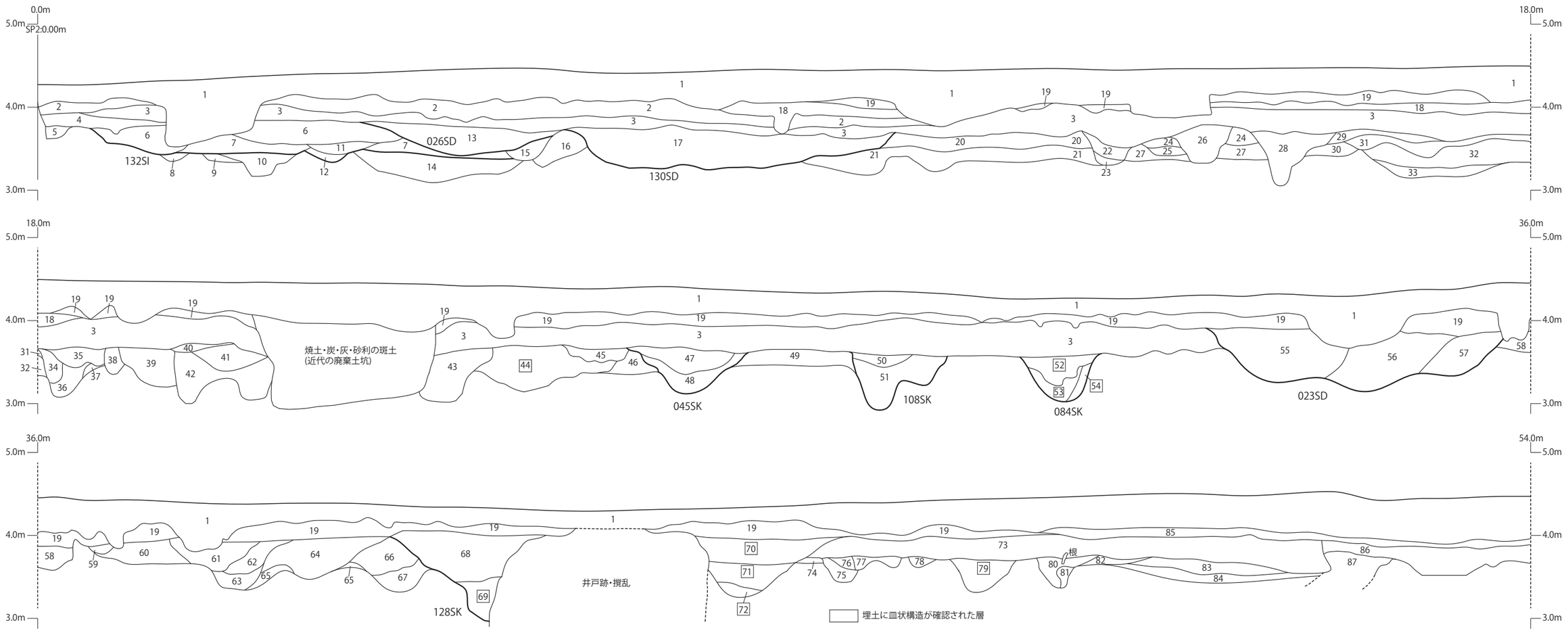


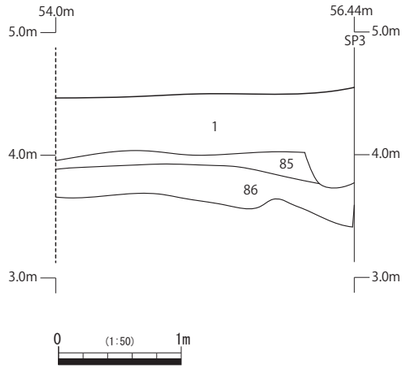
第８図　１地点平面図（西半）



第９図　１地点平面図（東半）

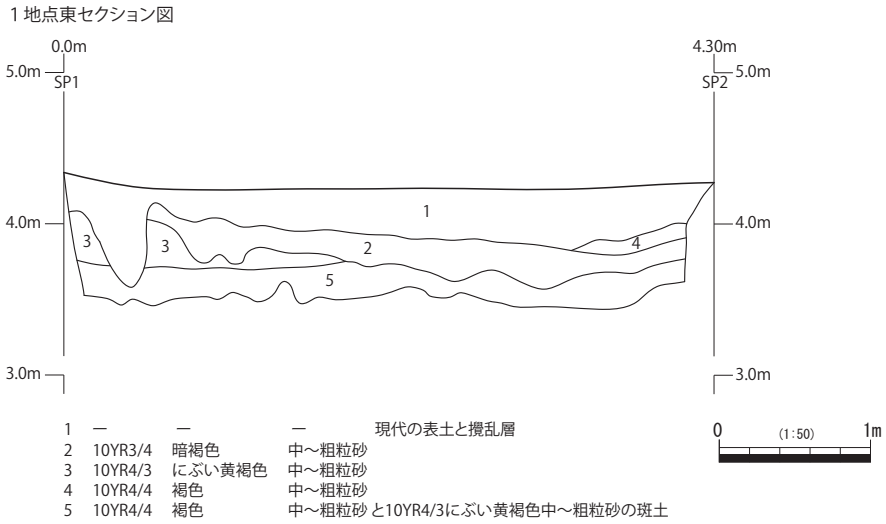
1地点南セクション図





1	—	—	—	現代の表土と撹乱層
2	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	
3	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	近世の整地層
4	10YR4/4	褐色	中粒砂	
5	10YR4/4	褐色	中～細粒砂	
6	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂と10YR4/4褐色中～粗粒砂の斑土	132SI埋土
7	10YR2/3	黒褐色	中～粗粒砂	
8	10YR2/3	黒褐色	中～粗粒砂と10YR3/2黒褐色中～粗粒砂の斑土	
9	10YR2/3	黒褐色	中～粗粒砂	
10	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
11	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂	132SI埋土
12	10YR2/3	黒褐色	中～細粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	132SI埋土
13	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色中～粗粒砂の斑土中世の区画溝	026SD埋土
14	10YR2/3	黒褐色	中～粗粒砂と10YR4/4褐色中～粗粒砂の斑土	
15	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂	
16	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂	
17	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色中～粗粒砂の斑土中世の区画溝	130SD埋土
18	10YR4/4	褐色	中～細粒砂固く締まる近世以降の整地層	
19	10YR4/4	褐色	中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土近世以降の整地層	
20	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	
21	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂	
22	10YR4/2	灰黄褐色	中～細粒砂	
23	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂	
24	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	
25	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	
26	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂	
27	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色中～粗粒砂の斑土	
28	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR4/2灰黄褐色中～粗粒砂の斑土	
29	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	
30	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土	
31	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂炭化物を含む	
32	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂炭化物を含む	
33	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂と10YR3/4暗褐色中～粗粒砂の斑土	
34	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂	
35	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
36	10YR5/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR6/6明黄褐色中～粗粒砂の斑土	
37	10YR5/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
38	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
39	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
40	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	
41	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂炭化物、焼土ブロックを含む	
42	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂炭化物、焼土ブロックを含む	
43	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂と10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトの斑土	
44	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂の斑土断面に皿状構造が発現	
45	10YR5/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	
46	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
47	10YR4/4	褐色	中～細粒砂炭化物および10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロックを含む	045SK埋土
48	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂と10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂の斑土炭化物を含む	045SK埋土
49	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
50	10YR4/4	褐色	中～細粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	108SK埋土
51	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂と10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂の斑土炭化物を含む	108SK埋土
52	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂断面に皿状構造が発現	084SK埋土
53	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂断面に皿状構造が発現	084SK埋土
54	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂の斑土断面に皿状構造が発現	084SK埋土
55	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂貝殻、粘土塊、中世陶器を含む中世の区画溝埋土	023SD埋土
56	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂中世の区画溝埋土	023SD埋土
57	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色粗粒砂の斑土中世の区画溝埋土	023SD埋土
58	7.5YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	
59	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	
60	7.5YR3/4	暗褐色	中～細粒砂炭化物を含む	
61	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂と10YR3/3暗褐色中～細粒砂の斑土	
62	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	
63	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
64	10YR4/4	褐色	中～細粒砂	
65	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	
66	10YR4/4	褐色	中～細粒砂	
67	10YR4/4	褐色	中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土	
68	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	128SK埋土
69	10YR4/4	褐色	中～細粒砂断面に皿状構造が発現	128SK埋土
70	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂と10YR4/4褐色中～細粒砂の斑土断面に皿状構造が発現	
71	10YR4/4	褐色	中～細粒砂断面に皿状構造が発現	
72	10YR4/4	褐色	中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土断面に皿状構造が発現	
73	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土	
74	10YR4/4	褐色	中～細粒砂	
75	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂破砕された貝殻を含む	
76	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	
77	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂10YR5/3にぶい褐色シルトブロックを含む	
78	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	
79	10YR4/4	褐色	中～細粒砂断面に皿状構造が発現	
80	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	
81	10YR5/6	黄褐色	シルト	
82	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	
83	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	
84	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂と10YR3/2黒褐色細粒砂の斑土	
85	7.5YR4/4	褐色	中～細粒砂破砕された貝殻を含む	近世以降の整地層
86	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	
87	10YR7/6	明黄褐色	粘土	

第10図　1地点南セクション図



第 11 図　１地点東セクション図

132SI 住居址プランの北西隅については、中世の区画溝である 026SD と 130SD の二本の溝によって滅失しており明確ではないが、比較的浅い 026SD 埋土には 027SU 土器集積と同時期の土器片が多く含まれており、並行する 130SD 埋土にはほとんど見られなかったことから、後者の手前で収束するようである。

次に出土遺物であるが、027SU 土器集積として一括して取り上げたもののほか、黒色土の検出と同時に散漫に出土し始めた土器の一群がある。先述の説明に従えば、正確には 132SI 住居址として把握すべき資料とも言えるが、遺物取り上げ（多くは地点上げ遺物扱い）時点での遺構プランが未検出であったことや、検出された遺物が後に出現する土器集積のものとほとんど時期差が認められなかったことなどから、027SU に含めて扱うこととした。その個数は 10 点未満で多くは器形のわかる個体ではなく破片であったため、地点上げ扱いにした。

027SU 出土土器集成図（第 13 図）は 027SU として検出された主な土器実測図で、土器集積の器種組成を把握するために作成したものである。主要器種としては台付甕 28 個（脚台のみのものも含む）、S 字甕 8 個、高坏 20 個、器台 4 個、壺 11 個（いわゆる複合口縁の柳ヶ坪（やながつぼ）タイプ 2 個を含む）、粗製小鉢 3 個（図示は 1 個）という内容である。

ここに示した実測図の数はおおむねこの土器集積全体の組成を反映していると思われるが、テンバコ約 4 箱に及んだ土器片全量を大まかに器種分類し、それぞれの器種で図示した以外にも含まれていた推定数を算出した。その結果が以下の第 2 表であるが、027SU 土器集積は南壁の奥方向に累々と続いており、可能な範囲で壁面の遺物包含層から採集した資料の奥にも、更に大規模な集積が存在する様子を確認している。

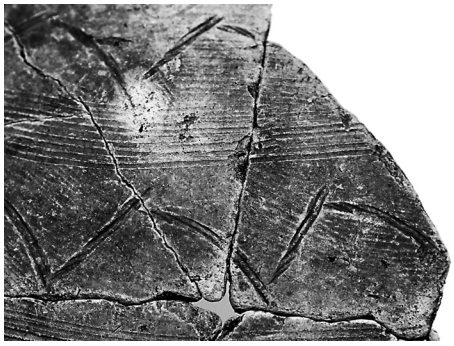
器種	A 実測図数	B 推定余分	(A+B) ×2	組成比率 (%)
台付甕	28	10	76	35
S 字甕	8	3	22	10
高坏	20	12	64	30
器台	4	3	14	6
壺	11	5	32	15
粗製土器	3	1	8	4
計	74	34	216	100

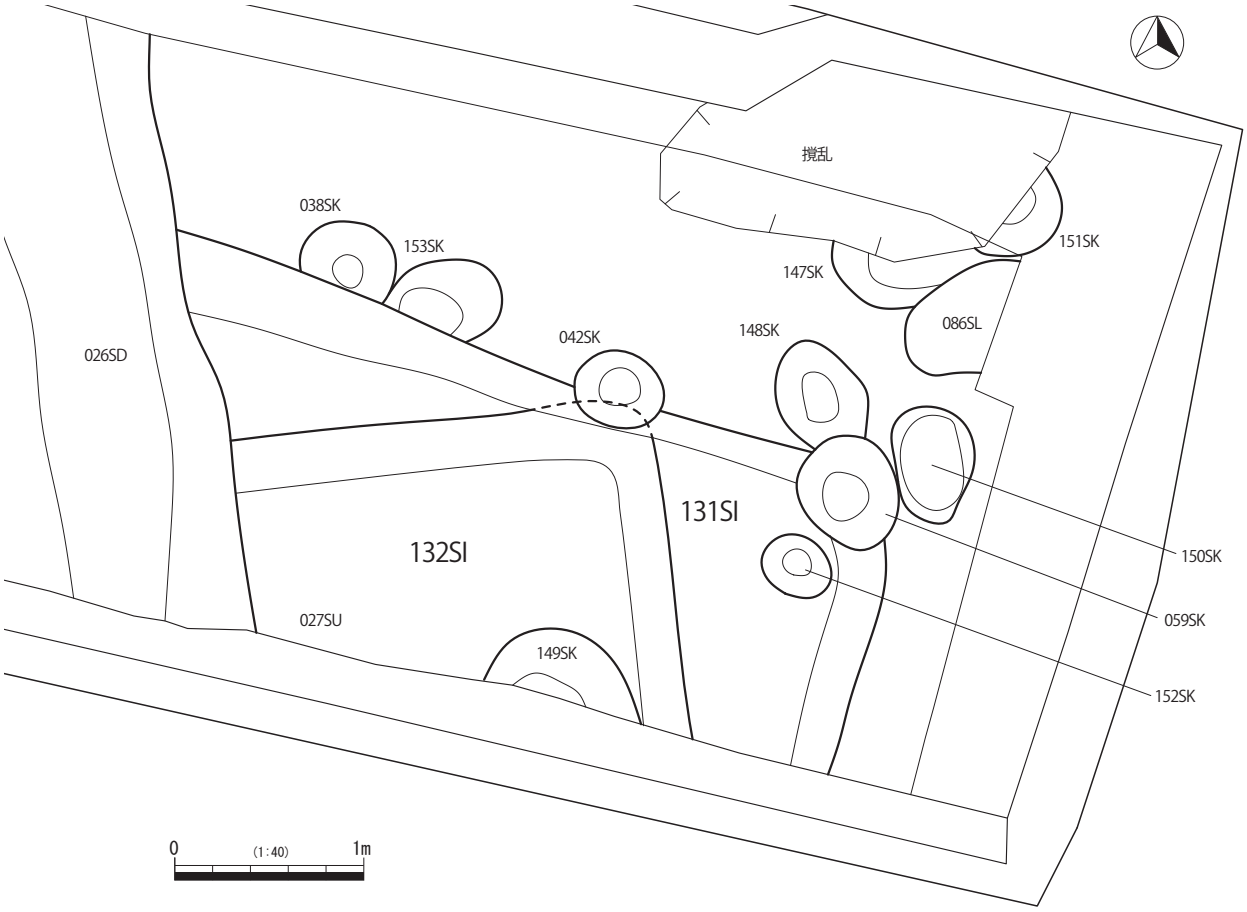
第 2 表　027SU 土器集積の器種構成推定値

器種構成としてはく字状口縁台付甕(以下「く字甕」と表記)、高坏を中心に、壺類、S 字状口縁台付甕（以下「S 字甕」と表記)、器台と小型の粗製土器が含まれる。なかでもく字甕は個体数で最も優越しており、口縁端部に面を作らず、頸部のハケメ調整が短く左

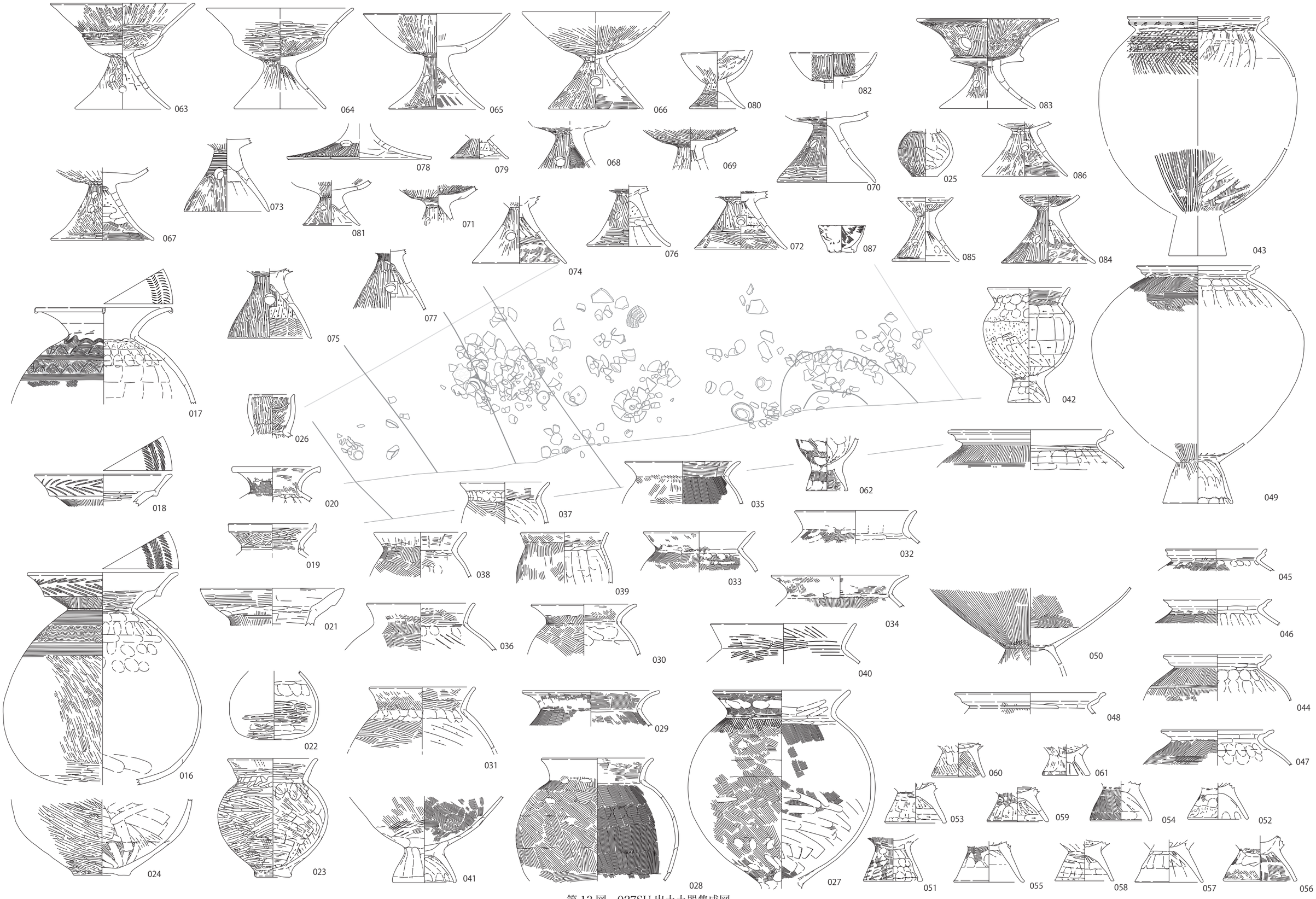
下がりで施される特徴を有する一群が主体をなす。

壺類には口縁が有段状を呈する加飾壺（柳ヶ坪タイプ、016,018）のもの２個体が含まれるが、主体は赤彩加飾壺を含む広口タイプ（017）を中心に、小型の短頸ヒサゴ壺（025,026）を伴う。また021は住居址プランよりわずかに外れた北側からの出土なので厳密には上層131SIの遺物ということになるが、口縁外面に付加された粘土板が荒々しい横位のハケメで仕上げられ、段を為して頸部に繋がる形状であるが、擬凹線文が意識された様子は無く、加飾壺の形状を写しつつも粗製土器に近い仕上げが施されたものである。柳ヶ坪タイプ壺（016,018）は２点とも口縁内外に矢羽根状の刺突を巡らせている。よく似た両者だが018の刺突文の方がより緻密に施されており、原体の長さも若干長い。胎土は緻密だが粗粒砂を含み、にぶい橙色を呈している。017（巻頭図版第3および右下写真参照）は加飾壺で、肩部にかけて櫛描き横線と赤彩で大まかになぞられた鋸歯文様を交互に施している。口端面は極めて薄く（厚さ5mm）、棒状浮文も一条の簡素なものであるが、いわゆるパレス壺の影響下に作られたものであろう。胎土は緻密で薄い橙色から灰白色に近い部分もある。これは赤彩を施す前提で選ばれた粘土であったことを示すものであろう。加飾壺の赤彩が加えられた鋸歯文部分は正確には直線の連続ではなく緩やかに彎曲した弧線によって構成されている。細部を観察すると刺突部の内側にも斜めに幾筋も走る弧線が観察でき、これは一般

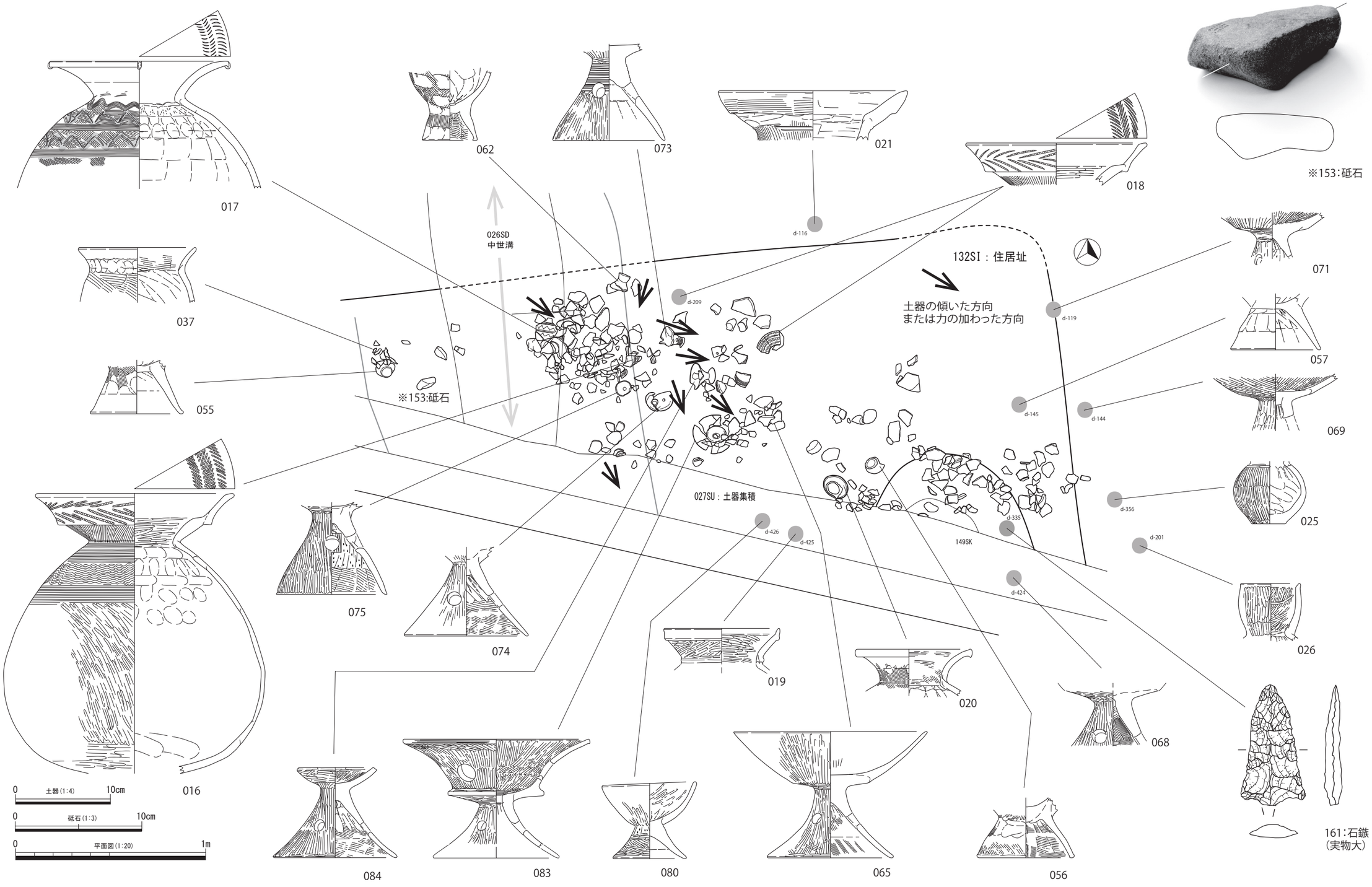




第12図　131・132SI　住居址



第 13 図　027SU 出土土器集成図



第 14 図　027SU 土器集積遺物分布図

に多条平行線のハケメを残す柾目（まさめ）の工具ではなく、少し反った板目工具の小口を利用した刺突の痕跡と推定される。中型壺としては、装飾を持たないヘラ磨き仕上げでく字状口縁のもの（023）や、下ぶくれ形で器壁 2 ～ 3mm と薄手で赤褐色のもの（022）がある。これらの他に加飾壺の資料として 1 片のみ、鋸歯文様のなかに斜平行線部分が見られる資料（090）がある。鋸歯文の始点と終点を便宜的に処理した結果であるとも理解できるが、区画された文様帯である可能性も含めて留意しておきたい。鋸歯文部分には赤彩も施されている。

高坏は坏部に段を有するもの（065）や、坏部下半が半球状に彎曲するもの（063,064）、坏部が段を持たないもの（066）、小型のもの（080）などがある。脚部の形状はやや袋状をなすもの（073,075）や、ほぼ円錐形のもの（066,072,074）、やや外反するもの（065,067,076）や脚部が極端に開くもの（078）があるが、ほぼ円錐形または端部がやや外反するものが多いようである。

器台は有段鍔（つば）付きの大型のもの（083）と、小型の浅い坏身で貫通孔を持つもの（085）と持たないものがみられる。

これらの他に土器集積には小型粗製（そせい）土器が含まれていた。図版 30 の 087 ～ 089 がそれらであるが、少なくとも 3 個体の存在を確認している。いずれも平底の浅鉢形で祭祀に用いられたものと思われるが、組成比率としては 4% を占め、過去の同時期の遺構でも発見されている（後述）。

132SI 住居址遺構の全面にこのような土器集積が存在するとは限らないが、掘削できなかった壁面の様子を確認する限り、少なくとも今回採集できた土器の倍近い量の土器が廃棄され集積しているものと思われる。小型粗製土器を除いた壺・甕・高坏などの推定個体数は約 200 に及ぶ。

これほどの土器が一度に廃棄されたことは考えがたく、複数回以上の廃棄（集積）結果であろう。第 14 図の遺物分布図は 027SU 土器集積において、出土位置と出土の状況が確認できた個体が含まれた部分に傾きの方向などを示す矢印を入れたものである。検出された土器集積にはいくつかの核となる部分が存在するようで、大きく分けて図の左側の 1 箇所と、右下から調査区南壁方向に続く 1 箇所に集中していた。前者には比較的大きな破片の個体が含まれており、複合口縁の壺（041）と赤彩された加飾壺（017）を中心に、小型台付甕（062）、高坏（073 ～ 075）や器台（083,084）他が住居址プランの北西側から一気に廃棄されたような状態で堆積した状況を確認できた。このような土器の検出状況は廃棄された単位を反映したものとも考えられる。南東側の一群に関しては顕著な方向性などは看取できなかったが、やはり住居址内の北側から南に向かって集積密度が高くなる状況を確認している。なお、甕類に関しては検出段階で個別に認識することが難しかったため、出土位置を図示できなかったが、S 字甕・く字甕ともに南側により多く集積されていた。

次に 027SU 土器集積資料の所属時期であるが、壺の形状や S 字甕・く字甕の様相などから、大半は廻間 II ～Ⅲ式範疇のものと理解できる。S 字甕のなかには口縁下段外面に刺突を巡らせる廻間 I 式に属するもの（043）も含まれるが、他の個体は概ね II 式後半から III 式にかけての特徴を有する。

高坏にも脚部のみの発見だが上部に櫛描横線を巡らせるもの（073）もあり、弥生時代後期以来の残存要素と理解できる。先述した小型粗製土器に関しては、過去の調査でも同様のものがいくつか出土しており、まとめにて小考する。

土器以外の遺物としては石器がある。石鏃 (161) は下呂石製の有茎鏃で、土器集積の上半から発見されたが、茎部を欠損している。砥石 (153) は砂岩製で、緩やかに彎曲した平滑面を持つ。これ

らの他に、住居址内からは拳大以下の礫（大半がチャート）を 20 個検出しているが、僅かな被熱痕のほか、割れている以外の加工痕や顕著な使用痕が見られるものは無かった。

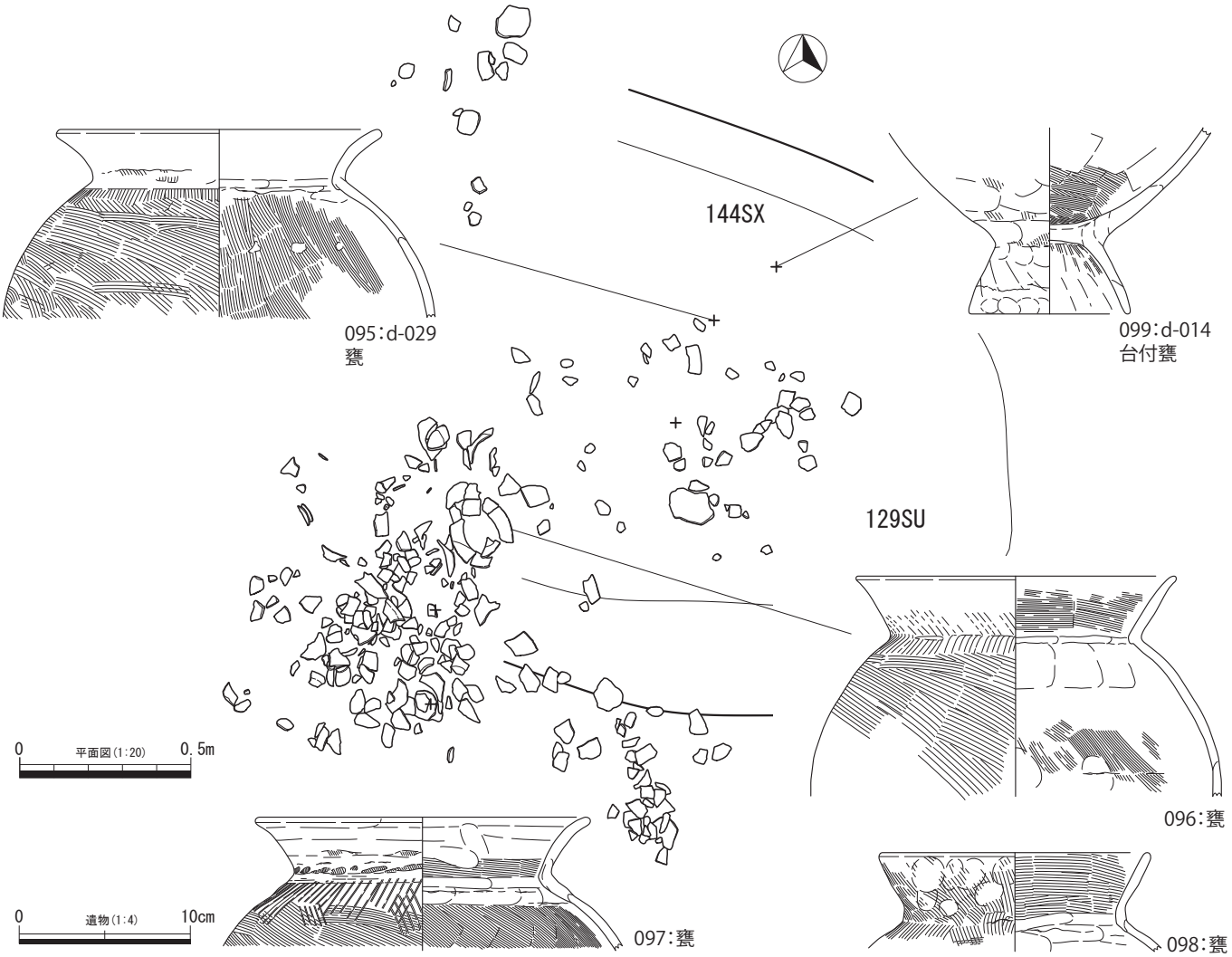
129SU・120SI：土器集積と住居址（第 15・16 図、巻頭図版第 4）

調査区西部で検出された小規模な土器集積で、027SU とは東西に約 35m 離れている。

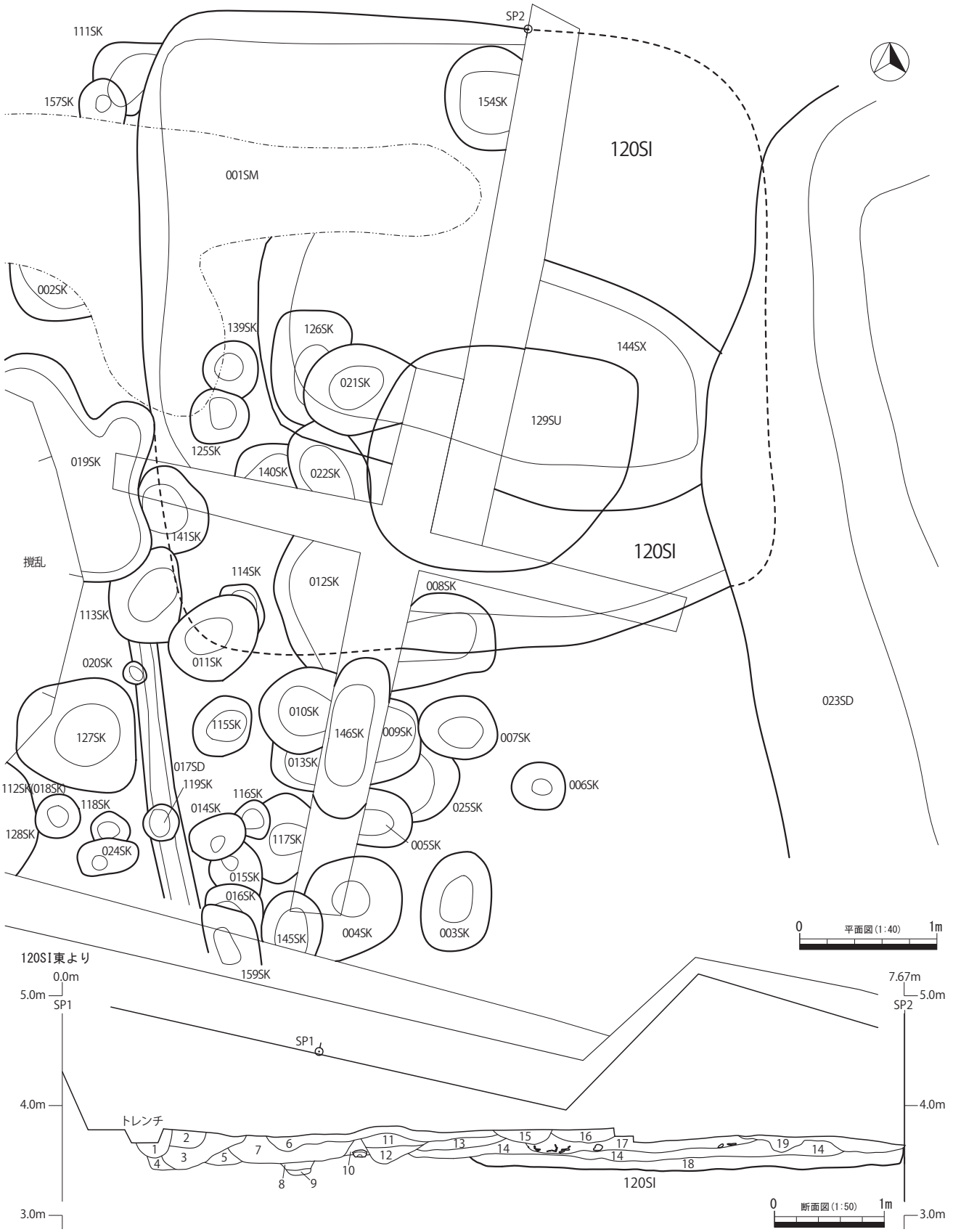
土器集積範囲は明確なプランを持たないが、黒色砂層の分布範囲と土器の集積された範囲はほぼ一致した。すでに断片化した土器片の堆積はほとんど無く、個別の個体がその場で潰れたような状態で検出されたが、北側から東側にかけては散漫な様相であった。遺物の分散範囲は東西約 2m、南北約 3m で、中心部の黒色砂の厚さは約 15cm であった。

集積されていた土器はく字甕のみであり、他の器種は検出されていない。推定される個体数は 10 以下である。土器以外には 5cm ほどのチャート礫が 2 個含まれていた。

く字甕の特徴も 027SU 出土資料とほぼ同様であり、口縁端部をヨコナデで丸く仕上げ、頸部直下の外面に短めのハケメを左下がりに施す。頸部内面には接合の段差を消さずにそのまま残すという特徴を有するもので、廻間 II ～Ⅲ式期のものと推定される。



第 15 図　129SU 土器集積遺物出土状況図



1	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂		11	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土
2	10YR3/4	暗褐色	中粒砂		12	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土
3	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂	下底に10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂と斑土部分を含む	13	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂
4	10YR3/4	暗褐色	細粒砂		14	10YR3/3	暗褐色	中粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂の斑土
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	細粒砂		15	10YR3/4	暗褐色	中～細粒砂
6	10YR3/3	暗褐色	中粒砂		16	10YR3/4	暗褐色	中粒砂
7	10YR3/3	暗褐色	中粒砂	と10YR2/3黒褐色中～細粒砂の斑土	17	10YR2/2	黒褐色	中～細粒砂　土器集積を含む
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂		18	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂
9	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂	と10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂の斑土	19	10YR5/4	にぶい黄褐色	中～細粒砂　中世遺物を含む
10	10YR3/4	暗褐色	中粒砂					

第 16 図　120SI　住居址

なお、この 129SU を含む範囲周辺には住居址が存在していた痕跡がみられ、120SI として大まかな範囲を精査した。残念ながら遺構の東側から南側部分は中世溝や土坑などでプランが消失しており、西半分のみの検出に留まったが、129SU は住居址内の土器集積であった可能性も否定できない。なお 120SI としては貼り床などの土層変化も見られず、黒色砂層の分布範囲と検出状況を手懸かりにプランを推定したものである。推定される規模は 4.5m×4.5m である。

035SI：竪穴建物跡（第 17 図、巻頭図版第 4）

中世の包含層直下で、北辺の幅がやや狭い台形状と推定される平面形を確認した。北西隅は調査区外になる。南辺は 2.7m、東辺は 2.9m を測り、残存する掘り方の深さは 0.25m であり、中央付近がやや窪んでいる。

竪穴周囲の壁面は 45 度以下に傾斜し、床面は掘り方下部を 0.1m ほど埋めて設けられている。貼り床や硬化面の形成は確認できなかった。検出時の竪穴埋土は中央付近に 4 層（黒褐色中粒砂）が堆積し、周囲を 2 層（暗褐色中粒砂）が取り巻いていた。しかし、4 層の底面はやや落ち込んで平坦ではないこと、143SK はちょうど 4 層の範囲内にあることを考えると、4 層は竪穴埋土ではなく 143SK 設置に先行して設けられた土坑であった可能性が高い。

竪穴内部に主柱は無く、径約 0.2m の柱穴が周壁際に並ぶ。柱穴は竪穴を掘り下げる過程で見つかったもので、埋土は竪穴の 1 層と同じ「にぶい黄褐色中粒砂」である。底面標高は床面と大差なく、削平を考慮しても浅い。

構築時期は重複する 143SK が 8 世紀前半なので、それより古い。

143SK：土坑（第 17 図）

035SI の 4 層（黒褐色中粒砂）の堆積範囲で見つかり、軸線は 035SI に一致する。平面形は長方形で長軸 0.72m、短軸 0.41m を測り、断面は箱形である。内部から蓋 1 点、盤 1 点、坏 4 点の須恵器がいずれも破片で出土した。盤（116）は大きな破片が東西の二ヶ所に分かれていた。東側では花弁状に割れた正位の坏（114）と重なっており、すぐ北には垂直に立った状態の破片があった。出土した須恵器の中ではもっとも広く散らばっていた。他の蓋や坏は北西隅付近でまとまっており、坏は正位で花弁状に割れていた。これら須恵器の大破片は概ね水平に、また小破片は一部が垂直に移動していることから、土坑内に置かれた後に土で埋め戻されたのではなく、初期には内部に空間のある「箱」状の施設（木質は未確認）に収めて埋められたのが、のちに空間が潰れる過程で不規則な圧力が加わったために須恵器の破断と移動が生じたと推測する。

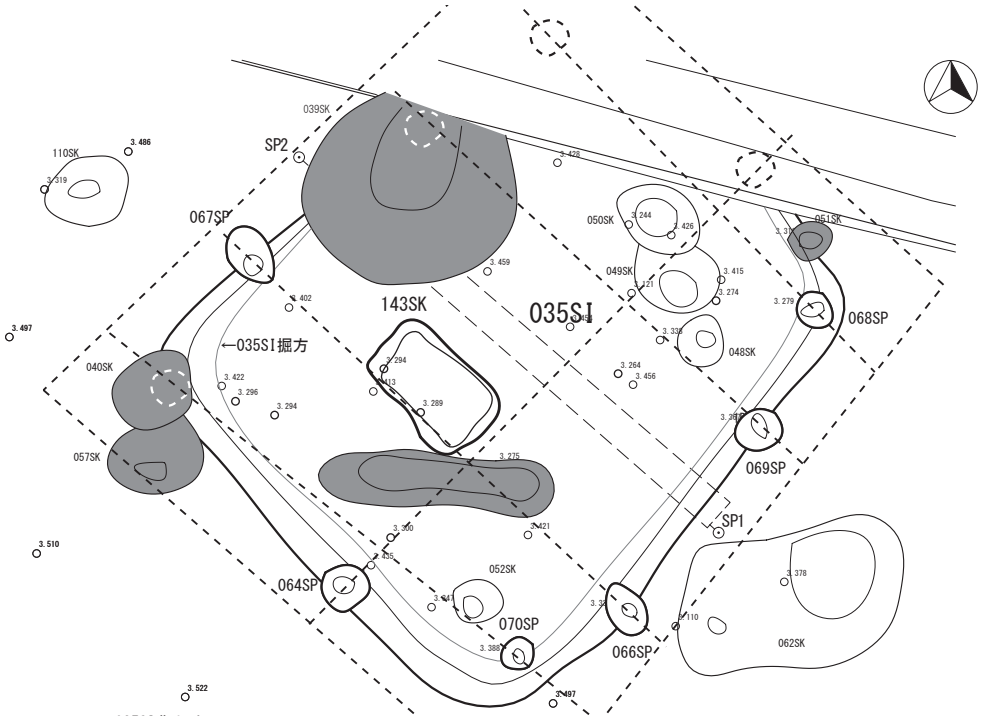
（035SI・143SK の記述は石黒立人氏による）

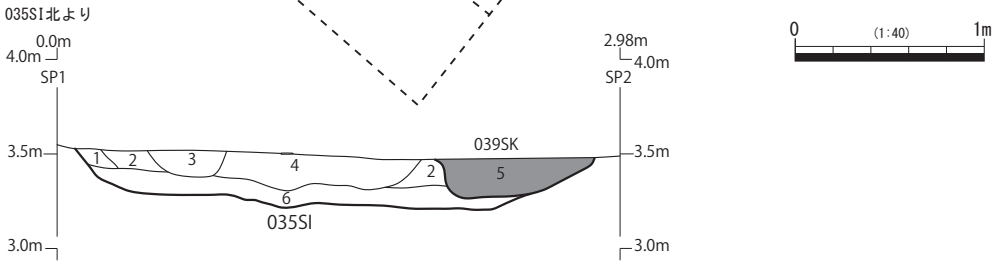
023SD：中世区画溝（第 18・19 図）

調査区中部と西部を区切る溝で、NNW-SSE 方向。最大幅 2.2m、中央部南端の深さは約 50cm だが、北端部では 20cm ほどとなる。調査区北辺で東方向に曲がっており、断面形状は緩やかなＶ字形で、部分的だが西側に拡張が試みられた痕跡を看取できる。

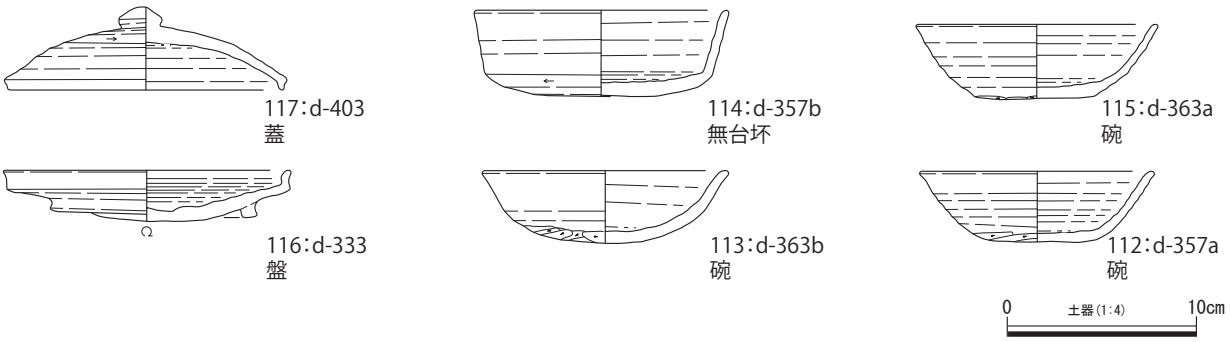
溝の埋土上半を中心に、中世以降の遺物を多く検出したが、南端部に多く集中がみられた。平成 24 年度 7 地点の SD7107 の延長線上に位置している。

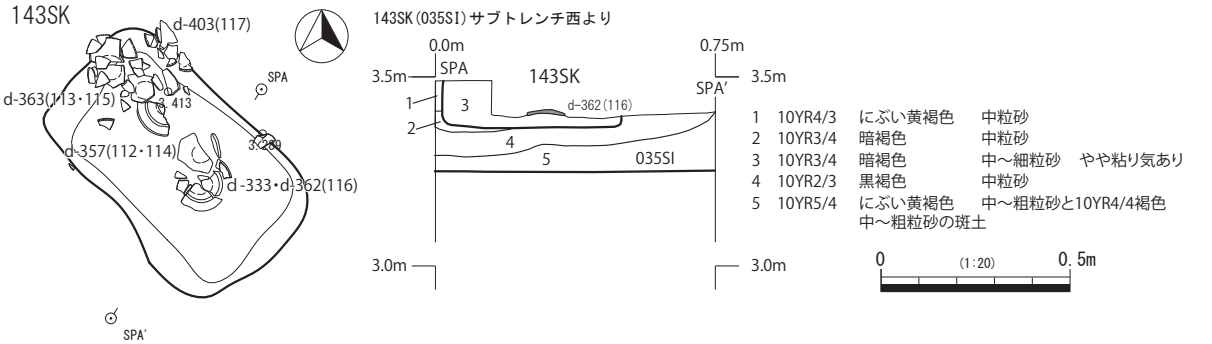
主な出土遺物としては東濃系山茶碗（128; 大谷洞段階、129; 大洞東段階）や片口鉢（122 ～





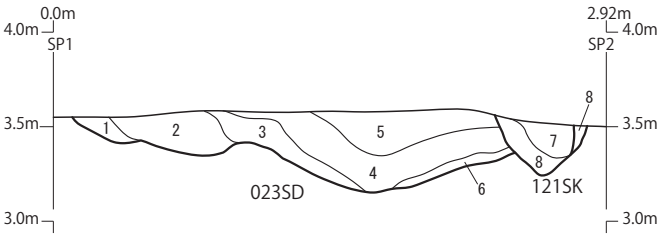
1　10YR4/3　にぶい黄褐色　中粒砂
2　10YR3/4　暗褐色　中粒砂
3　10YR3/4　暗褐色　中～細粒砂
4　10YR2/3　黒褐色　中粒砂
5　10YR4/4　褐色　中～粗粒砂　039SK（中世土坑）
6　10YR5/4　にぶい黄褐色　中～粗粒砂　と10YR4/4褐色中～粗粒砂の斑土が10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂と10YR3/4暗褐色中～粗粒砂に漸移する





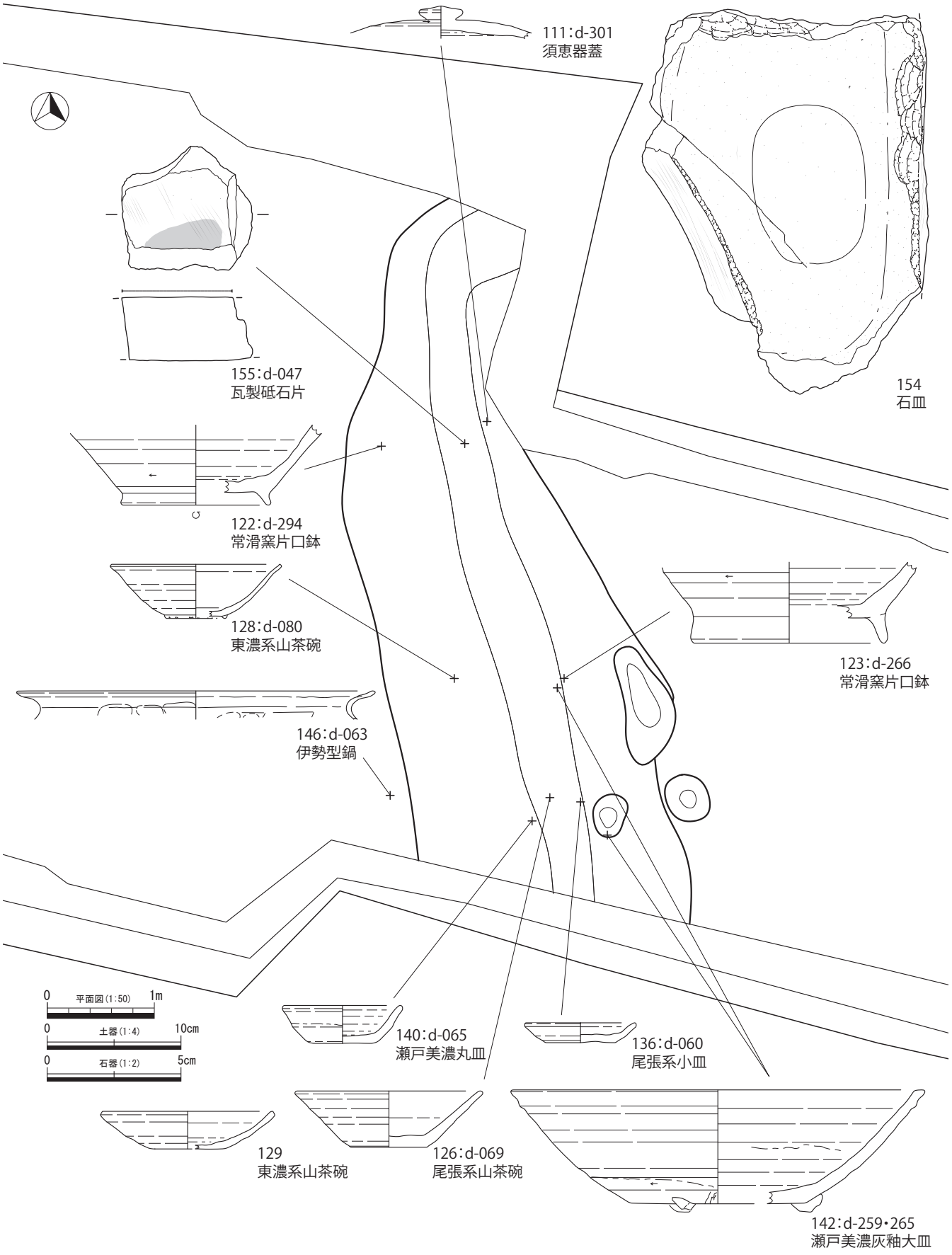
1　10YR4/3　にぶい黄褐色　中粒砂
2　10YR3/4　暗褐色　中粒砂
3　10YR3/4　暗褐色　中～細粒砂　やや粘り気あり
4　10YR2/3　黒褐色　中粒砂
5　10YR5/4　にぶい黄褐色　中～粗粒砂と10YR4/4褐色中～粗粒砂の斑土

第 17 図　035SI・143SK 平面図および出土遺物実測図



1	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR4/4褐色中～粗粒砂の斑土	
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR4/4褐色中粒砂の斑土	中世遺物を含む
4	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂	
5	10YR4/6	褐色	中～細粒砂　中粒砂	
6	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	
7	10YR4/4	褐色	中～細粒砂　121SK埋土	
8	10YR3/4	暗褐色	粗粒砂　121SK埋土	

第 18 図　023SD　溝



第 19 図　023SD 出土遺物実測図

124; 常滑窯 4 ～ 5 型式）がある。

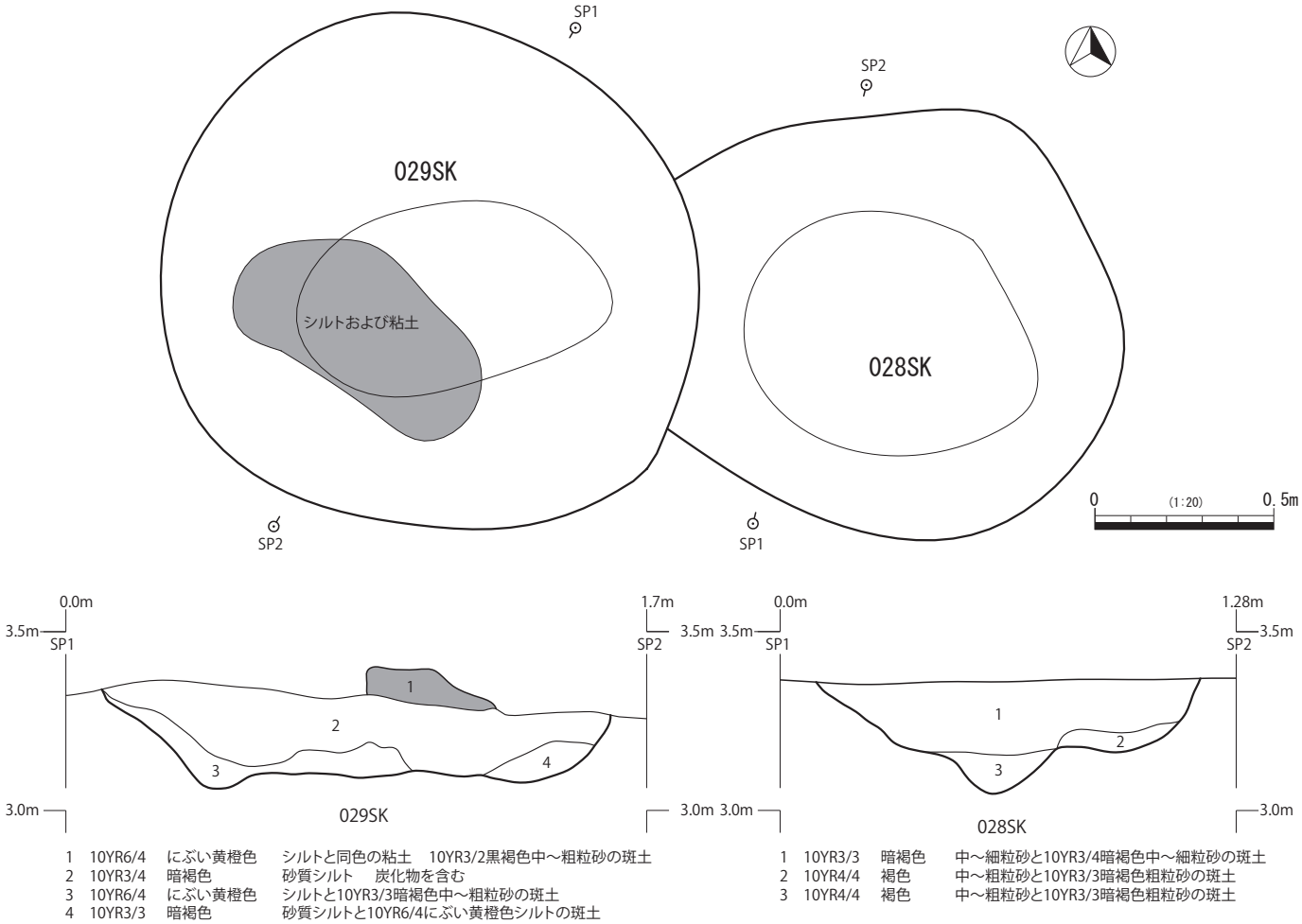
142 の瀬戸灰釉大皿は古瀬戸後期（15 世紀前半）のもの。146 は伊勢型鍋の口縁部で 13 世紀後半から 14 世紀のものと思われる。焼成不良の須恵器蓋（111）や、砂岩製で被熱の痕跡がみられる石皿（154）、よく研磨され砥石としての再利用が想定される瓦片（155）が見られた。いずれも中世のものである可能性が高い。

自然遺物としては、陶器片に混ざって拳大を上回る大きさのアカニシが 6 個（土塊と化した痕跡も含む）検出された。いずれも遺存状態が悪く個別の取り上げはできなかったが、殻の一部に割られた痕跡も認められることから、食用にされたものが半ば埋まりかけた溝に廃棄されたのであろう。

これらの様相から、023SD は中世後半に掘削され、掘り返されながら近世前半まで存続し、近世後半に周辺の整地とともに埋め立てられた溝と推定できる。

028SK・029SK（第 20 図）

調査区東部で検出された連なる土坑。にぶい黄橙色のシルト粘土が検出されている状況や、深さ 20 ～ 30cm ほどの浅い掘り方が連なった様子などから、近世以降のタタキ（常滑赤焼大甕を土坑に据え置き、下胴部を粘土やシルトを用いて固定した遺構）の痕跡と判断した。



1　10YR6/4　にぶい黄橙色　シルトと同色の粘土　10YR3/2黒褐色中～粗粒砂の斑土
2　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　炭化物を含む
3　10YR6/4　にぶい黄橙色　シルトと10YR3/3暗褐色中～粗粒砂の斑土
4　10YR3/3　暗褐色　砂質シルトと10YR6/4にぶい黄橙色シルトの斑土

1　10YR3/3　暗褐色　中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土
2　10YR4/4　褐色　中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色粗粒砂の斑土
3　10YR4/4　褐色　中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色粗粒砂の斑土

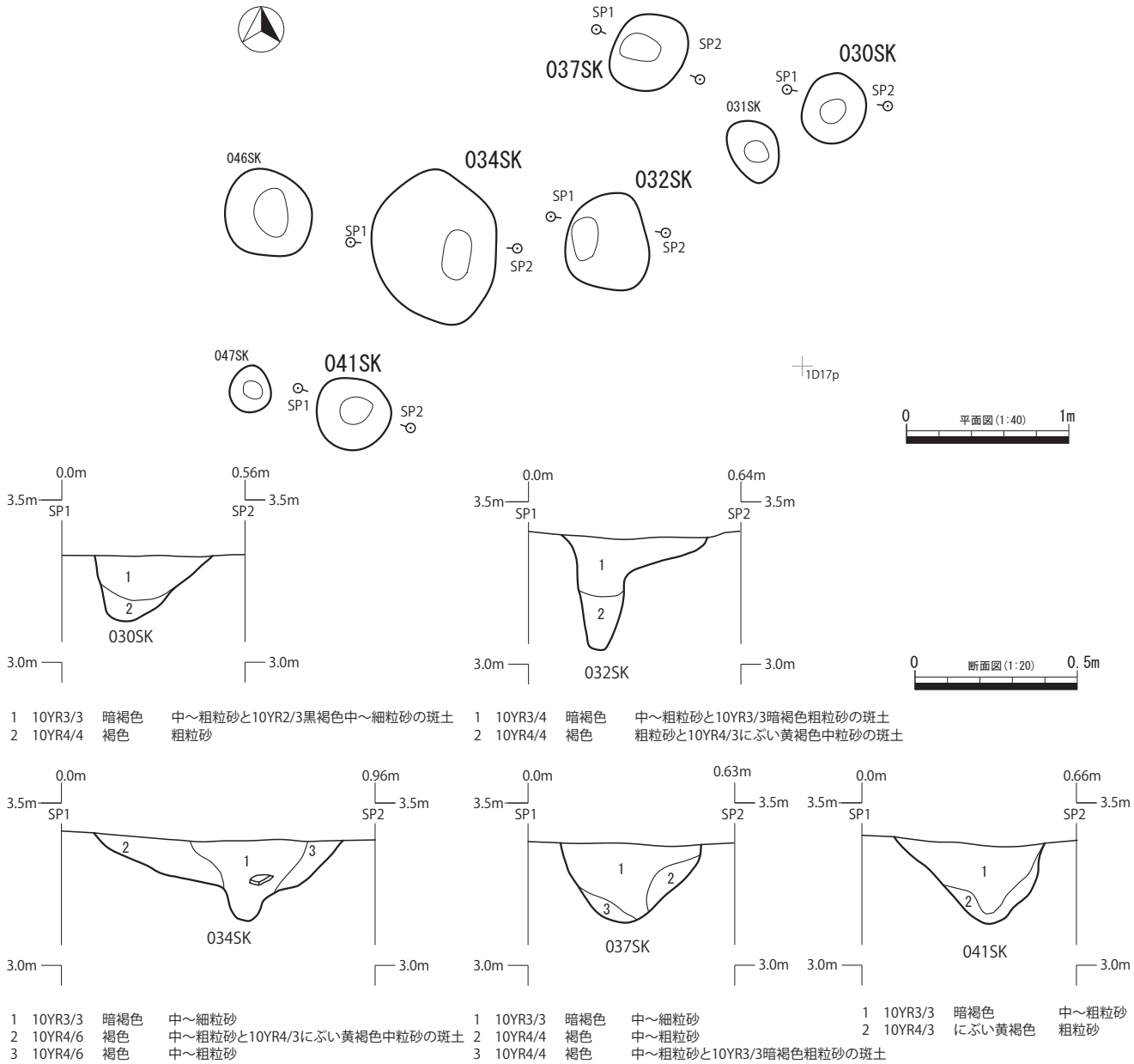
第 20 図　028・029SK　土坑

030SK・032SK・034SK・037SK・041SK ほか（第 21 図）

調査区東部、前述のタタキ遺構西側で集中的に検出された小規模な土坑群で、周辺からは近世の陶器類や常滑赤焼甕の破片などが検出されている。148 のかわらけは 041SK に半ば落ち込むような状態で検出された。厳密に時期を特定し得ないが 15 ～ 16 世紀のものと推定される。なお、030･031･032･041SK はほぼ直線状に並ぶが、間隔に規則性の無いことや規模および断面形状も類似性に乏しいことなどから、一連の遺構ではない可能性もある。

033SK・036SD（第 22 図）

調査区中部で検出された土坑と溝。033SK は調査区北壁のトレンチでプランが切られているが、長径約 50cm の土坑で、埋土と周辺からは重さ 2g 前後の小型の土錘が多く検出されていることから、近世のものと推測される。



第 21 図　030・032・034・037・041SK　土坑

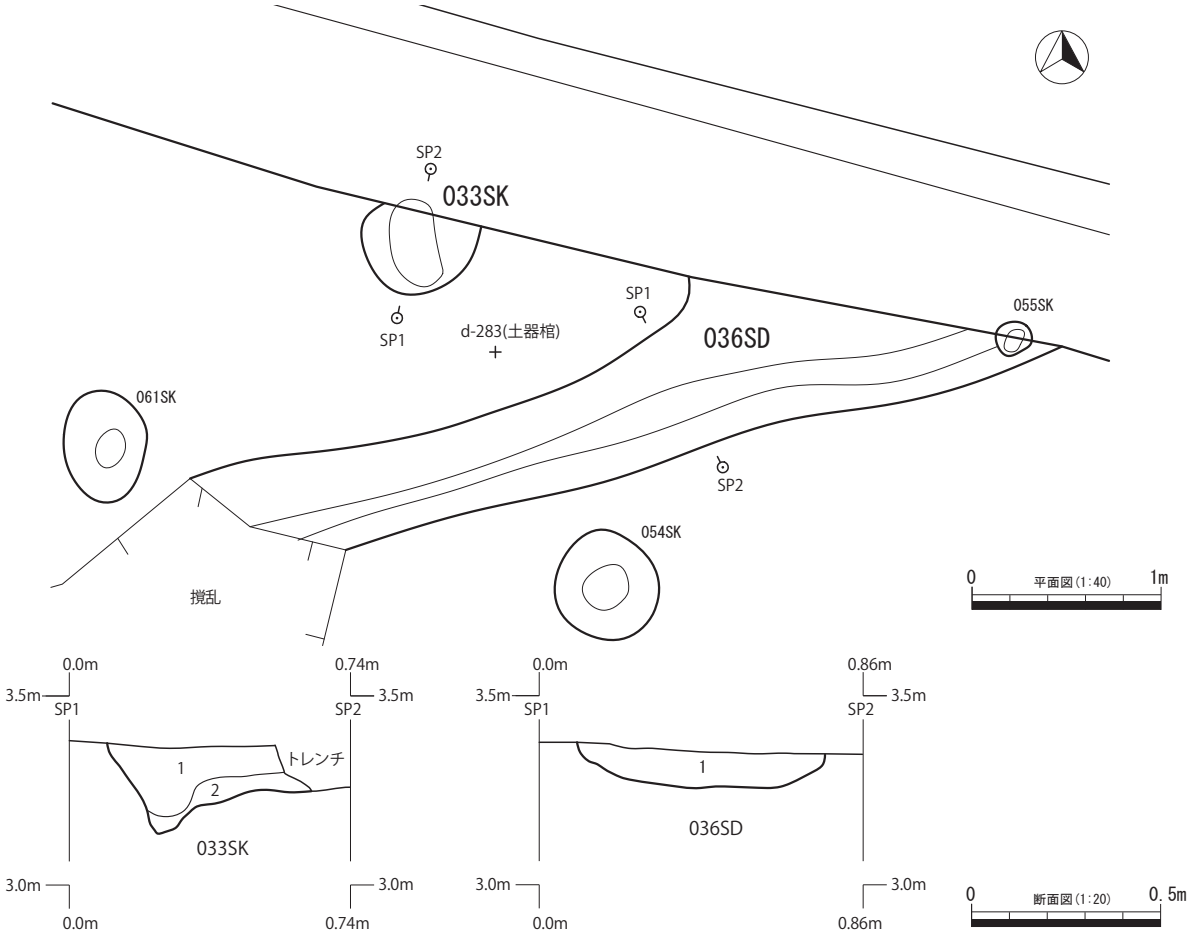
036SD は攪乱と整地で大半が削平されており、かろうじてプランを確定した溝で、幅 50 ～ 80cm、深さ 15 ～ 20cm、WSW-ENE 方向に延びており、北端部は北北西方向に曲がる傾向がみられた。溝埋土からは近世の小型土錘や古銭、灰釉碗（141）、尾張系山茶碗破片や常滑赤物甕などが、周辺からは土器棺残欠（015 ＝弥生時代前期）、東濃系山茶碗（130 ＝大谷洞段階）など、さまざまな時代の遺物が検出されており時期を特定することは難しいが、後述する近世末の井戸周辺遺構と方向が合うことや、南壁にかけて検出された焼土および炭・灰・砂利の詰め込まれた攪乱状の遺構に向かっていることなどから、それらに関連した遺構の一部と考えられる。

060・062・063・075・076SK および井戸（d-287）（第 23 図）

表土掘削の時点では、「井戸の息抜き」[註]がなされており、井戸の存在を認識していた。

表土掘削に伴い井戸枠が検出され、一部破損していたが 4 段分の井戸筒を取り上げた。常滑製品で幕末から明治頃のものと推定される。

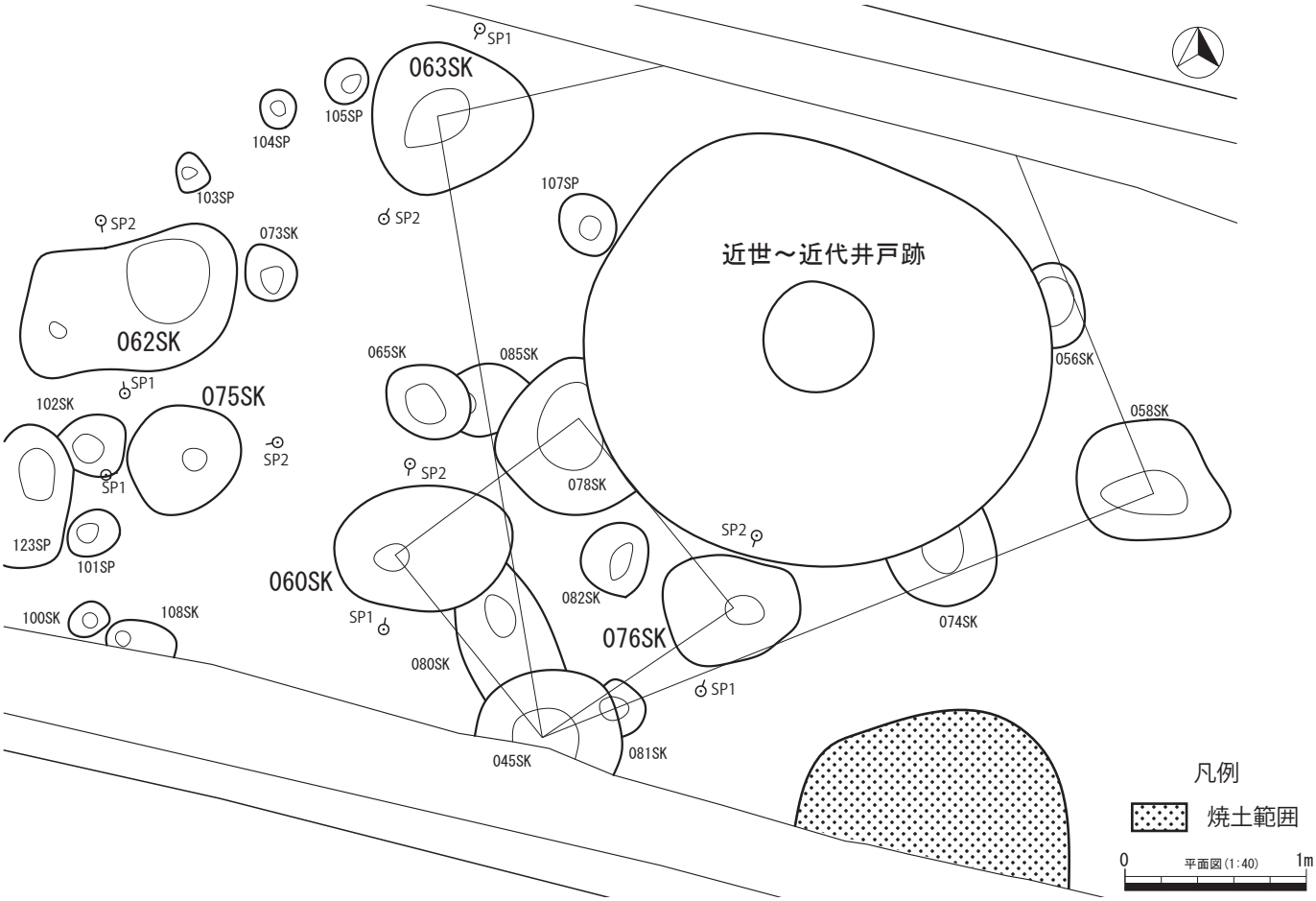
註：埋納した井戸の中心に節を抜いた竹筒を立て地上に土盛りをするまじないで、井戸の神様や精霊が呼吸できるようにおこなう意味の他、物理的なガス抜きのためという解釈もある。当地では解体の済んだ家屋敷地跡で普通にみられるもので、殆どの場合は儀式的なことはおこなわず、解体業者が習慣的に作っているようである。再開発時の安全のためという現実的な意味合いもある。

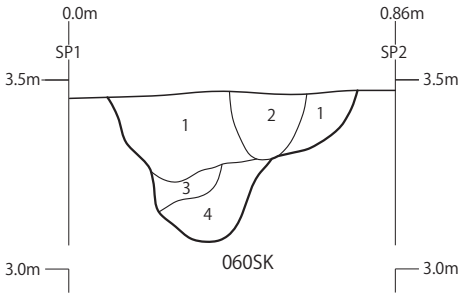


1　10YR3/3　暗褐色　　中～細粒砂
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～粗粒砂

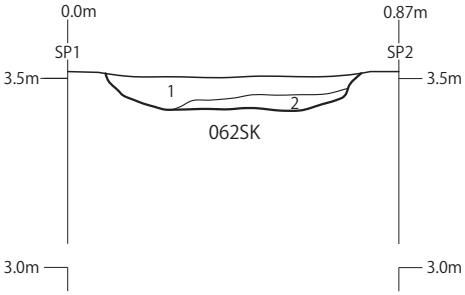
1　10YR3/3　暗褐色　中～細粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土

第 22 図　033SK　土坑　036SD　溝

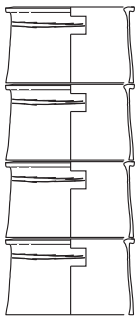




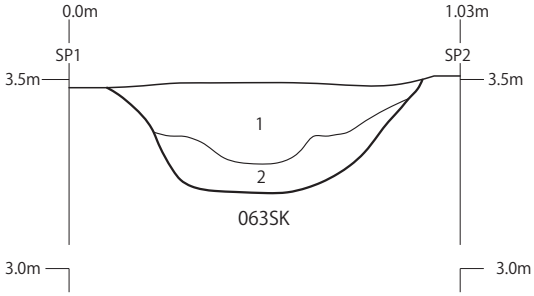
1　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～粗粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂の斑土
2　10YR4/4　褐色　中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂の斑土
3　10YR5/4　にぶい黄褐色　中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂の斑土
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～粗粒砂やや粘質有り



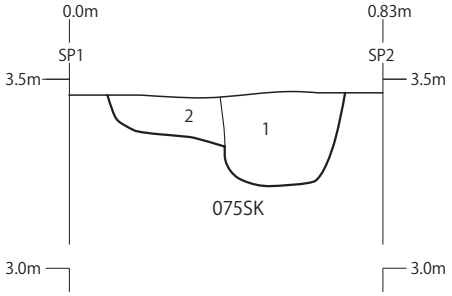
1　10YR3/3　暗褐色　中～細粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂の斑土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～細粒砂と10YR3/4暗褐色中～細粒砂の斑土



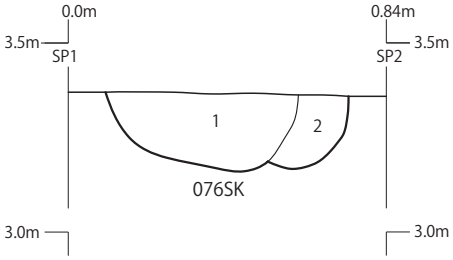
井戸跡より出土の
4段積み井戸の模式図



1　7.5YR4/4　褐色　中～細粒砂
2　10YR4/4　褐色　中～粗粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂の斑土　砂粒子の皿状構造がみられた



1　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～粗粒砂
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　中～粗粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂の斑土



1　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～粗粒砂
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂の斑土

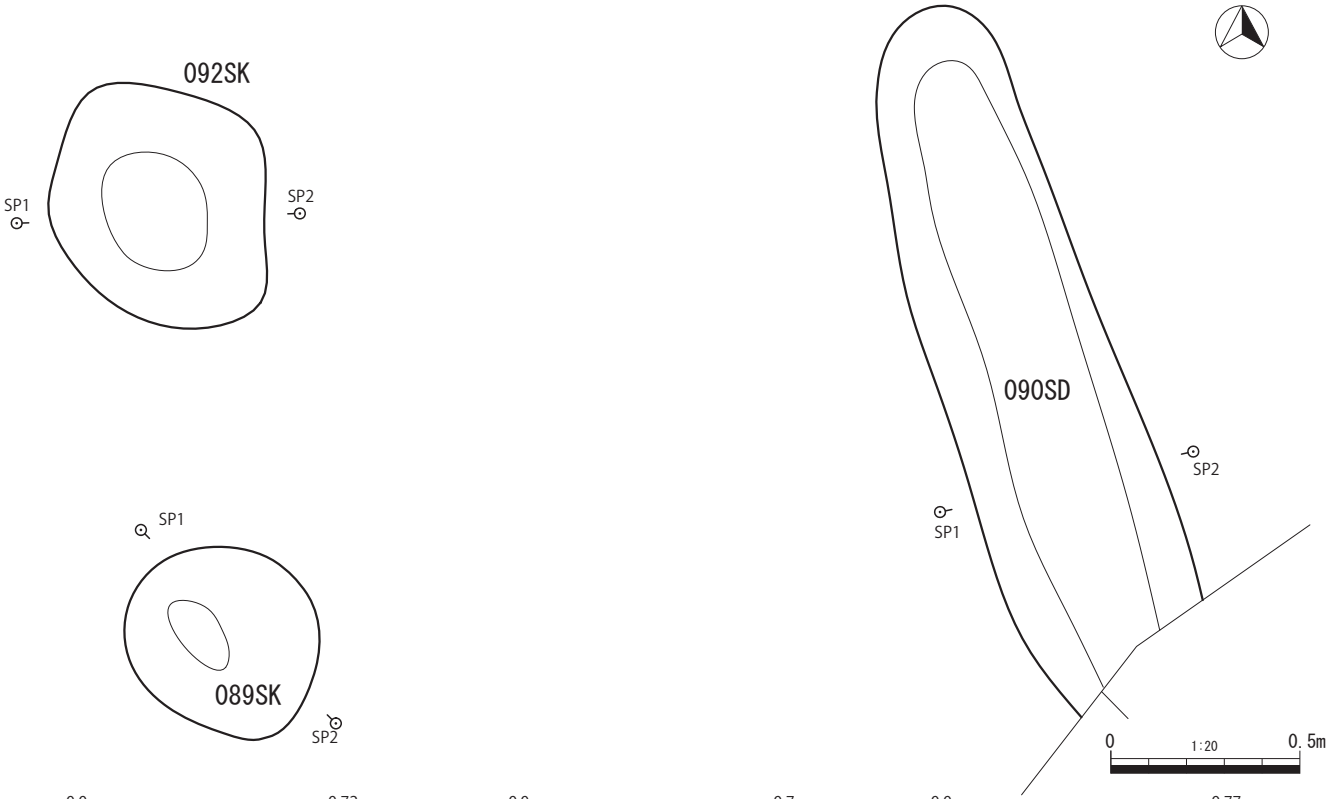
0
断面図(1:20)
0.5m

第 23 図　060・062・063・075・076SK　土坑

060SK は柱穴で 100×65cm 深さ約 40cm で、南セクションで断面が検出された 045SK もほぼ同規模の土坑であった。井戸跡を取り囲むように位置する 045・058・063SK は井戸の覆い屋など掘っ立て構造の柱穴であった可能性がある。これとは別に井戸南側の狭い範囲で検出された 045・060・076・078SK はそれぞれ 1.2m の距離で正方形プランを呈している。先述の井戸覆い屋とは角度を違えるが、井戸掘り方に接して存在することや、同質の埋土であること、埋土にいずれも近世の陶器類破片が混ざることなどから、井戸に関わる一連の遺構と考えられる。

089SK・090SD・092SK（第 24 図）

調査区西部で検出された遺構で、周辺からは土錘や陶丸、かわらけなどの他、近世の陶器類破片が検出されている。090SD は NNW-SSE 方向に延びる溝で、023SD などの中世後半以降に掘削された区画溝などと方向をほぼ等しくするため､耕作などに伴う溝か小規模な区画溝の残欠であろう。



1　10YR3/3　暗褐色　　中～粗粒砂
2　10YR4/4　褐色　　中～粗粒砂

1　10YR4/3　にぶい黄褐色　　中～粗粒砂

1　10YR4/3　にぶい黄褐色　　中粒砂
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　　中～粗粒砂と
10YR4/4褐色中～粗粒砂の斑土

第 24 図　089・092SK　土坑　090SD　溝

001SM：貝層（第 8 ・25 図）

調査区西部で東西に帯状に広がる貝層で、途中攪乱によって失われているが東西約 13m、最大幅 1.5m で、東端近くで南側に 1m ほど枝分かれしている。深さはいちばん厚い部分で約 30cm あり、全体がほぼ純貝層であった。

30cm 立方のブロックサンプルを分析した結果、シオフキを主体としハマグリやアサリを交えるもので、食用残滓であろう。検出状況は溝などの遺構を伴うものではなく、盛り上がった帯状の貝層が砂に埋もれたような状況を呈していた。貝層中に遺物を含まないために時期の特定は難しいが、東部北側から東濃系山茶碗や山皿、土師器の羽釜（143,144=14 ～ 15 世紀）などが比較的まとまって検出され、一部遺物は貝層表面に乗る出土状況であったことなどから、中世に属する貝層であると推測される。

3　出土遺物（第 25 図～第 29 図）

調査区東端部の 027SU 土器集積を除く、1 地点全体の主要な出土遺物に関しては分布図を参照されたい。

001 は調査区東端部での遺構検出時に出土した土製品で、粗粒砂を多く含んだ粘土紐を加工したものである（巻頭図版第 2）。長さ 5cm、太さ 1cm 前後の粘土紐の表面に 16 本ほどの細い沈線が引かれており、一方は割れた断面がみられ、反対側は丸く仕上げられ、直径 2mm ほどの小さな穴が貫通している。彎曲した内側は他の部分から剥離したような状態を観察できることなどから、本体が粘土板タイプの土偶頭部などに付加されていた部品と推定した。1 地点のすぐ東側には縄文晩期土器を多く検出した調査区（平成 21 年度 2 地点）が存在することからこの可能性を指摘しておきたい。弥生時代の遺物としては、調査区西半の東側から北側に水神平式土器の破片が多く検出される部分があり、分布図と拓影図を提示した（第 25 図）。また同時に、当地方では弥生期に石材として用いられることが多い下呂石剥片の分布も、同図に示した。条痕文土器に関しては、1 地点の北側の調査区（平成 26 年度 3 地点）においても同様の分布状況が報告されており、いずれもほぼ地山面での検出であるが、1 地点北側に弥生時代前期の中心地が存在した可能性を示すものであろう。下呂石剥片に関しては数グラムから 10 グラムほどの小さなものの他、石核（159）や顕著な加工痕を持つ剥片（160）もあり、当地点が石器製作場所でもあったことを意味するものであろう。なお 014 はいわゆる烏帽子タイプとも言われる口縁内部に鍔を持つ形状の粗製鉢で、製塩との関連が指摘されているものである。

015 の土器棺残欠は条痕文土器分布の中心から東に 15m ほど離れた地点で検出された。土坑に埋納された上面は中世の削平により消失していたが、土器棺の蓋として使われたものと推定される粗製鉢の細片も検出されている（巻頭図版第 4 、図版 20 参照）。本体は壺形土器で、胴部には二枚貝で縦位の羽状条痕文と、底部近くは横位の条痕文で仕上げられている。ほぼ全面に煤が付着しており、これが壺としての形状を保っていた時のものか、土器棺として再利用する際に付着したものかは議論が分かれるところである。

091 は縄文晩期の浮線文土器で、調査区西部 001SM 南側での出土。092 は弥生時代中期の壺型土器口縁部と思われるもので、沈線で弧状に区画された内部が貝殻擬縄文で充填されている。同様の資料は烏帽子遺跡（第 2 図 62）でも発見されている。102・103 は弥生時代後期の高坏破片である。

102は一見すると山中式の高坏に似るが、やや屈曲して外反する口縁部や体部との比率に差異が認められ、山中式とは異質のものを感じる資料である。いずれも調査区西部の狭い範囲から検出されており、現地に弥生時代後期の遺構が存在していた可能性を示唆する。104は全面ヘラミガキ仕上げの高坏で、坏部に被熱の痕跡がみられる。台付甕同様、調理に使用されたものであろう。

095から099までは129SU土器集積に含まれていた台付甕で、095のみは口縁部に若干屈曲する傾向がみられ、頸部のハケメがナデ消されている点が他の個体との違いだが、東端部の027SUで顕著に見られたく字甕の範疇として考えておく。

101のS字甕は調査区西部南壁で単独で発見されたものである（巻頭図版第３参照）。出土地点周辺にはごく狭い範囲に黒色砂層が見られ、その中から出土した。027SUに含まれていた他のS字甕と違い、粘土紐の接合部分の凹凸が完全に消されておらず（接合部４箇所の５段積み＋口縁部）目視でわかる程度に残されている。器壁の厚さは2.5mm前後。頸部直下のハケメは左下がりで力強いが、胴部はストロークの長い２段のハケメで仕上げられている。口縁部はやや平坦に開き気味で段も浅く、廻間III式に近い様相を示す。脚台は見つかっていないが焼成時の黒斑が大きな文様のように残っており、焼成方法も含めて在地で模倣製作された個体のようで、一見して無骨な印象をもつ。

093はパレススタイル壺の口縁部で、口縁部は擬凹線文仕上げで赤彩されている。廻間I式後半からII式のものであろう。

105の長胴甕は調査区東端北側で出土したもので、竈の支えとして利用されていたと思われる被熱した細長いチャート礫とともに検出されている。すぐ脇で106の長胴甕下胴部も出土したが、こちらは底部中央が割られており、甑に転用されたあとに廃棄されたものかもしれない。また近くからは118の須恵器有台坏坏身や108の土師器甕も出土しており、この周辺に古代の住居址が営まれていた可能性を示すものである（遺構プランは検出できなかった）。

109の甕はく字甕の一種で口端は丸く仕上げられているが、肩部は長いストロークのハケメで調整されている。口縁部も粘土紐の繋ぎ目がわずかに屈曲する傾向にあり、今回の調査で検出された唯一の例だが、廻間式のく字甕と宇田甕を繋ぐ資料と解釈できるかもしれない。

112～117は一群の猿投系須恵器で、121は常滑焼大甕口縁部で10型式のもので15世紀後半のもの。122～124は常滑窯片口鉢底部で、ケズリの程度や器壁の厚さなどに多少の違いは見られるが、概ね４～５型式範疇で、13世紀前半のもの。125～137は山茶碗・山皿類で、瀬戸窯、東濃系が主流となり、14世紀後半以降のものが多く出土する。138～140・142は瀬戸・美濃製品で、古瀬戸後期から大窯１期のもの。

143～145は球形の体部を持つ内彎型羽釜で、内外ともにハケメ調整された特徴などから、14世紀後半～15世紀代のものと考えられる。146・147は伊勢型鍋の口縁部で13世紀後半から14世紀頃のものであろう。

148のかわらけは15～16世紀のものと推定される。149はかわらけであるが山皿にも似た形状をしており、12世紀～13世紀のものである可能性もある。

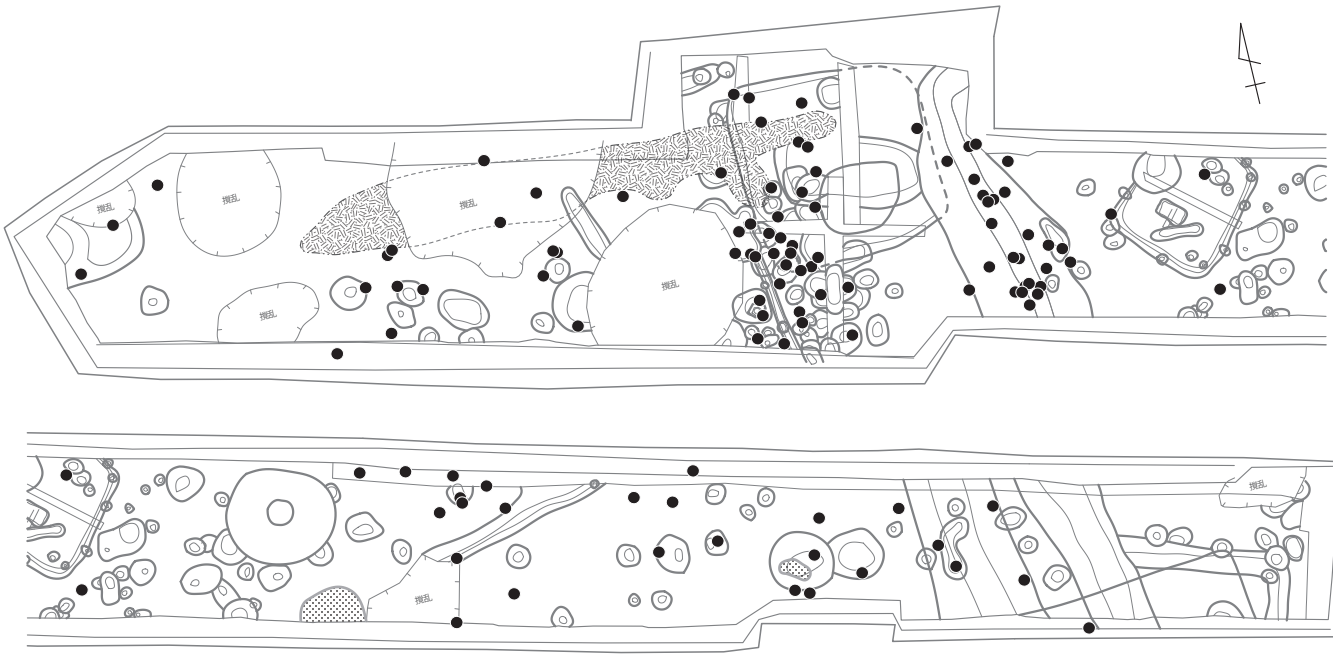
これらのほか、用途部位ともに不明だが須恵質の板状のもの（150）、12世紀代の布目瓦断片（151）、龍泉窯系の中国青磁碗（152）が出土している。

また、調査区のほぼ全面で重さ数グラム～10グラム以下の素焼きの土錘が数多く出土している

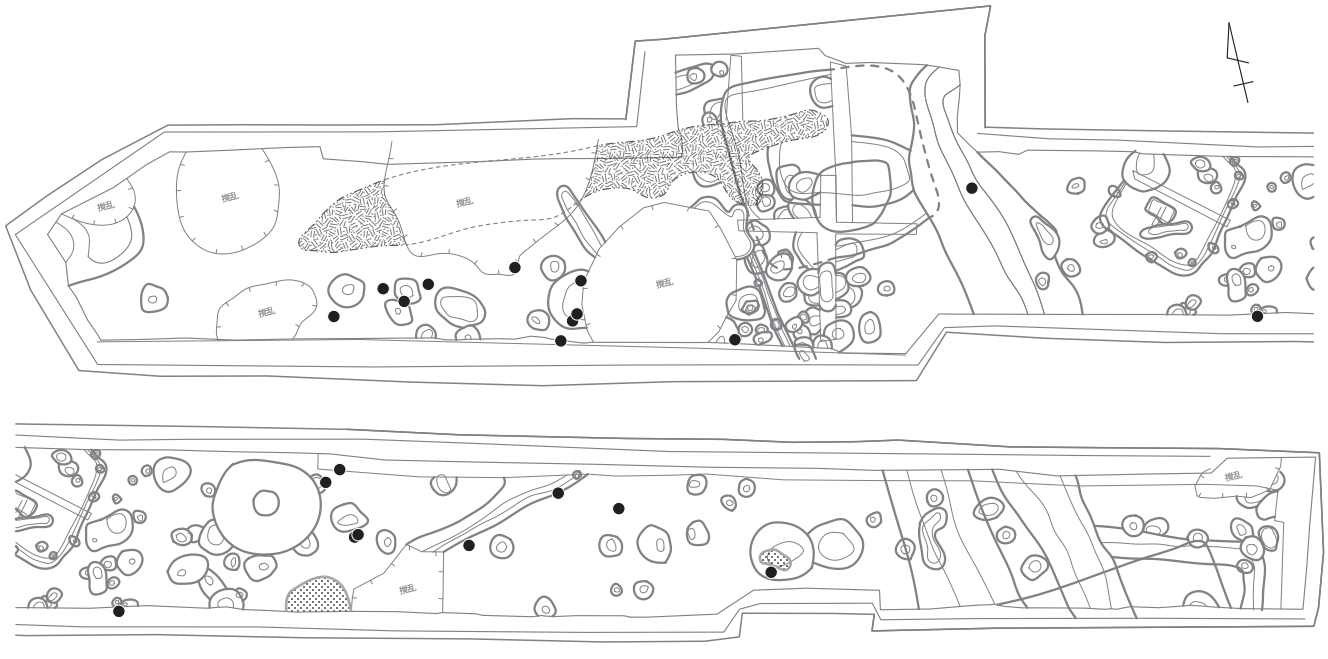
011:d-024
010
008:d-377
159:d-372
石核
014:d-182
015:d-283
土器棺残欠
009:d-211
160:d-315
剥片
007:d-305
013:d-324
006
012
005
004:d-350

凡例
焼土範囲
貝層範囲
剥片の出土地点
条痕文土器の出土地点

第 25 図　１地点条痕文土器と剥片の出土分布図

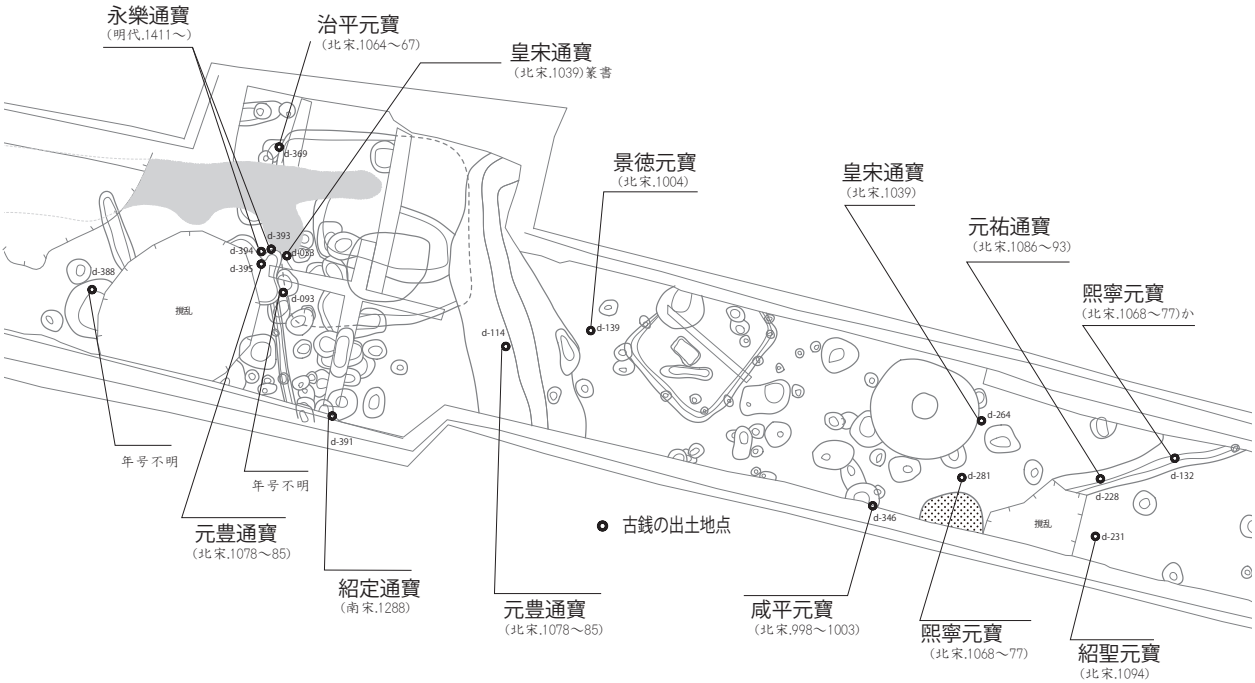


土錘の出土分布図



陶丸の出土分布図

第 26 図　土錘・陶丸の出土分布図



第 27 図　古銭の出土分布図

（第 26 図上）。中世区画溝 023SD とその西側に集中的に分布していたが、漁網などで纏まって使われていたものが散らばったものと推測される。所属時期は中世後半～近世と思われる。

陶丸（第 26 図下）も分布が偏在し、さらに山茶碗や土師質の内彎型羽釜などと重複することなどから、14 世紀を中心とした居住域が 023SD 区画溝とその西側北寄りの部分に展開していた名残りであろう。

北宋銭を中心とした古銭は極めて散漫な検出状況であったが（第 27 図）、調査区西部の比較的狭い範囲に 5 点が集中する様子が見られ、永樂銭 2 枚が含まれていたために六文銭などの副葬品を想定して調査を進めたが、墓壙などの遺構や骨質は検出できなかった。

石器類は水神平式期の活動痕跡と思われる下呂石剥片類のほか、石核（159）、加工剥片（160）、石鏃（161）、石錐（162）を検出している。

153 の砥石は 027SU 土器集積からの出土であり、廻間式期のものであろう。この他に時期を特定し得ないが石皿（154）、台石（156）がある。157, 158 の小型砥石は中世から近世のものであろう。

４　まとめ

1 地点東端部では想定通り、古墳時代前期の遺構や遺物を検出することができた。なかでも 027SU 土器集積（の一部）を検出できたことは、大きな成果であった。

具体的には、廻間遺跡におけるく字甕分類の甕 A1（口縁端部に刺突文を持つもの）や A2（口縁端部に明瞭な面を持つもの）、A3（体部からほぼ垂直に立ち上がる直交口縁）、A5（内彎口縁）などが見られず、A4（口端を丸く調整するもの）が主体となること。甕Ｂ（受口系口縁台付甕）が見られないこと。甕Ｃ（Ｓ字甕）では刺突文を持つ C1・C2 は 043 の 1 点を除き見られず、刺突文の省略された C3 と、口縁部が外方に大きく拡張する C4 が主体となる。

高坏に関しては、やや袋状の傾向がみられる脚部も 4 個体ほどみられるが、大半は円錐状の外反脚である。坏部の形状に関しては、063 と 064 は高坏 A のなかでも体部が直線的に屈曲するタイプと半球状坏部の高坏Ｂが合成されたような器形であり、廻間遺跡にはみられないタイプである。

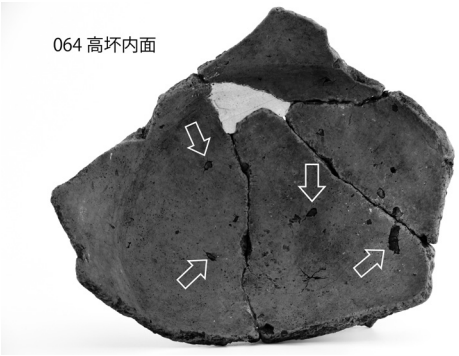
器台については円錐状の内彎脚をもつ器台 A は無く、坏部が大きく外反し鍔を持つ 083 のほか、口径の小さい器台Ｂが中心となる。また壺類については、垂下・拡張された口縁部に擬凹線文を施すものは見られず、加飾された広口壺で口頸部が外反・長頸の壺 B1(017) に口頸部が内彎する壺Ｃと直口・外反する口頸部の小型壺が伴い、壺Ｅ即ち複合口縁の加飾壺である柳ヶ坪型が客体として数個体伴う。

鉢に関しては後述する粗製のもの（鉢 B1 に類する）以外には検出されていない。廻間式土器の消長を主軸にしてこの土器集積を分析した場合、II 式後半から III 式前半における様相と良く照応するものである。

集落の構造や変遷に関する考察は全体のまとめに譲るが、廃絶した住居址の窪地が土器廃棄の場所として一定期間連続して使われていたこと、日常使いの土器とは少し様相を異にする器種構成がみられたこと、畑間・東畑遺跡では特徴的なく字甕の一群が中心的に存在することなどが明らかになった。

また、027SU から数十メートル離れた地点でく字甕を主体とした小規模な土器集積 129SU が検出され、同時期ながら別パターンの集積を確認できたことも重要な発見であった。

これら土器集積に伴う黒色砂から抽出された微粒炭の年代測定結果は 1 世紀後半から 3 世紀初めとかなり幅広い結果が出たが、暦年代較正数値のピークは 122-171 cal AD（48.91%）であった。廻間 II 式後半～Ⅲ式前半を中心とした資料であることを考えると、従来のデータより若干古い数値方向に幅を持っている印象を持つ。プラントオパールの分析ではネザサ節型とウシクサ族の優越する様子が判明したが、古墳時代前期の砂堆上は基本的にこれらの植物で覆われていたと推測される。なかでもウシクサは湿地や水辺に多く生息する雑草であることを考えると、旧河道に面し河川に関わる居住環境が明らかになったとも解釈できる。


064 高坏内面

027SU 土器集積に含まれていた遺物の中で、とりわけ高坏や台付甕を中心としたいくつかの個体で、ていねいなヘラミガキで仕上げられた器表面に 5mm 前後から 1cm 未満の赤褐色の亜角礫状の物質が目立つものがあり、それらの分析をおこなった（右写真、第３章参照）。

その結果成分は多くが赤鉄鉱や磁石鉄鉱などの酸化鉄を主体とした物質で、軟質な鬼板などが原形である可能性が判明した。鬼板は遺跡周辺の丘陵地や砂堆基盤層で普通に見られる物質だが、これらを全く含まない土器がほとんどであることから、特定の土器に限って意図的に混和された可能性も否定できない。今後の課題として過去に出土した遺物の確認と分析も必要であろう。

027SU 土器集積に含まれていた土器に関し、S 字甕の体部２点を抽出しその胎土分析をおこなった。その結果、1 点からは放散虫化石が検出され、胎土として海成粘土が用いられていたことが判明した。母体となる粘土はどちらも知多半島の師崎層群に由来する可能性が高いようだが、含まれる鉱物類にみる組成の傾向は雲出川水系特有の砂粒組成に類する特徴が指摘された。この点からも、過去に出土したＳ字甕の再分析が必要であろう。

古代としては 035SI 住居址の検出が特筆される。小規模な住居址だが中央の方形土坑と須恵器の一群が特徴的な検出状況を呈しており、住居址がほぼ単独で存在した意味合いも含め、情報希薄な時期を埋める貴重な発見となった。住居址埋土の分析結果としては、イネ族のプラントオパールとともにキビ族が検出されており、古代における雑穀栽培の可能性を示唆するものであろう。微粒炭の年代測定結果は７世紀後半から８世紀後半を示し、中央土坑から出土した須恵器の年代とよく照応するものであった。

中世以降においては従来から予想された集落内の区画溝の延長部分を追認することができたことと、近世には存在していたと思われる砂堆上の町割りの一部を再確認することができた点が重要である。また明治初期のものと思われる常滑製赤物井戸筒の４段積みを取り上げることができた。常滑という巨大な生産地が近いということと、日常的に至る所で赤物や真焼を中心とした常滑製品を見かける機会が多く、とかく遺物として理解する視点が欠落しがちな焼き物ではある。近年になって近世の常滑製品（特に真焼や赤物の大甕類）の編年が完成されつつあり、貴重性においても今後は他の時代の出土遺物同様の取り扱いが必要となるであろう。

1地点全景（北東から）

凡例
焼土範囲
貝層範囲
0 平面図(1:100) 2m
0 石器(1:2) 5cm
0 土器(1:4) 10cm

121
常滑大甕

144
羽釜

143:d-219
羽釜

125
山茶碗(瀬戸)

132:山皿(瀬戸)

133:東濃系山皿

127:d-187
東濃系山茶碗

134:d-240
東濃系山皿

138:d-186
瀬戸美濃丸皿

104:d-376
高坏

159:d-372
石核

150:d-197
須恵器?

099:d-014
台付甕

091:d-380
浮線文浅鉢

撹乱
096SK
097SK
092SK
093SK
099SK
095SK
098SK
094SK
089SK
091SK
088SK
090SD
090SI
158SD
156SK
155SK
111SK
157SK
120SI
154SK
144SX
002SK
139SK
126SK
021SK
019SK
125SK
140SK
022SK
141SK
012SK
114SK
008SK
129SU
120SI
113SK
146SK
020SK
018SK
115SK
010SK
009SK
112SK(018SK)
007SK
127SK
175SD
013SK
116SK
006SK
128SK
119SK
177SK
005SK
025SK
024SK
014SK
118SK
015SK
004SK
003SK
016SK
159SK
145SK
023SD
110SK
039SK
050SK
051SK
121SK
040SK
049SK
105SP
057SK
143SK
048SK
063SK
035SI
104SP
103SP
107SP
053SD
052SK
073SK
085SK
122SK
124SK
062SK
065SK
056SK
102SK
058SK
078SK
109SK
106SP
076SK
079SK
075SK
101SP
084SK
060SK
123SP
100SK
082SK
074SK
108SK
080SK
061SK
081SK
045SK
近世～近代井戸跡

100:d-307
S字甕

160:d-315
剥片

137:d-304
山皿(瀬戸)

094:d-170
弥生壺口縁

147:d-322
伊勢型鍋

149:d-002
かわらけ

131:d-330
山皿(尾張系)

109:d-432
甕

162:d-390
石錐

102:d-414
高坏

095:d-029
甕

101:d-311
S字甕

103:d-159
高坏(山中式)

124:d-411
片口鉢(常滑)

097
甕

107:d-034
長胴甕

098
甕

0 平面図(1:100) 5m

第 28 図　1 地点遺物出土分布図（西半）

117:d-403
蓋

116:d-333
盤

115:d-363a
碗

112:d-357a
碗

113:d-363b
碗

114:d-357b
無台坏

《住居址内土坑出土の須恵器群》

015:d-283
土器棺残欠

145:d-286
羽釜

105:d-001
長胴甕

凡例
焼土範囲
貝層範囲
粘土範囲

0 平面図(1:100) 2m
0 石器(1:2) 5cm
0 土器(1:4) 10cm

135:d-270
碗底丸

141:d-136
灰釉碗

001:d-360
土製品

118:d-003
有台坏身

106:d-120
長胴甕(甑?)

108:d-418
古代甕

148:d-331
かわらけ

138:d-126
瀬戸美濃丸皿

130:d-330
東濃系山茶碗

161:d-335
石鏃

158:検出
砥石

157:d-416
砥石

d-287 :2段目

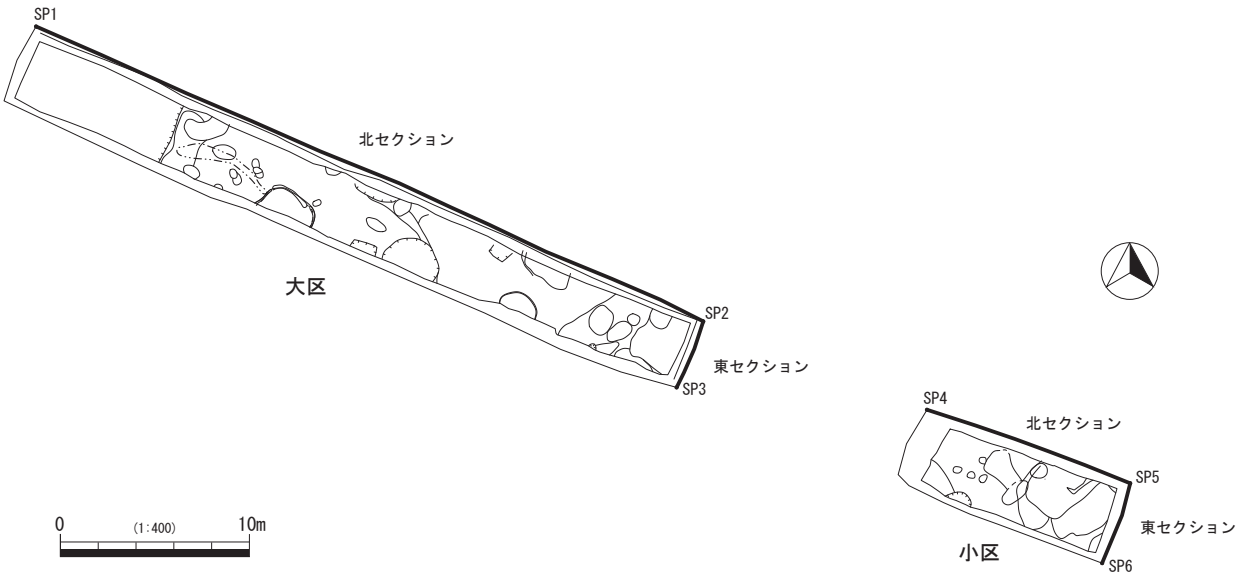
d-287:3段目

4段積み井戸の模式図

第 29 図　1 地点遺物出土分布図（東半）

第２節　２地点（HM19-2）の調査

１　２地点の概要と遺跡の構造



第 30 図　２地点セクション位置（1/400）

本調査区は調査予定地内に存在する電柱や路地の関係上、大小２区に分けて調査をおこなった。令和元年 (2019 年) ９月２日より、重機によって大区の西端部より表土掘削を開始し、同時に人力による掘削も開始した。小区の表土掘削は９月５日におこなった。10 月１日に高所作業車 (22m) から空撮をおこない、調査を終了した（直ちに道路工事が入るため、協議の結果、埋め戻しは実施せず)。調査面積は大区 170.5㎡＋小区 52.3㎡＝ 222.8㎡である。

基本層序は以下の如くである。

Ⅰ層：表土層、現代の攪乱層および耕作残土など。

Ⅱ層：近世の遺物包含層および整地層、混貝土層、混土貝層などで、本調査区のほとんどの部分ではこのⅡ層（近世層）が地山レベルまで及んでいた。粘土貼りを伴った大小規模の遺構や、大区東端から小区にかけて顕著に見られた大量の貝殻を含んだ層も近世に属する。

Ⅲ層：中世の遺物包含層であるが、大半が近世に削平されてしまったようで、前後の時代から分離可能な層としては確認できなかった。

Ⅳ層：大区西部のごく一部（地山直上）にその痕跡をわずかに認めたものの、上層と明確に区別可能な遺物包含層としては確認できなかった。

調査前の地表標高は 3.8m 前後で、地山面は大区西部で 2.9m 前後、小区では 3.2m ほどと僅かに高くなっていた。これは１地点同様、近世以後の大田集落（大里村）を南北に貫く往還道が小区に接し存在していたことに関係するものであろう。

本調査区に連続した西側には、平成 27 年度調査の 6 地点が存在するが、幅 1.2m ほどの区画溝やいくつかの土坑が検出されている。また地山面からは散漫に、弥生時代中期の土器や古墳時代前期の土器が検出され報告されている。今回の調査区では該当する時期の遺物包含層は検出されなかった。しかしながら手捏ねのミニチュア土器（005）や壺頸部（001）、磨製石斧（054）など、弥生時代中期から古墳時代前期に属すると推定される遺物が少量だが検出されている。

大区東端部から小区にかけては大規模な貝層がみられ、その検出状況からいずれもが廃棄を目的として急角度で掘削された土坑に詰め込まれたような状況であった。貝層には破砕されて圧縮されたものと、全く圧縮されず土砂も交えない純貝層が見られた。出土する遺物は大半が近世の陶器類であり、その時期に集中して廃棄が繰り返されたようである。008SK と 010SK に充填されていた貝層の分析結果は、第 3 章第 1 節を参照されたい。

また、大小両区からは、粘土貼りを伴った近世の遺構（実際に検出されるものの大部分は厳密に言えばシルト質であるが､構築当初はより粘土に近いシルト層であったことが判明したこともあり、慣習的に「粘土貼り遺構」と呼称している）複数検出されており、大規模な廃棄土坑の発見と共に今回の成果を特徴付けている。

２　主な遺構

001SX（第 34 図）

小区のほぼ中央で検出された粘土貼りを伴う遺構で、常滑赤物大甕の破片を半円形に配し輪郭を形成することが特徴である。掘り方は湧水によって明確には測定できなかったが、地山面を深く抉るように隅丸長方形で掘り込まれていたようである。

検出された部分の短辺は 2.3m で、長辺は 5m 以上ある。

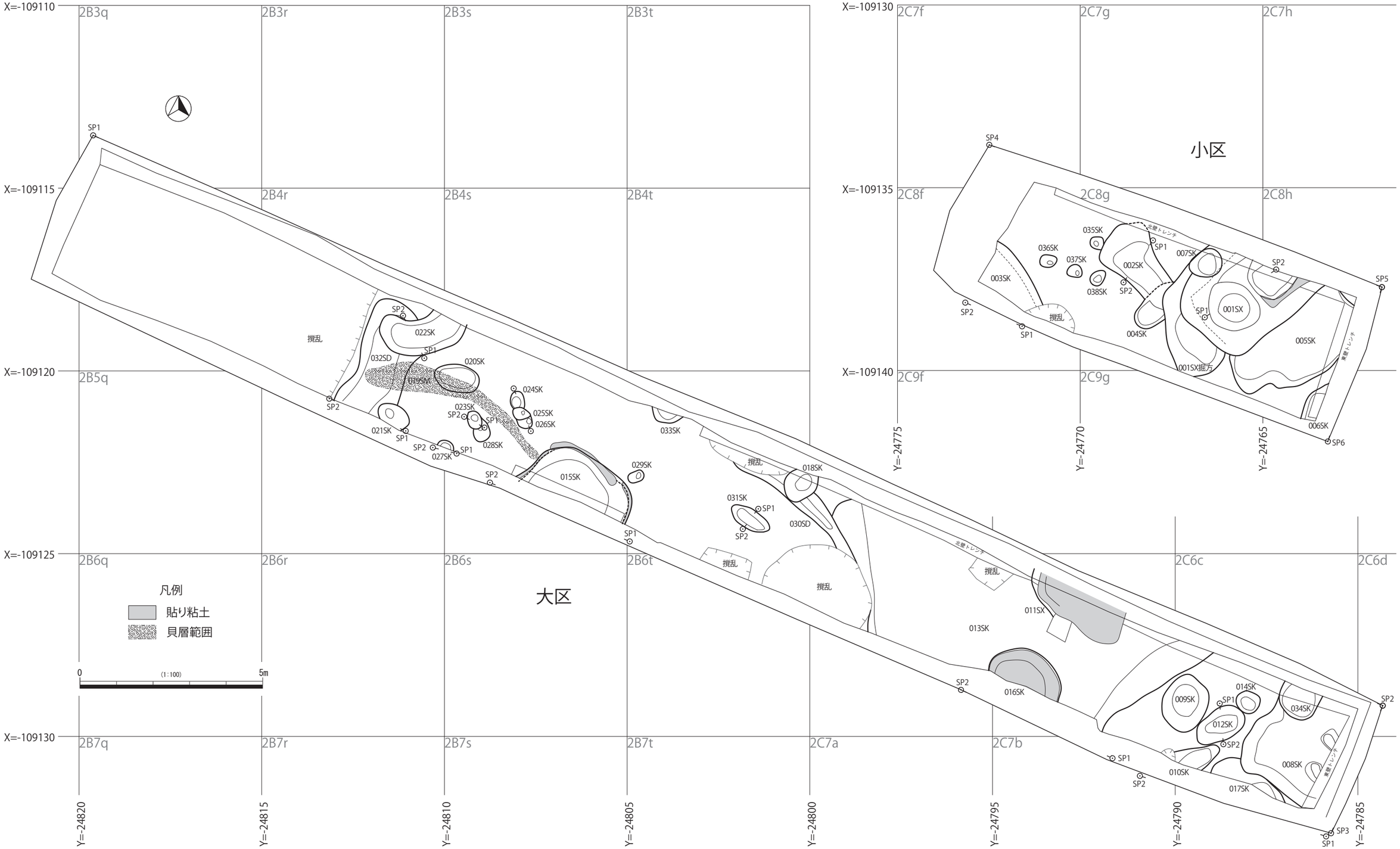
主軸は NE ～ SW 方向で、陶片で囲まれた南側は中央が検出面からの深さ 30cm ほどに浅く作られ、連続する北側は黄褐色の粘土が浅い皿状に貼り込まれ、長方形の凹みを作り出している。即ち、いったん地山粗粒砂層まで全体を掘り込んだ上で、シルト混じりの砂で内部を突き固めて平らに仕上げ、その上に陶片による囲みや粘土貼り部分を造り込んでいる。周辺には被熱した痕跡も無く、また粘土貼り部分にも目視する限りは沈殿物質などは認められず、さまざまな用途を検討したのだが、この遺構の用途は不明であった。

なお隣接する 005SK は大半が水没したため詳細は不明だが、その規模や状態などから、001SX 造築以前に存在した同様の遺構の痕跡または、001SX の掘り方である可能性がある。もし 005SX が 001SX の掘り方であるとすれば、全体は幅 4m 以上の大規模なものになる。005SK から検出された常滑赤物大甕（032）は 18 世紀後半から 19 世紀前半のものであり、001SX で使われていたものとほぼ同時期のものである。

出土遺物の様相から、本遺構は 18 世紀後半に構築されたものと考えられる。

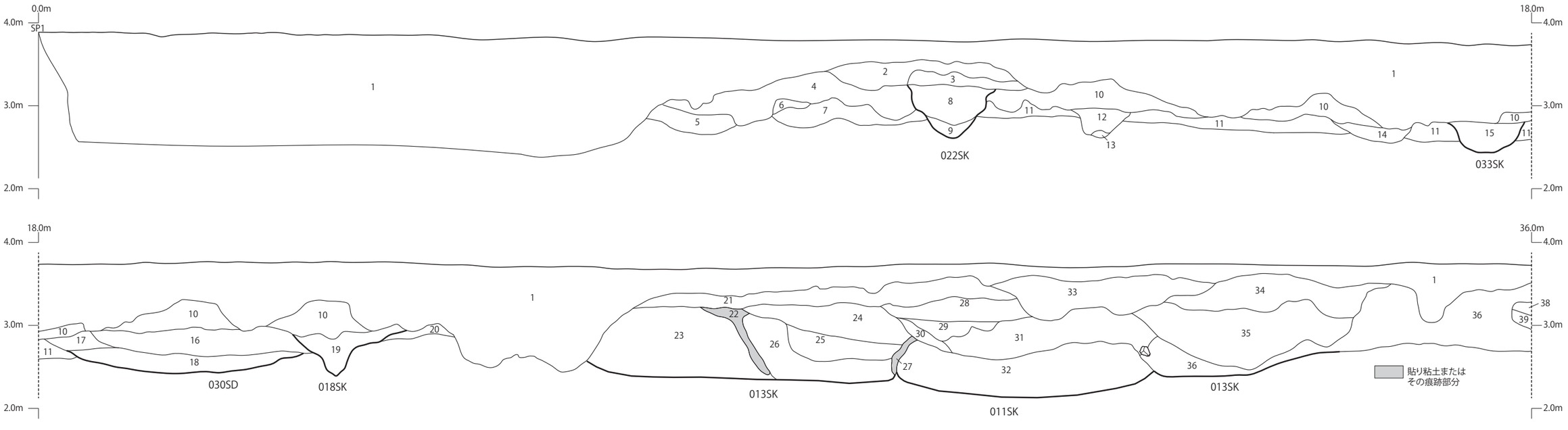
016SK（第 35 図）

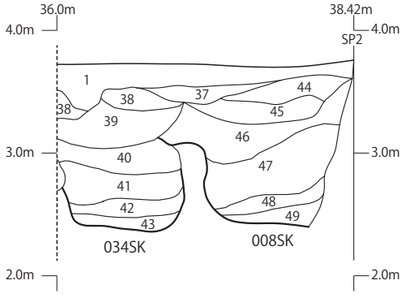
大区の南壁セクション清掃中に検出された大規模な粘土貼り遺構で、平面プランは円形または楕円形を呈するようである。断面における幅は底部で 2m 前後､50cm ほど立ち上がった部分では 2.5m となり、上に向かって開く平鉢状の形状が確認された。


X=-109110
X=-109115
X=-109120
X=-109125
X=-109130
X=-109135
X=-109140
Y=-24820
Y=-24815
Y=-24810
Y=-24805
Y=-24800
Y=-24795
Y=-24790
Y=-24785
Y=-24775
Y=-24770
Y=-24765
2B3q
2B3r
2B3s
2B3t
2B4r
2B4s
2B4t
2B5q
2B6q
2B6r
2B6s
2B6t
2B7q
2B7r
2B7s
2B7t
2C6c
2C6d
2C7a
2C7b
2C7f
2C7g
2C7h
2C8f
2C8g
2C8h
2C9f
2C9g
大区
小区
攪乱
北壁トレンチ
東壁トレンチ
001SX
001SX掘方
002SK
003SK
004SK
005SK
006SK
007SK
008SK
009SK
010SK
011SX
012SK
013SK
014SK
015SK
016SK
017SK
018SK
020SK
021SK
022SK
023SK
024SK
025SK
026SK
027SK
028SK
029SK
030SD
031SK
032SD
033SK
034SK
035SK
036SK
037SK
038SK
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
凡例
貼り粘土
貝層範囲
0
(1:100)
5m

第 31 図　２地点平面図

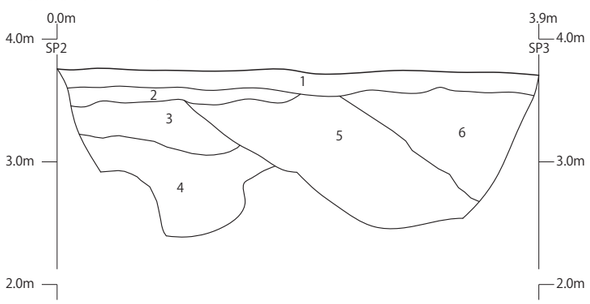
２地点大区北セクション図





1	—	—	—	表土と現代の攪乱層	
2	10YR4/4	褐色	中粒砂	炭化物を含む	
3	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂		
4	10YR3/4	暗褐色	粗粒砂		
5	10YR4/4	褐色	中～細粒砂～10YR4/3中～細粒砂		
6	10YR4/4	褐色	中～細粒砂～10YR4/6褐色中～細粒砂		
7	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂～10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂		
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂～10YR4/4褐色中粒砂		
9	10YR5/4	にぶい黄褐色	中～細粒砂と10YR4/4褐色中粒砂の斑土		022SK埋土
10	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂～10YR4/4褐色中粒砂		022SK埋土
11	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂		
12	10YR3/4	暗褐色	中粒砂と10YR3/3暗褐色中粒砂の斑土		
13	10YR4/4	褐色	粗粒砂		
14	10YR4/4	褐色	中～細粒砂		
15	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	数ミリ前後の炭化物を含む	033SK埋土
16	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂～10YR3/3暗褐色中粒砂	数ミリ～5mm前後の炭化物を含む	
17	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂	数ミリ～5mm前後の炭化物を多く含む	
18	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂と10YR3/3暗褐色中粒砂の斑土	下底部分は5mm前後の粒砂利となる	030SD埋土
19	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂～10YR3/4暗褐色細粒砂	下底部分は砂質シルトに漸移する	018SK埋土
20	10YR4/4	褐色	中粒砂		
21	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂～2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂	炭化物・灰・2.5Y7/4浅黄色シルトブロックを含む	
22	10YR3/3	暗褐色	砂質シルトと2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトの斑土		013SK埋土
23	10YR3/4	暗褐色	中粒砂と10YR4/3	にぶい黄褐色中粒砂の斑土	013SK埋土
24	10YR4/2	灰黄褐色	中粒砂と2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトの斑土	炭化物・灰・2.5Y7/4浅黄色シルトブロックを含む	
25	10YR3/2	黒褐色	炭化物層　灰と焼土、2.5Y7/4浅黄色シルトブロックと5YR4/6赤褐色酸化鉄分を含む		013SK埋土
26	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルトと2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト・中粒砂の斑土	炭化物と灰を含む	013SK埋土
27	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト		
28	10YR5/3	にぶい黄褐色	中粒砂	灰と10YR6/4にぶい黄橙色シルトブロックを含む	011SK埋土
29	—	—	破砕貝層	炭化物、2.5Y7/4浅黄色シルトブロックを含む	
30	2.5Y7/4	浅黄色	粘土	2.5Y5/4黄褐色砂質シルトと10YR4/2灰黄褐色中粒砂、炭化物を含む	
31	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂	炭化物、灰、2.5Y7/4浅黄色シルトブロックを含む	
32	10YR3/2	黒褐色	中～粗粒砂～10YR4/4褐色中粒砂	多くの部分でグライ化著しい	011SK埋土
33	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR3/3暗褐色中粒砂の斑土	灰と炭化物と2.5Y7/4浅黄色シルトブロックを多く含む	
34	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	破砕された貝殻と灰と炭化物を含む	
35	10YR3/3	暗褐色	中粒砂	破砕された貝殻と灰と炭化物を含む	
36	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む	013SK埋土
37	10YR3/3	暗褐色	混貝中粒砂	灰と炭化物を含む	
38	10YR3/3	暗褐色	中粒砂	炭化物を含む	
39	10YR4/4	褐色	中粒砂	破砕された貝殻を含む	
40	—	—	貝層	破砕されたものが少なく、小巻貝を多く含む	
41	—	—	破砕貝層	圧縮され破砕された貝殻の葉理状の堆積構造が４～５枚観察出来る	034SK埋土
42	—	—	混土貝層	10YR3/3暗褐色中粒砂を含む　貝殻は破砕されている	034SK埋土
43	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝粗粒砂層	破砕された貝殻を含む	034SK埋土
44	10YR3/3	暗褐色	中粒砂	破砕された貝殻と炭化物を含む	
45	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝中粒砂	破砕された貝殻と炭化物を含む	
46	—	—	貝層	破砕されたものが少なく、部分的に小巻貝を多く含む	008SK埋土
47	—	—	破砕貝層	圧縮され破砕された貝殻の葉理状の堆積構造が数枚観察出来る	008SK埋土
48	—	—	混土貝層	10YR3/3暗褐色中粒砂を含む　貝殻は破砕されている	008SK埋土
49	10YR4/4	褐色	混貝粗粒砂	破砕された貝殻を含む　底面レベルで湧水がみられた	008SK埋土

２地点大区東セクション図

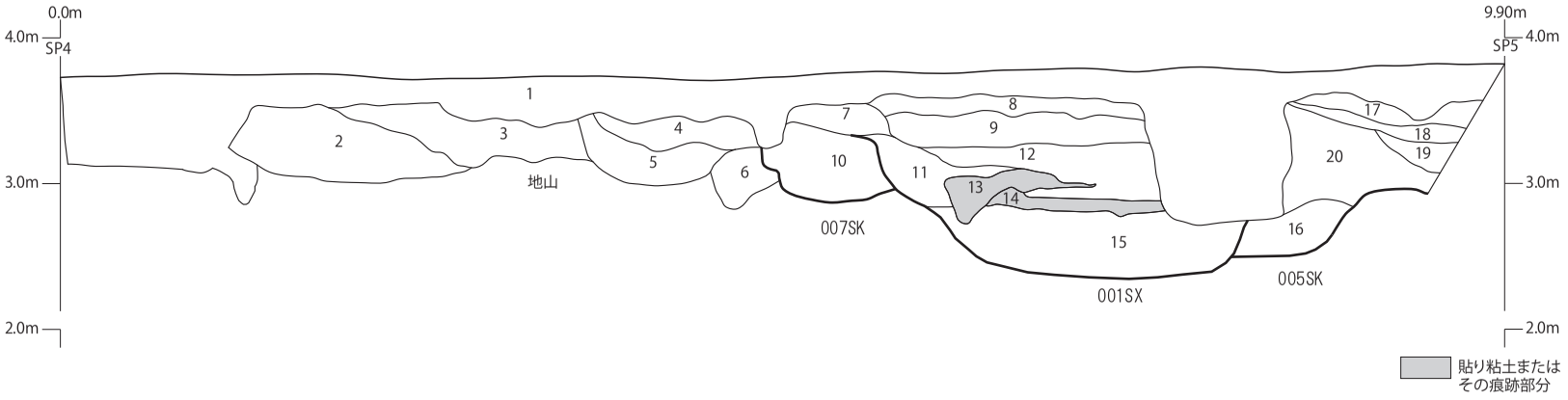


1	—	—	—	表土と現代の攪乱層	
2	10YR3/3	暗褐色	中粒砂	破砕された貝殻と炭化物を含む	
3	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂	混土貝層	
4	—	—	—	貝層	破砕されたものが少なく、部分的に小巻貝を多く含む貝層
5	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂	混貝土層	踏みつぶされたように破砕・圧縮された部分と破砕されずに貝殻の原形を残すものが堆積した部分が不規則に存在する
6	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂	混貝土層	踏みつぶされたように破砕・圧縮された部分と破砕されずに貝殻の原形を残すものが堆積した部分が不規則に存在する

0　(1:50)　1m

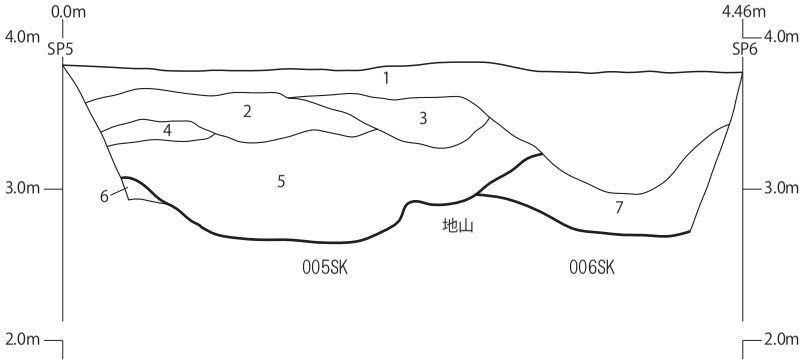
第 32 図　２地点大区北・東セクション図

２地点小区北セクション図



1	―	―	―	現代の表土および攪乱層		11	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂	炭化物を含む	001SX埋土
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂			12	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂と2.5Y6/4シルトの斑土		001SX埋土
3	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂			13	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土と10YR4/2粗粒砂の斑土		001SX埋土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂			14	2.5Y4/4	オリーブ褐色	粘土		001SX埋土
5	10YR3/3	暗褐色	中粒砂	数ミリ大の炭化物を含む		15	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂と2.5Y6/4シルトと10YR6/2灰黄褐色砂質シルトの斑土		001SX埋土
6	10YR3/3	暗褐色	中粒砂と10YR4/4褐色中粒砂の斑土			16	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂2.5Y7/4シルトブロックを含む		005SK埋土
7	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂			17	10YR4/2	灰黄褐色	中粒砂	炭化物および破砕された貝殻片を含む	
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	炭化物を多く含む		18	10YR4/2	灰黄褐色	粗粒砂と2.5Y7/3浅黄色シルトの斑土		
9	10YR3/1	黒褐色	中～粗粒砂	炭化物を含む		19	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂		
10	10YR3/3	暗褐色	中粒砂		007SK埋土	20	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂と2.5Y6/4シルトの斑土	破砕された貝殻と炭化物を含む	
						地山	10YR5/4	にぶい黄褐色	粗粒砂	1cm前後の粒円礫および鬼板片を含む	

２地点小区東セクション図



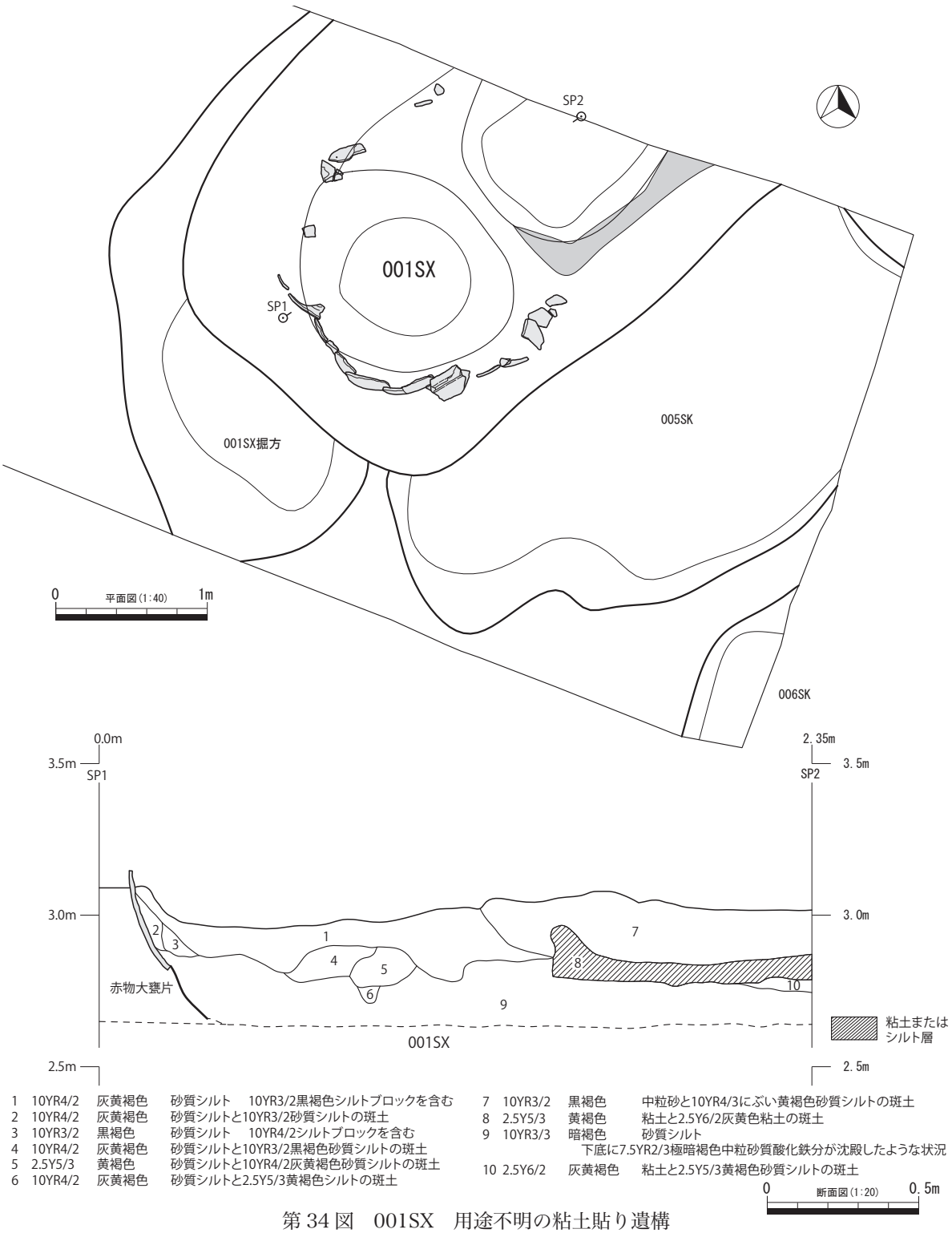
1	―	―	―	現代の表土および攪乱層	
2	10YR4/2	灰黄褐色	中粒砂	炭化物および破砕された貝殻片を含む	
3	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂	炭化物および破砕された貝殻片を含む	
4	10YR4/2	灰黄褐色	粗粒砂と2.5Y7/3浅黄色シルトの斑土		
5	10YR4/2	灰黄褐色	中～粗粒砂		005SK埋土
6	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂混貝砂層		
7	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂混貝砂層		006SK埋土
地山	10YR5/4	にぶい黄褐色	粗粒砂	1cm前後の粒円礫および鬼板片を含む	

0　(1:50)　1m

第 33 図　２地点小区北・東セクション図

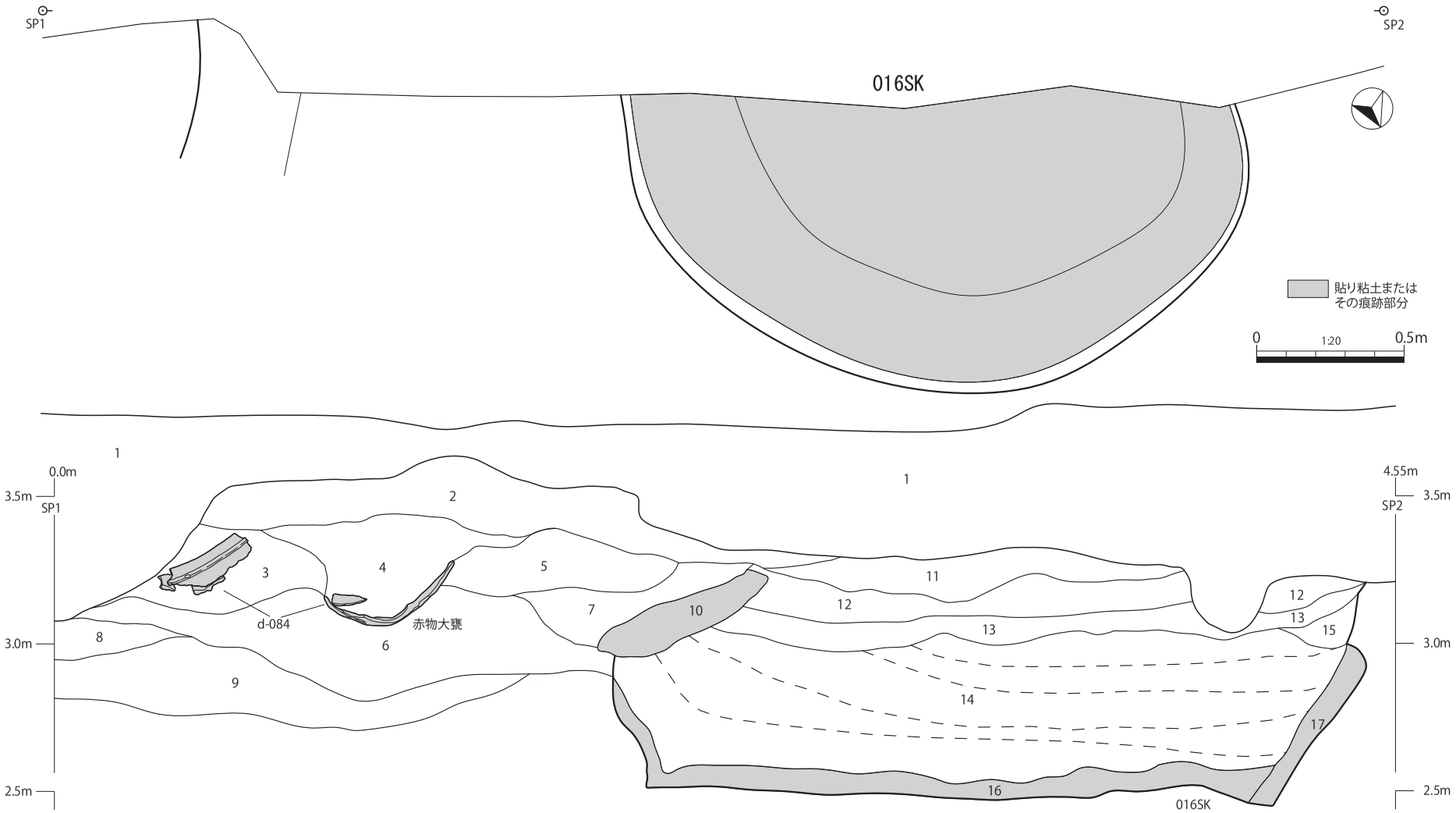
湧水面ぎりぎりのレベル（標高 2.5m）で検出された遺構底部には、厚さ 10cm ～ 20cm ほどの暗灰黄色シルトで貼り床（第 16 層）が施されており、このシルト層以下は湧水で水没していたが、直ちに地山層である粗粒砂が検出されることから、掘り込まれた土坑の形状そのままにシルトを貼り込み、形成されたものと推定される。

遺構内部には大量の貝殻が詰め込まれており（断面図の第 14 層）、土を交えつつ細かく破砕され圧縮された層と、ほとんど圧縮を受けていない貝層の互層を観察できた。圧縮貝層は層厚 10 ～



1　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　10YR3/2黒褐色シルトブロックを含む
2　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルトと10YR3/2砂質シルトの斑土
3　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　10YR4/2シルトブロックを含む
4　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルトと10YR3/2黒褐色砂質シルトの斑土
5　2.5Y5/3　黄褐色　砂質シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの斑土
6　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルトと2.5Y5/3黄褐色シルトの斑土
7　10YR3/2　黒褐色　中粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの斑土
8　2.5Y5/3　黄褐色　粘土と2.5Y6/2灰黄色粘土の斑土
9　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト
　下底に7.5YR2/3極暗褐色中粒砂質酸化鉄分が沈殿したような状況
10　2.5Y6/2　灰黄褐色　粘土と2.5Y5/3黄褐色砂質シルトの斑土

第 34 図　001SX　用途不明の粘土貼り遺構



1	―	―	―	表土と現代の攪乱層
2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質砂	
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂	2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを含む
4	10YR4/4	褐色	粗粒砂	2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを含む
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂	2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを含む
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂	2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックと炭化物を含む
7	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂	2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを含む
8	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂の斑土	
9	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂	部分的にグライ化がみられる
10	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土	10YR3/3暗褐色中粒砂を含む
11	10YR3/2	黒褐色	炭化物層	灰と焼土ブロックを含む
12	10YR4/2	灰黄褐色	中粒砂	炭化物と灰を含む
13	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂	同色同質の砂質シルト部分を含む　016SK埋土
14	―	―	混土貝層	破砕され圧縮された貝層。４回以上の廃棄単位が観察される　016SK埋土。
15	10YR3/2	黒褐色	中粒砂	炭化物と破砕された貝殻を含む。 下底に灰を含む10YR3/3暗褐色粗砂が沈殿したような様相で存在する。　016SK埋土
16	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	厚さ10cm前後で遺構下底にほぼ水平に存在する。 住居址の貼り床粘土のような様相。　016SK埋土
17	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	2.5Y4/2暗灰黄色粘土ブロックを含む。 粘土層が地中の水分によって溶解した残りのような様相。　016SK埋土

第 35 図　016SK　粘土貼り遺構

20cm 程度、非圧縮貝層は 20 ～ 30cm ほどで、４回以上の繰り返しが確認できた。貼り床面や側壁のシルト層は水分によって半ば溶解していたが、周辺の丘陵地からもたらされた粘土に近い灰黄色シルトで、構築時は防水性（保水性）を保っていたものと推定できる。

セクション図に見られるように、本遺構の左側側壁は別の遺構によって破壊されている。第 10 層は黄色の粘土層であるが、こちらは 016SK のシルトとは違い緻密性を持った粘土であり、すぐ脇に 19 世紀前半に比定できる常滑赤物大甕の底部が見られることなどから、016SK はそれ以前に廃棄された遺構と推定できる。第 10 層の粘土は大甕底部周辺にも見られることなどから、大甕を地面に固定して利用するいわゆるタタキ遺構の残欠と解釈できる。

016SK の場合、単に貝殻を廃棄するために構築された遺構とは考えがたい。周辺には急角度で地山面まで掘り込まれ内部に大量の貝殻が充填された土坑が複数見つかっていることから、貝殻を廃棄するためにわざわざ土坑を粘土貼りにする必要は認められないからである。次に、圧縮された破砕貝層との互層が、粘土貼り遺構の使用目的を現したものであるかどうかというと、小区の 003SK（第 37 図）や大区南セクション（第 40 図）に見られる 010SK 断面などでも破砕貝層を交えた互層が見られたが、それらに粘土貼りは伴わず、貝殻の廃棄に伴いより大量の貝を詰め込むために破砕が繰り返された結果とも理解できる。

この互層が、何らかの液体を濾過するために意図的に粘土貼り内部に充填されたものであるとすれば、粘土貼り遺構は何らかの装置の一部である可能性も捨てきれないが、そのためには全体構造を明らかにする必要があり、今回は指摘に留める。

015SK（第 36 図）

大区の西部南寄りで検出された粘土貼り遺構で、隅丸長方形のプランを呈するようである。遺構の輪郭に沿って貼られた粘土はほとんど溶解し、シルト化した層もしくはその痕跡を留める程度であったが、土層としての区別は可能であった。遺構内部下底近くでは湧水が見られ、その影響か底面にはシルト層が見られず、目視する限り沈殿物なども確認できなかった。

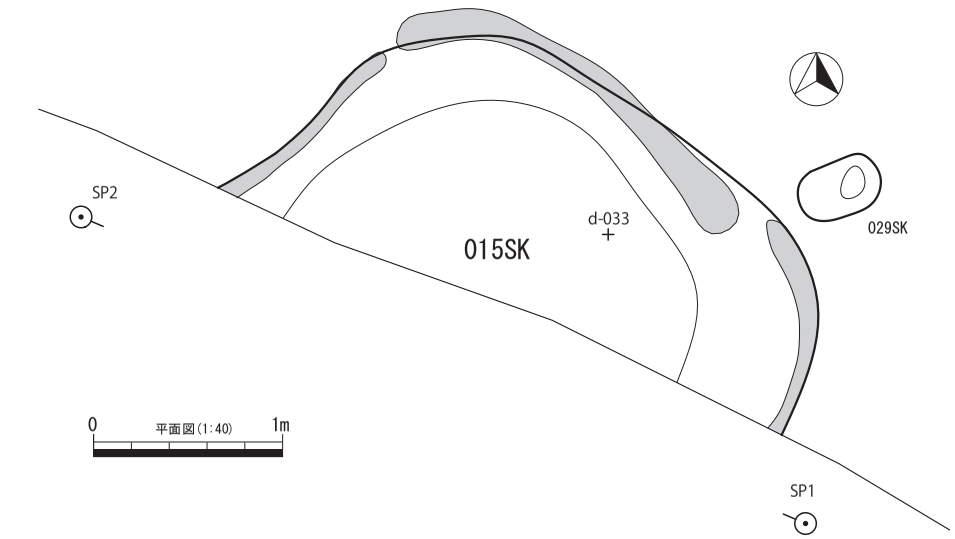
推定される全体形状は上に向かって開く浴槽のような形と推定されるが、内部は黄褐色のシルトを交えた斑土で充填されており、時期確定の手懸かりとなるような遺物はひとつも検出されなかった。

残存部の底面幅 2.3m で、側壁高約 50cm、上部最大幅が約 3m であり、主軸は NNE ～ SSW 方向のようである。遺構の所属時期は不明であるが、過去の調査事例や遺構の検出状況などから類推すれば、近世のものである可能性が高い。

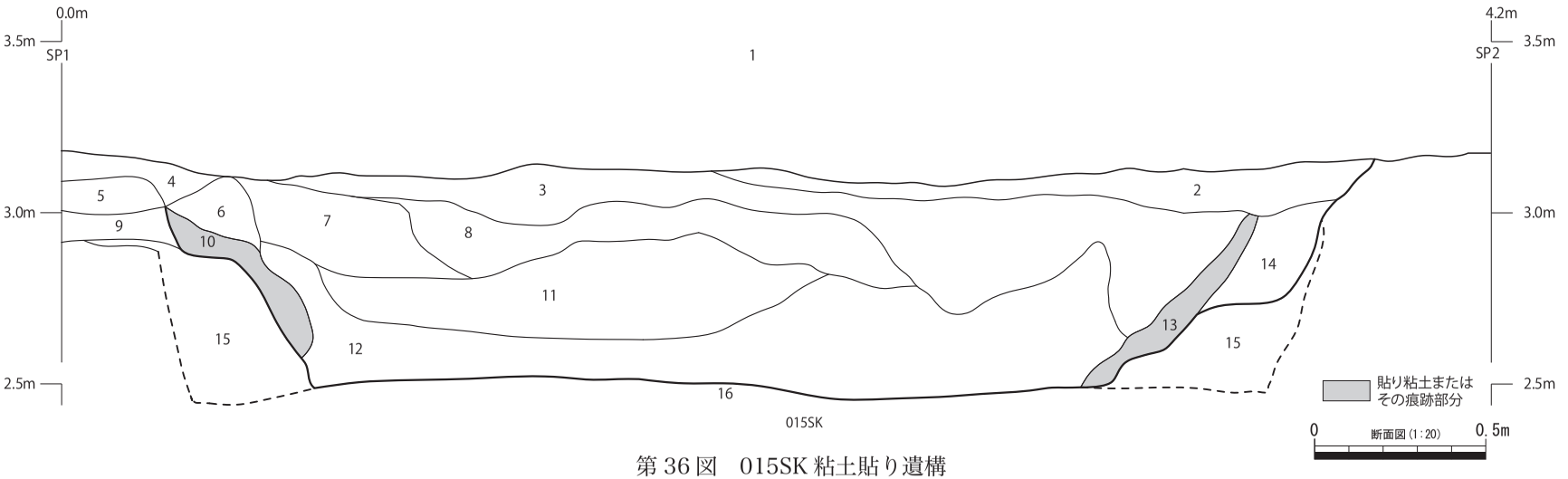
003SK（第 37 図）

小区の南西角で検出された土坑で、大量の貝殻が充填されていた。

攪乱と調査範囲の関係で全体規模は不明であるが、検出断面と平面ともに幅 1.5m ほどである。セクション図に見られるように埋土のほぼ全てに貝殻が見られ、第２層と第３層では細かく破砕された貝殻のみの圧縮層と大まかに破砕された混貝砂層の互層が観察された。出土した遺物の中には 052 のような下呂石剥片もあるが、埋土や貝層に含まれた遺物の多くは近世の陶器類であり、基本的には近世の遺構と理解したい。



1	—	—	—	表土と現代の攪乱層	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂と10YR4/6褐色中粒砂の斑土(近世以降の整地土)		
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR3/4暗褐色中粒砂の斑土		015SK埋土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR4/2灰黄褐色シルト質砂の斑土		
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂		
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂		015SK埋土
7	10YR4/4	褐色	中～細粒砂		015SK埋土
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂		015SK埋土
9	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルトと10YR6/4にぶい黄橙色粘土の斑土		
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロックと炭化物を含む	015SK埋土
11	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質砂と10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの斑土		015SK埋土
12	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂と10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの斑土		015SK埋土
13	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂と10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの斑土		015SK埋土
14	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	土坑壁面(地山)に貼り付けたような様相	015SK埋土
15	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルトと10YR3/2黒褐色砂質シルトの斑土(地山)		



第 36 図　015SK 粘土貼り遺構

002SK（第 38 図）

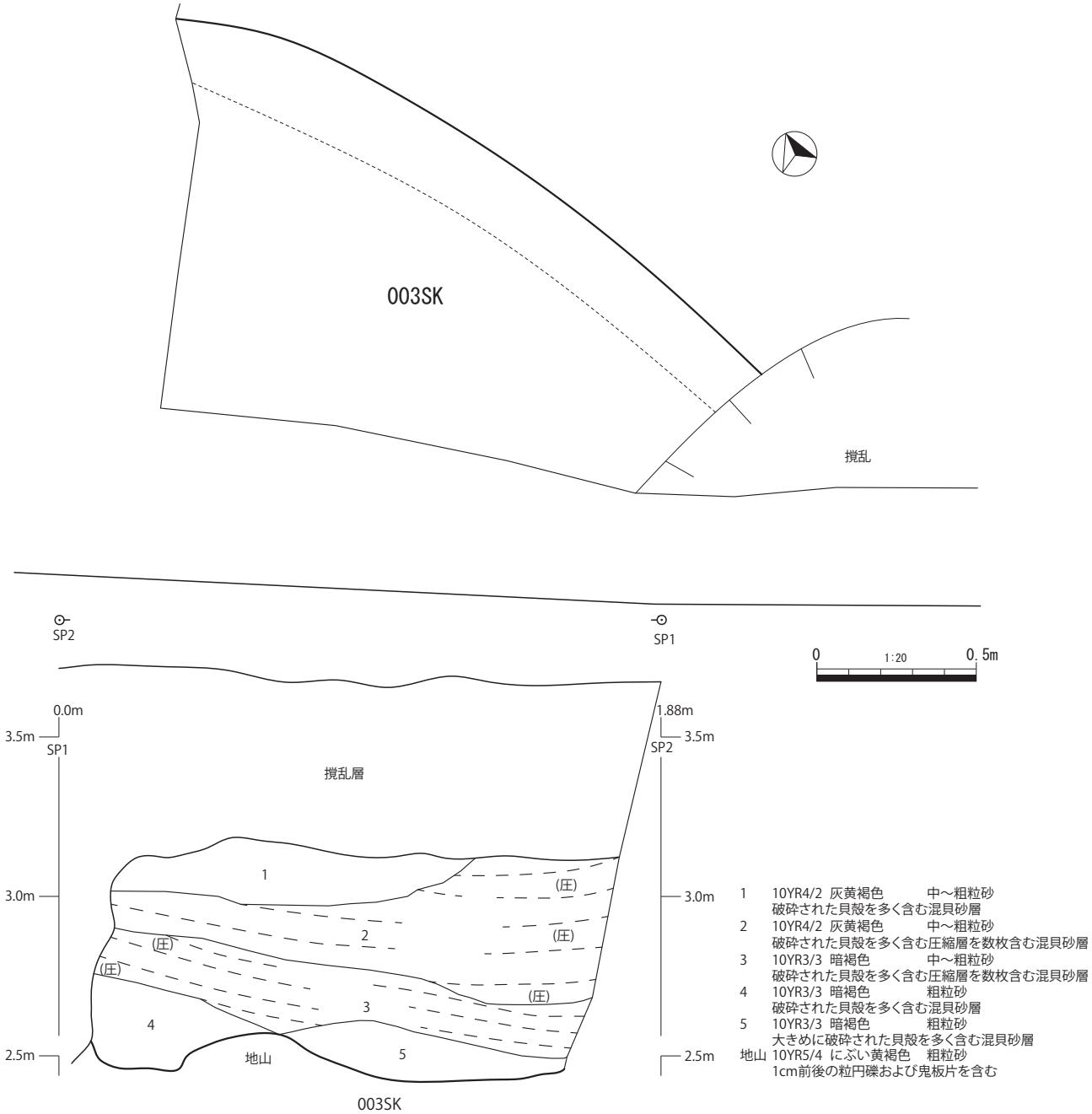
001SX の北西側に存在する土坑で、長軸が 001SX と直交するため、付属施設の残欠である可能性もある。

012SK（第 38 図）

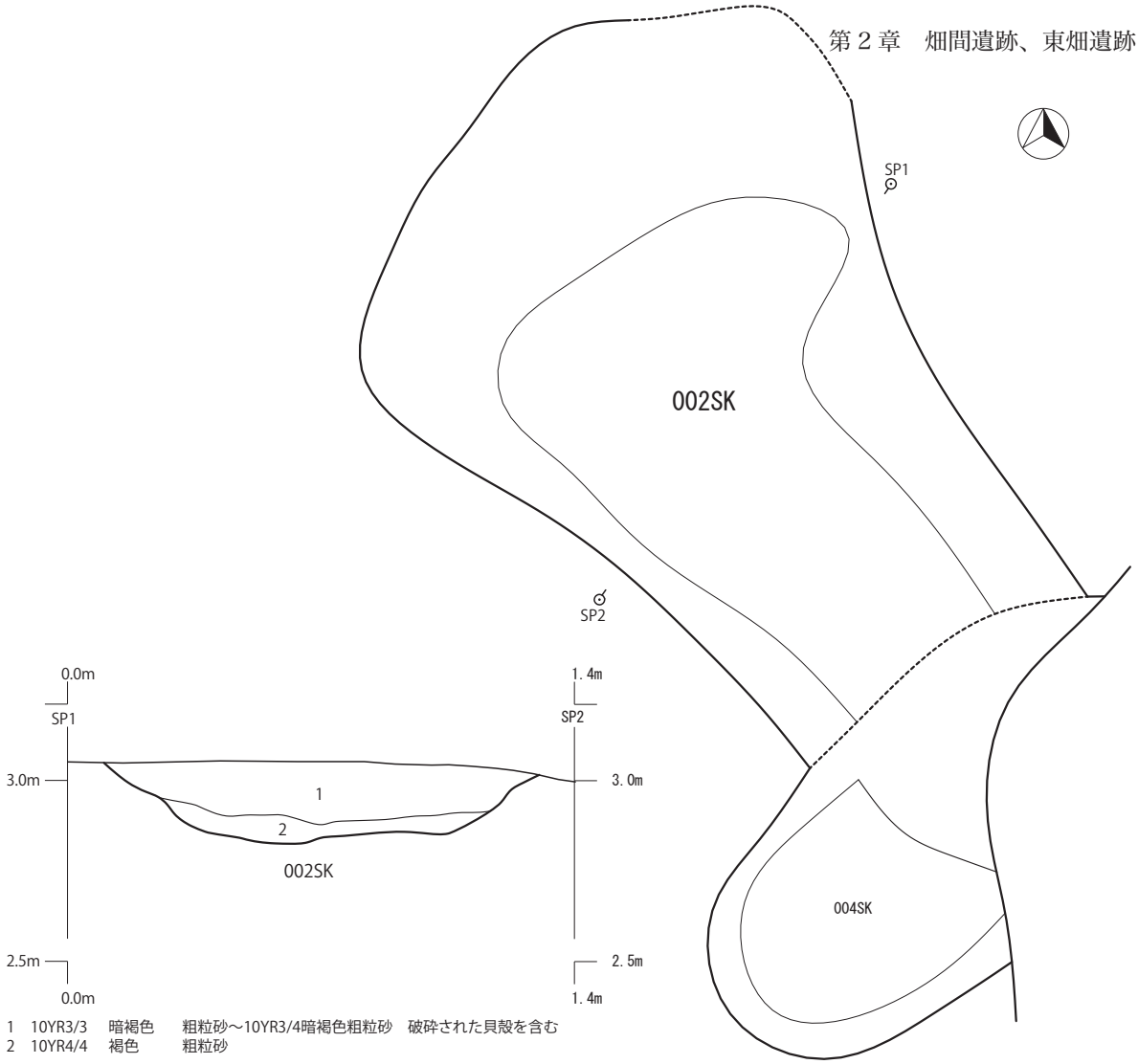
大区東端部の土坑群のほぼ中央に位置する。埋土に貝殻が見られる様子などから、周辺一帯に見られる貝殻廃棄用の土坑下底部分と判断できる。

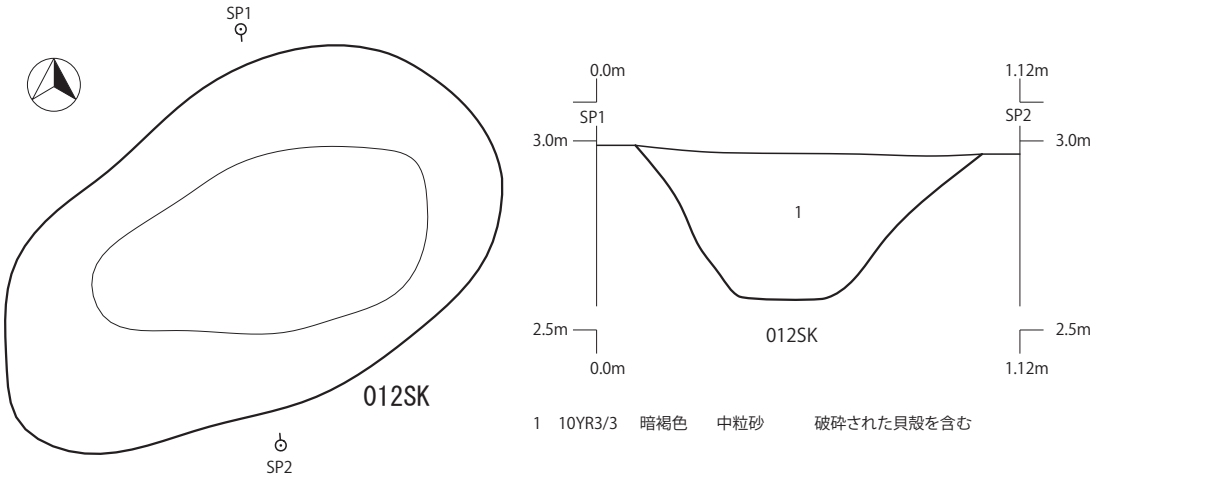
031SK（第 38 図）

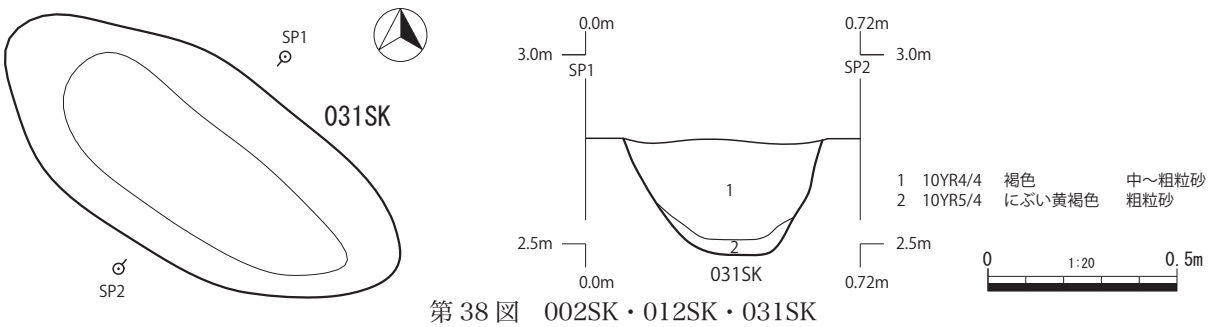
大区ほぼ中央の地山面において、単独で検出された楕円形の土坑。埋土に遺物を含まないため所属時期・性格共に不明。



第 37 図　003SK　土坑







第 38 図　002SK・012SK・031SK

032SD・021SK（第 39 図）

調査区西部で検出された溝と土坑で、両者とも掘削後短時間で埋没したようである。032SD に関しては方形周溝墓の溝などの可能性も検討したが、対応するものが見られず、性格を特定することができなかった。いずれも遺物は検出されていない。

019SM 貝層（第 39 図）

調査区西部、015SK 西側に緩やかな弧を描くように存在する。全長約 5m で幅は 80cm から 20cm で、層厚最大 20cm 程度の純貝層で、圧縮されたような状況は観察されなかった。貝種の大半はシオフキであったが（第３章参照）、獣骨や魚骨、人工遺物はまったく含まれていなかった。貝層の発現状況から溝状の遺構を想定して検出を進めたが、地面に掘り込まれた遺構としては確認できず、地面に直接廃棄されたまま砂に埋もれていった状況を推定することができる。

３　出土遺物（第 41 図・第 42 図）

主な出土遺物の実測図と出土地点は、大小区それぞれ分布図として提示した。

地山面からは弥生時代中期の土器 001 ～ 003 や古墳時代前期に属するものと思われる高坏脚 004 や手捏ねのミニチュア土器や製塩土器 006 も検出されているが、いずれも断片的である。剥片 052 や敲石 056 は弥生時代以前のものである可能性が高い。

瓦類も数点発見されており、007 ～ 009 は焼成や調整の様子などから平安時代末期頃のものと考えられるが、こちらも数点の検出である。011 は燻し瓦仕上げの瓦当で連珠唐草文様が見られるが、調査区南には貞享４年（1687）の創建とされる毘沙門寺（西山浄土宗）が存在することから、寺院に用いられたものである可能性もある。010 の平瓦は表面に数条指でナデた痕跡が見られ燻しは不十分なもの。

012 は東濃系山茶碗で大洞東段階のもの。013 は志野鉄絵皿でモミジの絵柄（登窯１～２期）。014 ～ 016 は志野丸皿で、図化した以外にも数個体分の小片があり、いずれも大窯４期後半から登窯段階のものである。天目茶碗も登窯期前半のものが多く、丸碗・尾呂茶碗は登窯５期以降のものが多い。

地元常滑製品は破片重量の比較においても少なく、図示できたものは 6b 型式の玉縁口縁広口壺（028）の他、９型式の大甕（029）、18 世紀後半の赤物大甕（032）などである。

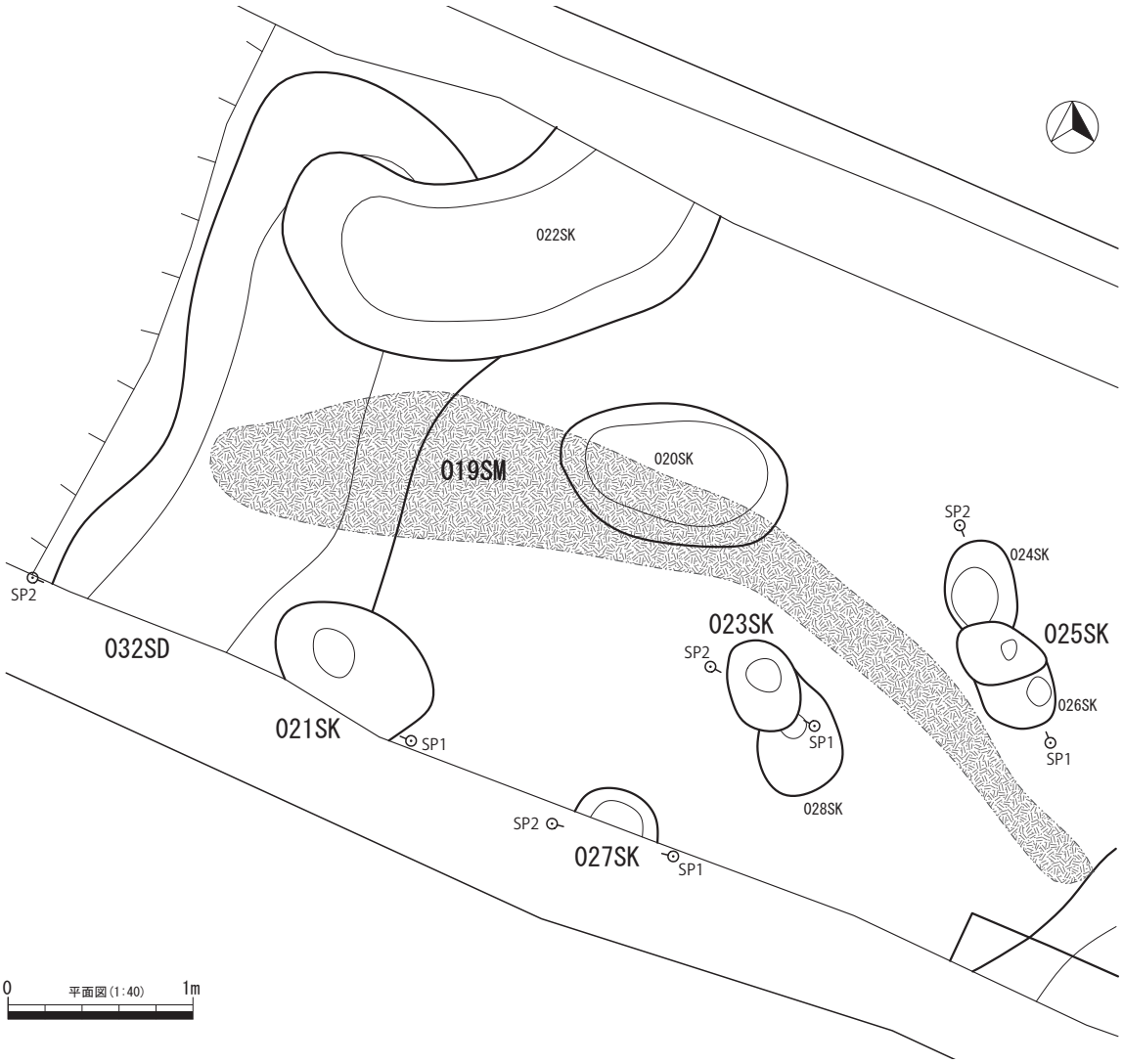
この他にも土師器鍋類としては羽付き内耳鍋（033･034）や内耳鍋（035）､焙烙（036）がみられた。

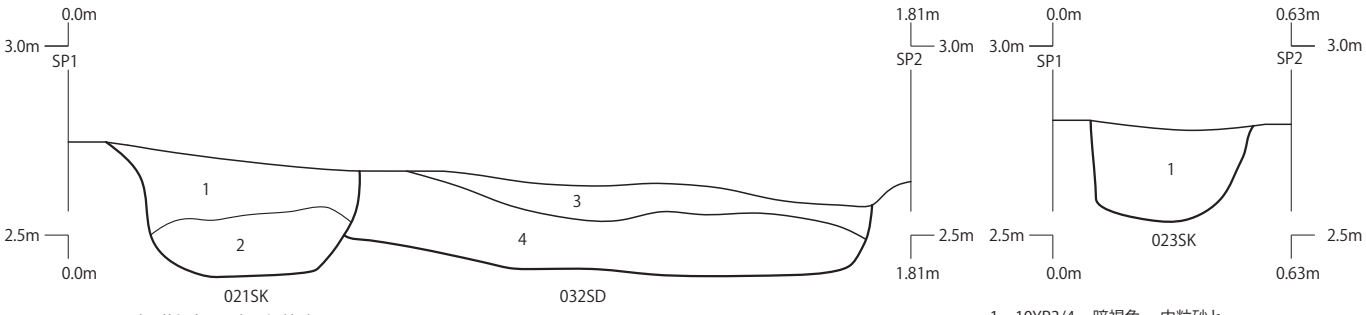
かわらけは轆轤調整のもの（037）の他、手捻りのもの（038 ～ 040）もみられ、いずれも厳密に時期を特定し得ないが、おおむね 16 世紀頃のものであろう。

土錘としては小型で素焼きのもの（042・043）の他、高温で焼成された陶製のもの（048）（同様のものが７個出土）もある。いずれも近世以降の漁業に関連したものであろう。

石器類はいずれも近世のものと推定される石臼残欠（049）や石皿または台石の残欠（050）、小型砥石（053）、陶質砥石（051）、小型の硯片（055）などのほか、ハイアロクラスタイト製の小型磨製石斧（054）が発見されている。

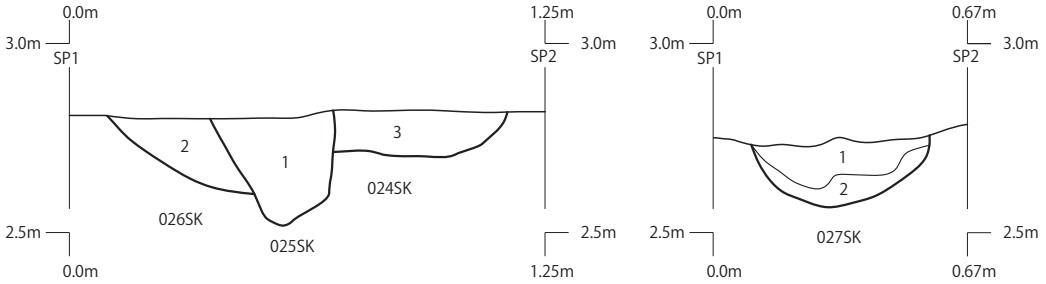
陶磁器類の破片はテンバコ４箱に及んだが、18 世紀以降のものが８割以上あり、時期を特定し得ないもの１割以外は 19 世紀以降の陶磁器類であった。





1　10YR4/3　にぶい黄褐色　中～細粒砂
2　10YR5/6　黄褐色　中粒砂
3　10YR5/4　にぶい黄褐色　中粒砂
4　10YR6/3　にぶい黄橙色　中～細粒砂　下底は砂質シルトでやや粘質有り

1　10YR3/4　暗褐色　中粒砂と
10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂の斑土

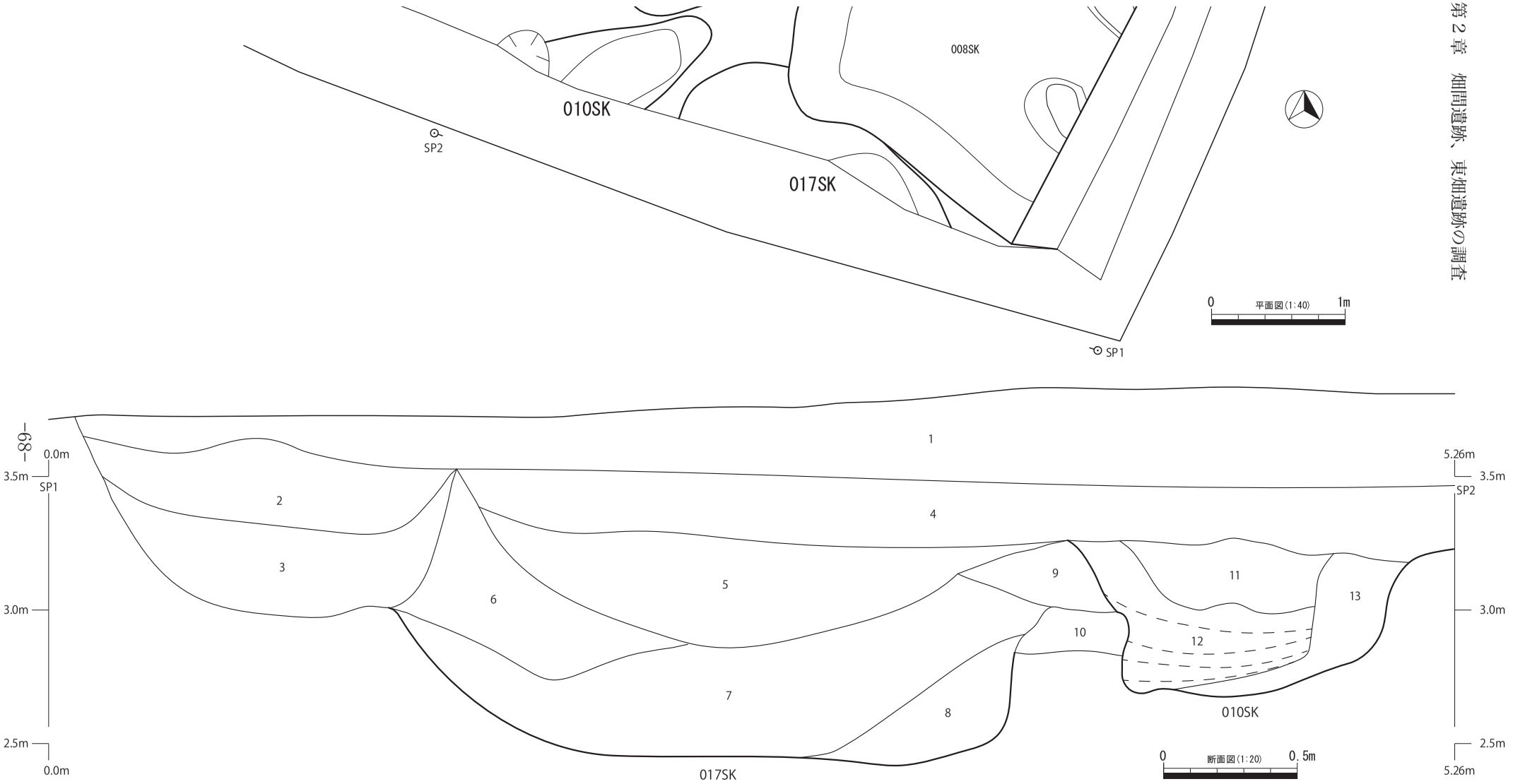


1　10YR4/2　灰黄褐色　中粒砂
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　中粒砂
3　10YR4/4　褐色　中粒砂

1　10YR4/4　褐色　中粒砂
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　中粒砂

0　断面図(1:20)　0.5m

第 39 図　021SK・032SD・023SK・025SK・027SK・019SM



1	―	―	―	表土と現代の攪乱層
2	10YR3/4	暗褐色	中粒砂	破砕された貝殻と灰、炭化物を含む
3	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂	破砕された貝殻と灰、炭化物を含む
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	破砕された貝殻と灰と炭化物を含む　貝殻が充填された土坑を覆う整地層
5	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂	破砕された貝殻と灰、炭化物を含む
6	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	破砕された貝殻と灰、炭化物を含む
7	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂	破砕された貝殻と灰、炭化物、破砕されていない貝殻ブロックを含む　007SK埋土
8	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂と10YR4/2粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂の斑土	008SK埋土
9	10YR5/3	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR4/2灰黄褐色中～粗粒砂の斑土	
10	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	
11	―	―	貝層　ほとんど破砕されていないほぼ純貝層	010SK埋土
12	―	―	混土貝層　10YR3/3暗褐色中粒砂を含む　圧縮された貝殻と中粒砂が不規則な互層をなす	010SK埋土
13	10YR3/3	暗褐色	中～粗粒砂　部分的に破砕された貝殻を含む	010SK埋土

第40図　017SK・010SK

005：検出
ミニチュア土器

027：検出
燈明皿

024
尾呂茶碗

021
天目茶碗

012
東濃系山茶碗

050：d-085
石皿？

043：d-087
土錘

028：d-028
常滑玉縁壺

033：d-052
内耳鍋

大区

攪乱

022SK

020SK

019SK

024SK

025SK

023SK

026SK

032SD

021SK

028SK

027SK

029SK

015SK

033SK

011：d-078
軒平瓦

036：d-057
焙烙

014：d-056
志野皿

048：d-022
陶錘

031SK

018SK

030SD

038：d-059
かわらけ

011SX

013SK

016SK

009SK

014SK

034SK

012SK

008SK

010SK

017SK

東畑トレンチ

凡例
貼り粘土
貝層範囲

0　平面図（1：100）　2m
0　石器（1：2）　5cm
0　瓦（1：3）　10cm
0　土器（1：4）　10cm

055
硯

019：d-086
天目茶碗

046：d-033
加工円盤

042：d-034
土錘

056
敲石

054：d-032
磨製石斧

016：d-058
志野丸皿

037：d-061
かわらけ

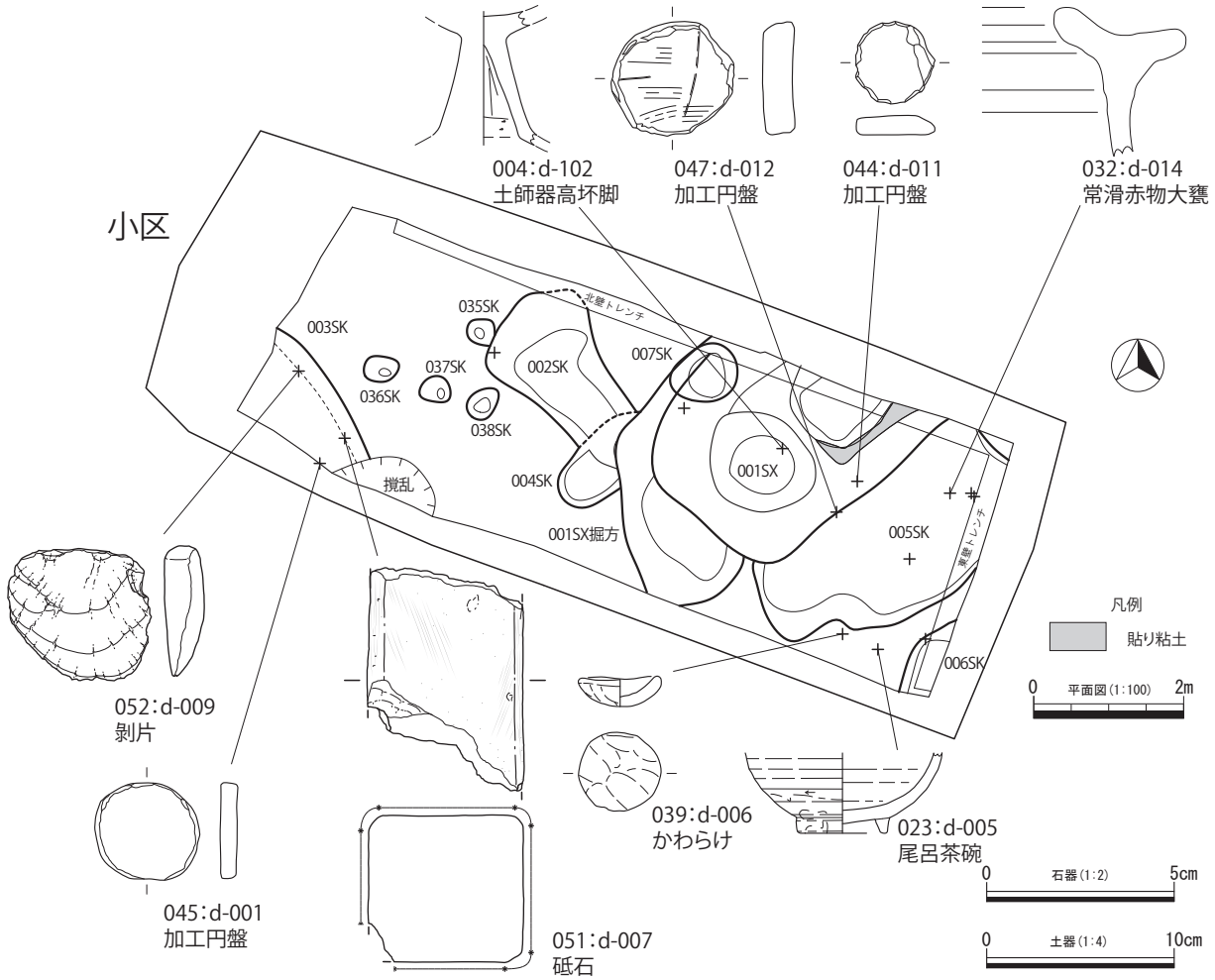
035：d-074
内耳鍋

029：d-062
常滑大甕

001：d-055
弥生土器

013：d-003
志野皿

第 41 図　２地点大区遺物出土分布図



第 42 図　小区遺物出土分布図

4　まとめ

２地点における成果としては第一に、いわゆる「粘土貼り遺構」の検出を挙げることができる。

過去の調査においても同種の遺構がいくつも検出されているのだが、未だもって用途が特定できていない。今回の調査では調査区内で遺構の全体を把握できたものは無かったが、至近距離で営まれた同様の遺構でありながら、構造と内容にいくつかのパターンが存在する様子を把握することができた。

即ち、001SX は片側の輪郭に陶片を並べ、区画内の一部に粘土貼りを施していた。016SK は上方に向かって開く盥（たらい）または浴槽のような形状に粘土貼りが施され、内部に圧縮された貝層と原形を保ったままの貝層が互層をなして充填されていた。015SK は槽状に粘土を貼り、内部が砂で充填されていた。また、011SX は水没状態ながら粘土貼り部分の輪郭をかろうじて確認できたが、内部に大量の灰や炭化物が充填されており、015SK とは様相を異にしている。位置的には先述の 016SX の対面に存在することから、関連した遺構である可能性も残している。

いずれも周辺の丘陵由来と思われる黄灰色の粘土で床面や壁面または輪郭を形成するという共通点はあるが、形状は円形または楕円形の他にも、浴槽のような隅丸長方形のものも報告されている。粘土貼り内部が破砕された貝層の互層で充填された例は今回が初検出と思われるが、大半は内部に特定の鉱物や色素が沈殿した様子は無いと報告されている。

この遺構の用途を推測する上で、ひとつのヒントになる遺跡が香川県の小豆島で調査されている。島の南西部に存在する蒲生（かもう）遺跡は現海岸から 80m ほど離れた砂堆上に存在するが、2015 年の調査で粘土貼りを伴う楕円形の大型土坑（長径 4.5m× 短径 3.5m、高さ 0.9m）が 10 基ほど検出されており、製塩時に使う鹹水（かんすい）溜めとして報告されている[1)]。上に向かって開く断面形状はまさに今回検出された遺構と類似するが、蒲生遺跡の例は広く中世以降の遺構と報告されているのに対して、本例はいずれも 18 世紀以降に属する可能性が高く、時期差がある。また物理的にも、堤防で囲まれたすぐ内側で潮まわしをおこなっていたとすれば、鹹水溜めも海岸に近い新田内に設置されたと考える方が自然であり、至近とはいえ新田と遺構との距離を説明できなければならないだろう。

そもそも知多半島沿岸部全体が古代以前からの製塩の伝統が存在した地域であることや、大田地区には古代の製塩集落遺跡として有名な松崎遺跡が存在することは、あらためて留意すべき点であろう。

尾張藩二代藩主光友公（1625 ～ 1700）の時代に付け替えられたとされる大田川の流路であるが、その河口部の遠浅の海を埋め立てた遺跡周辺の大規模新田開発が始まったのが寛延年間で、まさに松崎遺跡から上浜田遺跡の前面を埋め立てた浜新田の完成が寛延３年（1750）、河口南側の後浜（のちはま）新田は寛政９年（1797）に完成している。当時大田川旧河口側即ち横須賀御殿の存在した海岸側はまだ干拓されておらず（後浜新田を取り囲む川南新田の完成は嘉永４年）、第一砂堆から旧河口部の海岸までの距離は数百メートルであり、生業を営むに支障ない範囲であるとも理解できる。

残念なことに知多半島西岸地域では塩田に関する文書記録は残されていないが、この両新田の場合、堤防で閉め切られた内側では入浜式塩田[2)]が営まれていた可能性は十分ある。しかし新たに開削された河口部と第一砂堆との距離は 500m 近くにも及び、堤防で囲まれたすぐ内側で潮廻しをおこなっていたとすれば、鹹水溜めも新田内の陸寄りに設置されていたと考える方が自然であろう。

播州赤穂を中心とした瀬戸内海地域一般の例であるが、入浜式製塩に適した立地とは、晴れの日が多く（年平均 200 日）、雨が少なく（年間総雨量 1,000mm 程度）、温暖で、遠浅の砂浜で潮の干満差が大きくホンダワラなどの海藻が多く生えていること。同じく塩を焼く燃料の薪（塩木とも呼ぶ）が豊富で、更には釜の原料となる粘土・貝・石・砂鉄のいずれかが豊富に取れることとされている。知多半島沿岸でも同様の条件を満たした地域が存在し、大田の谷もそのひとつである[3)]。

今回の２地点では、ほぼ同時期の粘土貼り遺構にも形状に差異のあることが判明した。以前より用途不明の遺構として片付けられてきた粘土貼り遺構であり、単なる天水溜め施設であるとも報告されているが、今後は製塩に関連した遺構である可能性も考慮した上で考察を進めるべきであろう。

次に指摘すべきは、大規模貝層の存在である。時期的には先の粘土貼り遺構とほぼ同じ、いずれも近世の所産と考えられるが、多くが地表から地山面にまで及ぶ急角度で掘削された土坑内に大量廃棄された貝殻の用途について、貝層を分析して頂いた新美倫子氏は、ほぼ食用になったと思われる種だけで構成されるものと、食用でなかった種が混在する貝層がある点を指摘されている。分析していただいたものは細心の注意を払って水洗した貝層であるが、貝層には魚骨や鱗、獣骨などは全く見られなかった。また同時に、ほぼ食用にはなり得ない小型巻貝（ウミニナ・ヘナタリ類）を大量に含んだ貝層や、小型巻貝のみのブロックもしばしばみられることから、新美氏は砂泥の浅海

底を馬鍬（まんが）のような道具で無差別に採集し、食用貝を選抜し、更にその残滓がブロック状に廃棄された様子を推定されている。

過去の調査でも同様の貝層は調査区の至る所で確認されているが、今回検出された貝層の分布範囲はかなり広く、この場所が村落共同の貝殻廃棄場所であったとも推定できる。ただ、現地（今回の２地点小区）は砂堆中央を南北に貫く往還に面しており、常識的に考えれば砂堆上でもいちばん日常の利用（居住など）に適した場所である。本来なら数十メートル西側もしくは南側の砂堆縁辺海側への廃棄がより合理的で利便性が高いと思われるのだが、そのような利点をも無視して当地に貝殻の大量廃棄が続けられていたことは、新たな解釈を要するであろう。

近世の大田地区の生業に関しては文字資料も少なく、新田開発の実態も含めて不明な部分が多い。砂堆上の集落の変遷は、旧河道跡地部分の土地利用状況や、干拓による新田開発の変遷も考慮した上で、その特色や様相を解明していく必要がある。

遺物に関しては近世の陶磁器が大半であり、種類も日常雑器が中心で、隣接する毘沙門寺との関連を窺わせるようなものや、特定の生業を探る手懸かりとなるようなものは見あたらなかった。

1：『蒲生遺跡』2017　香川県教育委員会香川県埋蔵文化財センター

2：遠浅海岸の満潮水位を基準に囲郭（いかく）堤防を築き、内側に砂質地盤の塩田を設けたもの。溝によって短冊形に仕切り、満潮時に浸透させた海水を太陽熱で蒸発させる。塩分の付着した砂を掻き集めて海水をかけ、より濃厚な塩水（鹹水）とし、鉄釜などで煮詰めて塩の結晶を得る方法で、近世以降瀬戸内海沿岸地方を中心に発達した。

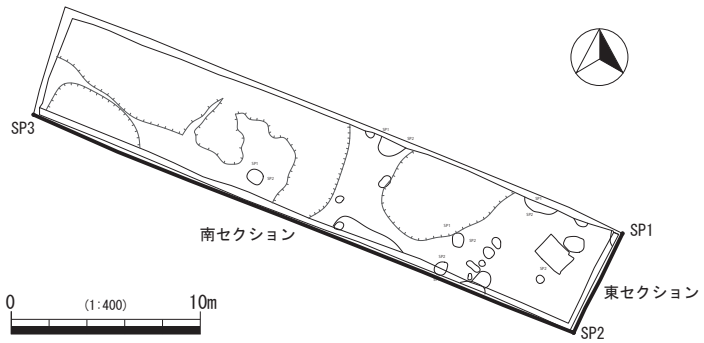
3：これらの要素は火を扱う窯業の前提条件とも共通点が多く、知多半島に於ける主要産業の必要条件としても注目に値する。

２地点大区中央部完堀状況

２地点大区東端部完堀状況

第３節　３地点（HM19-3）の調査

１　３地点の概要と遺跡の構造



第 43 図　３地点セクション位置（1/400）

３地点は、平成 30 年度３地点の東に続く調査区である。11 月 26 日・27 日にフェンスを設置し、12 月２日に基準点測量をおこない、翌３日から表土掘削をおこなった。４日から調査を開始。12 日にドローンを使用して空撮をおこない、15 日に埋め戻しをおこない、17 日には終了した。

調査面積は 191㎡である（調査区の西側３分の２以上が現代撹乱であった）。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土層。現代の耕作土や客土、撹乱層も含む。

Ⅱ層：中世から近世にわたる遺物包含層で、にぶい黄褐色の砂層である。東セクションの６層と南セクションの２層が相当する。残存している範囲が比較的少なく、後世の削平を受けているものと思われる。

現地表面の標高は、3.2 ～ 3.5 ｍと、第１砂堆の中では一番低い部分に属する。地山面の標高は 2.6 ～ 3.1 ｍとなっており、調査区の中央部から北東方向にかけて緩やかに傾斜している。

表土掘削の段階で、東側は遺物包含層の残りが悪く、表土直下でにぶい黄橙色の基盤層が確認された。また、西側は撹乱による削平を大きく受けていることが確認され、平成 30 年度３地点で確認されたような区画溝・掘立柱建物跡などは検出できなかった。

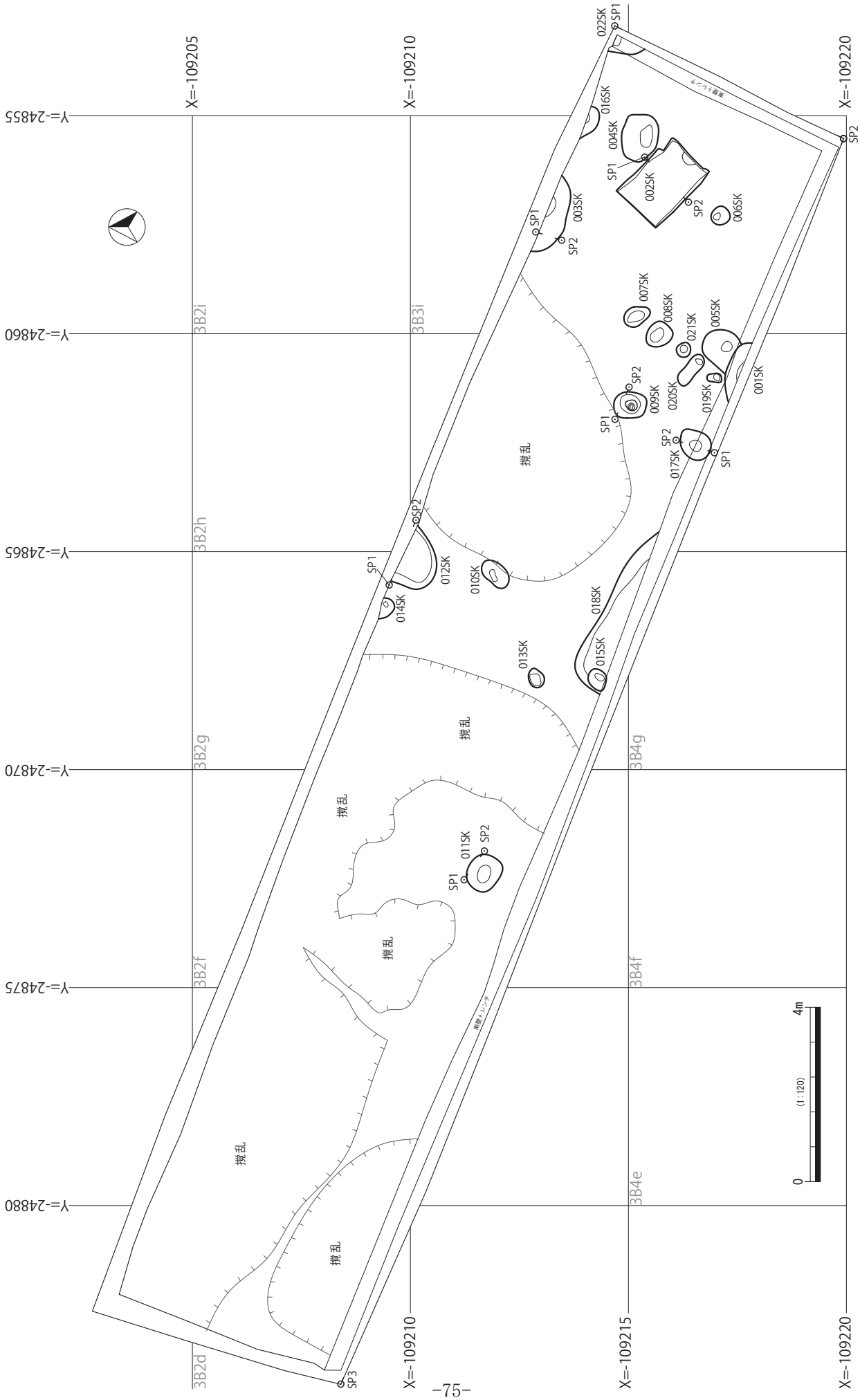
２　主な遺構

002SK：土坑（第 47 図）

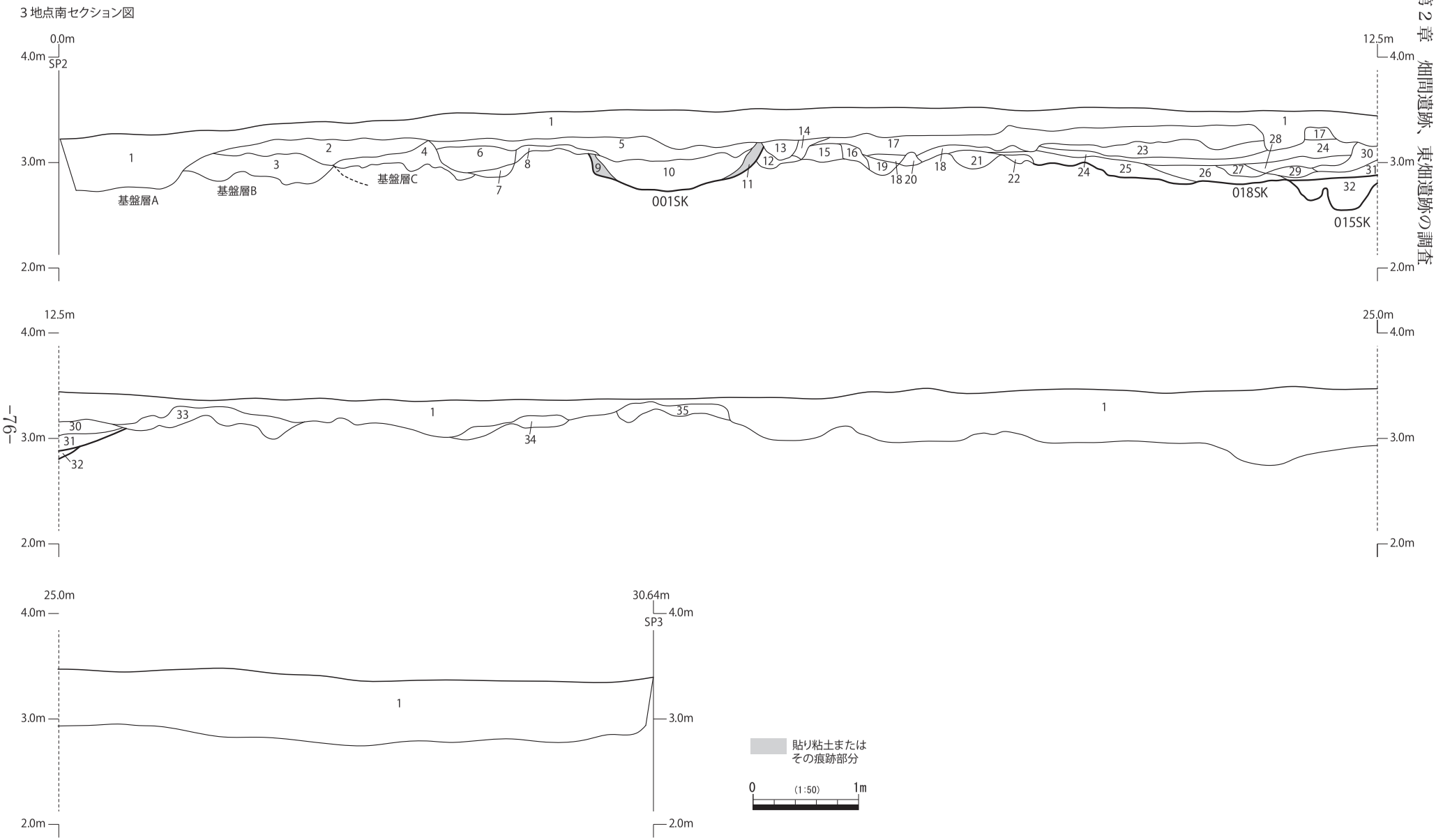
調査区東部で検出した土坑である。検出したプランは 1.7×1.2 ｍ、深さ 15cm 強であった。隅丸長方形であり、角の部分以外は極めて直線的なプランである。土壙墓などを予想して掘削を行ったものの、骨や遺物の検出はできなかった。用途不明であるが、埋土より中世以降の遺構と考えられる。

003SK：土坑（第 48 図）

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 1.9 ｍ、幅 0.5 ｍ、深さ１ｍを測る。中央部の断面を捉えることはできなかったが、下層はほぼ同一の埋土で埋め戻されたような様相を呈している。時期は特定できないものの、埋土に近世の志野鉄絵丸皿や焙烙が混じることから、近世以降の遺構と考えられる。


X=-109205
X=-109210
X=-109215
X=-109220
Y=-24855
Y=-24860
Y=-24865
Y=-24870
Y=-24875
Y=-24880
3B2d
3B2e
3B2f
3B2g
3B2h
3B2i
3B3i
3B4e
3B4f
3B4g
撹乱
SP1
SP2
SP3
022SK
016SK
004SK
025SK
006SK
003SK
007SK
008SK
021SK
005SK
009SK
020SK
019SK
001SK
017SK
012SK
014SK
010SK
018SK
015SK
013SK
011SK
0
(1:120)
4m

第 44 図　3 地点平面図

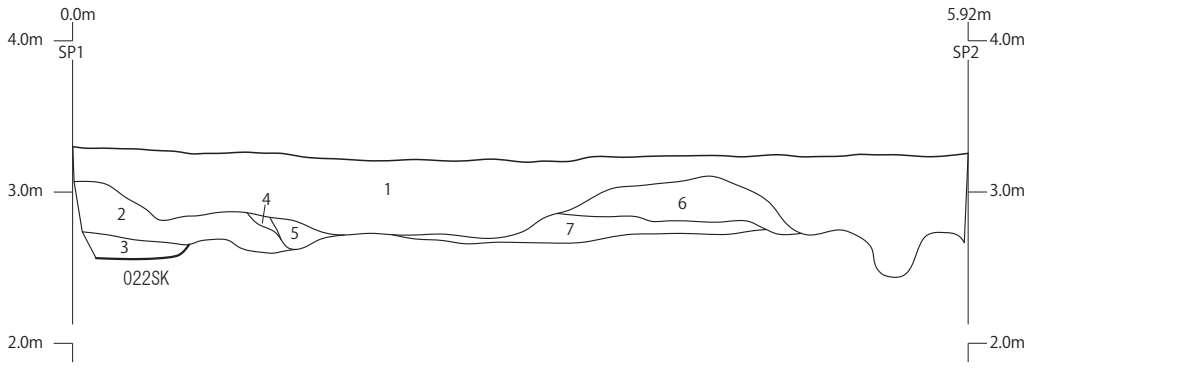


第45図　3地点南セクション図

3地点　南セクション注記

1	―	―	―	現代の表土および攪乱層	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂	10YR6/6明黄褐色シルトブロック、破砕された貝殻を含む	
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂	φ2～5mmの砂礫を多く含む	
4	10YR4/2	灰黄褐色	中粒砂		
5	10YR4/4	褐色	中粒砂		
6	10YR7/3	にぶい黄橙色	中粒砂と10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトの斑土	炭化物を含む	
7	10YR7/3	にぶい黄橙色	粘土と10YR5/3粗粒砂の斑土	φ3～10mmの砂礫を多く含む	粘土貼り遺構の残欠か
8	10YR6/2	灰黄褐色	中粒砂と同色の砂質シルトの斑土		
9	10YR4/1	褐灰色	中粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色粘土の斑土		
10	10YR4/4	褐色	混土貝層	上半に破砕された貝殻を多く含む	001SK埋土
11	10YR6/2	灰黄褐色	粘土	粘土貼り遺構の断面か	
12	10YR6/4	にぶい黄橙色	中～細粒砂		
13	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土		
14	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂		
15	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂		
16	10YR4/4	褐色	中粒砂	10YR6/6明黄褐色シルトブロック、破砕された貝殻を含む	
17	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	φ3～8mmの砂礫を多く含む	
18	10YR4/4	褐色	粗粒砂と灰・炭化物との斑土		
19	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR4/4中粒砂の斑土	10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロック φ5～10mmの砂礫を含む	大甕埋め込みのタタキ残欠
20	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト		
21	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR4/6褐色中～粗粒砂の斑土	10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックを含む	大甕埋め込みのタタキ残欠
22	10YR3/4	暗褐色	中粒砂	炭化物を含む	
23	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂		
24	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	018SK埋土	
25	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	018SK埋土	
26	10YR6/4	にぶい黄橙色	粗粒砂	018SK埋土	
27	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～細粒砂	018SK埋土	
28	10YR4/4	褐色	中粒砂	018SK埋土	
29	10YR4/4	褐色	粗粒砂	018SK埋土	
30	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂と10YR4/4中粒砂の斑土	018SK埋土	
31	10YR3/4	暗褐色	中粒砂と10YR4/4中粒砂の斑土	018SK埋土	
32	10YR5/4	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	015SK埋土	
33	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂		
34	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	炭化物、焼土ブロックを含む	
35	10YR4/4	褐色	中～粗粒砂	炭化物を含む	
※基盤層A	10YR6/4	にぶい黄橙色	中～粗粒砂	(地山)	
※基盤層B	10YR7/4	にぶい黄橙色	粗粒砂～10YR7/6明黄褐色粗粒砂	同色のシルト質部分を混じ固くしまっている(地山)	
※基盤層C	10YR7/4	にぶい黄橙色	細～中粒砂	下底に10YR6/4にぶい黄橙色部分がある(地山)	

３地点東セクション図



3地点　東セクション注記

1	―	―	―	現代の表土および攪乱層
2	10YR3/4	暗褐色	粗粒砂	炭化物を含む
3	10YR3/4	暗褐色	中～粗粒砂	炭化物を含む　022SK埋土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂	鉄分と二酸化マンガンの沈着したブロックを含む
5	10YR5/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	固く圧縮されている
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	中～粗粒砂	炭化物と破砕された貝殻を含む
7	10YR3/3	暗褐色	中～細粒砂	破砕された貝殻を含む

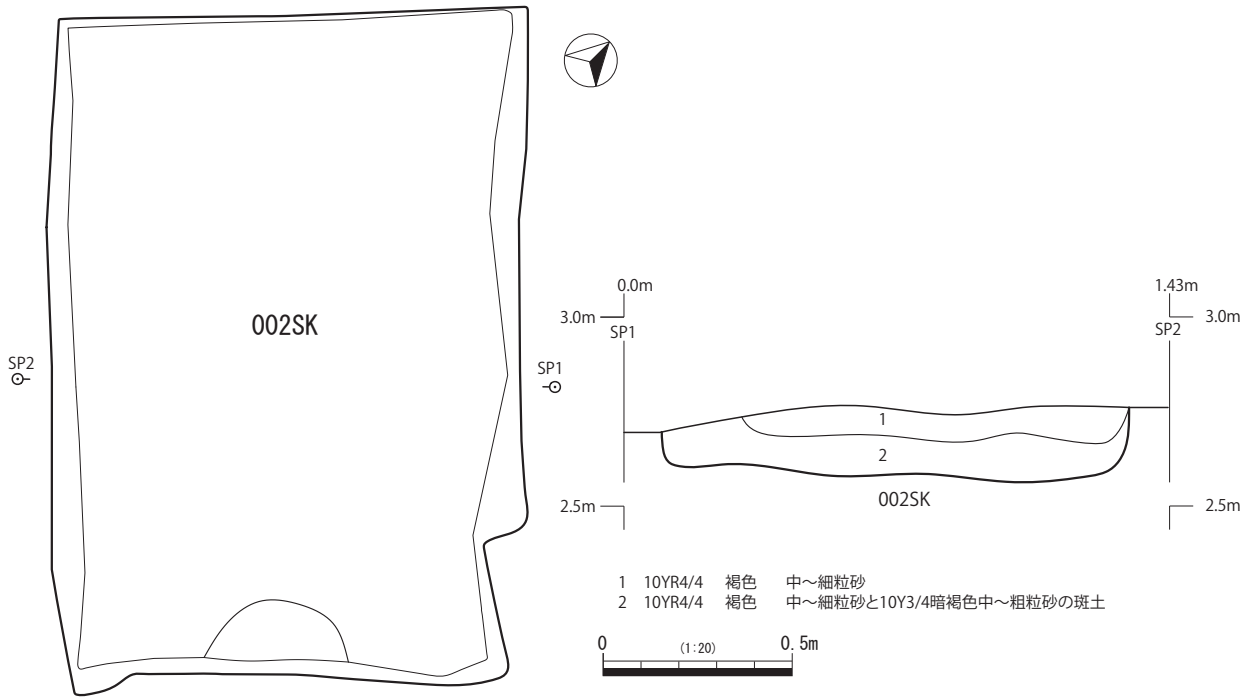
第 46 図　３地点東セクション図

004SK：土坑

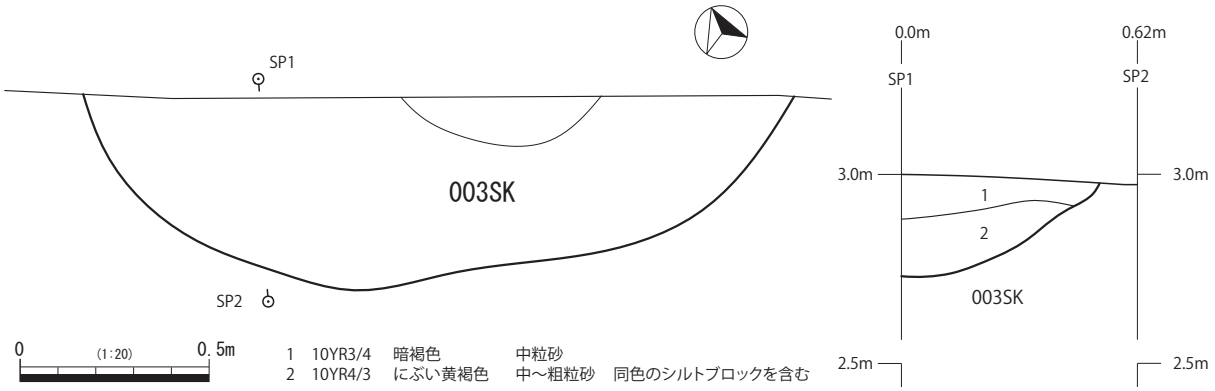
調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 1.1 m、幅 0.8 m、深さ 12cm 強を測る。埋土に近世の焙烙や素焼きの赤物が混じることから近世以降の遺構と考えられる。

005SK：土坑

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.8m、幅 0.8m 以上、深さ 87cm を測る。埋土に東濃系山茶碗や常滑甕、羽釜が混じることから、中世以降の遺構と考えられる。



第 47 図　002SK　土坑



第 48 図　003SK　土坑

006SK：土坑

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の直径 0.4 m、深さ 21cm を測る。埋土から東濃系山茶碗が 1 点出土したことから、中世以降の遺構と考えられる。

007SK：土坑

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.7m、幅 0.4m、深さ 17cm を測る。埋土に尾張型山茶碗・東濃系山茶碗が混じることから、中世以降の遺構と考えられる。

008SK：土坑

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.6m、幅 0.5m、深さ 15cm を測る。東濃系山茶碗が 1 点出土したことから、中世以降の遺構と考えられる。

009SK：土坑（第 49 図）

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.7m、幅 0.6m、深さ 88cm を測る。遺構掘削

時に柱痕を確認したものの脆弱であったため取上げ不可能な状態であった。埋土に尾張型山茶碗・東濃系山茶碗が混じることから、中世以降の柱穴と考えられる。

010SK：土坑

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.7 m、幅 0.5 m、深さ 55cm を測る。埋土に尾張型山茶碗・東濃系山茶碗・かわらけが混じることから、中世以降の遺構と考えられる。

011SK：土坑（第 50 図）

調査区中央部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.8m、幅 0.7m、深さ 48cm を測る。埋土から土師器高坏が出土したが、近世の大鉢や焙烙、磁器が混じることから近世以降の遺構と考えられる。

012SK：土坑（第 50 図）

調査区中央部で検出した土坑で、検出部分の長さ 1.4 m、幅 0.9m 以上、深さ 22cm を測る。埋土からかわらけが出土したことから、中世以降の遺構と考えられる。

014SK：土坑

調査区中央部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.5m、幅 0.3m 以上、深さ 25cm を測る。埋土から尾張型山茶碗が出土したことから、中世以降の遺構と考えられる。

015SK：土坑

調査区中央部で検出した土坑で、検出部分の直径 0.4m、深さ 48cm を測る。埋土から貝田町式壺が出土したが、東濃系山茶碗・かわらけ・素焼きの赤物が混じることから、中世以降の遺構と考えられる。

017SK：土坑（第 49 図）

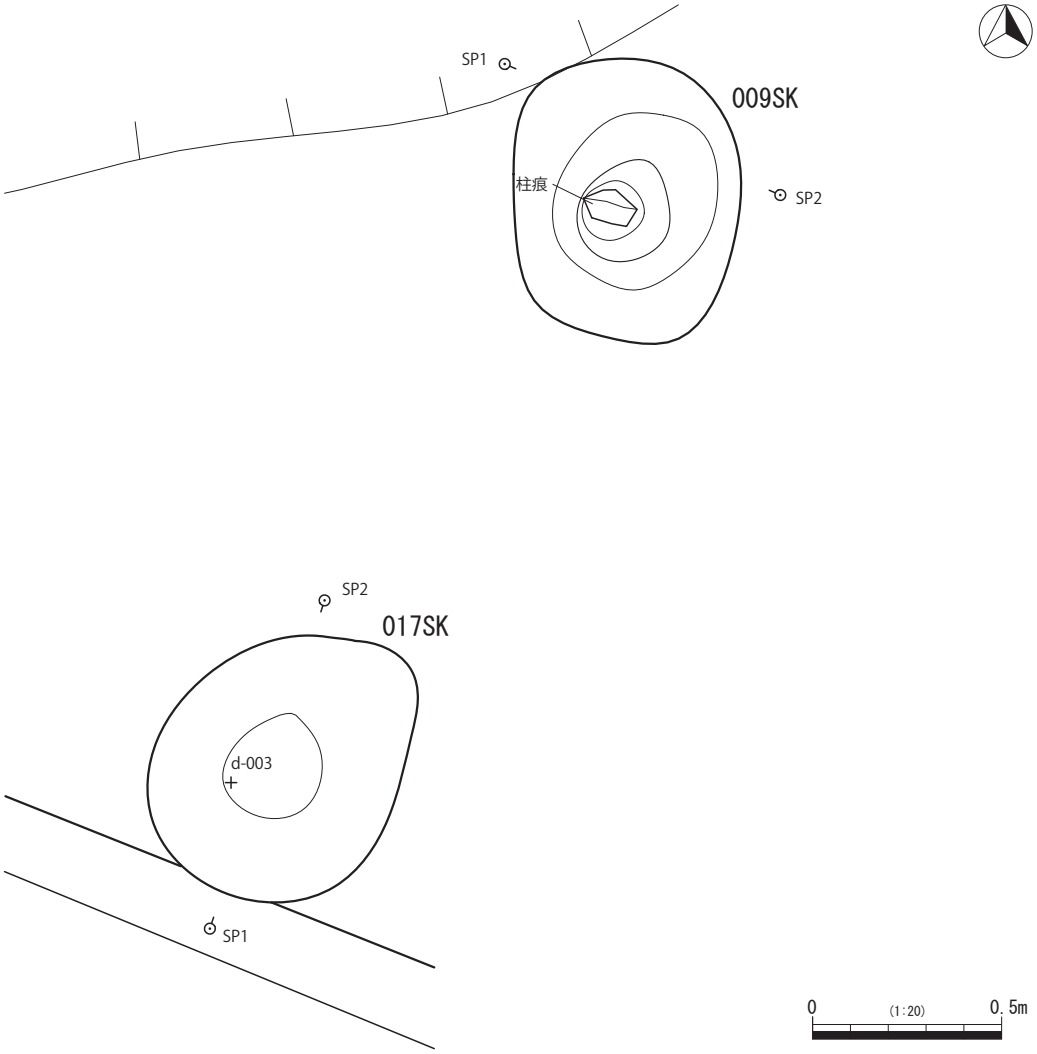
調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.8 m、幅 0.6 m、深さ 31cm を測る。埋土に常滑大甕の底部が水平に置かれた状態で検出された。水甕などの用途だったと考えられる。ほかに遺物は出土しなかったが、001SK ともに近世のタタキ遺構と考えられる。

018SK：土坑

調査区中央部で検出した土坑で、検出部分の長さ 4.0 m、幅 0.9m、深さ 21cm を測る。住居址などを想定して掘削を行ったものの周溝・柱穴などの検出はできなかった。用途時期ともに不明である。

019SK：土坑

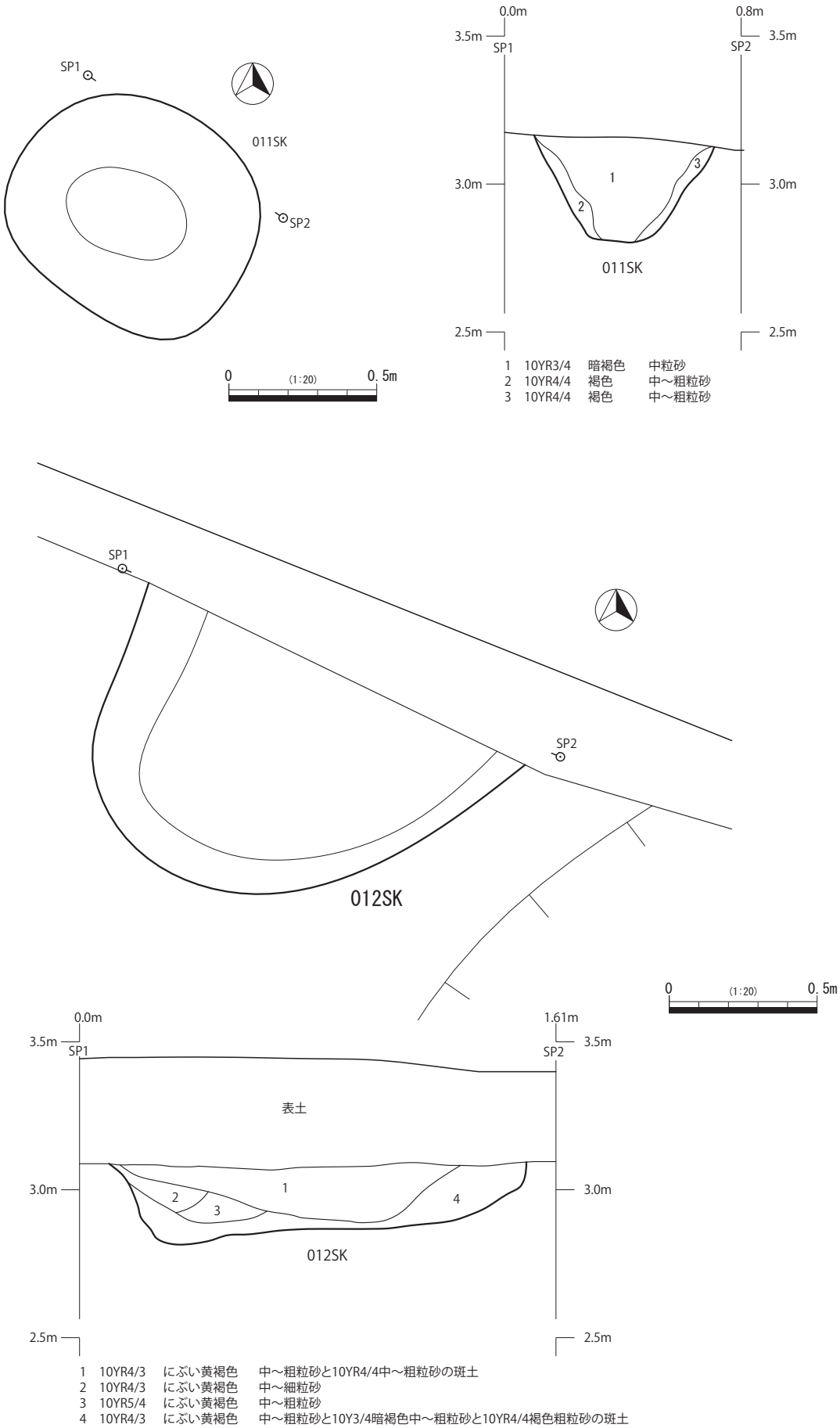
調査区東部で検出した土坑で、検出部分の長さ 0.3 m、幅 0.2 m、深さ 20cm を測る。埋土に尾張型山茶碗・東濃系山茶碗が混じることから、中世以降の遺構と考えられる。



1　10YR3/4暗褐色　　中粒砂
2　10YR4/3にぶい黄褐色　　中～粗粒砂
3　10YR4/3にぶい黄褐色　　中～粗粒砂
4　10YR4/4褐色　　粗粒砂

1　10YR4/3　にぶい黄褐色　　中～粗粒砂
2　10YR5/4　にぶい黄褐色
　中～粗粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土
3　10YR5/3　にぶい黄褐色　　シルト質砂と同色粗粒砂の斑土
d-003:大甕底部残欠

第 49 図　009SK・017SK　土坑



第 50 図　011SK・012SK　土坑

021SK：土坑

調査区東部で検出した土坑で、検出部分の直径 0.3 m、深さ 60cm を測る。埋土から尾張型山皿が出土したことから、中世以降の遺構と考えられる。

３　出土遺物（第 51 図）

本調査区の出土遺物は少なく、全てを合わせてもテンバコ 1 箱に満たない量であった。その大半は中世の山茶碗の破片であった。

弥生時代の遺物としては、中期の土器が 3 点出土している（001 ～ 003）。3 点とも古井式の壺形土器と考えられる。

古代の遺物としては、O-10 窯式期前後の長頸瓶（004）の底部 1 点が出土している。

中世資料は、豊富に出土したものの、その多くが細片であり、東濃系の大洞東段階の山茶碗（006）や、尾張型第 7 型式の山皿（005）などが出土している。また古瀬戸後 I 期の折縁小皿（007）・緑釉小皿（008）などが出土している。

近世資料は、大窯 4 期後半の志野皿（009）、登窯 1 ～ 2 の碗底丸（志野小碗）（011）などが出土しており、18 ～ 19 世紀初頭の焙烙（010）も出土している。

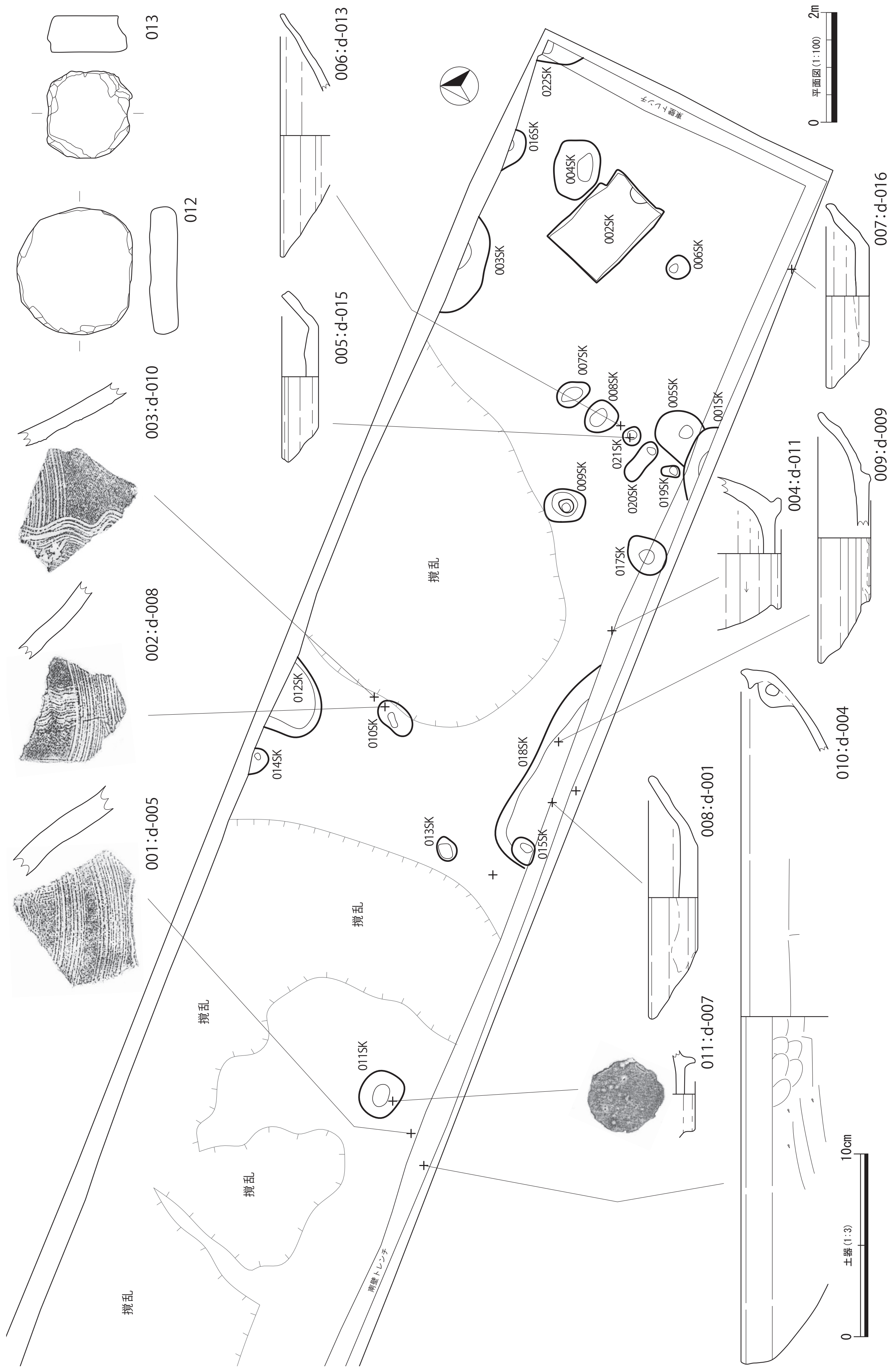
４　3 地点のまとめ

本調査区は、第一砂堆の中でも南西端に位置し、大田川の旧河道に面した地点である。

西側に隣接する平成 30 年度 3 地点では、中世～近世にかけての遺構・遺物が発見されている。本調査区は、調査区の西半が近代以降、大規模に削平と攪乱を受けており、遺構や遺物はほぼ見あたらなかった。また、地表面直下に地山が確認され、遺物包含層が存在しない部分も多かった。

調査区東側に関しては、東端部に向かって地山の落ち込みを確認することができた（5 mの範囲で約 20cm 下がる）。基盤層 A 部分は中～粗粒砂で構成される地山層であったが、基盤層 B 部分では粗粒砂がシルトを交えて硬く締まっており、更に基盤層 C 部分ではまったく締まりのない細粒砂に置き換わっていた。このような変化は他地点の地山ではほとんど見られない状況で、長年にわたり伊勢湾側からと内陸側両方からの影響を受けて形成されたものと考えられる。調査前の平均的な標高は 3.2m 前後と低く、旧河道に向かって傾斜する調査区東端の地山面は 2.7m であった。

遺物的には極めて散漫だが弥生時代中期の資料が検出されており、当時の活動領域が第一砂堆南端部にまで及んでいたことを物語っている。中近世に至る活動の痕跡は極めて断片的であり、タタキの存在などから、居住地に隣接した耕作地として利用が続けられてきた可能性を指摘することができる。



第51図　３地点遺物出土分布図

第３章　自然科学分析

第１節　貝層分析の結果

新美倫子（名古屋大学博物館）

１　はじめに

畑間・東畑遺跡の 2019 年度調査では、数カ所の貝集積や埋土中に貝を含む土坑が検出されている。それらのうち、畑間遺跡で３ヶ所（貝集積 019SM・土坑 010SK・土坑 008SK）と東畑遺跡で１ヶ所（貝集積 001SM）の貝層の一部が、分析用サンプルとして土ごととりあげられた。これらのサンプルの所属時期はすべて中世後半以降で近世主体とのことであり、それぞれ任意の量がとりあげられた後に、5mm 目のふるいで水洗され、動物遺体が選別された。同定及び分析は、筆者がすべて行った。

出土した動物遺体には貝類とフジツボ類が含まれていたが、どのサンプル中にも魚類・鳥類・哺乳類はまったく見られなかった。これらはもともと含まれていなかったのかもしれないし、水洗選別のふるいが 5mm 目であったため、これより小さな資料は採集されなかった可能性もある。出土した貝類の種名を第３表に、出土内容と最小個体数を第４表・第５表に示した。第４表では、二枚貝は殻頂部の数を、巻貝は芯の数を数えた。ただし、二枚貝でもマガキは左殻の数のみを、ヤマトシジミは左殻・右殻の合計の 1/2 を示している。

すべてのサンプルの合計出土個体数では、シオフキが 777 個体と最も多く、次いでハマグリが 351 個体、アサリが 156 個体、サルボウ 37 個体、マガキ 20 個体、アカニシ 19 個体、スガイ 14 個体、オオノガイ５個体、ナミマガシワ類４個体、マテガイ３個体、ヤマトシジミ１個体、オオタニシ１個体が出土している。また、食料として利用されなかったと思われるウミニナ・ヘナタリ類 422 個体、ムシロガイ類 129 個体、ヨウラクガイ類の幼貝 27 個体、ムギガイ類 23 個体も出土している。ただし、サンプルにより、その内容構成は大きく異なっており、以下に各サンプルの内容を述べ、それらの特徴をまとめたい。

２　各地点の貝層

畑間遺跡２地点（HM19-2）

019SM

貝類のみ 648 個体が出土し、そのうちシオフキが 476 個体と７割以上を占めている。残りはハマグリ 167 個体とアサリ４個体とウミニナ類１個体であり、種構成はかなり単純である。シオフキは殻長３～ 4cm のものが多いが、２～ 3cm の小さな個体もかなり多く、4cm をこえるものは少ない。なお、シオフキが破損して殻頂部のみになるとバカガイとの区別が難しい場合があるが、当遺跡出土のそのような資料は、おそらくすべてシオフキだと思われる。ハマグリも最も多いのは殻長３～ 4cm の個体で、次いで４～ 5cm のもの、２～ 3cm のもの、５～ 6cm のものの順となる。6cm をこえるものはほとんどなく、小さな個体が多い。

010SK

貝類のみ 460 個体が出土した。アサリが 131 個体と最も多く、他にサルボウ 37 個体、シオフキ 25 個体、ハマグリ 21 個体、マガキ 20 個体、アカニシ 19 個体、オオノガイ５個体、ナミマガシワ類４個体、スガイ・オオタニシ各１個体とウミニナ・ヘナタリ類 190 個体、ムシロガイ類５個体が見られた。アサリは殻長２～ 3cm の小さな個体が大部分であり、１～ 2cm のごく小さな個体も見られた。サルボウも２～ 3cm の個体と３～ 4cm の個体が同程度に多く、小さなものが主体である。シオフキは殻長３～ 4cm の個体が多く、ハマグリも３～ 4cm のものが多い。マガキは殻高３～ 4cm の個体が多く、アカニシはいずれも 7cm 以下の個体であった。ウミニナ・ヘナタリ類はイボウミニナが大半を占めるが、ホソウミニナ・ウミニナ・ヘナタリ・カワアイも含まれていた。

008SK

貝類のみ 423 個体が出土した。ウミニナ・ヘナタリ類 229 個体、ムシロガイ類 123 個体、ヨウラクガイ類の幼貝 27 個体、ムギガイ類 23 個体、スガイ 13 個体、アサリ２個体、ヤマトシジミ１個体が見られ、食料として利用されなかったと思われる個体がほとんどを占めている。ウミニナ・ヘナタリ類はイボウミニナが多いが、ウミニナ・ホソウミニナ・ヘナタリ・カワアイも含み、幼貝から成貝までさまざまな大きさの個体が含まれた。サルボウ？とした資料は、殻頂部の中心部のみが残存していたため種が確定できず、コタマガイ？とした資料も幼貝であるため種を確定できなかった。

東畑遺跡１地点（HH19-1）

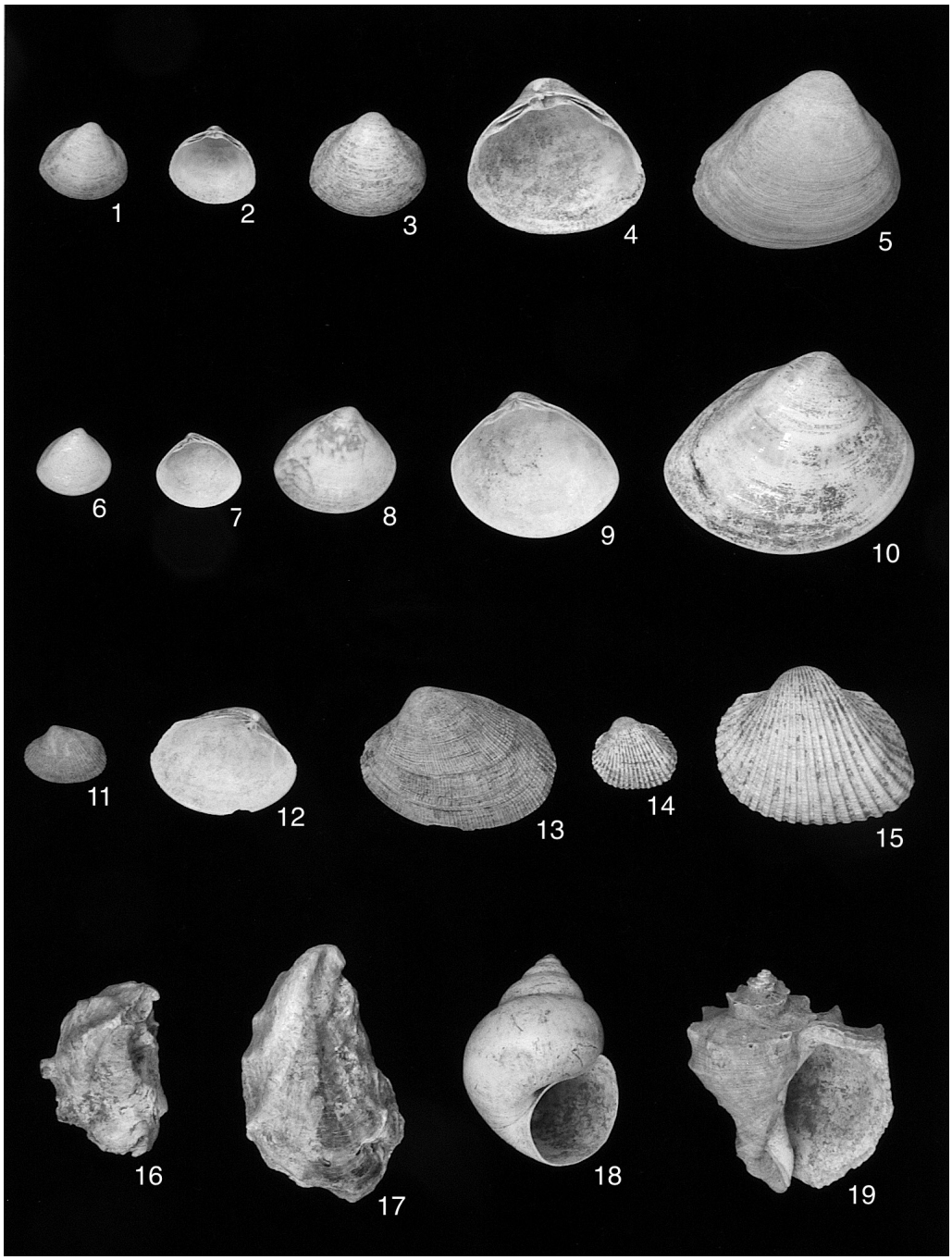
001SM

貝層範囲２において採集した 30cm×30cm のブロックサンプルである。

主体はシオフキで、次いでハマグリと多い。小数ではあるが、ウミニナ類、ムシロガイ類、マテガイが認められた。

３　まとめ

ここで分析した４つのサンプルは、①ほぼ食用になったと思われる種（シオフキ・ハマグリ・アサリ）だけで構成される 019SM と 001SM、②食用になったと思われる種と食用でなかったと思われる種が混在する 010SK、③ほぼ食用でなかったと思われる種（ウミニナ・ヘナタリ類やムシロガイ類など）だけで構成される 008SM の３グループに分けることができる。出土した貝類は砂泥性の種がほとんどであり、愛知県の砂泥底の海で現在も使用されるマンガのような道具を使用して貝類が無差別に採集されていたとすると、採ってきた貝類から食用貝を選びだしたのが①で、その残滓が③なのかもしれない。そして、食用になったシオフキ・ハマグリ・アサリ・サルボウなどはいずれも小さな若い個体が主体であり、大きい個体がほとんど含まれないのも特徴である。



１～５：シオフキ　６～10：ハマグリ　11～13：アサリ　14・15：サルボウ　16・17：マガキ
18：オオタニシ　19：アカニシ　１～10は右殻　11～17は左殻

写真１　貝類写真（約3/4）

1	アワビ類	9	カワアイ	17	マガキ
2	スガイ	10	ヘナタリ類	18	シオフキ
3	オオタニシ	11	ヨウラクガイ類	19	マテガイ
4	ウミニナ	12	アカニシ	20	ヤマトシジミ
5	ホソウミニナ	13	ムギガイ類	21	アサリ
6	イボウミニナ	14	ムシロガイ類	22	コタマガイ？
7	ウミニナ類	15	サルボウ	23	ハマグリ
8	ヘナタリ	16	ナミマガシワ類	24	オオノガイ

第３表　出土貝類種名

遺構 / 種類	畑間遺跡			東畑遺跡	計
	019SM	010SK	008SK	001SM	
シオフキ	左 476、右 467	左 4、右 25		左 276、右 273	1,521
ハマグリ	左 142、右 167	左 21、右 17		左 127、右 163	637
アサリ	左 4、右 1	左 126、右 131	左 1、右 2	左 19、右 14	298
サルボウ		左 37、右 31			68
マガキ		左 20			20
スガイ		1	13、フタ 6 あり		20
アカニシ		19			19
オオノガイ		左 5、右 3			8
ナミマガシワ類		左 4			4
ヤマトシジミ			1		1
オオタニシ		1			1
ウミニナ・ヘナタリ類	1	190	229	2	422
ムシロガイ類		5	123	1	129
ヨウラクガイ類			27		27
ムギガイ類			23		23
その他		種不明巻貝（幼貝）1	サルボウ？左 1 コタマガイ？（幼貝）左 1 種不明巻貝芯 3	マテガイ右 3	9
計	1,258	641	430	878	3,207

註　二枚貝は殻頂部の数を、巻貝は芯の数を数えた。左：左殻、右：右殻。なお、マガキは左殻のみの点数を、 ヤマトシジミは左殻・右殻合計の 1/2 を示した。

第４表　貝類出土内容

遺構 / 種類	畑間遺跡			東畑遺跡	計
	019SM	010SK	008SK	001SM	
シオフキ	476	25		276	777
ハマグリ	167	21		163	351
アサリ	4	131	2	19	156
サルボウ		37			37
マガキ		20			20
アカニシ		19			19
スガイ		1	13		14
オオノガイ		5			5
ナミマガシワ類		4			4
ヤマトシジミ			1		1
オオタニシ		1			1
ウミニナ・ヘナタリ類	1	190	229	2	422
ムシロガイ類		5	123	1	129
ヨウラクガイ類			27		27
ムギガイ類			23		23
その他		種不明巻貝（幼貝）1	サルボウ？ 1 コタマガイ？（幼貝）1 種不明巻貝 3	マテガイ 3	9
計	648	460	423	464	1,995

第５表　貝類出土最小個体数

第２節　東畑遺跡のプラント・オパール分析と微粒炭分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１　はじめに

愛知県東海市の東畑遺跡１地点において、遺構埋土が採取された。この試料についてプラント・オパール分析と微粒炭分析を行い、イネ科植物相や微粒炭の堆積状況について検討した。

２　試料と方法

分析試料は、027SU 土器集積埋土と 035SI 埋土の計２点である（第６表）。なお、同一試料を用いて行われた放射性炭素年代測定の結果、027SU 土器集積埋土は１世紀後半～３世紀初め、0035SI 埋土は７世紀後半～８世紀後半の年代値が得られている（放射性炭素年代測定の節参照）。これらの試料について、次の手順で分析を実施した。

試料 No.	遺構	放射性炭素年代測定	土相
1a	027SU	１世紀後半～３世紀初め	黒色（7.5YR2/1）中粒砂
1b	035SI	７世紀後半～８世紀後半	褐灰色（5YR4/1）中粒砂

第６表　分析資料一覧

2-1. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後､再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、写真２に載せた。

2-2. 微粒炭分析

試料を乾燥後、秤量する。そこに 10%の水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、微粒炭を検鏡した。なお、試料 1g 中の微粒炭含有数は、次式で求める。

$X = BD/AC$

X：試料 1g 中の微粒炭含有数、A：分析に用いた試料の重量（g)、B：濃縮試料＋グリセリンの重量（g)、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量（g)、D：プレパラート中の微粒炭数

３　結果

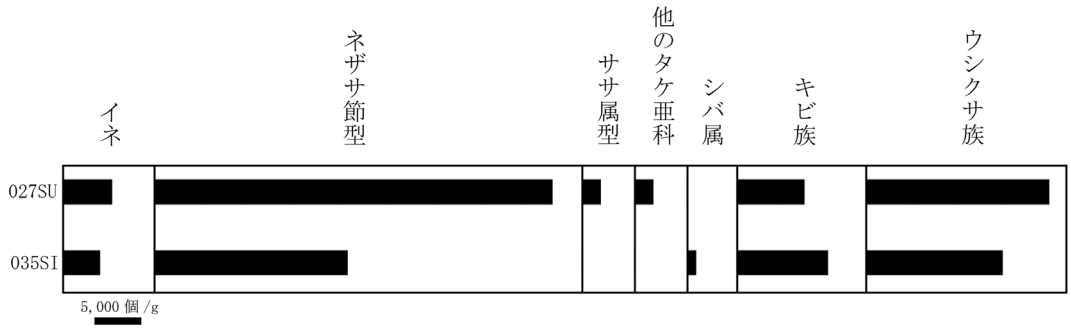
3-1．プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（第７表)、分布図を第 52 図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

２試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の７種類の機動細胞珪酸体が確認できた。このうち、ネザサ節型機動細胞珪酸体やササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体といったタケ亜科は、027SU に多く含まれる傾向がある。

	イネ（個 / ｇ）	ネザサ節型（個 / ｇ）	ササ属型（個 / ｇ）	他のタケ亜科（個 / ｇ）	シバ属（個 / ｇ）	キビ族（個 / ｇ）	ウシクサ族（個 / ｇ）
027SU	5,200	42,700	2,100	2,100	0	7,300	19,800
035SI	4,000	20,800	0	0	1,000	9,900	14,800

第７表　試料 1g 当りのプラント・オパール個数



第 52 図　植物珪酸体分布図

3-2．微粒炭分析

計量し、検鏡した結果を第８表に示す。いずれの試料にも微粒炭が含まれており、027SU は試料 1g 当り 1,527,114 個、035SI は試料 1g 当り 706,421 個である。

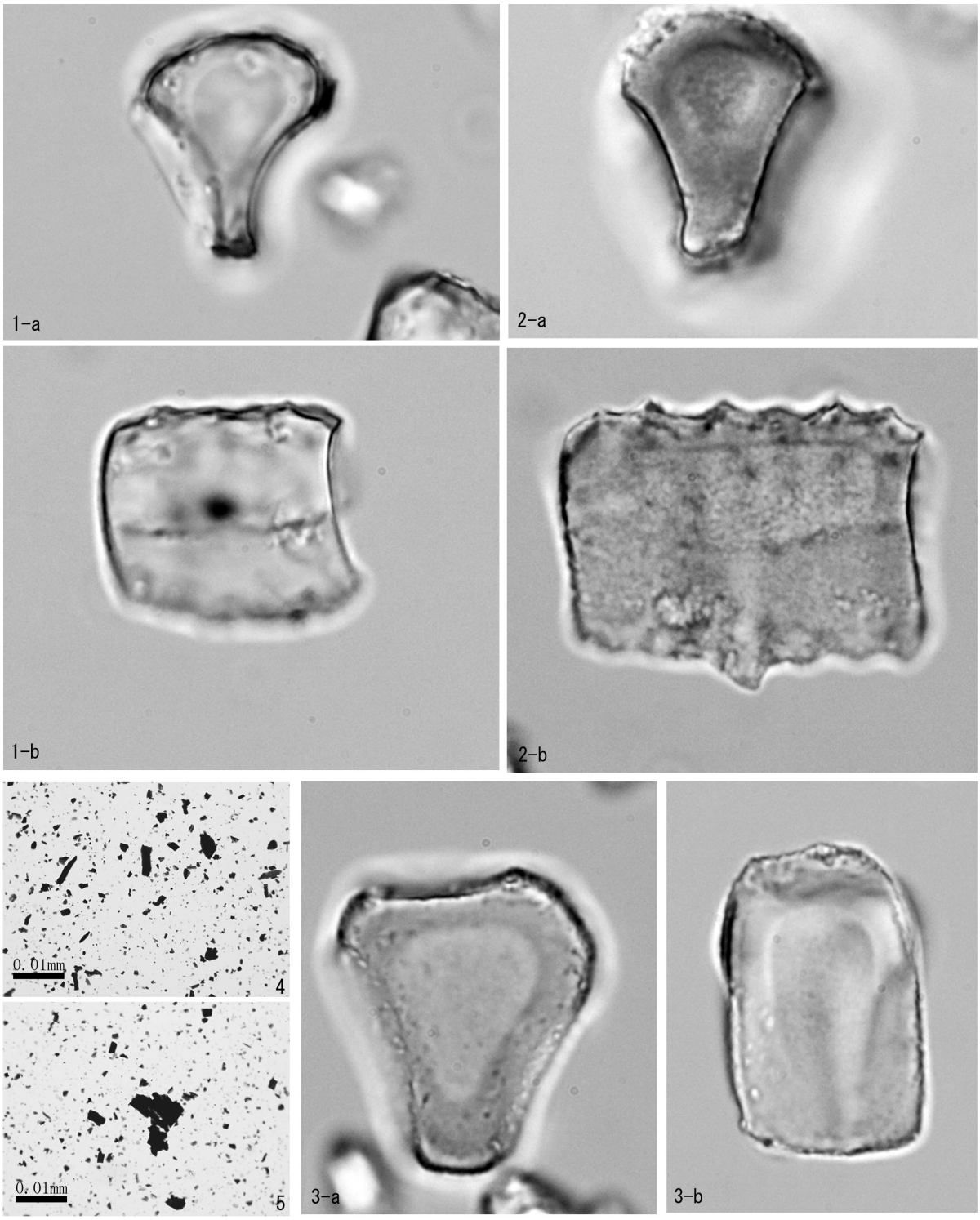
	027SU	035SI
分析に用いた試料（g)	3.4295	3.0301
残渣＋グリセリン（g)	1.1802	1.0001
封入に用いた量（g)	0.0120	0.0192
微粒炭数	53,251	41,094
（試料 1g 当りの個数）	1,527,114	706,421

第８表　微粒炭分析に用いた試料の計量値と微粒炭数

４　イネ科植物相について

1 世紀半ば～３世紀初めの年代値が得られている 027SU や、７世紀後半～８世紀後半の年代値が得られている 035SI では、イネ機動細胞珪酸体が検出された。東畑遺跡や近隣の畑間遺跡では、これまでもイネ機動細胞珪酸体が検出されており、弥生時代中期の土器棺（森，2013）や弥生時代中期～後期の 096SK の１層（森，2016）などの例がある。1 世紀半ば～３世紀初めや７世紀後半～８世紀後半には、イネは遺跡周辺において一般的な存在であったと思われる。

また、027SU と 035SI とでは、ネザサ節型機動細胞珪酸体やササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体といったタケ亜科の産出傾向に相違点がある。すなわち、027SU でタケ亜



1. イネ機動細胞珪酸体
2. ネザサ節型機動細胞珪酸体
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体
4. プレパラート写真（035SI）
5. プレパラート写真（027SU）

a: 断面　b: 側面

写真２　035SI から産出した植物珪酸体と微粒炭分析のプレパラート写真

科がより多く産出している。時期によってタケ亜科の分布状況が異なっていた可能性や、遺構の違いによって堆積状況が異なっていた可能性など、両試料のタケ亜科の機動細胞珪酸体の産出傾向の相違の背景には、いくつかの可能性が考えられる。

５　微粒炭について

微粒炭は、黒味が強い 027SU により多く含まれていた。よって、両試料の色調の相違は微粒炭の含有量によると考えられる。微粒炭は、人間活動や自然現象に伴う植物燃焼によって生じるため、1 世紀半ば～３世紀初めと７世紀後半～８世紀後半では植物燃焼に関わる事象が異なっていた可能性や、遺構の相違による微粒炭の堆積状況の相違を反映している可能性などが考えられる。

《引用文献》

森　将志（2013）東畑遺跡のプラント・オパール分析．国際文化財株式会社西日本支店編「畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告：愛知県東海市」：115-116，愛知県東海市教育委員会．
森　将志（2016）畑間遺跡のプラント・オパール分析と微粒炭分析．国際文化財株式会社中部支店編「畑間・東畑遺跡発掘調査報告：愛知県東海市」：144-147，愛知県東海市教育委員会．

第３節　東畑遺跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtatidze・森　将志・竹原弘展

１　はじめに

愛知県東海市大田町に所在する東畑遺跡１地点より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調製データは第９表のとおりである。PLD-41360 は、035SI の埋土である。PLD-41361 は、027SU 土器集積の埋土である。時期は、035SI は古代、027SU 土器集積は S 字甕第２段階以降と予想されている。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-41360	遺構：035SI	種類：土壌 状態：dry	湿式篩分：106 μ m 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41361	遺構：027SU 土器集積	種類：土壌 状態：dry	湿式篩分：106 μ m 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第９表　測定試料および処理

３　結果

第 10 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第 53 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

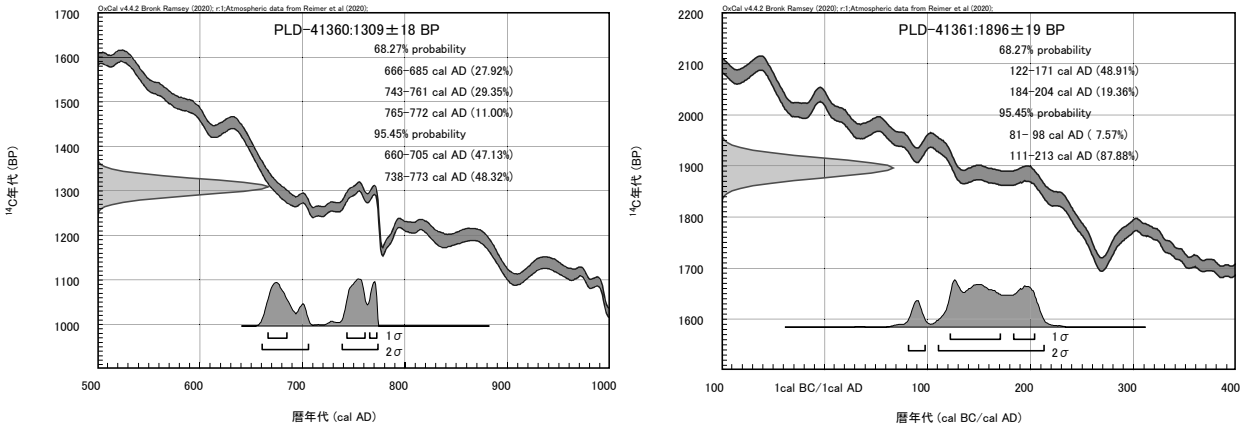
^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-41360	-25.70±0.26	1309±18	1310±20	666-685 cal AD (27.92%) 743-761 cal AD (29.35%) 765-772 cal AD (11.00%)	660-705 cal AD (47.13%) 738-773 cal AD (48.32%)
PLD-41361	-25.96±0.23	1896±19	1895±20	122-171 cal AD (48.91%) 184-204 cal AD (19.36%)	81- 98 cal AD (7.57%) 111-213 cal AD (87.88%)

第 10 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第 53 図　暦年較正結果

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

以下、2 σ暦年代範囲（確率 95.45%）を基に結果を整理する。

035SI の埋土である PLD-41360 は、660-705 cal AD(47.13%)および 738-773 cal AD(48.32%)で、7 世紀中頃から 8 世紀後半の暦年代を示した。これは、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

027SU 土器集積の埋土である PLD-41361 は、81-98 cal AD（7.57%）および 111-213 cal AD (87.88%）で、1 世紀後半から 3 世紀前半の暦年代を示した。これは赤塚（2009）を参照すると、弥生時代後期～古墳時代早期に相当する。

《参考文献》

赤塚次郎（2009）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代．日本文化財科学会第 26 回大会実行委員会編「日本文化財科学会第 26 回大会研究発表要旨集」：14-20，日本文化財科学会.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」日本第四紀学会 , 3-20.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869-1887.

第４節　東畑遺跡出土土器胎土内の塊状赤色物の成分分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

１　はじめに

東海市大田町に所在する東畑遺跡１地点から出土した土器の胎土に含まれる塊状赤色物について、各種分析を行い、材質を検討した。

２　試料と方法

分析対象は、027SU より出土した土器胎土中に観察される塊状赤色物である（写真 3-1）。土器の時期は、S 字甕期とみられており、塊状の赤色物は一部の土器に顕著にみられる。実体顕微鏡下で赤色物を少量採取して、アルミナ製乳鉢で粉砕し、蛍光Ｘ線分析およびＸ線回折分析を行った。また、別途微量採取した赤色物をセロハンテープに貼り付け、生物顕微鏡観察を行った。

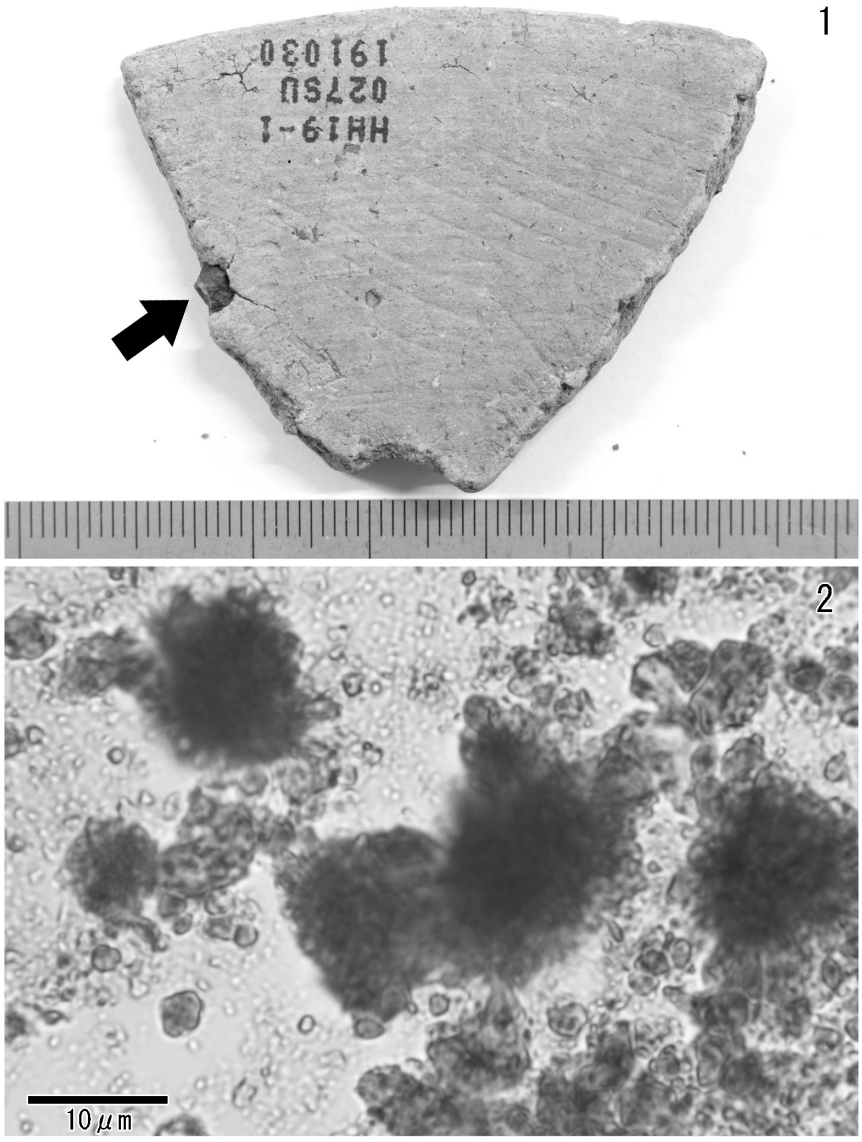


写真３　土器胎土内塊状赤色物の成分分析

1. 分析対象遺物（矢印が塊状赤色物）　2. 採取赤色物の生物顕微鏡写真

蛍光 X 線分析

蛍光 X 線分析は、マイラーフィルムを張った試料ホルダに粉末試料を入れて、測定した。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置は、X 線管が最大 50kV、1000 μ A のロジウム（Rh）ターゲット、X 線照射径が 8mm または 1mm、X 線検出器は SDD 検出器（VorteX）である。この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することで S/N 比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが、蛍光 X 線分析装置の性質上、軽元素の感度が若干低く、特に定量分析におけるナトリウムの精度は低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV（一次フィルタ無し・Cl 測定用）・50kV（一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用）の 4 条件で、測定時間は各条件 500 ～ 1000s、管電流自動設定、照射径 8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダード FP 法による半定量分析を行った。

X 線回折分析

X 線回折分析では、粉末試料を少量試料用の無反射試料板に充填して分析試料とした。

分析には、株式会社リガク製 X 線回折装置 MiniFleX600 を使用した。装置は、X 線管が銅（Cu）ターゲット、検出器が一次元半導体検出器（D/teX Ultra）を使用している。

測定条件は、管電圧 40kV、管電流 15mA、入射ソーラスリット 2.5°、入射高さ制限スリット 10.0mm、発散スリット 1.250°、散乱スリット 8.0mm、受光ソーラスリット 2.5°、受光スリット 13.0mm（Open）、K β フィルタに Ni0.03mm、走査速度 2.0°/min、ステップ幅 0.02°、走査範囲 3 ～ 65°、蛍光 X 線軽減モードに設定し、回転試料台で試料を回転させつつ測定した。

3　結果

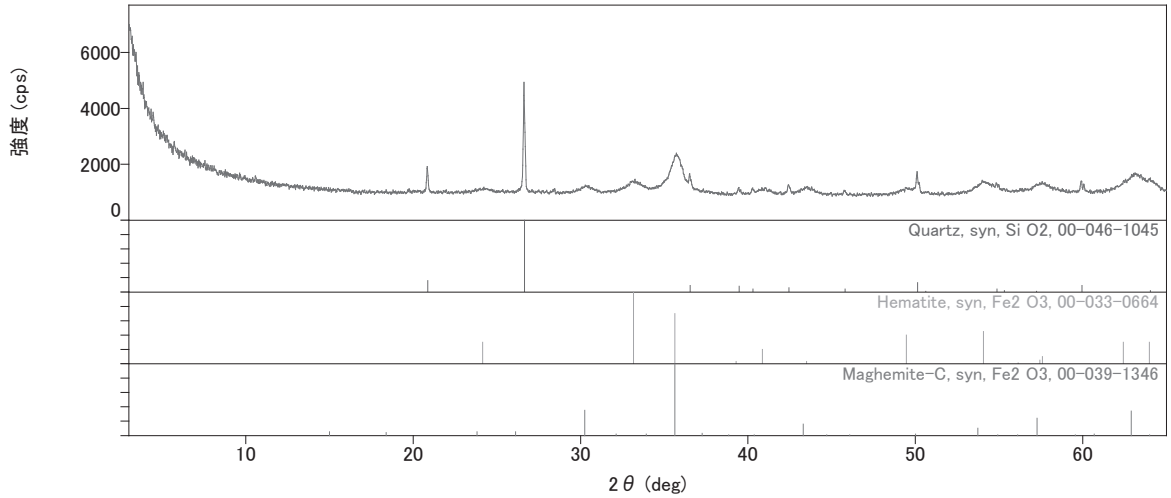
蛍光 X 線分析により得られた半定量分析結果を、第 11 表に示す。鉄（Fe_2O_3）が、60% 以上と非常に多く検出された。ほかに、アルミニウム（Al_2O_3）、ケイ素（SiO_2）、リン（P_2O_5）、カリウム（K_2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO_2）、クロム（Cr_2O_3）、マンガン（MnO）、亜鉛（ZnO）、ストロンチウム（SrO）、ジルコニウム（ZrO_2）、鉛（PbO）が検出された。

X 線回折分析により得られた回折パターンを、第 54 図に示す。石英（Quartz、SiO_2）、赤鉄鉱（Hematite、α -Fe_2O_3）、磁赤鉄鉱（Maghemite、γ -Fe_2O_3）が検出された。

また、採取した赤色物の生物顕微鏡観察により得られた画像を写真 3-2 に示す。赤褐色不定形粒子が観察された。

Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	ZnO	SrO	ZrO_2	PbO
12.08	19.49	2.45	0.36	1.05	0.60	0.04	0.03	63.82	0.03	0.01	0.03	0.01

第 11 表　蛍光 X 線半定量分析結果（mass%）



第 54 図　赤色物のＸ線回析分析結果

4　考察

分析の結果、蛍光Ｘ線分析では鉄が非常に多く検出された。また、Ｘ線回折分析では、赤鉄鉱や磁赤鉄鉱が検出された。以上より、塊状赤色物は酸化鉄（Ⅲ）を主体とした物質と確認された。

今回の分析試料の採取はデザインナイフで行ったが、塊状赤色物はそれほど固くなく、容易に割って採取が可能であった。土器の胎土中に含まれていた物質であり、土器焼成時に被熱しているため、褐鉄鉱の加熱脱水によって赤鉄鉱になった可能性も考えられる。例えば、赤黄色土中の赤色鉱物や、軟質な鬼板など、赤鉄鉱や褐鉄鉱の粒子に由来する可能性が考えられる。

第５節　東畑遺跡出土のＳ字状口縁台付甕の胎土分析

藤根　久・米田恭子（パレオ・ラボ）

１　はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、その砂粒物が示す地域がいずれであるかを推定するのは容易ではない。

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材で構成されるが、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村，2001）。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、使用した粘土の堆積環境を知ることが可能である。

一方、混和材としての砂粒物は、このような粘土層からの粘土採取の際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取したと推定される。東海地域の弥生時代後期の赤彩されたパレススタイル土器では、パレススタイル土器のうち３分の１程度は、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれていることが分かってきた（藤根，1998）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について、岩石・鉱物のほか微化石類やテフラなどの記載が重要であり、粘土や砂粒物、混和物の特徴について調べたうえで、周辺地質と比較・検討する必要がある。

ここでは、東海市東畑遺跡１地点のＳ字状口縁台付甕について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴を調べ、土器の胎土材料について検討した。

２　試料と方法

分析試料は、東畑遺跡から出土したＳ字状口縁台付甕２点である（第 12 表）。

土器片は、岩石カッターを用いて整形し、全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行う。薄片は、精密岩石薄片作製機および研磨フィルムを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面に含まれる微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について、観察と記載を行った。なお、ここで採用した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

放散虫化石

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

分析 No.	遺跡	器種	部位	遺構	時期	遺物 No.
1	東畑遺跡（HH19-1）	Ｓ字状口縁台付甕	胴部	土器集積遺構 027SU	廻間Ⅱ式後半～Ⅲ式（B 類）	191126
2		Ｓ字状口縁台付甕	胴部			191030

第 12 表　分析試料の詳細

珪藻化石

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは 10 ～数百μｍ程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

骨針化石

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も 23 種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

植物珪酸体化石

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μｍ前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

胞子化石

胞子は、直径約 10 ～ 30 μｍ程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

石英・長石類

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

長石類

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）によく見られる。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

雲母類

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

輝石類

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

角閃石類

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山

岩類に産出する。

ガラス質

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

ザクロ石

無色透明の屈折率の高いサイコロ状鉱物である。変成岩中にごく普通に産出し、火山岩中にも含まれる。

片理複合石英類

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩などと考えられる。

複合石英類

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が 0.01mm 未満の粒子を微細、0.01 ～ 0.05mm の粒子を小型、0.05 ～ 0.10mm の粒子を中型、0.10mm 以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

砂岩質・泥岩質

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。

斑晶質・完晶質

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。直交ニコルの観察において結晶度が高い岩石片である。

流紋岩質

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり主に流理構造を示す岩石である。

凝灰岩質

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、直交ニコルの観察において結晶度が低く、全体的に暗い岩石片である。

不明粒子

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3　結果および考察

偏光顕微鏡による各土器薄片の観察結果を述べる。粒子組成は、微化石類や岩石片、鉱物を記載するために、プレパラート全面を精査した。以下では、粒度組成や、0.1mm 前後以上の岩石片・鉱物の砂粒組成、微化石類などの記載を示す。なお、第 13 表における不等号は、量比の概略を示す。また、第 14 表の記号については、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、―は不検出を示す。

分析 No.	器種	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	S 字状口縁台付甕	220 μ m ～ 760 μ m	1.96mm	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型)〉複合石英類（微細)、火山ガラス（バブル型)〉ジルコン、斜長石（双晶)、ザクロ石、凝灰岩質、雲母類、角閃石類、カリ長石（パーサイト)、片理複合石英類、斜方輝石、チャート（結晶度高い複合石英類（微細))
2	S 字状口縁台付甕	280 μ m ～ 750 μ m	1.67mm	放散虫化石、骨針化石 (13)、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類、複合石英類（微細)〉複合石英類（大型)〉火山ガラス（バブル型･軽石型)、カリ長石（パーサイト)、ザクロ石、斜長石（双晶)、角閃石類、雲母類、ジルコン、複合石英類（中型)、凝灰岩質、片理複合石英類、複合石英類（小型)、斜方輝石、チャート（結晶度高い複合石英類（微細))

第 13 表　胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載

分析 No.	種別	粘土の特徴							砂粒の特徴								鉱物の特徴								植物珪酸体化石	その他の粒子
		種類	放散虫化石	珪藻化石 海水種	珪藻化石 淡水種	珪藻化石 不明種	骨針化石	胞子化石	分類	A･a 片岩類	B･b 深成岩類	C･c 堆積岩類	D･d 火山岩類	E･e 凝灰岩類	F･f 流紋岩類	G･g テフラ	石英	斜長石（双晶・累帯）	カリ長石（パーサイト）	ジルコン	ザクロ石	角閃石類	輝石類	雲母類		
1	S 字状口縁台付甕	その他	-	-	-	-	-	-	Bc	△	○	△	-	△	-	△	◎	△	△	△	△	△	△	△	△	チャート（結晶度高い)、植物細胞片含む
2	S 字状口縁台付甕	水　成	△	-	-	-	○	△	Cb	△	△	○	-	△	-	△	○	△	△	△	△	△	△	△	◎	チャート（結晶度高い)、植物細胞片含む

第 14 表　胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

3.1. 微化石類による粘土材料の分類

土器薄片の全面を観察した結果、微化石類（放散虫化石、骨針化石）が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数 100 μ m、珪藻化石が 10 ～数 100 μ m、骨針化石が 10 ～ 100 μ m 前後である（植物珪酸体化石は 10 ～ 50 μ m 前後)。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9 μ m 以下、シルトが約 3.9 ～ 62.5 μ m、砂が 62.5 μ m ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編，1981)。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は粘土中に含まれると考えられる。植物珪酸体化石以外の微化石類は､粘土の起源（粘土層の堆積環境）を知るのに有効な指標になると考えられる。植物珪酸体化石は、土器製作の場で灰質に伴って多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を必ずしも指標するとは限らない。

S 字状口縁台付甕の土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a）海成粘土、b）その他粘土、の 2 種類に分類された（第 14 表)。以下では、それぞれの粘土の特徴について述べる。

a）海成粘土（分析 No.1）

この土器胎土中には、放散虫化石が含まれていた。また、海綿動物の骨格の一部である骨針化石も含まれていた。

b）その他粘土（分析 No.2）

この土器胎土中には、水成環境を指標する微化石類が含まれていなかった。

3.2. 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、

			第 1 出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第 2 出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

第 15 表　岩石片の起源と組み合わせ

地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物群は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った（第 14 表）。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類（A/a）、複合石英類（大型）が深成岩類（B/b）、複合石英類（微細）などが堆積岩類（C/c）、斑晶質・完晶質が火山岩類（D/d）、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類（E/e）、流紋岩質が流紋岩類（F/f）、ガラス質がテフラ（G/g）である。

S 字状口縁台付甕の土器胎土中の砂粒組成は、第 15 表の組み合わせに従って、Cb 群または Bc 群の 1 群に分類された。

以下に、分類された砂粒物の特徴について述べる。

1）主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群または Cb 群（分析 No.1、分析 No.2）

これらの胎土中には、複合石英類（大型）やジルコン、角閃石類などからなる深成岩類と、複合石英類（微細）やチャート（結晶度の高い複合石英類（微細））などの堆積岩類が特徴的に含まれていた。その他、片岩類やテフラ、凝灰岩類を少量含む。また、片岩類に普遍的に含まれるザクロ石が見られた。

なお、分析 No.1 は深成岩類が多く、分析 No.2 は堆積岩類が多い。

3.3.　S 字状口縁台付甕の胎土材料の特徴

2 点の土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a）海成粘土（1 試料）、b）その他粘土（1 試料）、の 2 種類に分類された。また、砂粒組成はどちらも、1）主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群または Cb 群に分類された。

2 点の S 字状口縁台付甕の土器胎土は、粘土においては違いが見られたが、砂粒組成はどちらも Bc 群または Cb 群であり、その他の岩石や鉱物の特徴も同じであった。

2 点の S 字状口縁台付甕の胎土の由来は、片岩類の砂粒を含む点から、東海地域において中央構造線沿いに分布する領家変成岩帯や三波川変成帯に近接した地域が推定される。また、この中央構造線には、白亜紀後期～古第三紀初期の新規花崗岩および白亜紀後期の旧期花崗岩を伴う（牧本ほ

か，2004；日本地質学会，2011）。これらの地域の北側では、三河の設楽地域における前期中新世の設楽層群や、同岡崎地域における前期中新世の岡崎層群、同知多半島における前期～中期中新世の師崎層群、伊勢地域における前期～中期中新世の一志層群などの海成層が分布する（日本の地質「中部地方Ⅱ」編集委員会編，1988）。

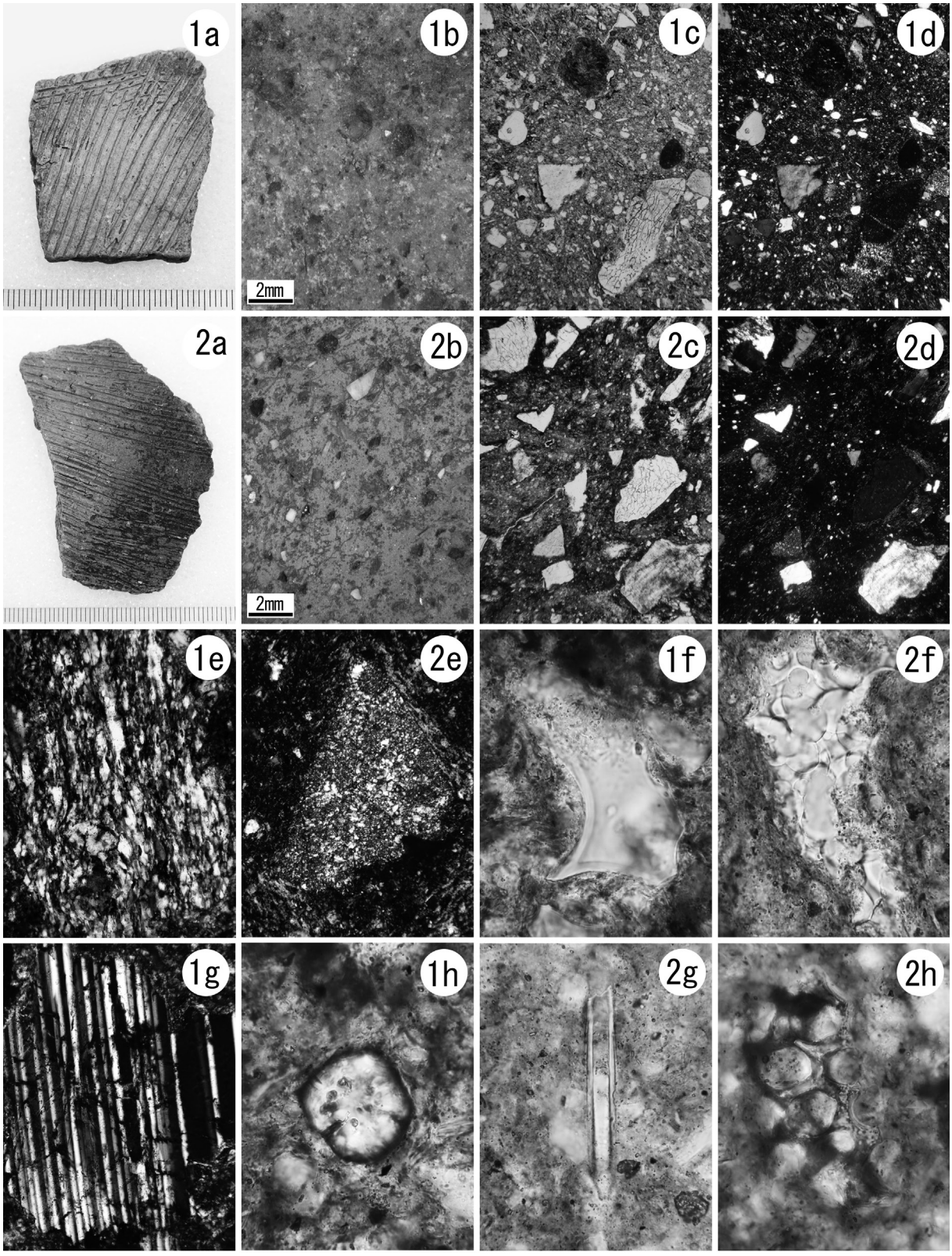
分析 No.1 のＳ字状口縁台付甕の胎土材料は、こうした地域の地質環境を示す材料と推定される。また、分析 No.2 のＳ字状口縁台付甕の胎土材料も同様の砂粒組成の特徴を示すため、同様の材料と推定される。

赤塚ほか（1998）は、現河川の砂粒組成との比較から、三重県松阪市貝蔵遺跡や愛知県一宮市西上免遺跡、清須市廻間遺跡のＳ字状口縁台付甕Ｏ類やＡ類の胎土が、輝石類や角閃石類、ジルコンのほかザクロ石を普遍的に含むという特徴から、雲出川水系の特有の砂粒組成であると指摘した。また、これらの一部には放散虫化石を含む胎土も含まれていた。

ここで分析したＳ字状口縁台付甕はＢ類に相当する土器群であるが、赤塚ほか（1998）が示したＳ字状口縁台付甕Ｏ類やＡ類と類似した特徴を示した。

《引用文献》

赤塚次郎・永草康次・服部俊之・早野浩二・原田　幹・藤根　久・宮腰健司・矢作健二・和気清章（1998）特集考古学フォ−ラム座談会１「Ｓ字甕の混和材を考える」．考古学フォ−ラム，9，22-47.
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（2），73-88.
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典．1612p，平凡社.
藤根　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ」：108-117，東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会.
藤根　久・今村美智子（2001）第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277，日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団 .
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20.
牧本　博・山田直利・水野清秀・高田　亮・駒沢正夫・須藤定久（2004）20 万分の１地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」．産業技術総合研究所地質調査総合センター.
日本地質学会（2011）日本地方地質誌４「中部地方」．554p，朝倉書店.
日本の地質「中部地方Ⅱ」編集委員会編（1988）日本の地質５「中部地方Ⅱ」．310p，共立出版 .



（スケール　1c,1d,2c,2d:500 μ m、1e,2e,1g:100 μ m、1f,2f,1h,2g,2h:20 μ m）

1a. 分析 No.1　1b. 分析 No.1（断面）　1c. 分析 No.1（解放ニコル）　1d. 分析 No.1（直交ニコル）

2a. 分析 No.2　2b. 分析 No.2（断面）　2c. 分析 No.2（解放ニコル）　2d. 分析 No.2（直交ニコル）

1e. 片理複合石英類　2e. 複合石英類（微細）　1f. 火山ガラス（バブル型）

2f. 火山ガラス（軽石型）　1g. 斜長石（双晶）　1h. ザクロ石　2g. 骨針化石　2h. 放散虫化石

写真４　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真

第４章　まとめ

今回の調査で明らかになった遺跡の実態に関し、いくつかのテーマに絞って考察してみたい。

1　古墳時代前期の土器集積 027SU について

東畑遺跡 1 地点で確認された 027SU 土器集積は、廃絶した住居跡の窪地に、廻間 II 式～ III 式期を通じて土器廃棄が続けられた結果生じたものであった。約 35m 西側で発見された同時期の小規模集積 129SU も、住居の跡地に廃棄されたもの、または住居址廃絶の際に残された土器群であろう。

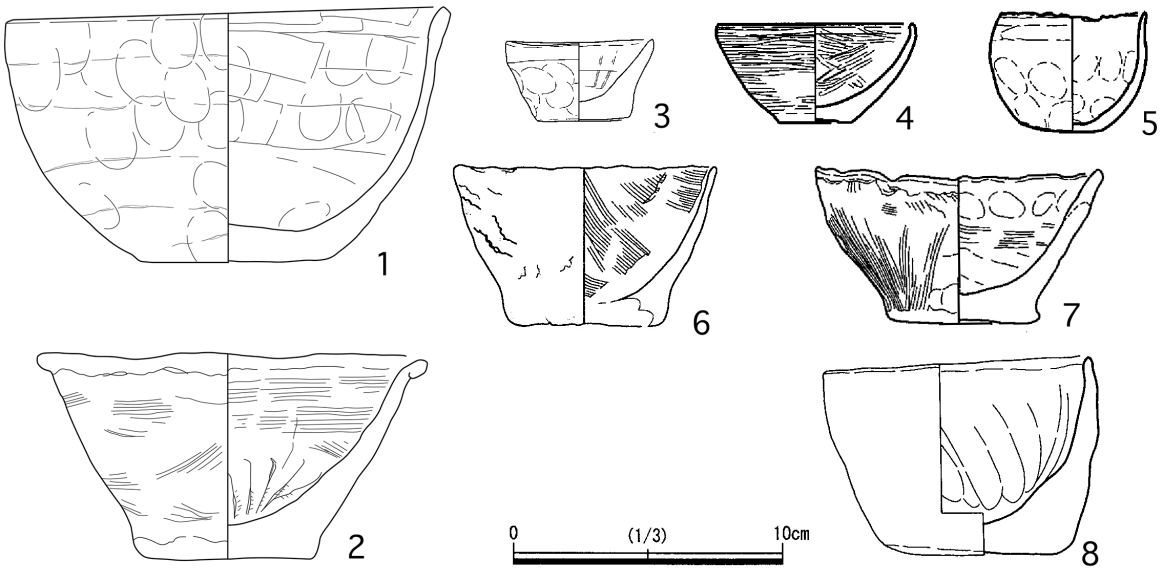
いずれもく字甕を主体とした集積であるが、027SU には S 字甕や高坏、器台や加飾壺、粗製小型土器も含まれており、純粋な日常雑器というよりも祭祀や酒宴などで用いられたもの一式が集められ、廃棄されたような印象がある。

組成の特徴としては、同時期の尾張平野部の遺跡との比較において、いくつかの欠落した要素もみられる。台付甕に関しては、く字甕と S 字甕が主体であり、その中間形態に位置する受け口状口縁の台付甕が見られないこと。山陰・北陸系の台付甕が見られないこと。口縁端部に面を持つ器台や、擬似的な凹線文が施された幅広の口縁端部を持つ典型的なパレススタイルの加飾壺がみられないこと。また、器台と組み合わせて使用された大小の丸底壺がほとんど見られないことも、この集積の特徴と言ってよいだろう。大きな土器集積の一部分の分析に過ぎないが、従来より予想されていた地域の個性を焙り出す結果となった。

このように、く字甕を主体とする土器群の様相についての詳細な考察は石黒氏の付載論文に譲るが、廻間式期を通じて当地がひとつの小地域としての独自性を保ち続けたことを示す代表的な遺物群として理解できよう。隣接する尾張平野部や西三河地方、更には伊勢湾口地域とも様相を異にすることから、今後は独自の型式設定も視野に入れた上での資料の再検討が必要となる。

土器集積に含まれていた粗製小型土器に関しては、過去の調査でも類似したものがいくつか出土しており、参考資料とともに主なものを過去の報告書などから引用し図示しておく。

第 55 図の 1 は弥生時代中期の土器棺列に沿って掘られた溝から出土した粗製の丸小鉢で、指頭痕や粘土紐の輪積み痕を意図的に残して成形されたものである。出土状況から見ると土器棺墓への供献土器であった可能性が高いものである。２は同区の別地点で出土した粗製小鉢で、内外にハケメ・ヘラナデ調整痕を残したもので、口端は粘土紐を外側に折り返し丸く仕上げられている。底面に米粒圧痕が見られ、弥生時代中期後半の遺物包含層から出土したものである。３はとりわけ口径が小さく、手捻りで内面にヘラ跡もみられ、ミニチュア土器とも解釈できる。４は口端がやや内湾する器形で、５は指頭痕をよく残す碗のような器形である。６は今回 027SU 土器集積から検出されたもので、底部を欠くが器表には粘土紐の隙間が見られる。７は器形や調整痕などが６とよく似た作りのもので、口端は粘土紐の凹凸そのままでナデ仕上げなどはされていない。３～７はいずれも廻間式期の出土遺物である。８は参考資料として掲載するもので、浜松市天白磐座遺跡出土の粗製土器であり、古墳時代前期から中期のものである可能性が指摘されている。



１・２：H23 年度４地点出土　３：H26 年度４地点出土
４・５：H24 年度７地点出土　６：今年度 027SU 出土
７：H21 年度２地点出土　８：天白磐座遺跡出土(参考資料)

第 55 図　粗製小型土器実測図

８を除く資料の出土地点は、いずれも今回の１地点に隣接した調査区および数十メートル範囲の調査区である。器形は１のような丸みを帯びた体部を持つものと、２のように上に向かって開いた小鉢形が存在するようである。用途としては、壺や甕や高坏などに伴う例もあるが、祭祀で使われた土器と考えるのが妥当であろう。少なくとも当地においては、弥生時代中期以後、古墳時代前期にかけて小型化しつつも、継続して組成の一角を担う存在であったことを指摘しておきたい。他の器種に比べ時期特定が難しく、破片の場合はとかく見逃されがちな粗製土器だが、後の古代や中世のかわらけなどを挙げるまでもなく、これら粗製の小型土器は日常の祭祀には欠かせない存在であり続けたことは留意されるべきであろう。

過去の調査成果も加え、第一砂堆南側の東畑地区を中心とした遺構の時期的変化をおおまかに色分けしてみたのが第 56 図である。弥生時代中期後半以後の住居址はこの図の範囲に限れば主に東側に偏在する傾向が見られるが、今回の１地点でも散漫に後期の遺物が発見されており、活動領域は住居址群の西側にも広がっていたようである。

続く廻間式期については、図示した 13 軒以外にも東側の調査区で更に２軒の住居址が検出されている。個々の住居址については厳密に時期を限定し得ないが、報告書に記されている記載に準じて記入した。今回の１地点 132SI（027SU 土器集積を含む）も含み、東西方向に広がりを持って集落が展開していた様子を看取できる。

また、図の西側には同時期に再利用された様子が報告されている２基（または３基）の方形周溝墓（四隅切れ長方形）も検出されており、原形は弥生時代中期に作られたようだが、居住域の中の墓地としての意識は廻間式期まで受け継がれていたことを示しているのかもしれない。

続く松河戸式期には遺構密度が低下しつつも、やはり東西にわたって散漫に住居址の分布する様

子がわかる。図示した範囲は第一砂堆南辺に位置し、大田川旧河道に面した立地環境にあることから、地形に即した利便性が優先されて形成された集落であったことを物語るものであろう。

なお、図中の平成 21 年度２地点調査区内の東側では縄文晩期の土器もまとまって発見されており[註]、古くは縄文晩期前半から、以後断続的に居住が続けられてきた場所であったことを物語っている。

次に黒色砂層の問題であるが、畑間・東畑遺跡において、中世以前の遺構埋土がしばしば特有の黒色を呈する砂層であることは、以前から指摘し続けてきた（坂野 2016 ほか）。今回も 027SU 土器集積は漆黒に近い黒色砂に埋もれており、その土壌分析を実施した。

その結果、土壌中には大量の微粒炭が含まれており、同時にプラント・オパールとしてはネザサ節型のものを筆頭に、タケ亜科のものが大量に含まれていることが判明した。また同時に、水辺に多く見られるウシクサ族やイネ科植物の珪酸体も検出され、大田川旧河道の水辺周辺の植生を反映したものとなった。

イネ科植物に関しては、弥生時代中期～後期の土壌と推定された平成 26 年度３地点の 096SK（今回の１地点から北に約 20m の距離）第１層からも検出されており（イネ 2,100 個 /g、ネザサ節型 13,400 個 /g、ウシクサ族 4,100 個 /g、キビ族 3,100 個 /g）、それに続く時期である今回の分析結果ではイネ 5,200 個 /g、ネザサ節型 42,700 個 /g、ウシクサ族 19,800 個 /g、キビ族 7,300 個 /g という数値を見る限り、いずれもが倍増以上の傾向を見て取ることができる。

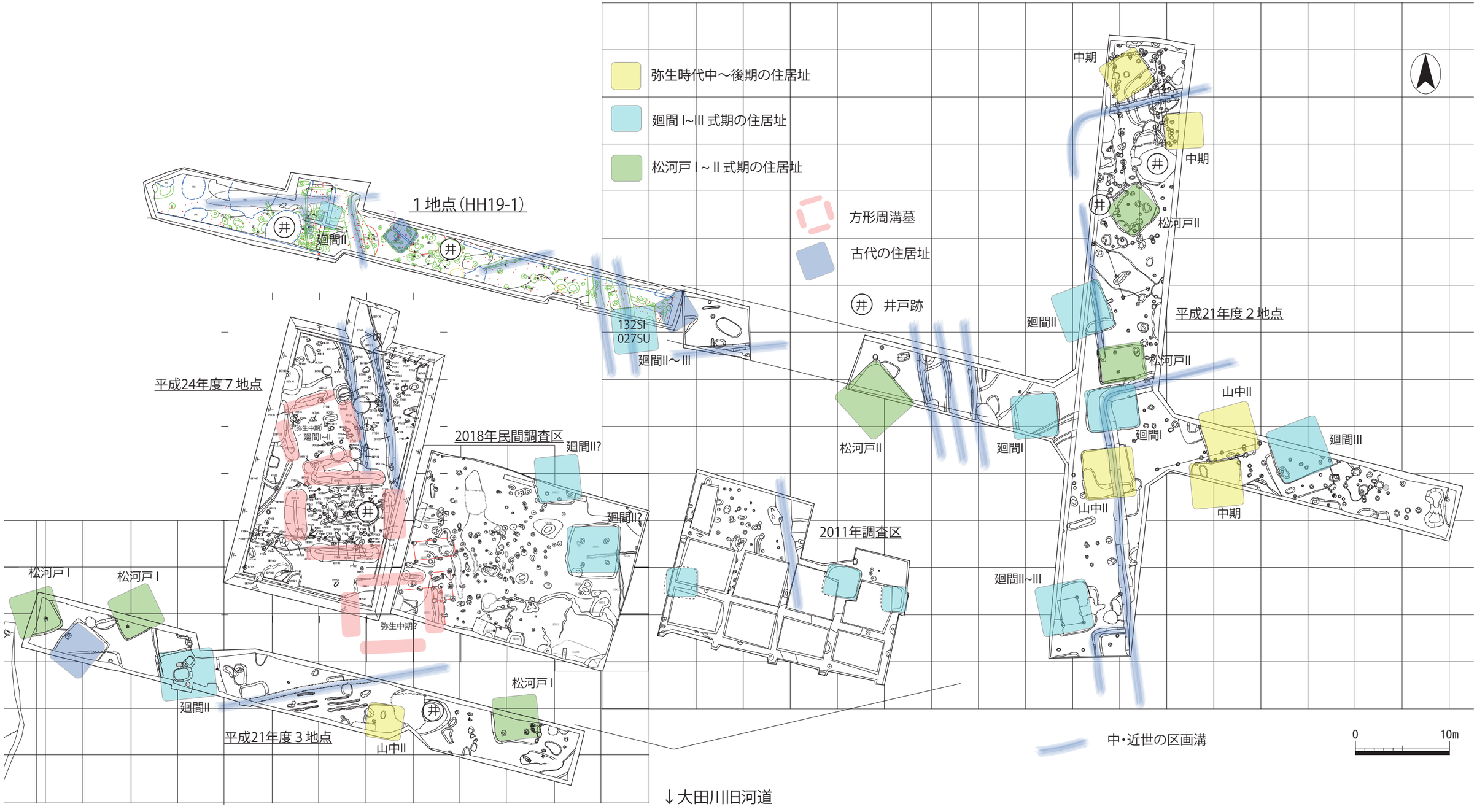
大田の谷におけるイネ栽培の可能性に関しては、第１砂堆南側に沿って流れていた大田川旧河道流路を前提に考えると、恐らく砂堆東側の後背湿地部分までは汽水域であった可能性が高いので、河道に隣接した支谷での水田を想定しなければならない。また、第１砂堆全体の水辺を除く地表面はネザサ類を中心とした雑草や灌木で覆われていたと推定されるが、それらが自然発火によって燃焼する可能性は極めて低いと思われるので、継続的に人為的な燃焼がおこなわれてきたと仮定すれば、黒色砂層中に含まれた大量の微粒炭の供給源を考える上でも有力な選択肢となる。その場合、以前にも提起した陸稲種栽培の可能性も、あらためて指摘しておきたい。今回の分析でも引き続きキビ族のプラント・オパールが検出されており、第１砂堆上では少なくとも古墳時代前期まで、陸稲を含んだ雑穀栽培がおこなわれていた可能性がある。

註：縄文晩期前半の雷 II 式から桜井・稲荷山式段階までの 200 点以上の土器片が発見されている。

２　粘土貼り遺構の問題

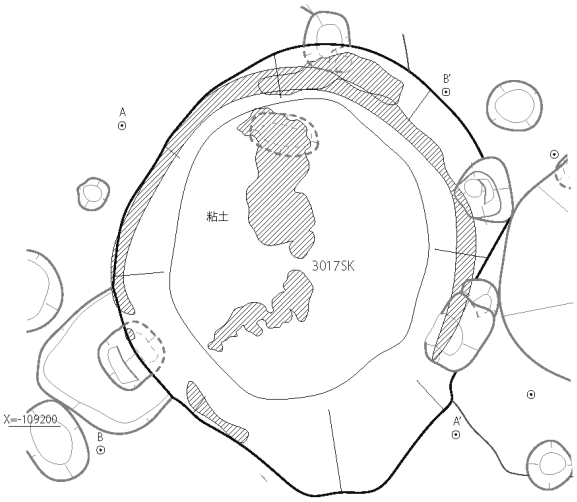
今回畑間遺跡２地点ではいわゆる「粘土貼り遺構」がその痕跡も含め５基検出された。過去の調査でもしばしば発見されており、形状や構造にはいくつかのパターンが存在することが報告されている。

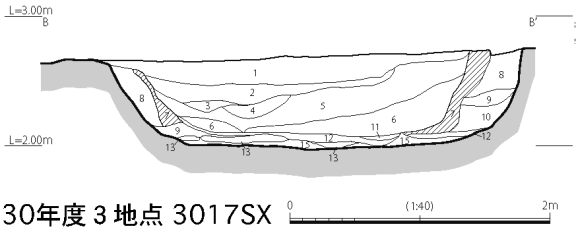
地山である砂層を掘り込み、いずれも砂堆上には存在しない粘土（土質がシルト寄りの場合は基盤層中に層状に存在することがある）を用い、浴槽のような形状や桶のような形状に仕上げている。粘土の内側には特に何も無いものと、今回は貝殻で充填されたものや、粘土貼りの外側が陶片で囲われたものが発見され、種類を増やしている。



第 56 図　東畑地区における遺構の時期的変化

H19年度４地点 G037SX 検出状況（北東から）





H30年度３地点 3017SX

平成 19 年度４地点では全長 2m 以上、幅 1m、深さ 30cm ほどの舟形の粘土槽が検出されており (G037SX)、輪郭の一部が二重に作られていた。遺物としては東濃系山茶碗が検出されており、15 世紀の遺構であると報告されている。また、平成 30 年度３地点では径 3m 前後、深さ 70cm の盥（たらい）状の粘土槽が発見され (3017SK)、内部から発見された炭化木材の年代測定結果より 16 ～ 18 世紀の遺構として報告されている。

前者は用途不明の遺構と、後者は貯水を目的とした施設と報告されている。今回２地点で発見された遺構はいずれも 17 世紀後半から 18 世紀以降に構築されたものと考えられるが、同時代には液体の貯蔵用にしばしば常滑焼の赤物大甕が使われており、実際粘土貼り遺構周辺からもよくその破片が見つかっている。

粘土貼り遺構を一般的な貯水施設と解釈すれば、大甕の容量を遥かに超えた内容量が要求された結果作られたものでなければならず、日常の貯水であると同時に何らかの生業に関わる施設であった可能性もある。粘土貼りという基本構造を持ちながらも、さまざまな形態のものが存在する意味は、家ごとに使いやすいように工夫がされた痕跡なのかもしれない。

近世以降、知多半島地域の農耕地では一般に野壺と呼ばれる大甕が敷地隅に複数並んで埋設され、天水や人糞などの肥料を貯蔵し、農業に利用されていた。ごく一部に漆喰を用い四角い槽状に形成された貯水施設を見たことがあるが実例は少なく、大甕を用いる例が大半である。

２地点 016SK の場合は粘土槽が貝殻で埋積されたのち、その一部を破壊して赤物大甕を設置するタタキが作られた様子を観察できた。この例を見る限り、貯水施設としての機能が大甕に姿を変えて受け継がれていたという解釈も可能である。

このように貯水施設としての用途のほか、２地点のまとめで述べたように、塩作りに関係した鹹水（かんすい）溜め施設としての用途も念頭に、過去の報告例はあらためて検討されるべきであろう。砂堆中央部から発見される例は指摘のように貯水施設である可能性が高いが、旧河道河口部や海岸線近くで検出される例は製塩に関した施設としての可能性も検討されるべきと思う。

３　複合遺跡としての在り方と地域の独自性について

同一砂堆上の道路予定地を中心に、足かけ 20 年にわたり総面積 27,000㎡以上の発掘調査が継続されてきた例は全国でも希であろう。その結果、地質的な様相や砂堆上に展開する遺跡のさまざまな動態や、出土遺物に関する膨大な知見を得ることができた。

特に今回は、東畑地内における古墳時代前期の土器の組成が明らかとなり、旧河道沿いに展開する集落の変遷を理解する手がかりを得た。

これまでの調査成果を概観すると、縄文時代晩期の活動は第 1 砂堆南東部のごく限られた範囲に限られていたが、弥生時代前期には第 1 砂堆の中央部を中心に分散していった様子がみられる。現在までのところこの時期の中核的な地点は特定されていないが、今回の 1 地点とその北側の地域が候補地の一つと言って良いだろう。

愛知県史によれば、知多半島の弥生時代遺跡として紹介された 42 の遺跡中、前期土器が発見された遺跡は 14 箇所で、そのうち遠賀川式土器の存在が報告された遺跡は 8 箇所ある。この 8 箇所に畑間・東畑遺跡も含まれるが、地域的なまとまりがみられるのは知多市側の砂堆上に並ぶ遺跡群（細見・下内橋・荒古遺跡）で、半島南部では半田市の岩滑遺跡や美浜町の下高田遺跡、南知多町の山田遺跡・神明社貝塚と、偏在している。知多市の遺跡群は最も海岸線に近い大規模な砂堆上に存在しているが、在地的な条痕文土器の分布圏と、西方からもたらされた遠賀川式土器が接触する最前線が、この知多半島北部西岸を中心とした地域にも存在したことを示すものである。知多半島北部西岸地域には、遠賀川式土器と条痕文土器が共存する遺跡と同時に、条痕文土器のみを使い続ける遺跡が同一地域内に存在することも特徴と言えよう。

弥生時代中期になると住居址に加え方形周溝墓や土器棺墓も営まれ、第 1 砂堆上でも集落規模の展開がみられるが、居住域と墓域を画するような溝は存在せず、砂堆という立地上、独自の空間利用が定着したようである。即ち臨海沖積地内に海岸線に沿って形成された砂堆（または砂堆列）は多くの場合、後背湿地を伴っており、低地を流れる河道の彎曲部など特定の地点を除き砂堆への出入りは限られたものとなる。砂堆前面は海であることを考えれば、津波や高波などの危険性は常に背負いつつも、自然環境に護られた居住環境であるとも言えよう。このような環境下で営まれた集落では敢えて内と外を分かつ溝を設ける必要が無く、同一平面の特定地点、例えば砂堆上の僅かな凹凸や伏流水の存在、または周囲の丘陵地や遠隔の山稜が生み出す特殊な景観などが重視され、居住域と墓域が割り当てられていたのかもしれない。土器の様相はほとんど西三河と同期したものとなり、伊勢湾を介した地域間の交流より、衣ヶ浦方面の文化圏に取り込まれたと言ってもよい。

後期前半の様相はやや希薄となるが、中期に構築された方形周溝墓の再掘削もおこなわれるようになり、居住域は後期後半から古墳時代前半にかけて次第に砂堆南辺の大田川旧河道側に移っていく様子がみられる。前期古墳は旧あゆち潟を望む丘陵上に存在した名和町の兜山古墳が知られるのみであるが、天白川河口周辺は大田地区とは違った文化圏に含まれており、大田の谷との直接的な関係は希薄と思われる。

ちなみに型式名祖である柳ヶ坪遺跡は東海市の養父・横須賀の谷奥の砂堆上に存在するが、今回の土器集積分析でも明らかなように、いわゆる柳ヶ坪タイプの複合口縁壺はあくまでも客体的存在であり、それらの分布中心は海上を含む伊勢湾口周辺である。

第 57 図　知多半島北部西岸航空写真 (米軍による空撮写真にトレース)

古墳時代後半以降の様相としては、知多市下内橋遺跡で尾張型の須恵質埴輪を持った古墳の存在が明らかになり、この地区では少なくとも 5 世紀後半から古墳の構築が開始されたようである。

6 世紀から 8 世紀にかけての遺物や遺構は第 1 砂堆上では散漫に分布しており、大田の谷北部の丘陵と砂堆の境界に位置する松崎遺跡が中核的集落として機能していた。しかし、平成 29 年度調査では推定直径 20m 近い円墳（6 世紀中葉）の周溝が検出されており、砂堆上にも墳丘を持った古墳が存在した可能性を示すものである。また、大正時代に滅失した王塚古墳は第 1 砂堆北側の丘陵裾に存在し、東南方向に開口する横穴式石室を持ち、直径 15m ほどの円墳（6 世紀前半）であったと伝えられている。隣接する養父・横須賀の谷にも丘陵中腹に長さ 8.4m もの巨大な石室を持つ岩屋口古墳（6 世紀末～ 7 世紀）や、砂堆上で組合わせ石棺が発見された釈迦御堂古墳（滅失）という例もあり、同時期の知多半島先端の日間賀島や佐久島では群集墳も見られるが、第 1 砂堆周辺の例はいずれもが単独で存在した古墳のようである。

知多郡衙は未発見だが、横須賀の砂堆にある大木之本遺跡からは円面硯を含んだ大量の遺物が発

見されており、推定候補地の一つとして可能性を指摘しておきたい。

古代後半、10 世紀から 11 世紀代の遺物や遺構は量的に乏しく、時折、灰釉陶器がまとまって発見される程度である。12 世紀代に加木屋谷方面で瓦や陶器類の生産が開始され、これらの遺物が第１砂堆の方々で発見されている。瓦類は荘園の産物として鳥羽離宮安楽寿院まで運ばれており、同時に大田の谷とその周辺には熱田社領が集中（御幣田（おんべだ）・大郷（おおさと）・木田郷など）していた。当時の第１砂堆の役割は、窯を操業していた工人たちも居住していただろうし、同時に窯で焼かれた製品の仕分け場所としても機能していたはずである。荘園の実態に結び付く手がかりは少ないが、主な神社や古刹の存在、更には地形的条件に加え、大田地区における遺物の出土状況も併せて考察していく必要がある。また、12 世紀末には第１砂堆中央南寄りを東西に横断する幅 5m 深さ 1m の大溝が掘削されたという指摘もあり、この時期に砂堆の南北を画するような何らかの必要が生じたようである。この大溝が排水溝として掘削された可能性に関しては、佐渡島のような形状をした第１砂堆のほぼ中央部の括れた部分に位置することや、大溝の東端には旧河道にも通じる大規模な湿地帯が広がっており、同時に南の加木屋谷方面から来る大田川と、北の荒尾谷方面から来る荒尾川の合流地点でもあることを考えれば、氾濫も想像以上に多かったと思われることから肯定できよう。そもそも砂堆の括れた形状そのものが幾度にもわたる旧河道の変化を反映したもので、洪水による侵蝕が影響した可能性については、既に平成２０年度の調査報告書で指摘している[註]。

13 世紀までには砂堆上のいくつかの地点では溝で方形に区画された遺構が出現しており、これらは居館を取り囲んでいた堀の痕跡と思われるものである。同時に第１砂堆北東部の縁辺には土壁立ちの仏堂や祀堂の存在を物語る遺構や遺物（大量の瓦や被熱した礎石を含む）の他、馬頭を埋納した雨乞い遺構（12 世紀末～ 13 世紀初頭）や、墨書かわらけを用いた先祖供養のまじない遺構（15 世紀末～ 16 世紀初頭）が、その 150m ほど南では２箇所で埋納銭（15 世紀後半以降の埋納）が、更に至近の場所から密教法具である独鈷杵（どっこしょ）や和鏡片が出土しており、集落のなかで中世以降の宗教的空間が保たれ続けてきたことを物語る貴重な発見となった。

13 世紀以降の出土遺物に関しては、従来から指摘されているように常滑窯産の山茶碗が 6a 段階から激減し、瀬戸や東濃産の製品に取って代わられてしまう傾向が顕著である。知多半島の付け根で常滑窯という巨大な産地に一番近い消費地であり、激減するとはいえまだ知多半島域全体でみれば陶器の生産は続けられていたにも関わらず、日常雑器が他の産地のものに置き換わっていくには、相応の理由を見出す必要がある。確かに、瀬戸や東濃地区における生産拡大により工人が一気に移動してしまったとするならば、それでは次にどのような流通ルートで瀬戸や猿投、東濃の製品がもたらされたのかを解明する必要がある。

寛文６年（1666）には尾張藩二代藩主徳川光友公の横須賀御殿造営に伴い大田川流路が付け替えられ、古くは馬走瀬（まはせ）と呼ばれた横須賀には小規模な門前町が作られ、大田側には郷中を中心として半農半漁の生業形態をもった集落が形作られていった。東畑地区は文字通り、大田集落の東側（実際には東南側）に広がる耕作地として利用されてきたのであろう。横須賀の地にこのような御殿が築かれた意味は、表向きは大仰な城郭住まいを嫌い風光明媚なる地を好んだ藩主の趣味を反映した

註：平成 20 年度３地点の 022NR（自然流路）は流水堆積による砂層で、第１砂堆の東側から西に向かって砂堆に乗り上げるような状況を検出した。丘陵側から押し寄せた洪水によってもたらされた可能性が高く、本例はその堆積状態から 15 世紀後半から 16 世紀以降に発生した洪水の痕跡と思われる。

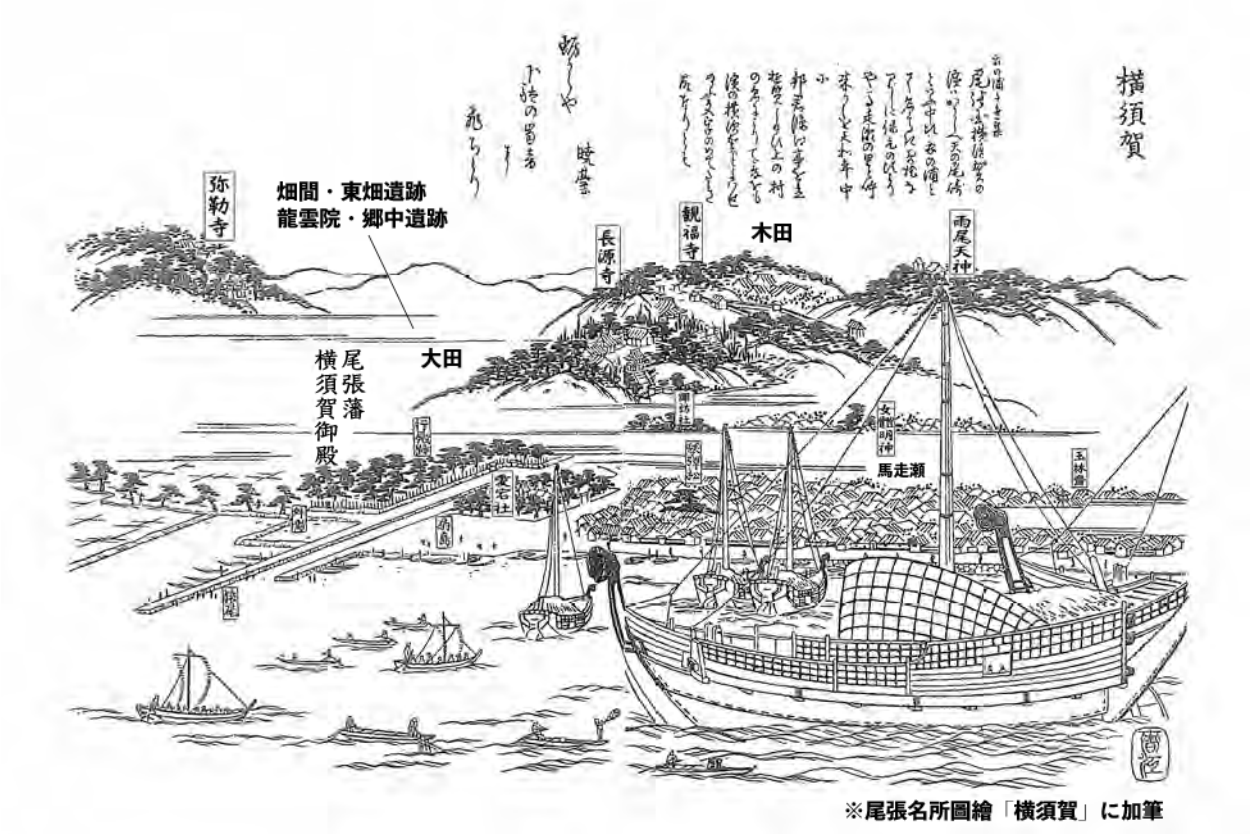
ものとされているが、当時の政治的な繋絡が名古屋城から堀川～宮の渡しを経てこの横須賀の地と直結していたことを物語っているのではないだろうか。

役所設置の背景には必ず古くからその土地が保ち続けてきた脈絡や軍事的意味合いがあるもので、事実、御殿廃止以後は横須賀代官所となり、北は名和村から南は大泊村（南知多町）までを統轄し、横須賀の地は知多半島西海岸の政治的中心として機能し続けたのである。

以上のように、時期によって濃淡はあるが、畑間・東畑遺跡の存在する第１砂堆では少なくとも縄文晩期以降[註]、古代・中世から近世、そして現代に至るまで、営々と人々の生活が続けられてきたことが、調査の積み重ねによって明らかになった。今後は「大田の谷の第１砂堆」という小さな枠を離れ、「養父（やぶ）・横須賀の谷」から隣接する知多市側に広がる「八幡（やわた）の谷」と呼ばれる、砂堆列と後背湿地、沖積地に小河川と丘陵で構成された小地域で遺跡の実態把握や遺物の動向が考察されていくべきであろう。この地理的に共通した要素を持ち地域色を共有する小地域での文化実態が明らかになってはじめて、知多半島北部の地域特性が焙り出され、他地域との比較や独自性が発信できるのである。

20 年の調査成果を無駄にしないためにも、より多元的な検討と総括が必要とされている。

註：過去の調査ではそれぞれ単独で縄文中期の北裏（きたうら）C1 式土器と咲畑式土器が発見されており、現在のところ第１砂堆で発見された最古の遺物である。また、隣接する横須賀の砂堆上にある烏帽子遺跡と野崎遺跡では、早期末の粕畑式土器が１片ずつ発見されている。これらの土器の供給源である縄文遺跡は未発見である。



※尾張名所圖繪「横須賀」に加筆

《参考文献目録》

『八幡のむらのおいたち』八幡町史資料第２集 1956　八幡町史編纂会編
『横須賀町史』1928　愛知県史蹟編纂会・知多郡横須賀町役場発行
○　『横須賀の遺跡』横須賀町史別冊　1956　横須賀町史編纂委員会
『横須賀町史』1967　横須賀町役場
○　「高ノ御前遺跡第３地点試掘調査報告」『中ノ池遺跡群発掘調査報告書』付載１　1982　東海市教育委員会
○　「塚森遺跡」『松崎貝塚第２次発掘調査報告書』付載　1984　東海市教育委員会
○　『トゝメキ遺跡』1988　東海市教育委員会
○　『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』1997　東海市教育委員会
○　『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』1998　東海市教育委員会
○　『大木之本遺跡第Ⅱ地点発掘調査報告』1998　東海市教育委員会
○　『上浜田遺跡発掘調査報告』1999　東海市教育委員会
○　『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』2009　東海市教育委員会
○　『平成 22 年度　畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』2012　東海市教育委員会
○　『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』2012　東海市教育委員会
○　『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告　―平成 11 ～ 19（1999 ～ 2007）年度調査―』2014　東海市教育委員会
永井伸明・宮澤浩司「伊勢湾を望む海辺の遺跡 - 東畑遺跡等発掘調査概報 -」『研究報告とうかい』創刊号 2007　東海市教育委員会
宮澤浩司「伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）- 平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要 -」『研究報告とうかい』第２号 2009　東海市教育委員会
立松　彰「柳ヶ坪遺跡第３次調査報告」『研究報告とうかい』第５号　2015　東海市教育委員会
○●『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 10 集　1990　愛知県埋蔵文化財センター
○●『烏帽子遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 117 集　2003　愛知県埋蔵文化財センター
『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』1999　愛知県教育委員会
『愛知県史資料編１　考古１　旧石器・縄文』2002　愛知県史編さん委員会
『愛知県史資料編２　考古２　弥生』2003　愛知県史編さん委員会
『愛知県史資料編３　考古３　古墳』2005　愛知県史編さん委員会
『愛知県史資料編４　考古４　飛鳥～平安』2010　愛知県史編さん委員会
『愛知県史別編窯業１　古代　猿投系』2015　愛知県史編さん委員会
『愛知県史別編　中世・近世　瀬戸系』2007　愛知県史編さん委員会
『愛知県史別編　中世・近世　常滑系』2012　愛知県史編さん委員会
『日本の地質　中部地方 2』1988　共立出版株式会社
『モノリス・真下の宇宙』INAX ミュージアムブック　2008　INAX 出版
池橋宏『稲作の起源　イネ学から考古学への挑戦』2005　講談社選書メチエ 350　講談社
杉崎章「知多半島における古代漁村集落の土器」『古代学研究』第 15・16 号　1956　古代学研究会
杉崎章・河合克己監修『図説　知多半島の歴史』1995　株式会社郷土出版社
杉崎章「東海地方の古代海浜集落」『知多古文化研究２　磯部幸男先生退官記念論文集』1986　知多古文化研究会
柴垣勇夫「十二世紀の常滑窯の瓦生産窯」永原慶二編『常滑焼と中世社会』1995　小学館
金子健一「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』1996　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
増子康眞「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人 63』2003　名古屋考古学会
○●　石黒立人「烏帽子遺跡をめぐる問題群」『烏帽子遺跡』1996　愛知県埋蔵文化財センター
●　石黒立人「弥生集落史の地平　その２」2004　愛知県埋蔵文化財センター　研究紀要　第５号
●　石黒立人「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」2006　愛知県埋蔵文化財センター　研究紀要　第７号
●　赤塚次郎・早野浩二「松河戸・宇田様式の再編」2001　愛知県埋蔵文化財センター　研究紀要　第２号
●　早野浩二「臨海の古墳時代集落　―松崎遺跡の歴史的素描―」2005　愛知県埋蔵文化財センター　研究紀要　第６号
『蒲生遺跡』2017　香川県埋蔵文化財センター

○印は全国遺跡報告総覧（奈良文化財研究所）のホームページからダウンロード可能なものです。url=https://sitereports.nabunken.go.jp/ja
●印は愛知県埋蔵文化財センターのホームページからダウンロード可能なものです。　url=http://www.maibun.com/top/

畑間・東畑遺跡 (令和 1 年度 1 地点) 出土の「く」字状口縁台付甕をめぐって

石黒立人

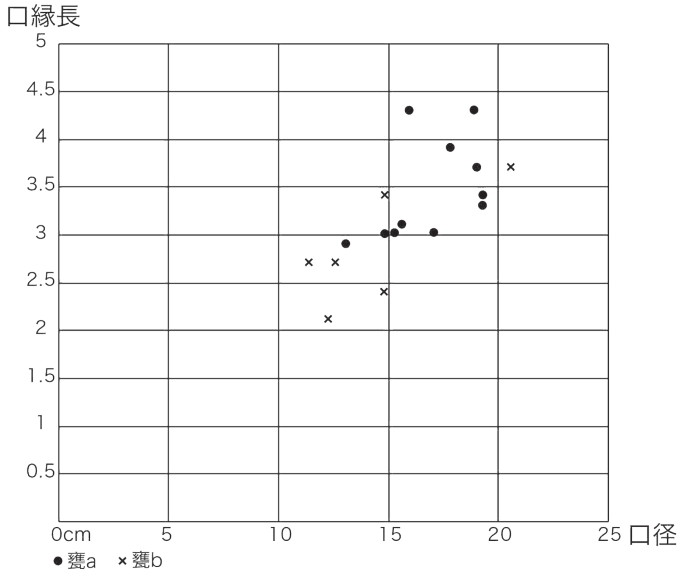
なぜ注目するのか

伊勢湾沿岸域では「S」字状口縁台付甕（以下、S 字甕と呼ぶ）の出現後、在来の伝統的な「く」字状口縁台付甕（以下、く字甕と呼ぶ）は次第に比率を減少させる。それが一気に進むのが S 字甕 C 類の時期である。胎土の多様化にみるように生産地の増加によって普及が大きく進んだ事がうかがえる。

ところが、それに同調しないエリアもある。岐阜県・内陸回廊や愛知県西部・瀬戸地区である。一見してそれは S 字甕生産地からの距離に関係すると評価されるかもしれないが、それに疑問を挟む資料として畑間・東畑遺跡のく字甕が浮上することになった。つまり、在来系譜の存続条件を考える上で格好の材料になるからである。

特徴の整理

畑間・東畑遺跡の甕の基本属性を第 1 表、法量の傾向分布を第 1 図にまとめた。口縁部と頸部を中心にして、サイズや調整手法の異同によって配列した。全てに共通する点は横ナデの有無にかかわらず口縁端部に明確な面が無いこと、次に多くに認められるのは頸部外面の屈曲部を起点にして左下に向けてやや斜めに短いハケメが施される点である。上端が横ナデに消されているものもあるので仕上げというわけではないが、製作工程の終わり近くに共通した動作が行われていることに注目し、当該の資料を甕 a、それ以外を甕 b とする。なお、頸部から左下やや斜めに施されるハケメという点では S 字甕と似ていなくもないが、S 字甕のそれは体部上位まで達する長いもので、宇田甕まで継承される系譜を特徴づける基本属性であり、甕 a は別物と考える。



第 1 図　今回報告分く字甕の法量分布

甕 a は属性の共有状況にばらつきもある中で、全てを共有するものや頸部から体部内面のハケを体部外面とは異なるハケ工具で仕上げる手法に注意が引かれる。その点で 027 と 097 は頸部外面の粗いハケもよく似ているといえるが、頸部内面のハケメの傾きと重なり具合が異なっている。今回出土した甕 a はそれぞれが微妙に異なって製作動作が全く同じものはないとはいえ、過去の調査でも出土しているので、それらについて改めて検討することの意味は大きいであろう。

番号	口径	口縁長	口縁		頸部外面		頸部内面		分類	備考
			面	横ナデ	ハケ	ナデ	ハケ	ナデ		
027	19.1	3.7	×	○	○	○	○	○	甕 a	頸部ハケは粗い
028	15.7	3.1	×	○	○	×	○	×	甕 a	
030	14.9	3.4	×	○	×	×	×	○	甕 b	
031	14.9	2.4	×	○	×	○	×	○	甕 b	
032	17.1	3.0	×	○	○	○	×	○	甕 a	
034	19.3	3.3	×	○	○	○	○	○	甕 a	
036	15.3	3.0	×	○	○	×	×	○	甕 a	
037	12.6	2.7	×	○	×	○	×	○	甕 b	
038	13.1	2.9	×	○	○	×	○	○	甕 a	
039	12.3	2.1	×	○	×	×	×	○	甕 b	
040	20.6	3.7	×	○	×	×	○	×	甕 b	非常に粗いハケ
042	11.4	2.7	×	○	×	○	×	○	甕 b	外面削痕・粘土紐痕
046	14.9	3.0	×	○	○	○	○	○	甕 a	
095	19.3	3.4	×	○	○	○	○	○	甕 a	
096	18.9	4.3	×	×	○	×	×	○	甕 a	
097	17.9	3.9	×	○	○	○	○	○	甕 a	頸部ハケは粗い
098	16.0	4.3	×	×	○	×	×	○	甕 a	

頸部外面にハケありを甕 a、ハケ無しを甕 b とする

第 1 表　今回報告分く字甕の属性

関連資料との比較

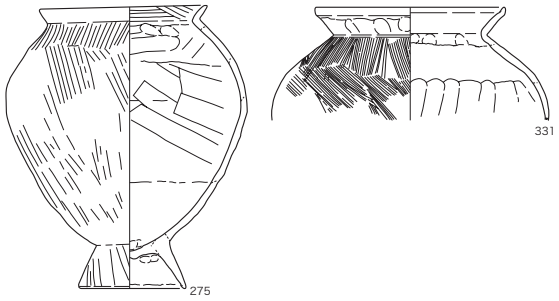
S 字甕世界である伊勢湾西岸域では甕 a 関連資料を探すのが困難である。いちおう津市六大 A 遺跡や同嶋抜遺跡ではく字甕の報告例がいくつかある。六大 A 遺跡・SR2 から出土した 92(第 2 図)は甕 a によく似ている。他にも頸部のハケメが短い左下りである資料が散見できるものの、動作方向の確認が必要である。嶋抜遺跡をはじめとしてく字甕は散見されるが僅少で搬入品の可能性もあり、在来として固有の系列が存在する可能性が高いようにはみえない。

濃尾平野北縁とは山塊を挟む盆地的な景観が連なる「内陸回廊」では、美濃加茂盆地を望む段丘縁に位置する美濃加茂市東野遺跡から S 字甕 C 類から同 D 類に変わる時期に相当するく字甕が出土している。275 は、短い口縁部をもち、頸部外面には左下りの短いハケが施されている。体部の斜めハケとの先後関係は不明である。331 は下半部を欠くので台付甕と断言はできないが、東野遺跡から同時期の平底甕は出土していないし、本例は S 字甕のように肩が張りやや長めのハケが左下がりに施されているので台付の可能性は高いと考える。口縁端部は僅かに立ち上がり、頸部外面の斜めハケも 275 よりは長い。その下端は体部のハケに切られているように図化されている。どの程度く字甕系列が存在していたのか、十分に検討できる資料には欠ける。

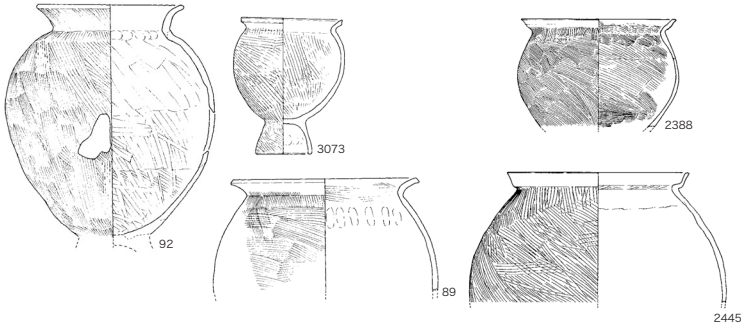
可児市宮之脇遺跡の SB44 からは、S 字甕 C 類の 10 点に対して、く字甕の脚台は 8 点出土している。他に小さな平底や凸底、丸底のく字甕もあると言うように、より西方の要素を含み複雑な様相を示す。口縁部のみでは台付甕と確定できないが、口縁端部に面を持たないものが一定数あるのは気にかかる。

愛知県西部の内陸、矢田川最上流域に位置する瀬戸市域では、かねてよりく字甕が存続している

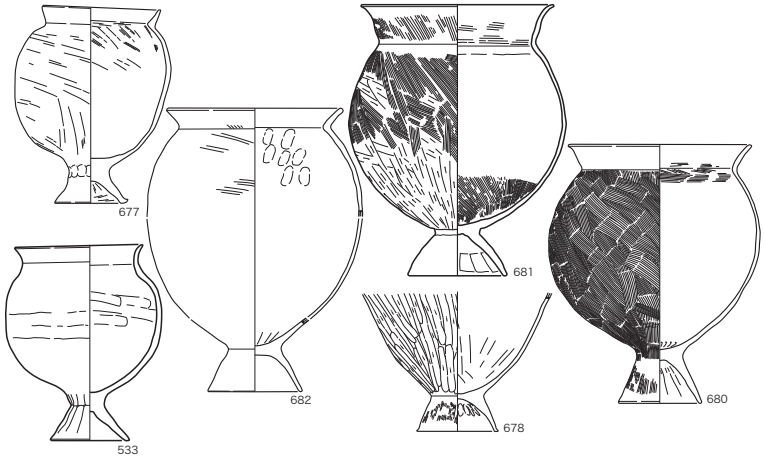
岐阜県・東野遺跡



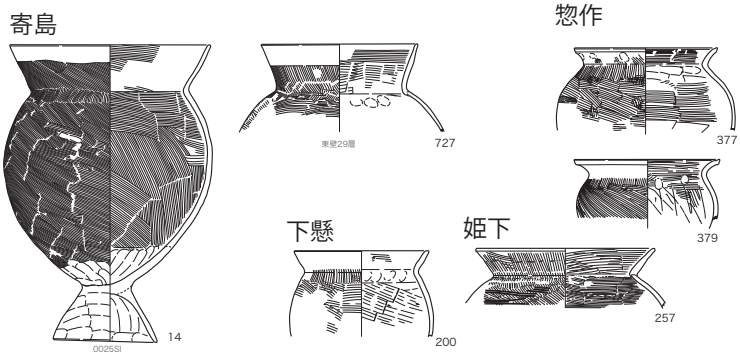
三重県・六大 A 遺跡



愛知県西部・惣作・鐘場遺跡



愛知県東部・鹿乗川遺跡群



第 2 図　畑間・東畑遺跡の甕 a に関連する資料

と見られていた。その一つ、惣作・鐘場遺跡の SD212 出土資料では、口縁端部が面をもたない点や口縁部の長い個体がある点は畑間・東畑遺跡に親和的である。ただ口縁形態に類似したものはあるが、製作手法はばらつく。それでも脚台は 15 点が図化されておりまとまっている点は注目できる。非 S 字甕としてのく字甕は確かに存在するが、果たしてそれが独自な系列であったのか、今後の検討課題である。

庄内川下流域の名古屋市若葉通遺跡でも S 字甕 C 類に共存する台付甕はあるが、まとまって存在するという状況にはない。五条川以西の濃尾平野に至っては確実な資料はほとんど見当たらない。

愛知県東部の矢作川流域では、西岸域で六大 A 遺跡に集中するのとは異なり、複数の遺跡から甕 a に類似する資料を拾う事ができる。安城市惣作遺跡を除きいずれも口縁端部は丸く、頸部外面には左下りに短いハケが施されている。寄島遺跡 14 は口縁部が長く内彎気味で形態は異なるが、727 と同様に頸部外面に短いハケが施されている。下懸遺跡 200 と姫下遺跡 257 は下半部を欠くが台付甕でよいのだろう。それに対して惣作遺跡 377 は口縁部を上下から摘んで横ナデを施す特徴的な手法は平底甕のものであり、頸部外面のハケメも体部の斜めハケメとの先後関係

も不確かな図化になっている。379 は肩の張りも無く台付甕の可能性は残る。これら矢作川下流域の資料については、平底甕を含む可能性はありつつも頸部外面に左下りの短いハケメが施されるという点での類似性はあり、分布域としての可能性を検討する必要はある。

S 字甕 C 類から D 類にかけて共存する在来の台付甕とは？

濃尾平野では S 字甕 C 類に共存する台付甕には口縁部が内彎する初期の形を残すものがあるものの清須市廻間遺跡にみるように出土量は激減し、次の S 字甕 D 類段階になると平底甕が目立つようになって台付甕はほとんど見られないという状況に至る。もちろん、こうした動態は平野部を中心にしたものであり、上述のように内陸・山間地では在来固有の甕形式が存続していた可能性は皆無ではない。その中で、宮之脇遺跡（川合遺跡群）と対照的に沿岸部に位置する畑間・東畑遺跡で S 字甕 C 類に共存して大小のく字状口縁台付甕がまとまって出土したことは何を意味するのか。

他方、伊勢湾西岸域では S 字甕の成立とともに、鈴鹿川流域以南において在来系列の甕は払拭されて S 字甕圏が成立する。それは、一器種である甕にとどまらない土器製作体制の、濃尾平野にはない「S 字系器種群」の成立でもあった。その意味で、西岸域では在来系列の存続を正面に据える議論は除外される部分もあるが、S 字甕 C 類の時期になると 3 連結 S 字甕という特殊形態はあるものの複数器種からなる S 字系器種群は崩壊しており、多様性の次に多数性の喪失に進むという点では伊勢湾岸で軌を一にしているといえる。

畑間・東畑遺跡の甕 a その後

畑間・東畑遺跡周辺では北の上浜田・松崎遺跡が後続する。基本的には宇田甕の時期であり年代は大きく降るが、そこに 1 点類似する資料が含まれている。東海市教育委員会報告（第 3 図）の「第 17 図」47 は、口縁端部は丸く、頸部外面に左下りの短いハケメを残す。下端の斜めハケメとの先後関係は不確かであるとはいえ、本例の他にも台付や平底のく字甕はあるが、甕 a に類する資料が混入でなければ興味深い。

さて、宇田甕を S 字甕に系譜を辿ることができるものに限るなら、それはその通りであろう。しかし、同時期にく字甕も存在するならば、その系譜も重要である。県埋文センター報告分 254・255 の 2 点の台付甕は口縁端部に面をもち、どちらも口縁部内面にはハケメがあり宇田甕とは異なる。体部のハケメも 254 は断続する縦ハケ、255 は短い斜めハケになっている。254 の頸部外面のハケメは宇田甕のように左下りで長いが 255 は短い。255 は動作が下から上であったならく字甕の系列が存続していることを示すものとして評価できる。一方、254 は肩部のハケメが東海市報告「第 17 図」42・46 などの宇田甕の短い部類に類似している。254 頸部内面の稜線はハケを施したから形成されたものであり、宇田甕とは動作の一手が異なるだけといえないこともない。

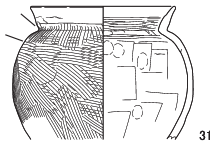
ところで、名古屋市志賀公園遺跡の報告ではこうしたく字甕を「D（ハケ甕）」に分類している（第 4 図）。肩部のハケメが宇田甕のように長いものを「Da」とし、

	宇田型甕	宇田系壺	く字甕Da	く字甕Db
上浜田・松崎 II	10	0	1	10
上浜田（東海市）	8	0	3	4
志賀公園	20	1	13	12

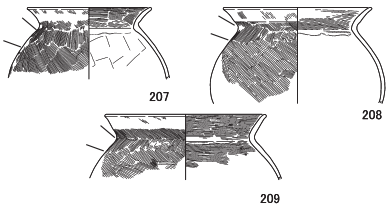
第 2 表　甕出土比較

東畑遺跡出土資料 東海市教育委員会報告分

東畑 2012-2 地点

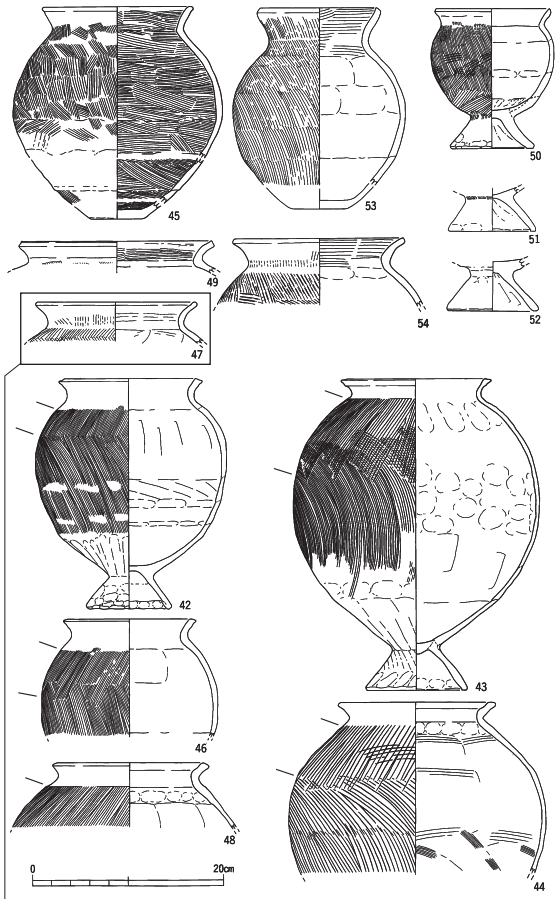


東畑 2012-3 地点

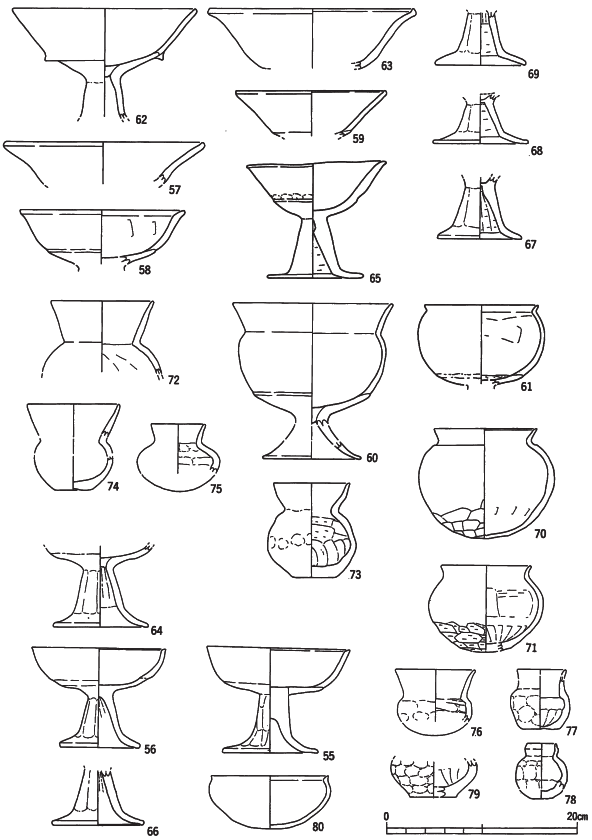


上浜田遺跡出土資料

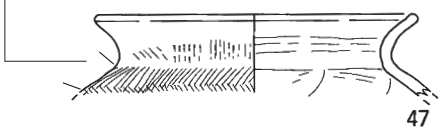
東海市教育委員会報告分

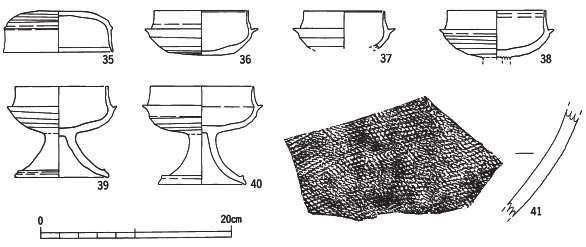


第17図　調査区 2 遺物集中部出土土師器①



第18図　調査区 2 遺物集中部出土土師器②

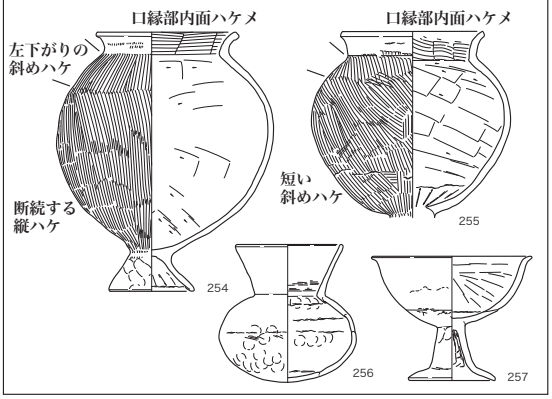




第16図　調査区 2 遺物集中部出土須恵器

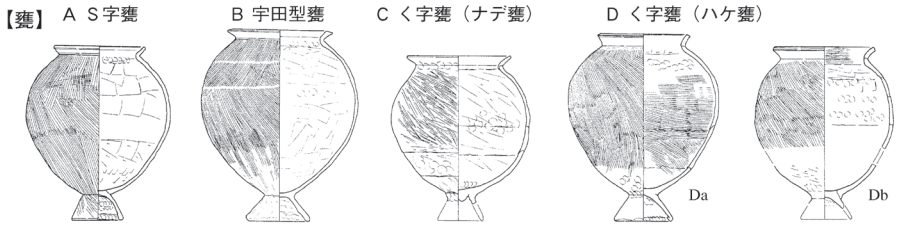
（財）県埋文センター報告分

上浜田・松崎Ⅱ08B 区 2043SI

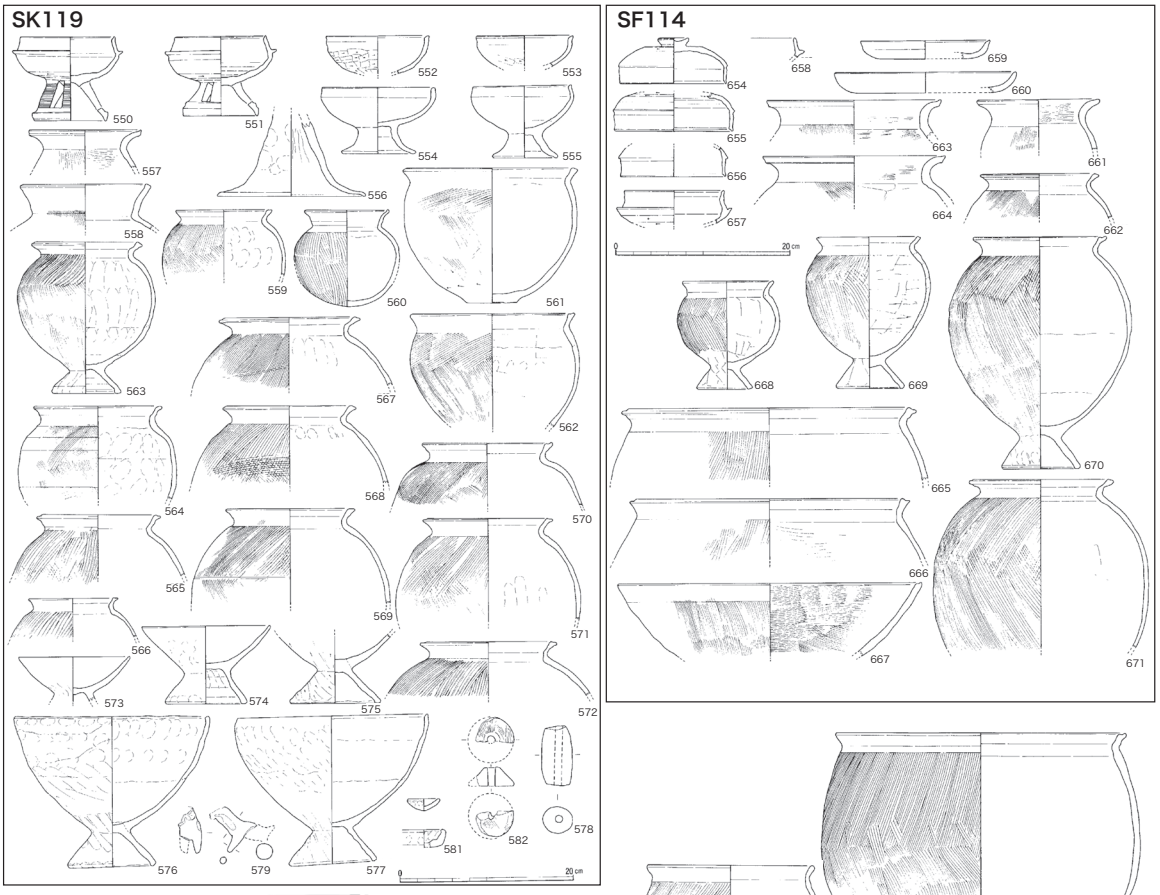


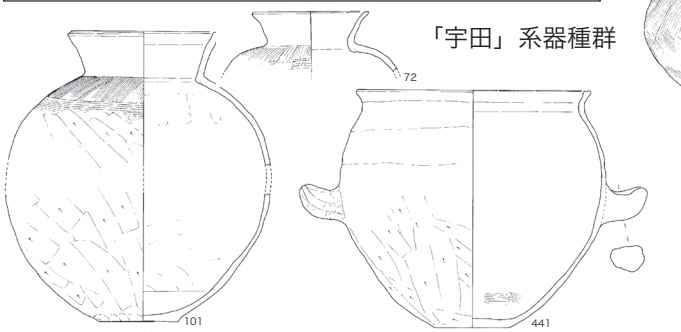
第３図　畑間・東畑遺跡の甕ａその後に関連する資料

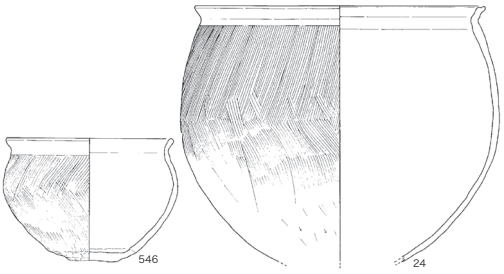
志賀公園遺跡における最後の台付甕の分類



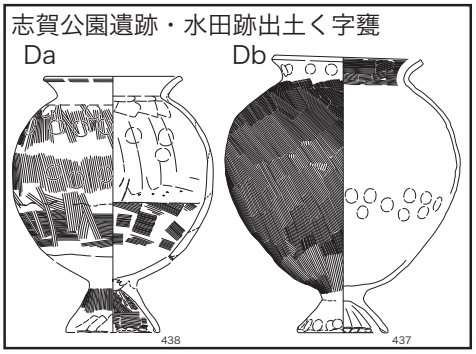
高茶屋大垣内遺跡：「宇田」系器種群と共伴資料



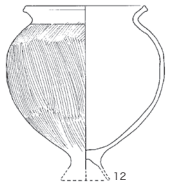




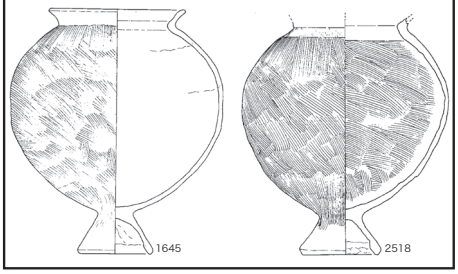
志賀公園遺跡・水田跡出土く字甕



高茶屋大垣内遺跡
く字甕 Da



六大 A 遺跡・く字甕 Da



第 4 図　宇田甕の世界

第 5 図　関連遺跡分布図

口縁部内面にハケメを残すものを「Db」に区分するが、「Da」は口縁部内面が無文なものに占められており、むしろこちらが重要な要素に思える。

面白いのは、この区分が上浜田・松崎遺跡や志賀公園遺跡には有効であっても、伊勢湾西岸域では分類の水準が異なることである。津市高茶屋大垣内遺跡の資料には在地須恵器成立にも関係する「宇田系器種群」があるので、前段階には途絶えていた「S 字系器種群」の製作・使用環境の復活という印象を与える。その中でまたしても六大 A 遺跡から甕 Da が複数出土している点については庄内川河口～知多北部エリアからの搬入品であった可能性を残す。ともかく、甕や壺という単体の器種ではなく、複数の器種を生み出す基盤である固有の技術単位が存在する環境に注目する必要がある。

現状における甕 a のその後を考える上での難点は、松河戸 I 式段階でのく字甕の存在が不確かであること、宇田甕で顕著になる甕脚台大型化のもとにく字甕が成立して宇田甕との分岐を果たしているようにみえることである。く字甕 Db が分布する庄内川下流域から知多半島北部エリアにかけて先行するく字甕の存在が無関係では無いのなら、畑間・東畑遺跡のく字甕 a の痕跡が同じエリアの上浜田･松崎遺跡で認められることの意味は小さくない。

両系列の統合が進む段階を経てあらためて分岐した結果の宇田甕とく字甕であるなら、宇田甕のように口縁部内面にハケメを残さない「甕 Da」や宇田甕に類似する肩部ハケメの存在に不可解さはない。まさに、統合からの分岐であり、ステージを一つ上がったという評価も可能だろう。だが、そこに宇田系器種群の併存は無く、S 字甕 B 類までのような特定器種に収斂する需給体制から超え出ていない。

強固な需給体制がベースにあった中での分岐である。在地生産への方向にはどうしてもフィルターがかかるということだろう。やはり、S 字系－宇田系の縁にあるという印象は拭えない。はたして「核」があるなら、それはどのような社会的位相にあるのであろうか。

《引用文献》

赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　愛知県埋蔵文化財センター
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 1994『松河戸遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 1999『門間沼遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 1999『三ツ井遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2002『八王子遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2008『惣作・鐘場Ⅱ遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2012『惣作遺跡Ⅱ』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2014『松崎遺跡Ⅱ・上浜田遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2012『姫下遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2011『御山寺遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2012『長野北浦・塔ノ越遺跡』
愛知県愛知県埋蔵文化財センター 2017『寄島遺跡』
東海市教育委員会 1999『上浜田遺跡発掘調査報告』
東海市教育委員会 2012『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』
岐阜県文化財保護センター 2016『東野遺跡Ⅱ』
可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』
三重県埋蔵文化財センター 2000『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター 2001『嶋抜遺跡発掘調査報告 3』
三重県埋蔵文化財センター 2002『六大Ａ遺跡発掘調査報告』

図　　版

遺構観察表

遺構番号	グリッド	遺構	法量（cm）			平面	断面	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ				
001	1D15h・1D14i・1D15i・1D15j・1D15k	SM	130.0	163.3	-	不定	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
002	1D15j	SK	(69.8)	(34.0)	35.7	不明	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
003	1D16k	SK	74.8	50.1	28.1	楕円	U 字	10YR3/3 暗褐色中粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
004	1D16j・1D16k	SK	69.1	(62.5)	28.1	円	U 字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
005	1D16k	SK	41.8	(36.3)	20.2	不明	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
006	1D16k	SK	39.2	34.6	13.2	円	皿	10YR3/3 暗褐色中粒砂	
007	1D15k・1D16k	SK	58.4	46.2	13.2	楕円	皿	10YR3/3 暗褐色中粒砂と同 4/4 褐色中粒砂の斑土	
008	1D15k	SK	(70.5)	62.7	8.9	不明	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
009	1D15k・1D16k	SK	64.4	(29.3)	17.2	不明	皿	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
010	1D15j・1D16j	SK	64.4	(50.8)	19.3	不明	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
011	1D15j	SK	70.5	54.6	20.0	楕円	U 字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR4/4 褐色中～粗粒砂の斑土	
012	1D15j・1D15k	SK	(89.2)	(57.7)	17.0	不明	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
013	1D15j・1D16j	SK	(34.7)	(26.0)	19.6	不明	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
014	1D16j	SK	42.3	30.0	33.6	楕円	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
015	1D16j	SK	43.3	(18.7)	17.1	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
016	1D16j	SK	43.3	(18.7)	17.1	不明	皿	10YR3/3 暗褐色中粒砂	
017	1D15j・1D16j	SD	(243.4)	21.1	6.9	-	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
018		SK	-	-	-	-	-	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	112SK と同一
019	1D15j	SK	(181.1)	(35.1)	12.0	不明	逆台形	10YR3/3 暗褐色中粒砂	
020	1D15j	SK	17.3	15.4	19.7	円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
021	1D15j・1D15k	SK	(77.7)	(65.6)	29.6	不明	U 字	10YR3/3 暗褐色中粒砂	
022	1D15j・1D15k	SK	(55.6)	55.2	18.9	不明	U 字	10YR3/3 暗褐色～ 10YR3/4 暗褐色中粒砂	
023	1D15k・1D16k・1D15l・1D16l	SD	(638.5)	226.4	54.3	-	逆台形	セクション図参照	
024	1D16j	SK	44.9	25.9	33.7	楕円	V 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
025	1D15k・1D16k	SK	(61.7)	(43.7)	16.5	不明	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
026	1D16q・1D17q	SD	(387.4)	144.4	21.2	-	逆台形	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
027	1D17q・1D17r	SU	(296.4)	(124.2)	-	不明	-	10YR2/2 黒褐色中粒砂	
028	1D16p・1D17p	SK	122.9	(117.6)	27.2	楕円	U 字	セクション図参照	
029	1D16o・1D17o・1D16p・1D17p	SK	150.7	142.0	24.1	楕円	U 字		
030	1D16o・1D16q	SK	44.0	37.9	24.6	円	U 字	セクション図参照	
031	1D16o	SK	39.6	30.1	10.7	楕円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
032	1D16o	SK	59.1	52.6	34.2	楕円	V 字	セクション図参照	
033	1D16n	SK	61.1	(41.8)	24.8	楕円	U 字	セクション図参照	
034	1D16o	SK	97.8	75.7	35.0	楕円	V 字	セクション図参照	
035	1D15l・1D16l・1D15m・1D16m	SI	(314.3)	262.8	26.7	隅丸方	逆台形	セクション図参照	
036	1D16n・1D16o	SD	(375.7)	108.7	21.5	-	逆台形	セクション図参照	
037	1D16o	SK	50.1	43.7	38.0	円	U 字	セクション図参照	
038	1D17q	SK	51.3	49.7	35.1	円	U 字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
039	1D15l	SK	111.1	(92.2)	17.1	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
040	1D15l・1D16l	SK	43.7	37.2	45.4	楕円	U 字	10YR4/6 褐色中粒砂	
041	1D17o	SK	46.1	44.8	36.6	円	U 字	セクション図参照	
042	1D17r	SK	49.1	43.6	22.8	円	U 字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
043	1D16n・1D17n・1D17o	SK	50.3	(47.7)	27.3	不明	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂	
044		欠番							
045	1D16m	SK	81.4	(45.1)	22.2	不明	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
046	1D16o	SK	54.7	51.1	37.1	円	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
047	1D16o・1D17o	SK	28.7	25.7	28.9	円	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
048	1D15l	SK	27.4	24.5	11.0	円	皿	10YR3/4 褐色中粒砂	
049	1D15l	SK	44.5	(32.5)	32.2	不明	U 字	10YR3/3 暗褐色中粒砂	
050	1D15l	SK	46.7	34.6	18.3	楕円	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
051	1D15m	SK	23.5	20.1	13.9	円	皿	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
052	1D16l	SK	27.1	23.5	11.2	円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂	
053	1D16l	SD	124.0	29.0	11.4	-	皿	10YR4/4 褐色中粒砂	
054	1D16n	SK	57.3	55.1	34.0	円	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
055	1D16o	SK	19.2	18.5	33.8	円	U 字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
056	1D16n	SK	46.7	20.7	24.1	不明	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
057	1D16l	SK	51.1	(35.4)	23.2	楕円	V 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
058	1D16n	SK	71.0	66.4	31.7	方	U 字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
059	1D17r	SK	62.3	50.1	24.7	楕円	U 字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
060	1D16m	SK	98.4	70.4	43.3	楕円	V 字	セクション図参照	
061	1D16n	SK	59.6	44.8	30.4	楕円	U 字	10YR3/3 暗褐色中粒砂	
062	1D16l・1D16m	SK	121.8	73.1	39.7	長方	U 字	セクション図参照	
063	1D15m・1D16m	SK	(104.5)	88.2	35.4	楕円	U 字	セクション図参照	
064	1D16l	SP	24.7	24.1	16.3	円	皿	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
065	1D16m	SK	49.3	39.1	47.8	円	U 字	10YR3/3 暗褐色中粒砂	

図版2

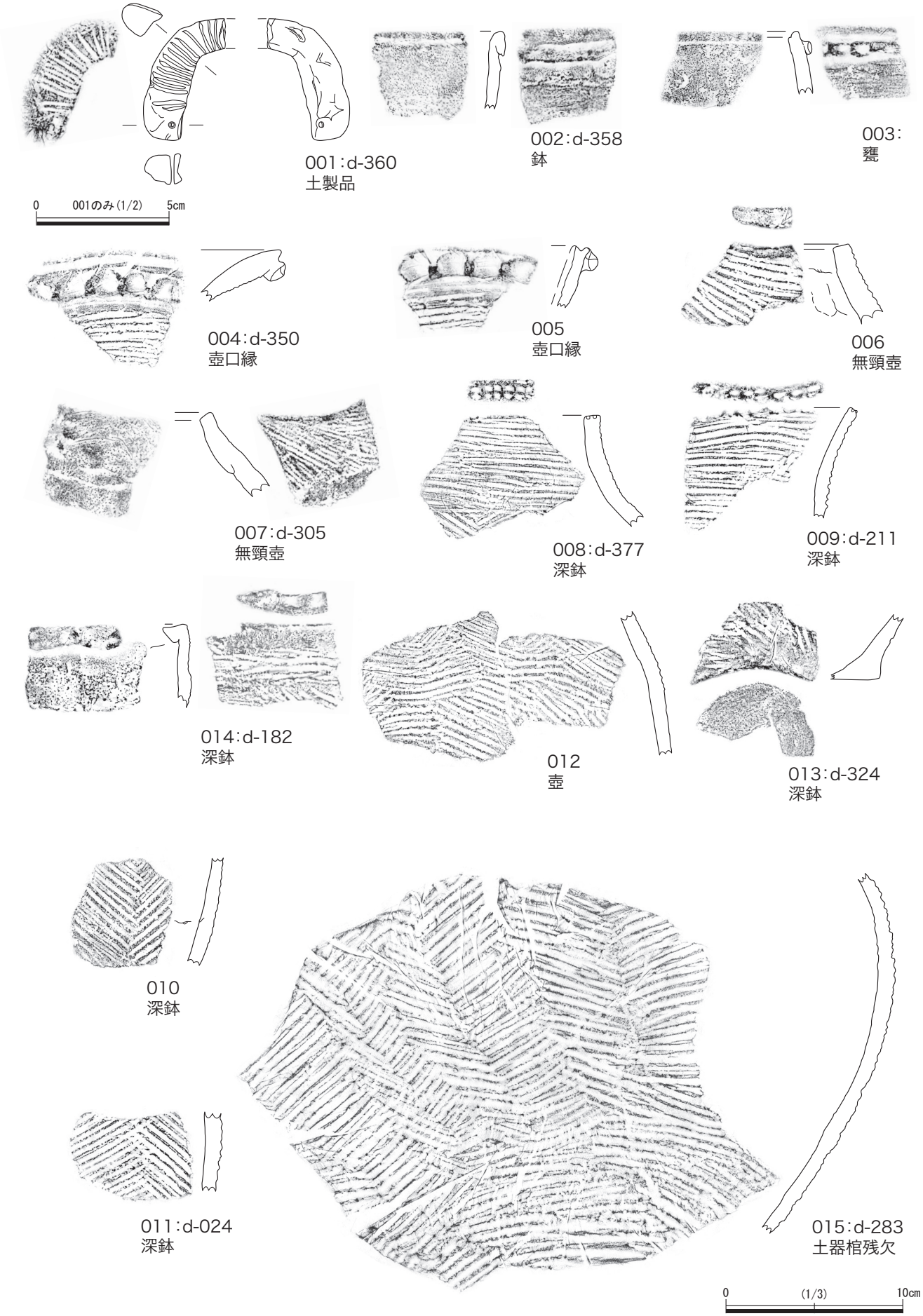
遺構観察表

遺構番号	グリッド	遺構	法量（cm）			平面	断面	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ				
066	1D16l	SP	29.6	19.1	19.2	楕円	皿	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
067	1D15l	SP	33.4	22.2	21.7	楕円	U 字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
068	1D15m	SP	20.4	17.8	9.3	円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
069	1D16l・1D16m	SP	24.7	22.0	14.6	円	皿	10YR4/6 褐色中粒砂と 10YR3/4 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
070	1D16l	SP	18.7	16.6	14.3	円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/6 黄褐色中～粗粒砂の斑土	
071		欠番							
072	1D16p・1D17p	SK	37.5	31.7	12.9	楕円	V 字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
073	1D16m	SK	32.7	29.4	21.6	円	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂と 10YR3/4 暗褐色粗粒砂の斑土	
074	1D16m	SK	59.1	(37.2)	40.9	不明	U 字	10YR3/4 暗褐色中～細粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
075	1D16m	SK	62.5	57.1	46.8	楕円	V 字	セクション図参照	
076	1D16m	SK	74.0	60.5	38.6	楕円	U 字	セクション図参照	
077		欠番							
078	1D16m	SK	85.7	59.7	47.6	不明	U 字	10YR3/4 暗褐色中～細粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
079	1D16l	SK	36.4	32.1	23.4	円	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
080	1D16m	SK	(50.6)	49.8	46.7	不明	V 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
081	1D16m	SK	31.2	(16.4)	14.6	不明	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
082	1D16m	SK	39.8	36.6	27.8	円	V 字	10YR3/3 暗褐色中粒砂と同 4/4 褐色中粒砂の斑土	
083		欠番							
084	1D16l	SK	46.8	24.3	39.5	不明	U 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
085	1D16m	SK	41.4	(22.2)	43.9	不明	U 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
086	1D17r	SL	59.6	(50.2)	-	不明	-	セクション図参照	
087		欠番							
088	1D15i	SK	147.7	(81.8)	42.0	不明	逆台形	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
089	1D15i	SK	53.9	49.2	48.9	円	V 字	セクション図参照	
090	1D15i・1D15j	SD	(177.7)	51.0	19.4	不明	U 字	セクション図参照	
091	1D15i	SK	59.6	57.1	16.9	円	皿	10YR3/3 暗褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい褐色中～粗粒砂の斑土	
092	1D15h・1D15i	SK	63.7	57.1	35.4	方	U 字	セクション図参照	
093	1D15h	SK	86.9	81.3	63.9	円	U 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
094	1D15i	SK	58.4	(34.8)	33.3	不明	V 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
095	1D15i	SK	126.3	85.6	35.2	長円	U 字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
096	1D14g・1D15g	SK	(208.3)	(175.6)	37.4	不明	U 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
097	1D15g	SK	63.7	63.5	37.3	円	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂	
098	1D15i	SK	46.5	(32.3)	15.0	不明	U 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
099	1D15h・1D15i	SK	64.5	52.4	59.6	楕円	V 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
100	1D16l・1D16m	SK	23.2	17.8	16.1	楕円	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
101	1D16l・1D16m	SP	30.4	24.3	11.3	楕円	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
102	1D16l・1D16m	SK	(37.7)	34.4	38.1	不明	U 字	10YR4/6 褐色中粒砂	
103	1D16m	SP	21.1	16.7	6.25	楕円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
104	1D15m・1D16m	SP	21.5	19.8	12.6	円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
105	1D15m	SP	26.9	23.4	10.5	円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
106	1D16l	SP	28.8	20.9	3.5	不明	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
107	1D16m	SP	35.4	30.2	34.0	円	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
108	1D16m	SK	38.6	16.8	37.2	不明	V 字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂と 10YR4/4 褐色粗粒砂の斑土	
109	1D16l	SK	39.1	23.2	21.9	不明	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂の斑土	
110	1D15l	SK	41.8	38.0	16.8	楕円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
111	1D14j・1D15j	SK	52.8	41.0	10.4	不明	皿	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
112	1D15j・1D16j	SK	86.0	81.2	57.9	方	U 字	10YR4/4 褐色中粒砂	018SK と同一
113	1D15j	SK	69.5	53.2	22.3	楕円	U 字	セクション図参照	
114	1D15j	SK	38.7	9.5	15.5	不明	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
115	1D15j・1D16j	SK	48.7	40.3	6.3	楕円	皿	10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂と 10YR4/4 褐色中～粗粒砂の斑土	
116	1D16j	SK	28.7	19.7	6.6	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
117	1D16j	SK	66.1	42.9	11.1	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
118	1D16j	SK	28.5	19.4	8.4	楕円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
119	1D16j	SK	26.5	24.8	7.0	円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
120	1D14j・1D15j・1D14j・1D15j	SI	463.5	(448.1)	24.11	隅丸方	逆台形	セクション図参照	
121	1D15l・1D16l	SK	110.2	45.6	32.9	楕円	U 字	セクション図参照	
122	1D16l	SK	44.8	39.5	14.9	楕円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
123	1D16l	SP	79.2	40.5	51.5	楕円	U 字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
124	1D16k・1D16l	SK	40.4	29.5	17.3	楕円	皿	10YR4/4 褐色中粒砂	
125	1D15j	SK	42.8	38.8	20.0	楕円	U 字	セクション図参照	
126	1D15j・1D15k	SK	84.7	56.8	14.7	方	皿	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土	

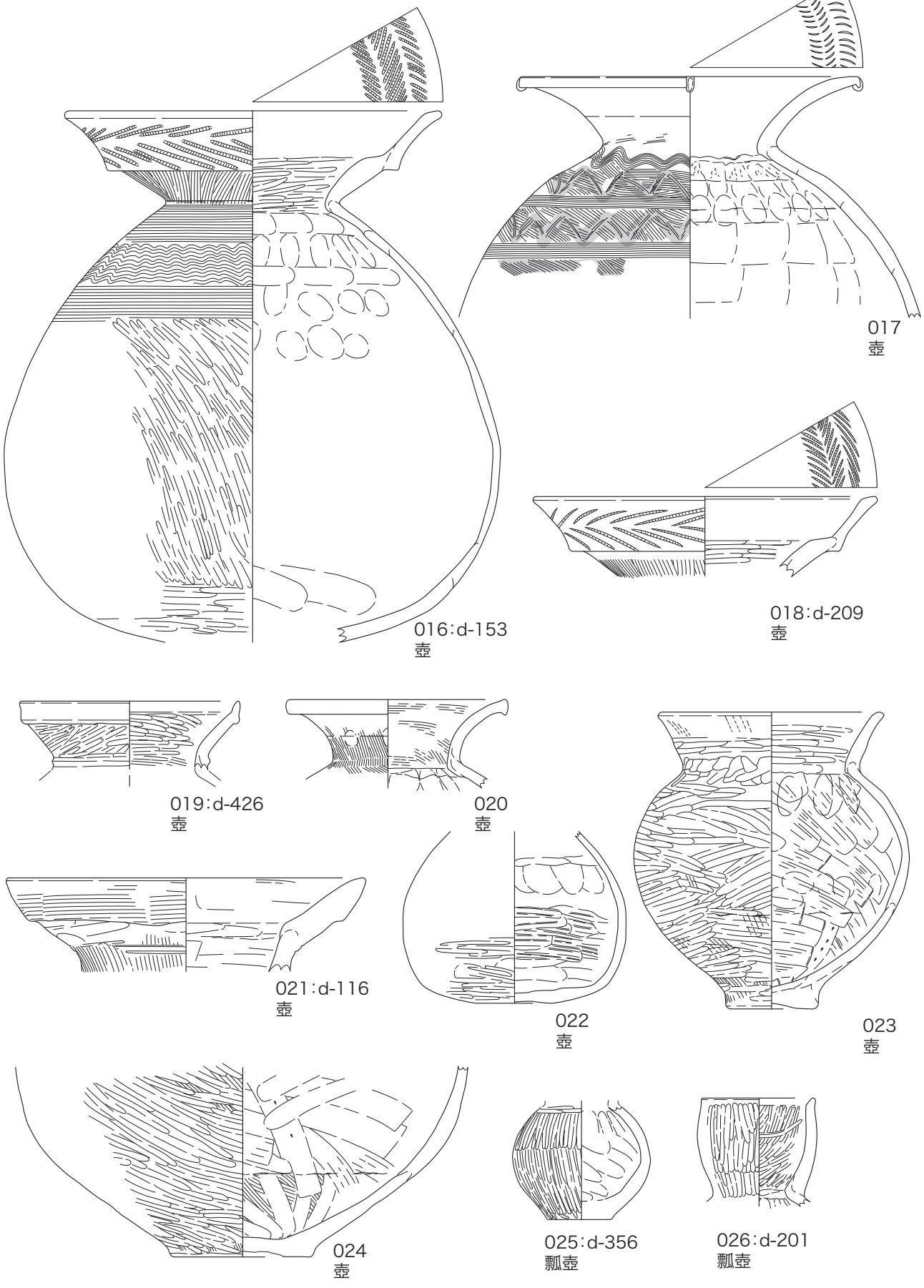
遺構観察表

遺構番号	グリッド	遺構	法量（cm）			平面	断面	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ				
127	1D16j	SK	32.9	31.9	24.7	円	U字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
128	1D16j	SK	(78.6)	(71.4)	48.4	不明	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
129	1D15k	SU	(150.6)	(89.9)	-	不明	-	10YR2/2 黒褐色中粒砂	
130	1D16p・1D17p・1D16p・1D17q	SD	(354.8)	216.2	28.5	-	逆台形	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
131	1D17q・1D17r	SI	(376.9)	(172.4)	18.4	隅丸方	皿	南セクション参照	
132		欠番							
133	1D17p	SK	47.2	42.9	14.3	円	皿	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
134	1D16p	SK	42.1	38.9	23.1	円	U字	10YR3/2 黒褐色中～粗粒砂	
135	1D16q・1D17q	SK	74.3	51.2	16.9	楕円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
136	1D17q	SK	62.6	51.3	23.1	楕円	U字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
137	1D16p・1D17p	SD	150.0	44.4	24.6	-	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
138	1D17q	SK	44.3	40.5	13.5	円	皿	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
139	1D15j	SK	40.7	38.3	15.2	円	皿	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
140	1D15j	SK	39.6	(28.8)	10.0	不明	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
141	1D15j	SK	64.8	(45.0)	12.6	不明	U字		
142		欠番							
143	1D15l・1D16l	SK	70.9	45.5	8.7	隅丸方	皿	10YR3/3 暗褐色中粒砂～シルト質砂	
144	1D15k	SX	168.4	(138.4)	15.2	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
145	1D16j	SK	44.7	30.9	12.3	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
146	1D15j・1D16j・1D15k・1D16k	SK	119.1	40.9	24.4	楕円	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
147	1D17r	SK	(74.3)	(53.9)	57.5	不明	U字	10YR3/4 褐色中～粗粒砂	
148	1D17r	SK	(53.0)	47.2	17.3	不明	皿	10YR4/4 褐色中～粗粒砂および砂礫	
149	1D17q・1D17r	SK	86.3	(35.8)	13.2	不明	皿	10YR4/4 褐色粗粒砂	
150	1D17r	SK	62.4	41.7	12.3	楕円	皿	10YR4/4 褐色粗粒砂	
151	1D17r	SK	54.4	(24.8)	32.9	不明	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
152	1D17r	SK	37.2	31.6	14.5	楕円	皿	10YR4/6 褐色粗粒砂～砂礫・砂利	
153	1D17q	SK	(51.7)	46.2	16.9	不明	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
154	1D14k・1D15k	SK	75.91	(51.3)	13.8	不明	U字		
155	1D14j	SK	38.8	36.4	39.3	円	U字		
156	1D15j	SK	41.1	38.7	18.1	円	皿		
157	1D14j	SK	34.7	(30.3)	16.4	不明	皿		
158	1D14j	SD	(99.3)	53.2	8.0	-	皿		
159	1D16j	SK	(43.4)	39.9	49.0	不明	V字		

図版４

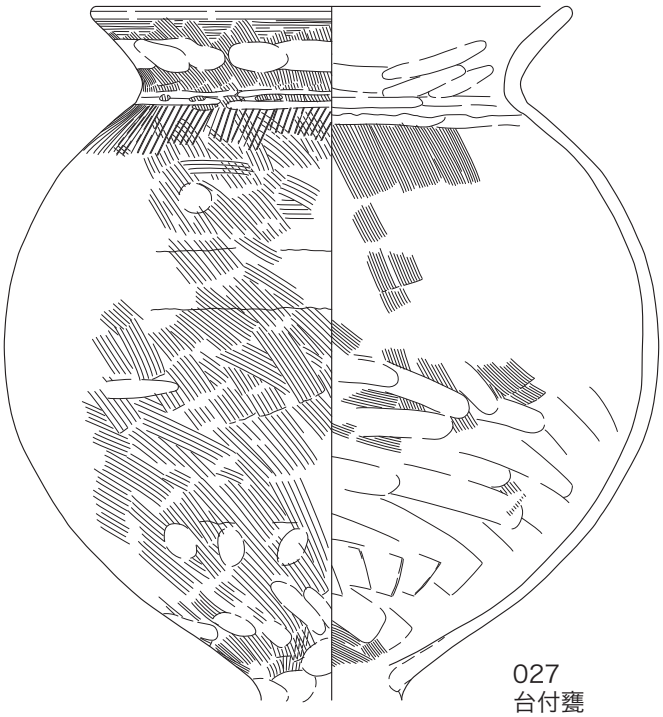


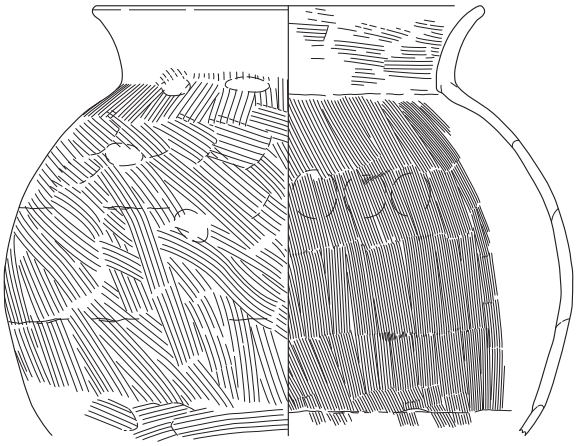
1 地点出土遺物実測図（１）

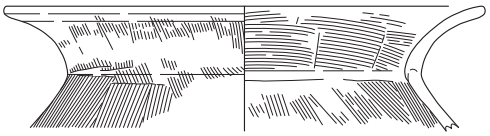


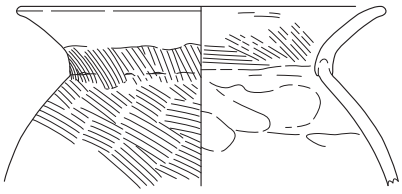
1 地点出土遺物実測図（2）

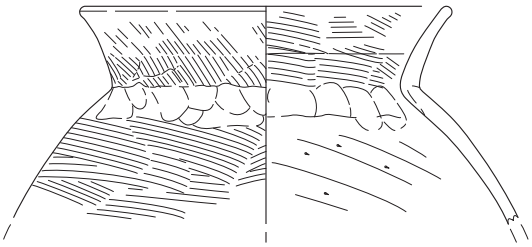
図版6

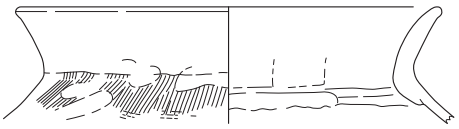

027
台付甕

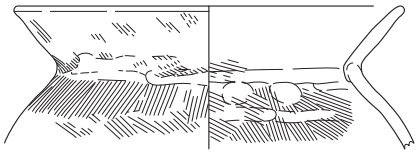

028
甕

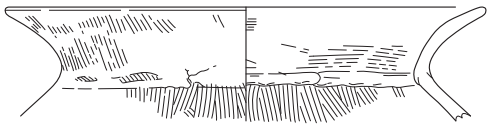

029
甕

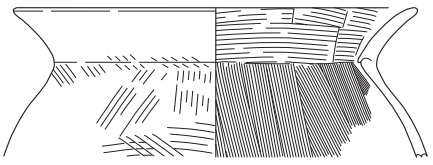

030
甕

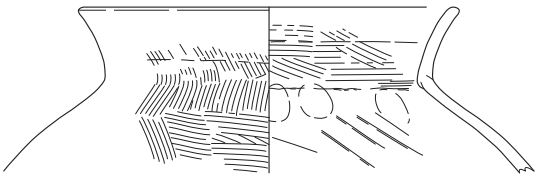

031
甕

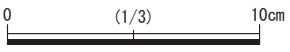

032
甕


033
甕

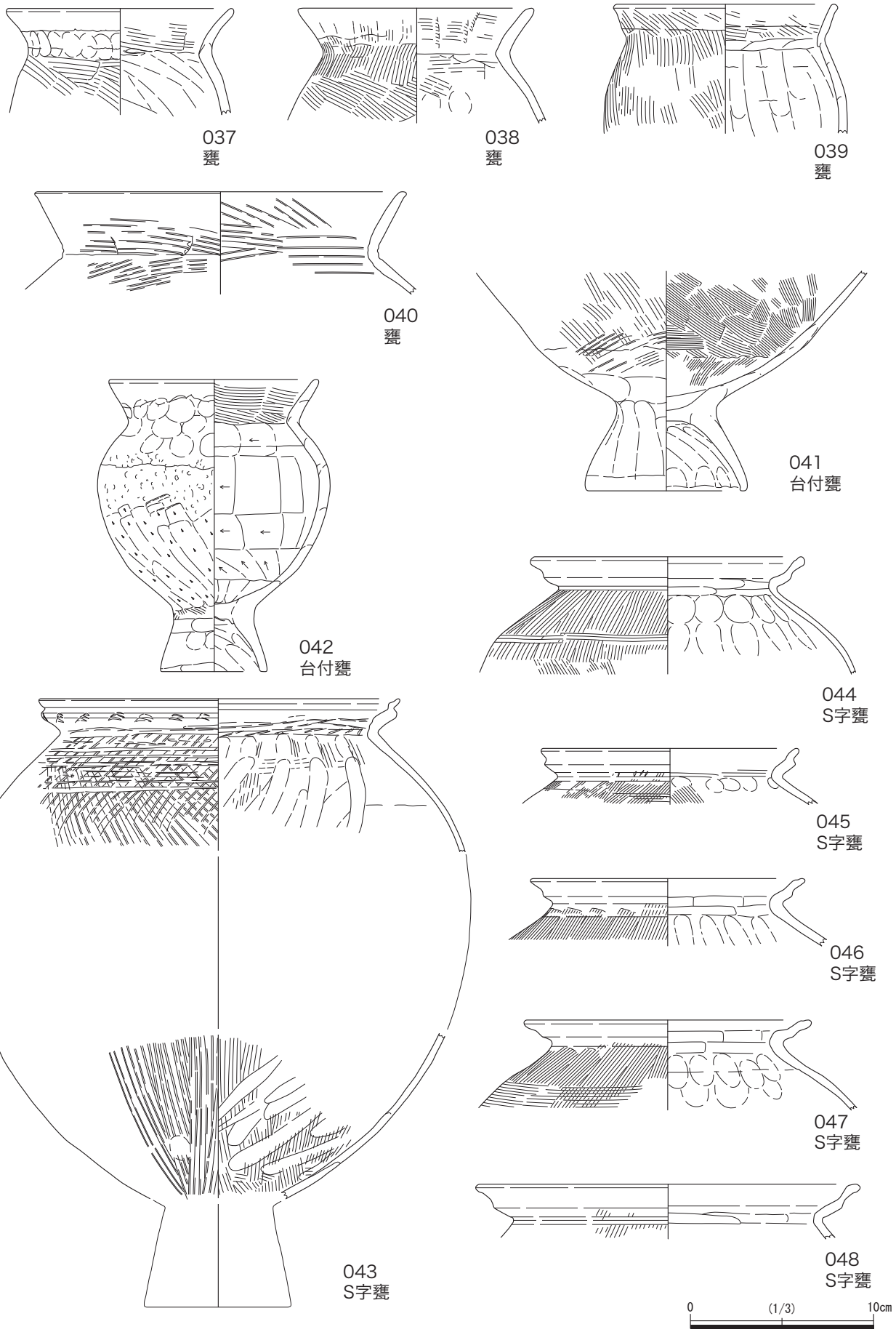

034
甕


035
甕


036
甕

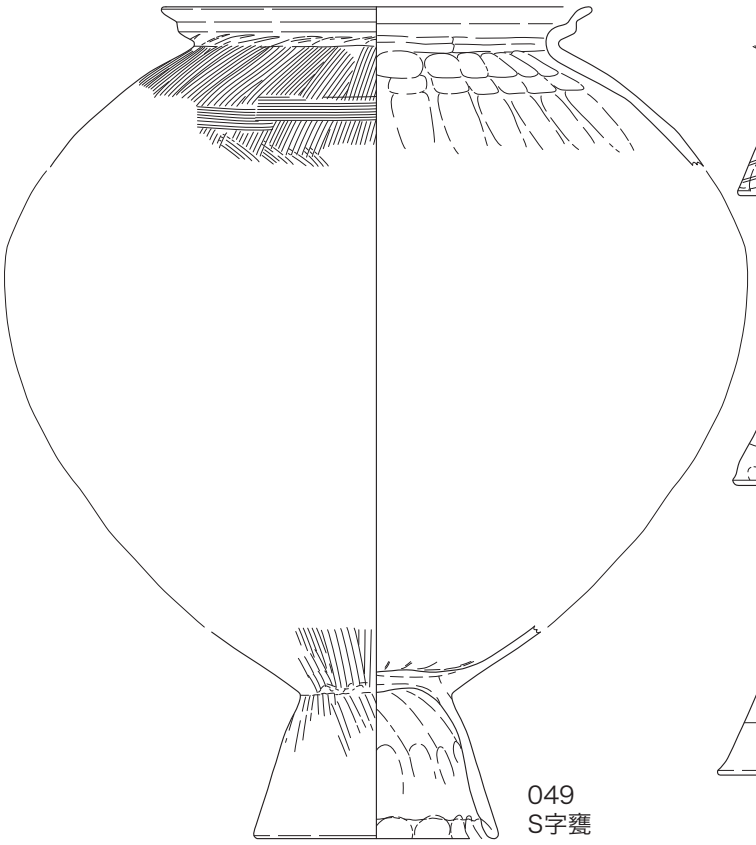


1 地点出土遺物実測図（3）

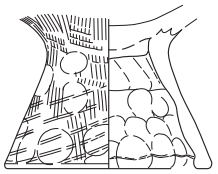


1地点出土遺物実測図（4）

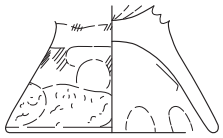
図版8



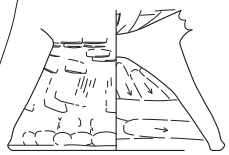
049
S字甕



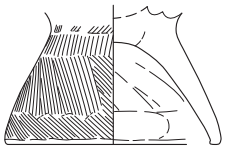
051
脚台



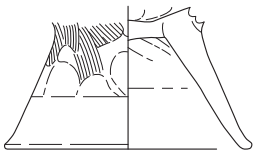
052
脚台



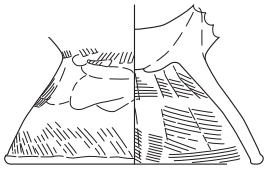
053
脚台



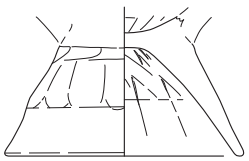
054
脚台



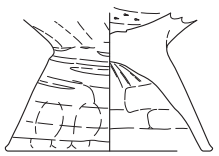
055
脚台



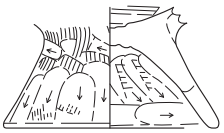
056
脚台



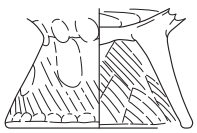
057:d-145
脚台



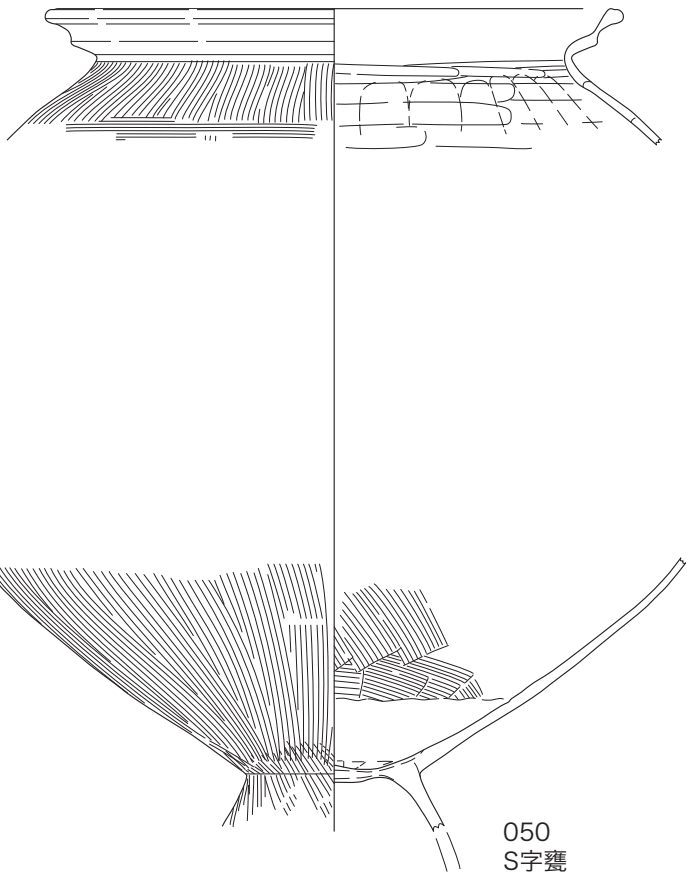
058
脚台



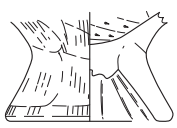
059
脚台



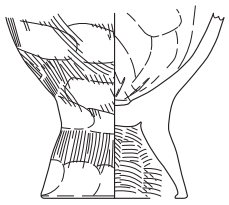
060
脚台



050
S字甕



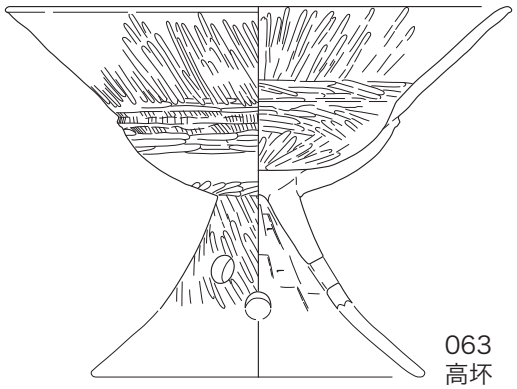
061
脚台



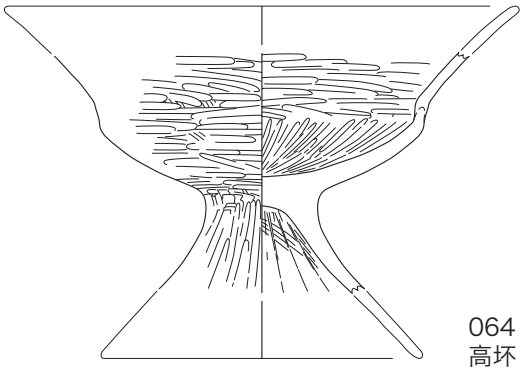
062
台付

0 (1/3) 10cm

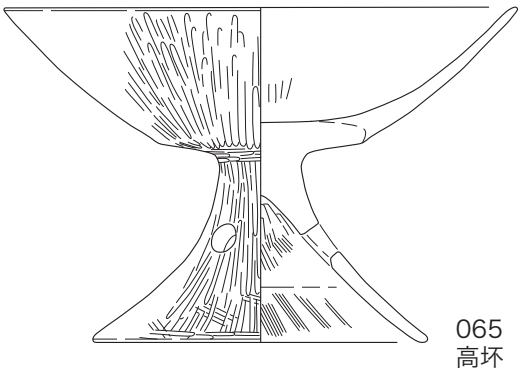
1 地点出土遺物実測図（5）



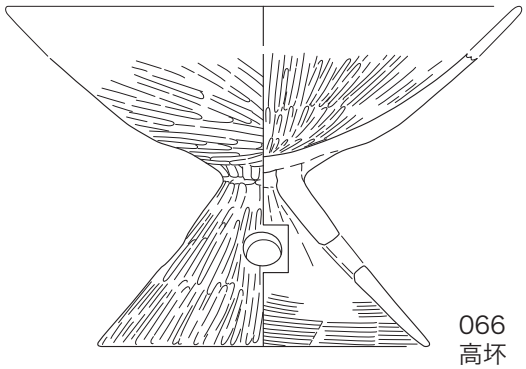
063
高坏



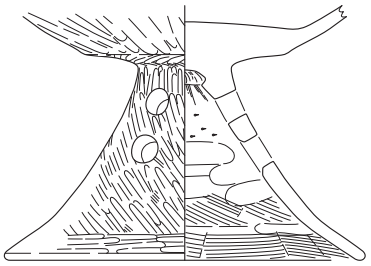
064
高坏



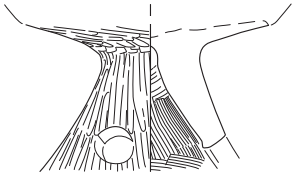
065
高坏



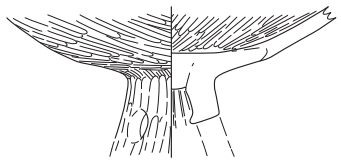
066
高坏



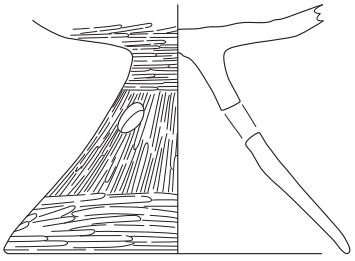
067
高坏



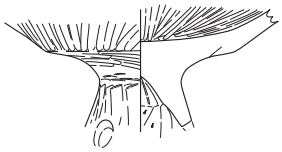
068:d-424
高坏



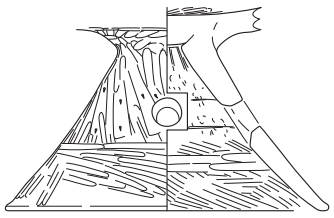
069:d-144
高坏



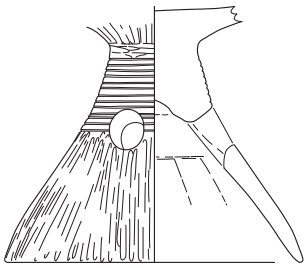
070:d-218
高坏



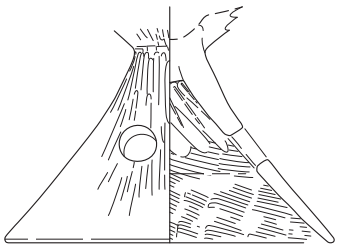
071:d-119
高坏



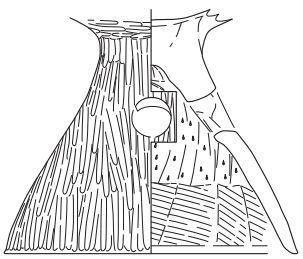
072
高坏



073
高坏



074
高坏

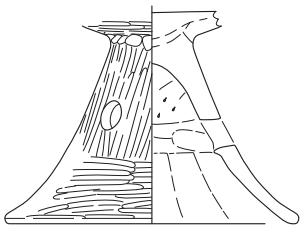


075
高坏

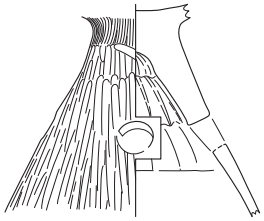
0 (1/3) 10cm

1地点出土遺物実測図（6）

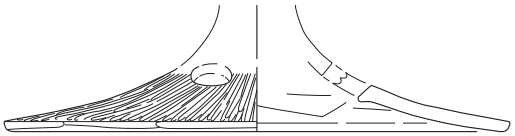
図版10



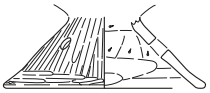
076
高坏



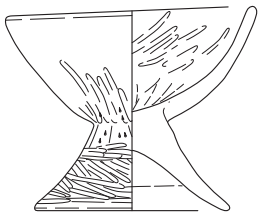
077
高坏



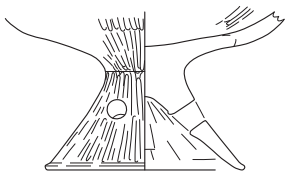
078
高坏



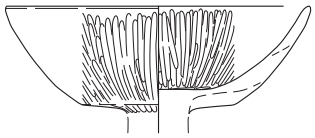
079
高坏



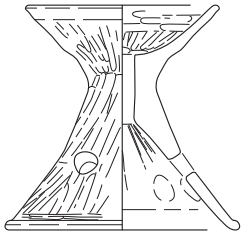
080：d-425
高坏



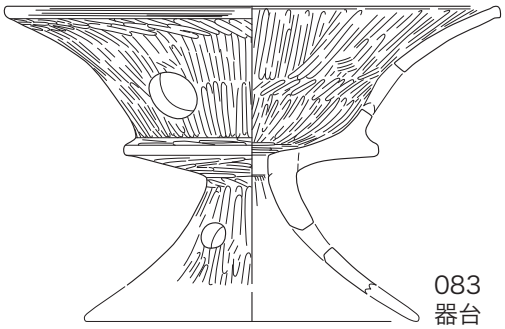
081
高坏



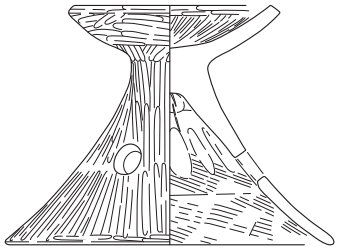
082
高坏



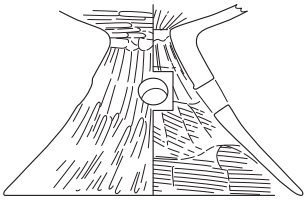
085
器台



083
器台

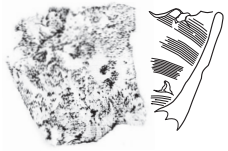


084
器台

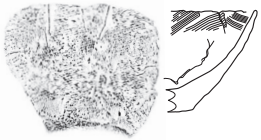


086
器台

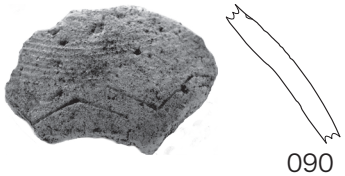
087
粗製小鉢



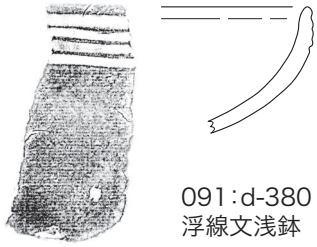
088
粗製小鉢



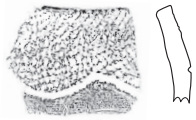
089
粗製小鉢



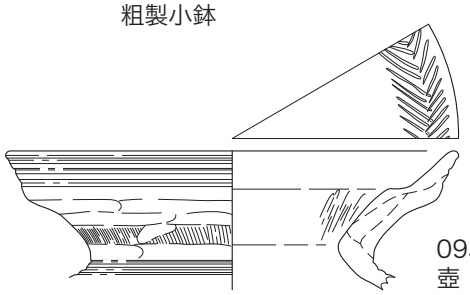
090
壺



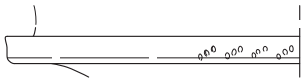
091：d-380
浮線文浅鉢



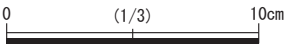
092
壺



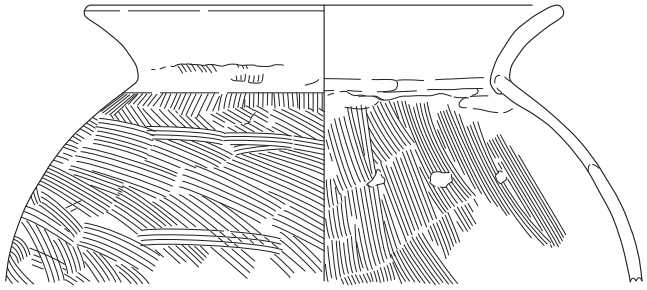
093
壺



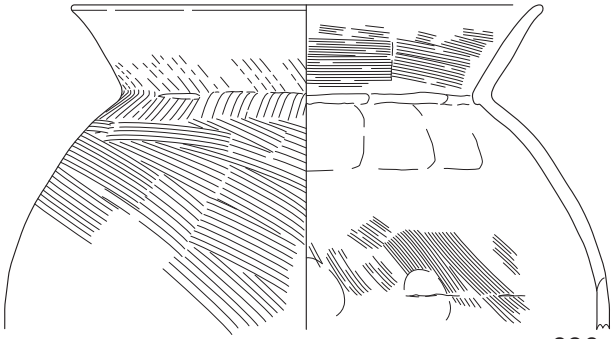
094：d-170
壺口縁



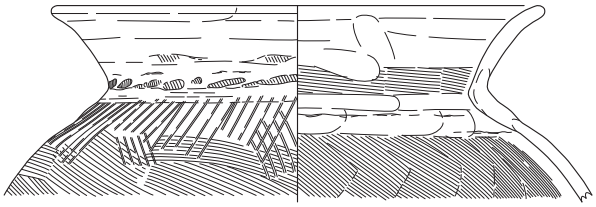
1 地点出土遺物実測図（7）



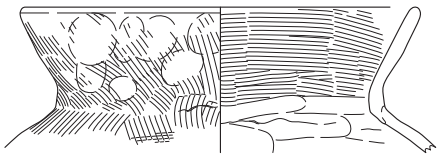
095:d-029
甕



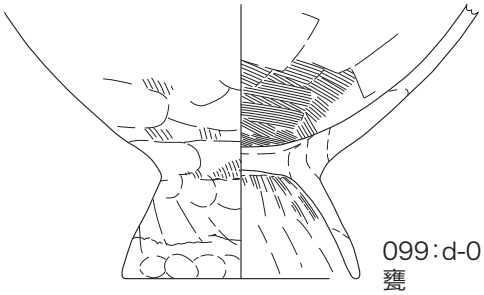
096
甕



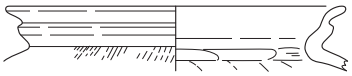
097
甕



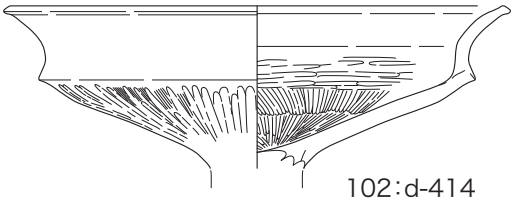
098
甕



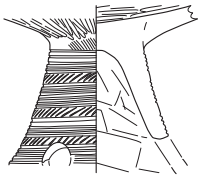
099:d-014
甕



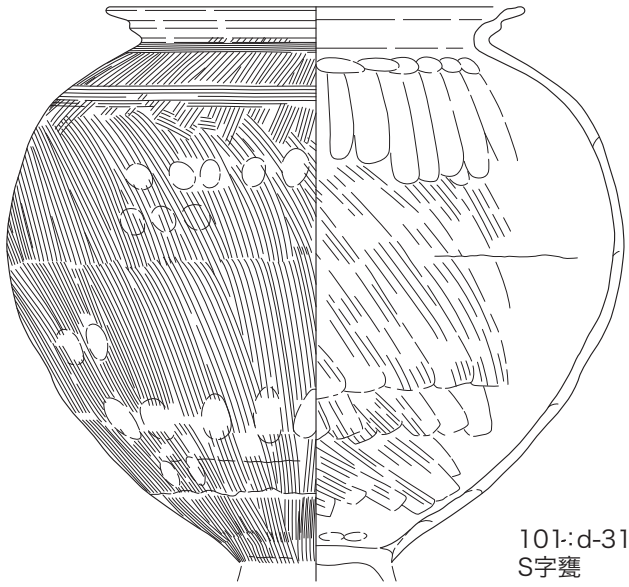
100:d-307
S字甕



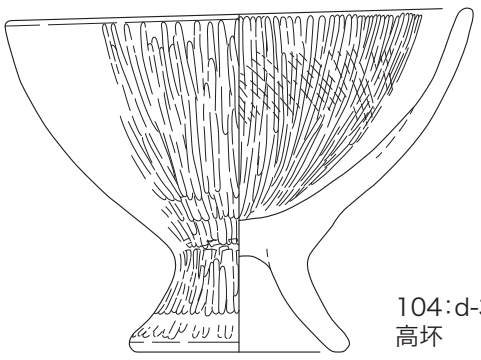
102:d-414
高坏



103:d-159
高坏



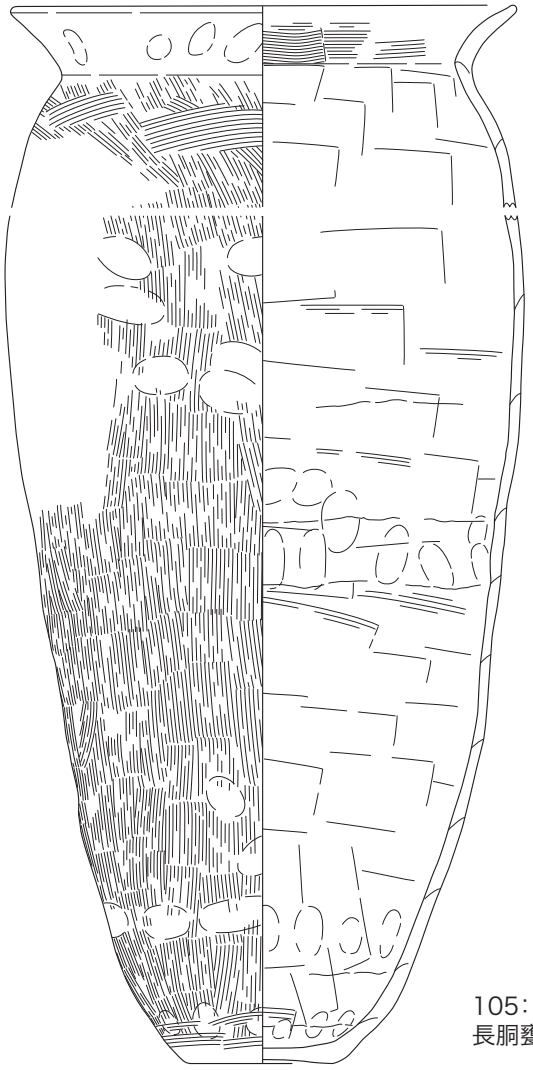
101:d-311
S字甕



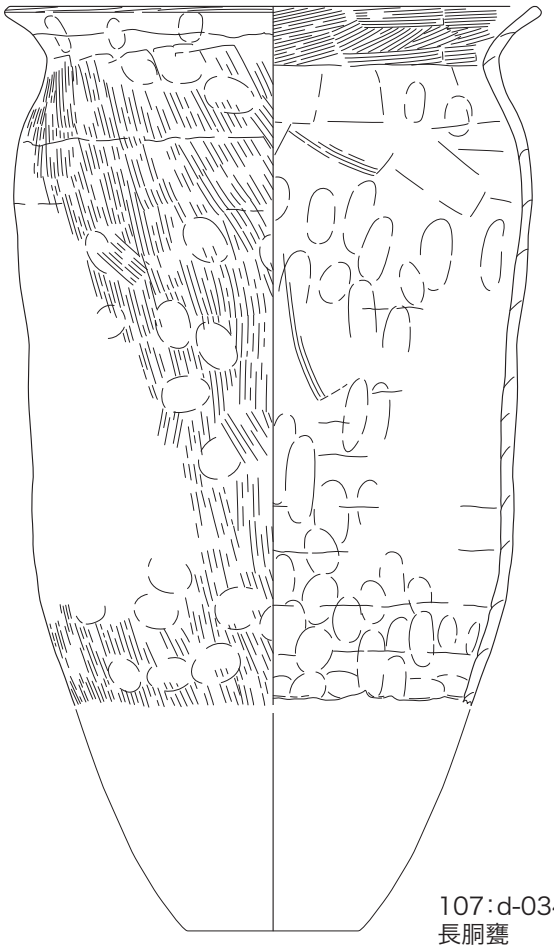
104:d-376
高坏

1 地点出土遺物実測図（8）

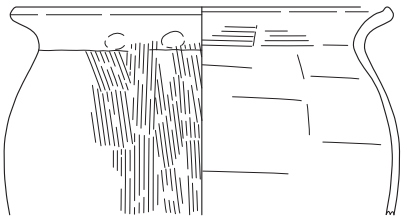
図版12



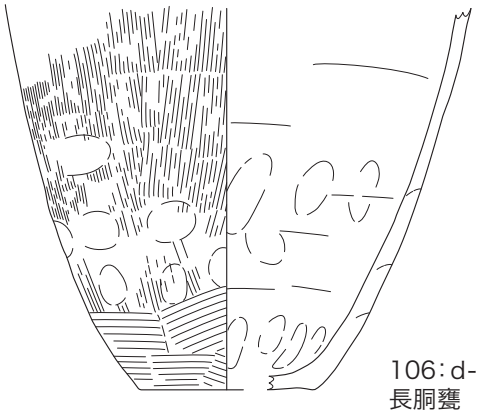
105：d-001
長胴甕



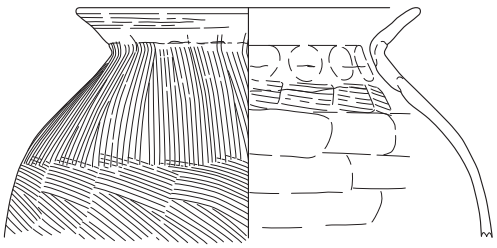
107：d-034
長胴甕



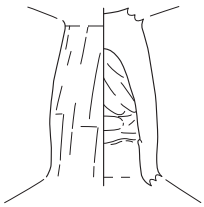
108：d-418
甕



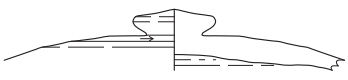
106：d-120
長胴甕



109：d-432
甕



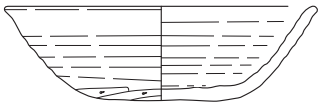
110：d-353
高坏脚



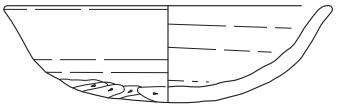
111：d-301
蓋

0 (1/3) 10cm

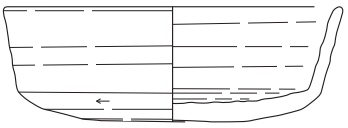
1 地点出土遺物実測図（9）



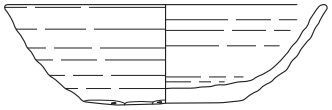
112:d-357a
碗



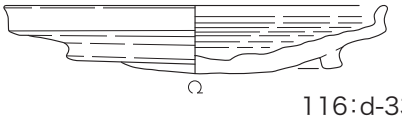
113:d-363b
碗



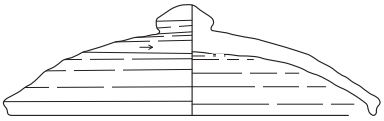
114:d-357b
無台坏



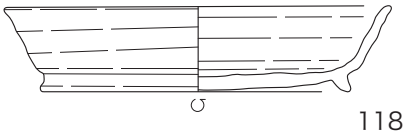
115:d-363a
碗



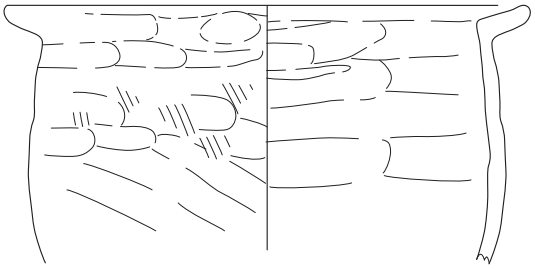
116:d-333
盤



117:d-403
蓋

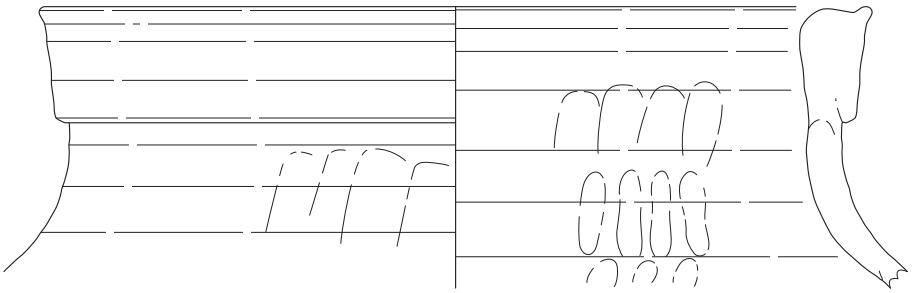


118:d-003
坏身

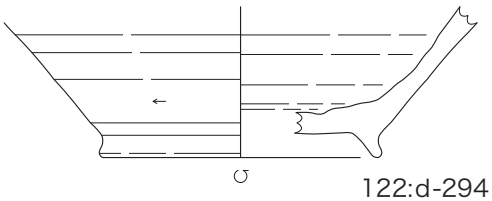


119:d-251
土師器甕

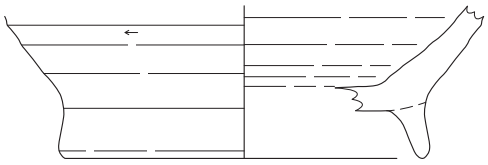
120:d-415
土師器甕



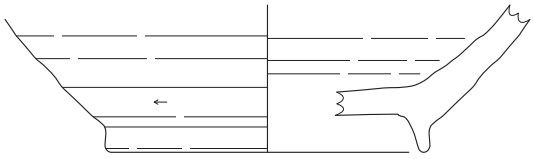
121
大甕



122:d-294
片口鉢



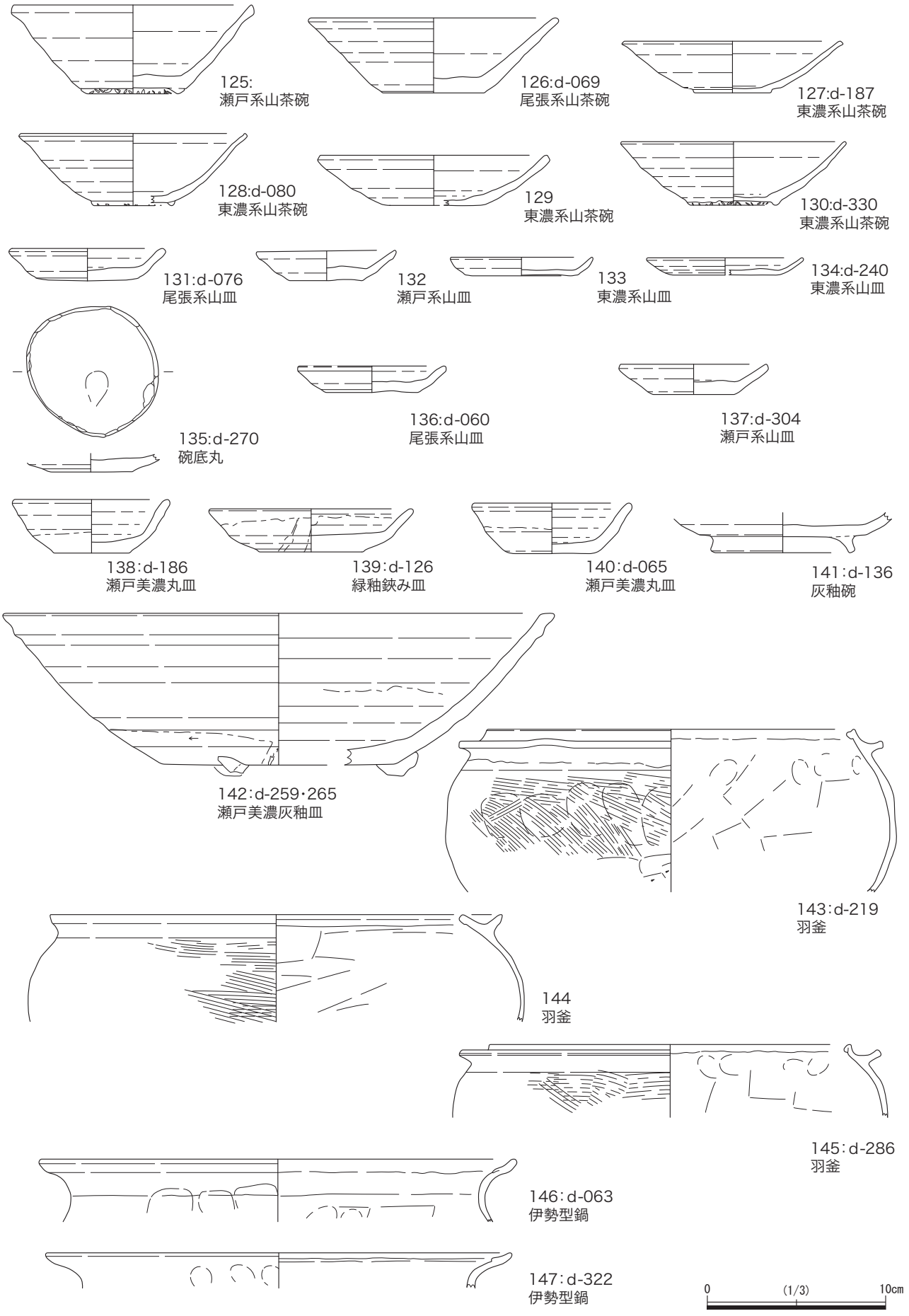
123:d-266
片口鉢



124:d-411
片口鉢

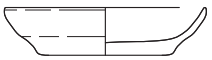
1 地点出土遺物実測図（10）

図版14

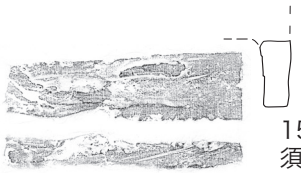


1 地点出土遺物実測図（11）

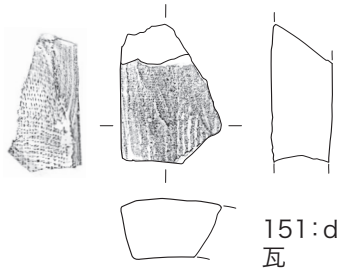
148：d-331
かわらけ



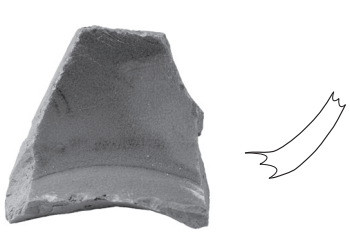
149：d-002
かわらけ



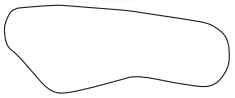
150：d-197
須恵器製品



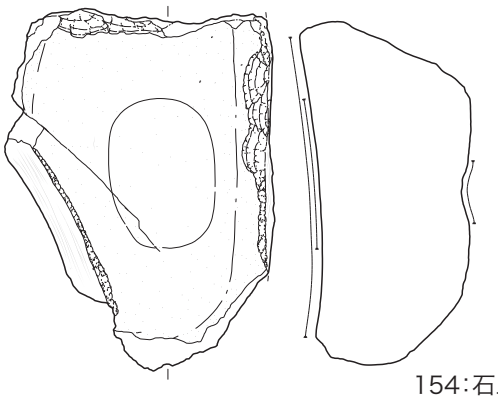
151：d-288
瓦



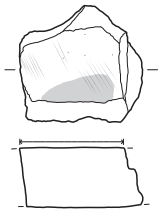
152
青磁碗



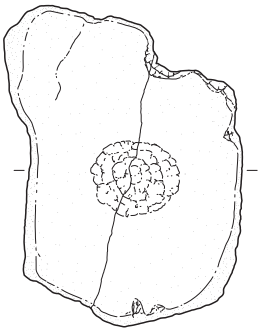
153：
砥石



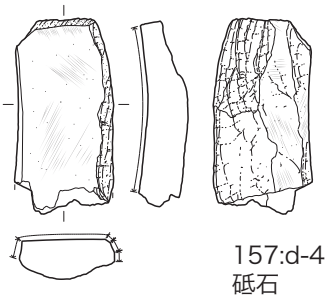
154：石皿



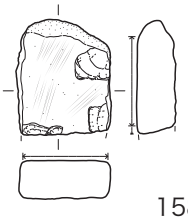
155
砥石？



156:d-340
台石

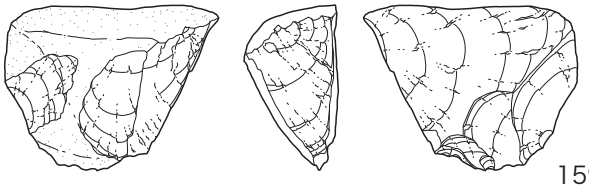


157:d-416
砥石

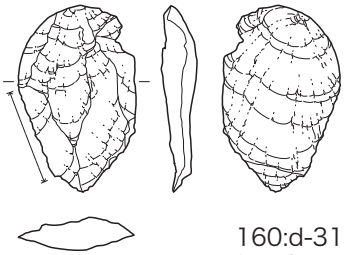


158
砥石

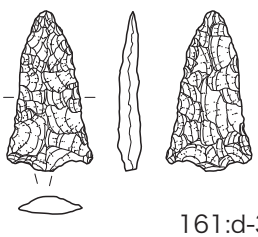
0 (1/3) 10cm



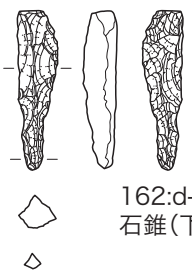
159:d-372
石核（下呂石）



160:d-315
剥片（下呂石）



161:d-335
石鏃（下呂石）



162:d-390
石錐（下呂石）

0 (2/3) 2cm

1 地点出土遺物実測図（12）

遺物観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長（cm）	器高幅（cm）	底径厚（cm）	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
001	d-360				土製品		(6.3)		0.8～1.1		ヘラ線刻	砂粒多い	にぶい黄橙	10YR7/3	縄文晩期？	土偶などの土製品のパーツである可能性が高い
002	d-358				鉢？						ヘラナデ　指ナデ		にぶい黄橙	10YR7/2	縄文晩期？	
003			中部検出		甕（深鉢）？						ヘラケズリ　ヘラミガキ	細かい白色砂粒を多く含む	にぶい黄橙	10YR6/3	縄文晩期？	凸帯文土器
004	d-350				壺					ナデ	条痕文　指オサエ	砂粒多く含む	にぶい黄橙	10YR7/4	弥生前期	水神平期
005		035SI			壺					不明　ハクリ	条痕文　指オサエ		黄灰	2.5Y4/1	弥生前期	水神平期
006			西部検出		無頸壺					指ナデ	条痕文		にぶい黄橙	7.5YR7/4	弥生前期	水神平期
007	d-305				無頸壺					指ナデ　指頭痕	条痕文	大量の中粒砂を含む	にぶい黄橙	10YR7/3	弥生前期	水神平期
008	d-377				深鉢					指ナデ	条痕文	砂粒多く含む	にぶい黄橙	10YR6/3	弥生前期	水神平期　ススト付着
009	d-211				深鉢					ナデ	条痕文	長石系中粒砂多く含む	にぶい黄橙	10YR6/3	弥生前期	口端面に刺突２列
010			西部検出		深鉢					ナデ	条痕文		にぶい黄橙	10YR7/3	弥生前期	水神平期　条痕文（羽状）
011	d-024				深鉢か					ナデ	条痕文		にぶい黄橙	7.5YR6/4	弥生前期	水神平期
012			西部検出		壺								にぶい黄橙	10YR6/3	弥生前期	水神平期　条痕文壺
013	d-324				深鉢				3.8	指ナデ	条痕文（底）ナデ	中粒砂を多く含む　赤い砂粒が多い	にぶい黄橙	10YR7/3	弥生前期	水神平期
014	d-182				深鉢					ナデ	条痕文　横＋右下がり	砂粒多く含む	にぶい黄橙	10YR6/3	弥生前期	水神平期
015	d-283				壺					ナデ	条痕文　横＋羽状				弥生前期	土器棺残欠　ススト付着
016	d-153	027SU		土師器	柳ケ坪ﾀｲﾌﾟ壺	6	20.8	27.4		横ナデ、指ナデ、指オサエ、ミガキ、ケズリ、刺突文	ハケ、ミガキ、刺突文、波状文、横線文	密、礫を含む	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
017		027SU		土師器	壺	1	18.8			ハケ、ミガキ板ナデ、横ナデ、刺突文	横ナデ、板ナデ、ハケ貼付文、波状文	粗	橙	7.5YR7/6	古墳前期	～7.5YR8/2 灰白色
018	d-209	027SU		土師器	柳ケ坪ﾀｲﾌﾟ壺	6	19			ナデ、横ナデ→波状文	ハケ、横ナデ、波状文	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
019	d-426	027SU		土師器	壺	9	12.2			横ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ、凸帯	密	にぶい橙	5YR6/4	古墳前期	
020		027SU		土師器	壺	12	12.2			ハケ、板ナデ	ハケ、横ナデ	粗、礫含む	橙	5YR7/8	古墳前期	
021	d-116	131SI (027SU 北)		土師器	壺	1	20			板ナデ	ヨコナデ、ハケ、オサエ、ナデ	やや粗、5㎜小石混	にぶい橙	7.5YR7/4	古墳前期	複合口縁部
022		027SU		土師器	壺	8	器径12.3		5	オサエ、ナデ、板ナデ	オサエ、ミガキ	密、礫を含む	褐色	2.5YR4/6	古墳前期	
023		027SU		土師器	壺	口7底12	12.5	16.4	4.6	横ナデ、ミガキ、指オサエ	ハケ、板ナデ、ミガキ	粗	灰褐	5YR6/2	古墳前期	接合部径6.8cm
024		027SU		土師器	壺	7			8	板ナデ、ミガキ	ミガキ	密、礫を含む	橙	7.5YR7/6	古墳前期	
025	d-356	027SU		土師器	瓢壺	12			3.4	ナデ	ミガキ	粗	橙	2.5YR6/6	古墳前期	口縁部
026	d-201	027SU		土師器	瓢壺	11	6.3			板ケズリ、ナデ、横ナデ	ミガキ、横ナデ	粗	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
027		027SU		土師器	甕	1	19			横ナデ、ハケ、板ナデ	横ナデ、ハケ	粗	にぶい橙	2.5YR6/4	古墳前期	
028		027SU		土師器	甕	4	15.6			横ナデ、ハケ、指オサエ	横ナデ、ハケ、指オサエ	粗、礫含む	にぶい橙	2.5YR6/4	古墳前期	外面ススト　内面コゲ
029		027SU		土師器	甕	1	19.1			ヨコナデ、ハケ	ハケ、ヨコナデ	密、チャート含む	橙	5YR6/6	古墳前期	
030		027SU		土師器	甕	4	14.6			横ナデ　ナデ　ハケ	横ナデ、ハケ、オサエ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR6/6	古墳前期	
031		027SU		土師器	甕	4	14.7			横ナデ　ハケ　板ナデ　オサエ	ハケ、指オサエ	粗、礫含む	橙	5YR7/8	古墳前期	
032		027SU		土師器	甕	3	16.8			横ナデ、板ナデ　オサエ	オサエ、ハケ、ナデ	粗、礫含む	にぶい橙	2.5YR6/4	古墳前期	
033		027SU		土師器	甕	1	15.4			横ナデ、ハケ、指オサエ	横ナデ、ハケ	粗、礫含む	にぶい橙	2.5YR6/4	古墳前期	
034		027SU		土師器	甕	3	19			横ナデ、ハケ、指オサエ	横ナデ、ハケ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR6/4	古墳前期	
035		027SU		土師器	甕	1	16			ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	密	橙	5YR7/6	古墳前期	ハケ工具３種
036		027SU		土師器	甕	4	15			ハケ　板ナデ　オサエ	ハケ、ナデ	粗、礫含む	橙	5YR7/8	古墳前期	ススト付着
037		027SU		土師器	甕	3	12.4			横ナデ　ナデ　ハケ	横ナデ、指オサエ、ナデ、ハケ	粗	橙	2.5YR6/6	古墳前期	
038		027SU		土師器	甕	3	12.9			ハケ後ナデ、横ナデ　ススト付着	ナデ、ハケ	粗	にぶい橙	2.5YR6/4	古墳前期	
039		027SU		土師器	甕	2	12.2			タテナデ、横ナデ	横ナデ、ハケ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR6/4	古墳前期	ススト付着
040		027SU		土師器	甕	1	20.2			横ナデ、ハケ、板ナデ	横ナデ、ハケ	粗、礫含む	橙	5YR6/6	古墳前期	頸部2/12残存
041		027SU		土師器	台付甕	12	接合部径5.4		8.8	ハケ、オサエ	ハケ、オサエ、横ナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
042		027SU		土師器	台付甕	口5底10	11.2	12.9	5.8	ハケ、板ナデ、ナデ	横ナデ、板ケズリ、ハケ、指オサエ、ナデ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR7/4	古墳前期	
043		027SU		土師器	S字甕	9	19.6			横ナデ、指ナデ、ハケ	横ナデ、ハケ	粗、雲母を含む	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
044		027SU		土師器	S字甕	10	14.8			オサエ、ヘラナデ、横ナデ	ハケ、横ナデ	粗　礫、雲母含	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	ススト付着

遺物観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長（cm）	器高幅（cm）	底径厚（cm）	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
045		027SU		土師器	S字甕	1	14			ヨコナデ、頸部にヨコハケ、オサエ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ヨコハケ、ハケ	密、石英･長石･雲母含む	にぶい橙	7.5YR6/4	古墳前期	
046		027SU		土師器	S字甕	1	15			ヨコナデ、頸部ヘラ調整、ナデ	ヨコナデ、ハケ	密	橙	5YR6/6	古墳前期	薄くスス付着
047		027SU		土師器	S字甕	1	15.7			板ナデ、オサエ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ヨコハケ	密	橙	5YR6/6	古墳前期	
048		027SU		土師器	S字甕	1	21			ヨコナデ、頸部ヘラ調整	ヨコナデ、頸部に沈線、ハケ	密、石英・長石含む	浅黄橙	10YR8/3	古墳前期	
049		027SU		土師器	S字甕	口11底4	17		9.7	横ナデ、指ナデ	横ナデ、ハケ	粗	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
050		027SU		土師器	S字甕	2	22.8			横ナデ、指ナデ	横ナデ、ハケ	粗	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
051		027SU		土師器	甕脚台	11			8.2	オサエ、板ナデ	ハケ、タタキ	粗、礫含む	橙	2.5YR6/6	古墳前期	
052		027SU		土師器	甕脚台	9			8.4	ナデ、板ナデ	指オサエ、ハケ、ナデ	粗、礫含む	にぶい赤褐	2.5YR5/4	古墳前期	
053		027SU		土師器	甕脚台	10			8.6	オサエ、ナデ	ハケ、ナデ	粗、礫含む	橙	5YR7/8	古墳前期	
054		027SU		土師器	甕脚台	12			8.4	ナデ	ハケ	粗	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	スス付着
055		027SU		土師器	甕脚台	10			9.8	横ナデ、ナデ	ハケ , 横ナデ、ナデ	粗、礫含む	橙	2.5YR6/6	古墳前期	
056		027SU		土師器	甕脚台	6			9.8	ハケ、ケズリ	ハケ、ナデ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
057	d-145	027SU		土師器	甕脚台	8			9.5	板ナデ	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	粗、中礫含む	にぶい橙	7.5YR7/4	古墳前期	
058		027SU		土師器	甕脚台	6			8	ケズリ、ハケ	指オサエ、ナデ	粗、礫含む	橙	5YR7/8	古墳前期	
059		027SU		土師器	甕脚台	1			4.6	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	粗、礫含む	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
060		027SU		土師器	甕脚台	12			7.4	ハケ、ナデ	指オサエ、ハケ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
061		027SU		土師器	甕脚台	6			6.6	板ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	粗、礫含む	にぶい赤褐	2.5YR5/4	古墳前期	スス付着
062		027SU		土師器	甕脚台	2			5.8	板ナデ、ハケ	ハケ、ナデ	粗	浅黄橙	7.5YR8/3	古墳前期	
063		027SU		土師器	高坏	3	20			ミガキ、板ナデ	ミガキ．ハケ、ナデ	密	橙	5YR7/8	古墳前期	
064		027SU		土師器	高坏	体部5/1	接合部径4.4			ミガキ、板ナデ	ハケ→ミガキ	密、礫を含む	橙	2.5YR6/6	古墳前期	
065		027SU		土師器	高坏	口2底10	20.3	13.3	13.2	ミガキ、ハケ、ナデ、板ナデ	ミガキ、ハケ	密	橙	5YR7/8	古墳前期	穿孔３方向
066		027SU		土師器	高坏	3			13.2	ミガキ、ナデ	ミガキ	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	穿孔４方向
067		027SU		土師器	高坏	2			14.4	ハケ、ナデ	ミガキ	やや粗	橙	5YR7/8	古墳前期	穿孔３方向２段
068	d-424	027SU		土師器	高坏	1				ハケ	ミガキ	やや粗、礫含む	橙	2.5YR6/6	古墳前期	接合部径 3.9
069	d-144	027SU		土師器	高坏	1				しぼり、ナデ	ハケ、ケズリ	粗	橙	2.5YR6/6	古墳前期	
070	d-218	027SU		土師器	高坏	口1			13.4		ミガキ、横ナデ	粗	灰褐	5YR6/2	古墳前期	穿孔３方向
071	d-119	131SI (027SU 北)		土師器	高坏	1				ミガキ→ナデ、ケズリ	ミガキ、ナデ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
072		027SU		土師器	高坏	11			12.8	ナデ	ケズリ→ミガキ	密、礫を含む	橙	2.5YR6/6	古墳前期	穿孔４方向
073		027SU		土師器	高坏	3			11.8	ミガキ、ナデ	ミガキ、板ナデ	やや粗	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	穿孔３方向
074		027SU		土師器	高坏	11			13	ハケ→放射状のナデ	ミガキ	密、礫を含む	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	穿孔３方向
075		027SU		土師器	高坏	5			11.5	ハケ、板ナデ	ミガキ	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	穿孔４方向
076		027SU		土師器	高坏	1			11.6	板ナデ、ミガキ、ナデ	ミガキ	粗	にぶい橙	5YR7/4	古墳前期	穿孔３方向
077		027SU		土師器	高坏	3				板ナデ	ミガキ、ハケ	密	橙	7.5YR7/6	古墳前期	穿孔４方向
078		027SU		土師器	高坏	4			20	横ナデ、ナデ	ミガキ	粗	にぶい橙	5YR7/4	古墳前期	孔 1.6㎝
079		027SU		土師器	高坏	6			8	ケズリ	ミガキ	粗	にぶい橙	5YR7/4	古墳前期	
080	d-425	027SU		土師器	高坏	12	9.9	8.1	7.6	ナデ、横ナデ	横ナデ、ミガキ、ケズリ	粗	橙	5YR7/8	古墳前期	
081		027SU		土師器	高坏	10			7.9	ミガキ、板ナデ	ミガキ	やや粗	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	穿孔３方向
082		027SU		土師器	高坏	2	12			ミガキ、ナデ	ミガキ	密	橙	5YR7/8	古墳前期	
083		027SU		土師器	器台	11	19.6			ミガキ、ナデ	ミガキ　当て具の条線あり	密、礫を含む	橙	5YR7/8	古墳前期	穿孔３方向
084		027SU		土師器	器台	口12底10	7.8	9.5	13	ミガキ、ハケ→ナデ	ミガキ	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	穿孔３方向
085		027SU		土師器	器台	口2底2	7.6	8.9	9.4	ミガキ、ナデ、オサエ	ヘラナデ、板ナデか粗いミガキ	密	橙	2.5YR6/6	古墳前期	穿孔３方向（歪な穿孔）
086		027SU		土師器	器台	1	接合部径3.4		11.8	ミガキ、ハケ→ナデ	ミガキ	密	橙	5YR7/8	古墳前期	穿孔４方向
087		027SU		土師器	粗製小鉢	5				ハケ、ナデ	ナデ	粗	にぶい赤褐	5YR5/3	古墳前期	他２個体あり
088		027SU		土師器	粗製小鉢	4				ハケ	指ナデ　指オサエ	やや粗	にぶい橙	5YR6/4	古墳前期	
089		027SU		土師器	粗製小鉢	3				ハケ	指ナデ　指オサエ	やや粗	―	―	古墳前期	器表 10YR2/1 黒 内面 5YR6/4 にぶい橙

1 地点遺物観察表（２）

遺物観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長（cm）	器高幅（cm）	底径厚（cm）	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
090		027SU		土師器	壺（加飾）					ユビナデ指頭痕	クシガキ　ヘラガキ（鋸歯）	長石砂を含む	浅黄橙	10YR8/2	古墳前期	関東系の文様か？
091	d-380	001SM南		土師器	鉢	1				一部ヨコミガキ、ヨコナデ？	ヨコミガキ	密	にぶい黄橙	10YR7/4	縄文晩期	浮線文
092			検出	土師器	壺					ナデ	擬縄文、沈線、ミガキ		浅黄	10YR8/4	弥生中期	貝殻擬縄文
093			中部検出	土師器	壺	口4	18			ミガキ、羽状文、	ハケ、横ナデ、横線文	密	赤橙	10R6/6	古墳前期	外面に赤彩付着
094	d-170	019SK		土師器	壺	1				ナデ	ナデ、縄文	粗	橙	2.5YR6/6	古墳前期	
095	d-029	144SX		土師器	甕	6	19			横ナデ、ハケ、指オサエ	横ナデ、ハケ	粗、礫含む	橙	5YR7/8	古墳前期	ススト付着
096		129SU		土師器	甕	11	18.7			横ナデ、ハケ、オサエ	横ナデ、ハケ	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
097		129SU		土師器	甕	3				横ナデ、ハケ、オサエ	横ナデ、ハケ	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
098		129SU		土師器	甕	2				横ナデ、ハケ、オサエ	横ナデ、ハケ	密	にぶい橙	5YR7/3	古墳前期	
099	d-014	144SX		土師器	台付甕	7			9.4	ナデ、板ナデ、ハケ　オサエ	指オサエ、ナデ、ハケ	粗、礫含む	にぶい橙	2.5YR6/4	古墳前期	
100	d-307	西端		土師器	S字甕	1				ヨコナデ、頸部ヘラ調整、ナデ	ヨコナデ、ハケ	密、石英・チャート含む	橙	7.5YR7/6	古墳前期	ハケわずか
101	d-311			土師器	S字甕	8	16.6	幅24.6		横ナデ、オサエ、指ナデ、板ナデ	ハケ、横ナデ、指オサエ	粗	にぶい橙	7.5YR7/3	古墳前期	
102	d-414	146SK		土師器	高坏	?	20			ミガキ、ナデ	細かいハケ、ミガキ		橙	2.5YR6/6	弥生後期	
103	d-159	115SK		土師器	高坏					ミガキ、板ナデ	ハケ、ミガキ	密	橙	7.5YR7/6	弥生後期	文様あり、櫛十貝施文、スカシ3方向、接合部径3.7㎝
104	d-376	120SI		土師器	高坏	?	18.6	13.4	8.7	板ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ、指オサエ	やや粗、礫含む	にぶい橙	5YR7/4	弥生後期	ススト付着
105	d-001	東端		土師器	長胴甕	口7底12	20.8	42	6	板ナデ、指オサエ	ハケ、指オサエ	粗、礫含む	にぶい橙	5YR7/4	古代	
106	d-120	東端		土師器	長胴甕	11			7	ナデ、オサエ	板ナデ、ハケ、指オサエ	粗、礫含む	にぶい橙	7.5YR6/4	古代	ススト付着
107	d-034	001SM下層		土師器	長胴甕	5	21.1			板ナデ、ハケ、ナデ、オサエ	板ナデ、ハケ、指オサエ	粗、礫含む	灰褐	5YR6/2	古代	
108	d-418	東端		古代	甕	1	15.2			ヨコナデ、ハケ、板ナデ？	オサエ、ハケ	密、石英・長石角粒多	橙	2.5YR6/6	奈良	
109	d-432	西側		土師器	甕	6	13.6			横ナデ、板ナデ	横ナデ、ナデ、ハケ	粗、礫含む	橙	2.5YR6/6		ススト付着
110	d-353	049SK西		土師器	高坏					坏底部マメツ、脚部ナデ	脚部板ナデ	やや粗、礫・砂含む	橙	5YR7/6	古墳中期	接合部径3.0㎝
111	d-301	023SD		須恵器	蓋	1					ケズリ	密、砂含む	橙	7.5YR7/6	奈良	摘み径3.2㎝
112	d-357a	143SK		須恵器	碗	口10底12	12.4	3.75	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、手持ヘラケズリ	密、砂粒を含む	灰褐	5YR5/2	古代	
113	d-363b	143SK		須恵器	碗	口8底12	13	3.85		ロクロナデ	ロクロナデ、手持ヘラケズリ	密、砂粒を含む	褐灰	10YR4/1	古代	
114	d-357b	143SK		須恵器	無台坏	口11底12	13.4	4.55		ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	密、礫を含む	暗赤灰	10R4/1	古代	
115	d-363a	143SK		須恵器	碗	口11底12	12.8	4	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、手持ヘラケズリ	密、礫を含む	灰	7.5GY5/1	古代	
116	d-333	143SK		須恵器	盤	口11底11	15.2	2.7	10.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	密、礫を含む	暗赤灰	10R4/1	古代	自然釉付着
117	d-403	143SK		須恵器	蓋	口11底10	14.9	4.3		ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	密、礫を含む	暗赤灰	10R4/1	古代	摘み径2.3㎝
118	d-003	東端撹乱		須恵器	有台坏坏身	口6底6	15.3	3.4	12.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	密、礫を含む	赤灰	10R5/1	古代	
119	d-251	035SI		土師器	甕	1	21			ナデ	ナデ	粗	灰褐	5YR6/2	古代	
120	d-415	035SI		土師器	甕	1	28			ヨコナデ、オサエ、板ナデ	オサエ、板ナデ	密	浅黄橙	10YR8/3	平安前期	三河型
121			検出	常滑	大甕	2	33			ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、板ナデ	やや粗、礫を含む	暗赤褐	7.5R3/2	第10型式	
122	d-294	023SD		常滑	片口鉢	1			11.2		ケズリ	密、中礫含む	灰白	7.5Y7/1	常滑4～5型式	内底使用スレ、少しスス付着
123	d-266	023SD		常滑	片口鉢	2			14.6	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	粗、礫を含む	青灰	5B6/1	常滑4～5型式	
124	d-411	120SI		常滑	片口鉢	1			12.8	使用スレ	ケズリ	密、礫含む	灰白	10YR7/1	常滑4～5型式	
125			検出	瀬戸	山茶碗	1	13.6	5	5.8			密、礫含む	灰白	2.5Y8/2	第7型式	モミ痕、糸切
126	d-069	023SD		尾張系	山茶碗	1	14	4.2	5.8	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	密、砂粒・礫を含む	にぶい黄橙	10YR7/2	第10型式	
127	d-187	001SM		東濃系	山茶碗	口9底12	12.4	2.9	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	密	灰白	2.5Y7/1	大洞東段階	内面見込み部に重ね焼き痕有
128	d-080	023SD		東濃系	山茶碗	口5底3	12.8	4.1	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	密	明褐灰	5YR7/1	大谷洞段階	モミ痕有、重ね焼き痕有
129		023SD		東濃系	山茶碗	1	13	2.8	5.5			密	灰白	2.5Y8/2	大洞東段階か	無台碗、糸切
130	d-330	054SK		東濃系	山茶碗	1	12.6	3.5	5			密、砂礫含む	灰白	7.5Y8/1	大谷洞段階	モミ痕、糸切
131	d-076	120SI南		尾張系	山皿	口6底12	8.8	1.8	4.4	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	粗、礫含む	灰白	10YR7/1	第8型式	
132			西部検出	瀬戸	山皿	1	7.9	1.7	4.5			粗、礫含む	灰白	2.5Y8/2	第9型式	糸切
133			西部検出	東濃系	山皿	1	8	1	6.4			密	灰白	2.5Y8/1	大畑大洞段階	

遺物観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長（cm）	器高幅（cm）	底径厚（cm）	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
134	d-240	120SI		東濃系	山皿	6	8.8	0.9	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	明褐灰	5YR7/1	大洞東段階	
135	d-270	026SD		瀬戸美濃	碗底丸	12			4.9	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	にぶい黄橙	10YR7/2	中世	
136	d-060	023SD		尾張系	山皿	口4 底12	8.3	2	5.2	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	灰白	10YR7/1	第７型式	
137	d-304	098SK西		瀬戸	山皿	口3 底12	8.4	1.7	4.6	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	にぶい黄橙	10YR7/3	第８型式	
138	d-186	001SM		瀬戸美濃	丸皿	口10 底12	8.8	3	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	淡黄	2.5Y8/3	古瀬戸後期	施釉（灰釉）
139	d-126	026SD		瀬戸美濃	緑釉鉢み皿	口3 底6	11.4	2.4	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、施釉	密	にぶい黄橙	10YR7/2	大窯１	
140	d-065	023SD		瀬戸美濃	丸皿	口2 底12	9	2.8	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	灰白	10YR7/1	古瀬戸後期	施釉（灰釉）
141	d-136	036SD		猿投系	灰釉碗	7	―	―	8.1	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	密	灰白	N7/		焼き歪みあり、自然釉付着
142	d-259 d-265	023SD		瀬戸美濃	灰釉皿	口5 底5	31	9.1	13.3	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、ヘラケズリ、施釉	密	明オリーブ灰	2.5GY7/1	古瀬戸後期	
143	d-219	158SD		土師器	羽釜	3	20.7 最大 23.8			ロクロナデ、板ナデ、指オサエ	ロクロナデ、ナデ、ケズリ、ハケ	やや粗、礫を含む	にぶい黄橙	10YR7/2	中世	スス付着
144			検出	土師器	羽釜	1	21			板ナデ？	ヨコナデ、ハケ	密	淡橙	5YR8/3	中世	内湾型羽釜
145	d-286	030SK		土師器	羽釜	2	20.3 最大 23.7			ロクロナデ、板ナデ、指オサエ	ロクロナデ、ナデ、ハケ	やや粗、礫を含む	浅黄橙	7.5YR8/3	中世	スス付着
146	d-063	023SD 西側		土師器	伊勢型鍋	3	26.8			ロクロナデ、板ナデ、指オサエ	ロクロナデ、ナデ	密、礫・雲母を含む	にぶい黄橙	10YR7/2	中世	スス付着
147	d-322			土師器	伊勢型鍋	1	26.2			ヨコナデ	オサエ、ヨコナデ	やや粗、雲母・石英含む	浅黄橙	10YR8/3	中世	
148	d-331	041SK南		土師器	かわらけ	1	8	1.4	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密、礫含む	浅黄橙	7.5YR8/4	中近世	
149	d-002	159SK		土師器	かわらけ	口1 底7	8	1.9	5 0.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密、砂粒・礫を含む	橙	5YR7/6	中近世	
150	d-197	023SD		須恵器	不明					ナデ	ナデ	密	青灰	10BG5/1	不明	
151	d-288			陶器	瓦					布目	ムシロ目　ナデ消し	密	灰白	10YR7/1	平安末～鎌倉	平瓦・自然釉
152			検出	磁器	碗					線彫文様	（釉）		灰	7.5Y5/1	中世	龍泉窯系青磁

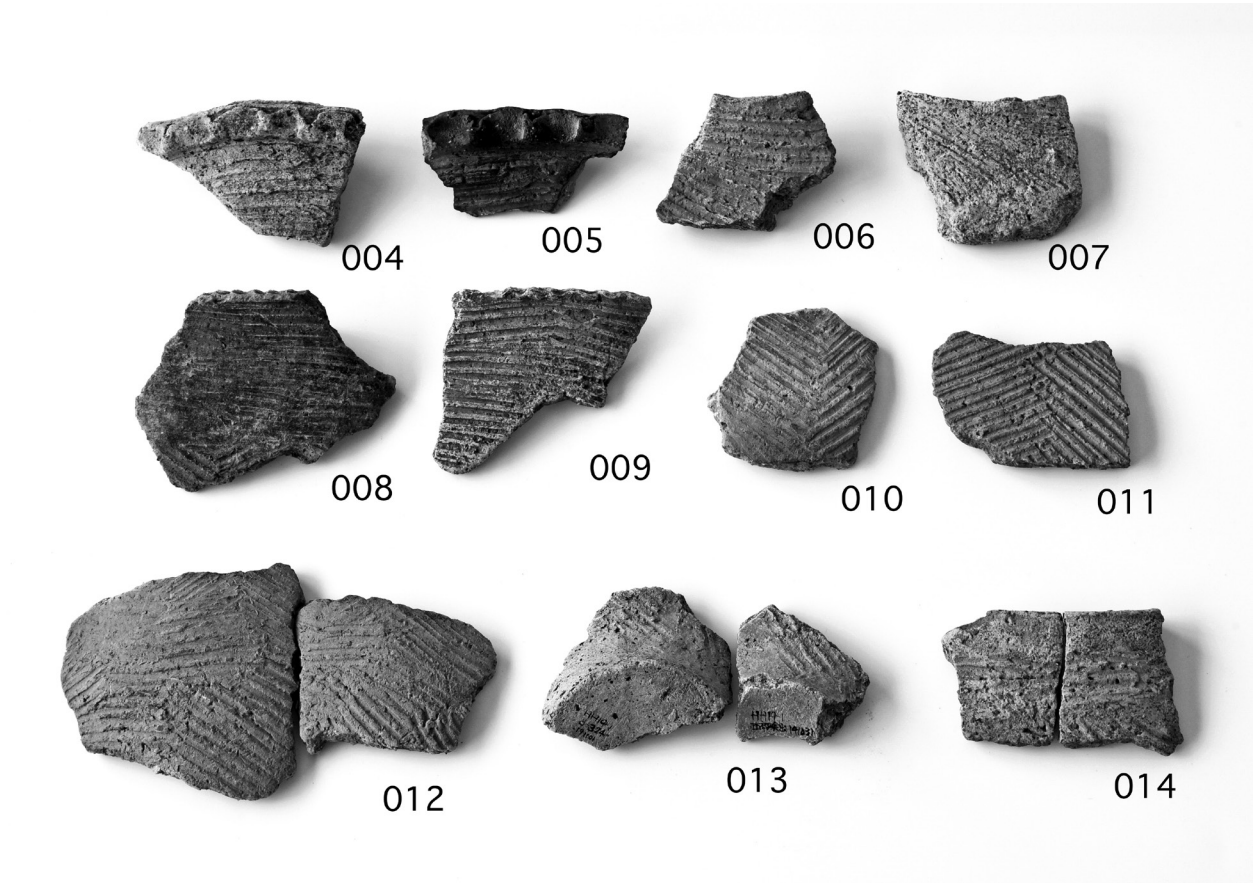
石器観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	種類	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考
153		027SU		砂岩	砥石	9.5	6.5	3.4	243.5	廻間式期
154		023SD		砂岩	石皿	13.7	10.4	6.2	1,300.0	被熱
155	d-047			土製品	砥石？	4.6	4.3	2.6	66.4	被熱
156	d-340			砂質凝灰岩	台石	11.9	9.6	4.0	457.0	被熱？
157	d-416			凝灰岩	砥石	7.6	4.0	1.8	68.4	原礫面
158			中部検出	砂質凝灰岩	砥石	4.6	3.7	1.5	28.9	被熱？
159	d-372			下呂石	石核	3.3	4.3	1.8	23.8	転石
160	d-315			下呂石	剥片	3.6	2.3	0.7	4.8	
161	d-335			下呂石	石鏃	3.2	1.7	0.5	2.1	茎部欠損
162	d-390			下呂石	石錐	3.1	0.8	0.7	1.6	原礫面

図版 20

002（d-358）

003



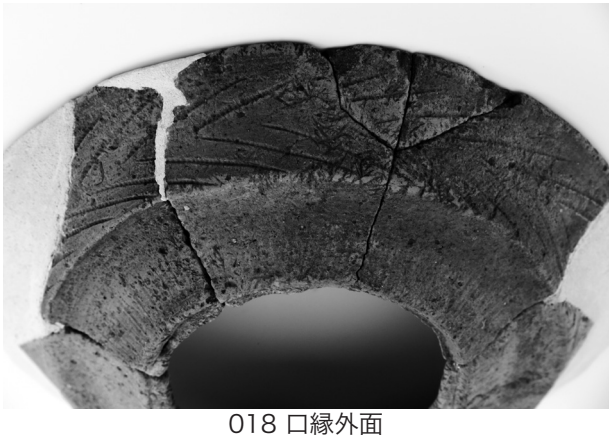
004~014 条痕文土器

015（d-283）土器棺

015 土器棺蓋

1 地点出土遺物（1）

018



018 口縁外面

019

020

021

022

023

024

1 地点出土遺物（2）

図版 22

025

026

028

029

030

030 内面

031

032

1 地点出土遺物（3）

033

033 内面

034

034 内面

035

035 内面

036

037

1 地点出土遺物（4）

図版 24

038

040

039

039 内面

041

042

043

044

1 地点出土遺物（5）

045 ～ 048 S 字甕

050 口縁部

050 下胴部

051

052

053

1 地点出土遺物（6）

図版 26

054

055

057

056

056 内側

058

059

060

061

062

1 地点出土遺物（7）

063

064

065

066

067

068

069

070

1 地点出土遺物（8）

図版 28

071

072

073

075

074

074 内面

076

077

1 地点出土遺物（9）

078

079

080

081

082

083

084

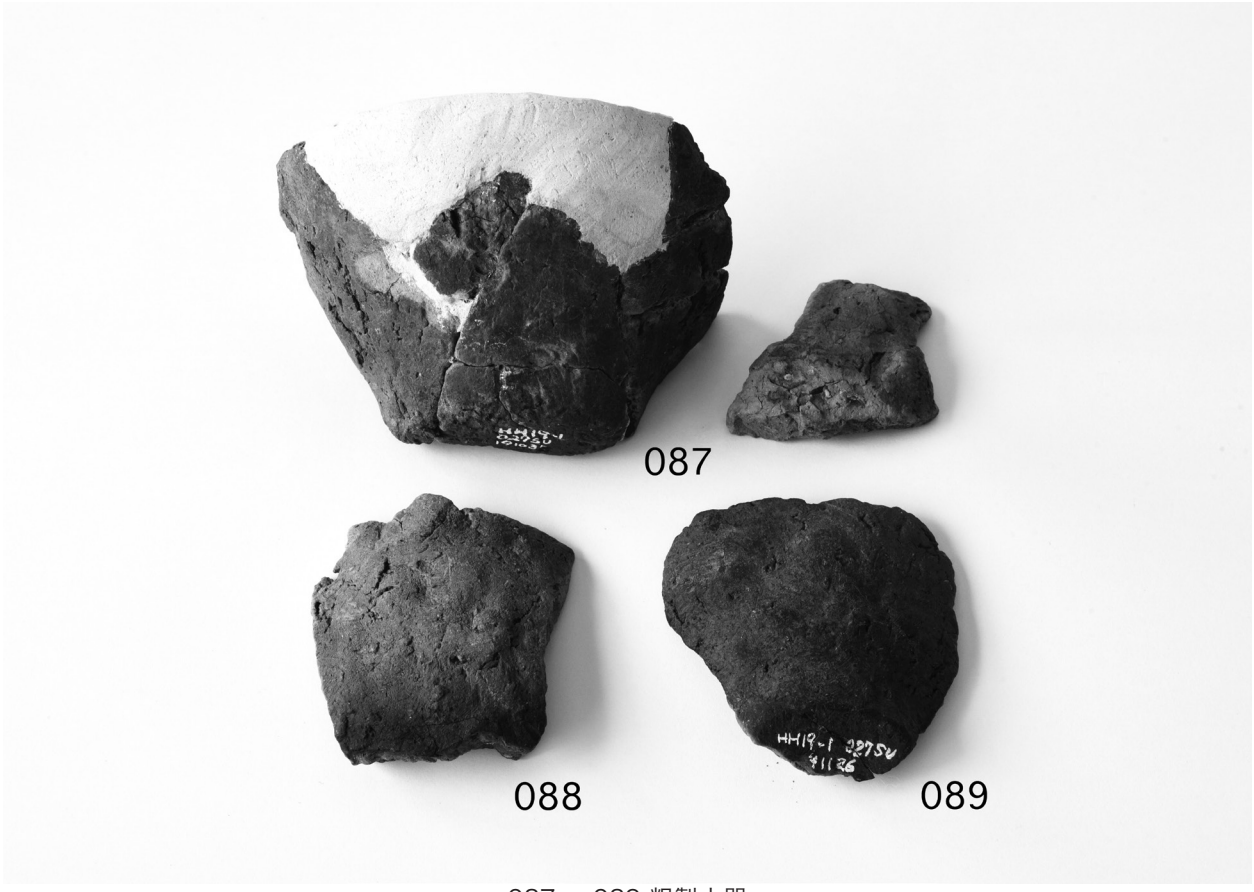
085

1 地点出土遺物（10）

図版 30

086

086 内面



087 ～ 089 粗製土器

090

091

092

1 地点出土遺物（11）

093

093

094

096

095

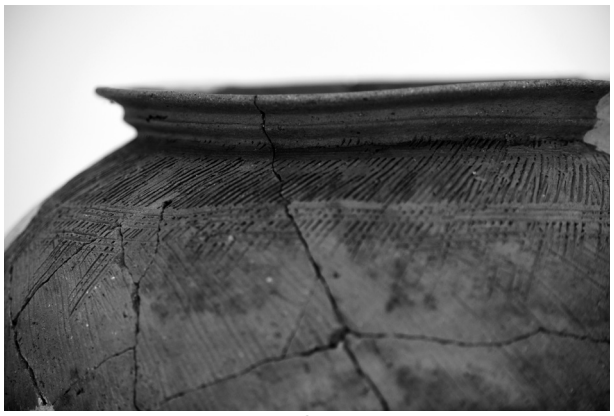
095 内面

099

100

1 地点出土遺物（12）

図版 32



101

102

103

104

105

106

107

109

1 地点出土遺物（13）

111

118

119

120

121

122

123

124

1 地点出土遺物（14）

図版 34

125

126

127

128

129

130

131

132

1 地点出土遺物（15）

133

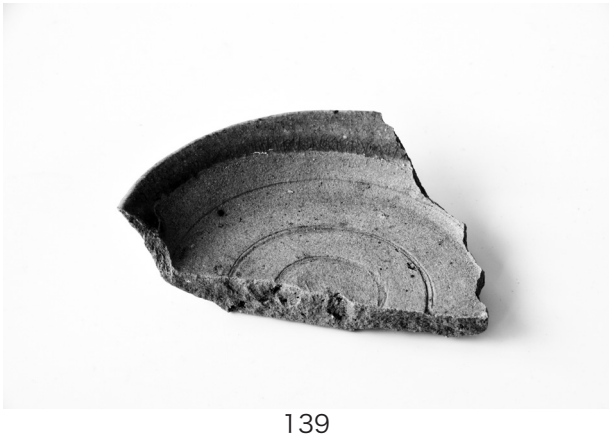
134

135

136

137

138



139

140

1 地点出土遺物（16）

図版 36

141

142

143

144

145

146

147

148

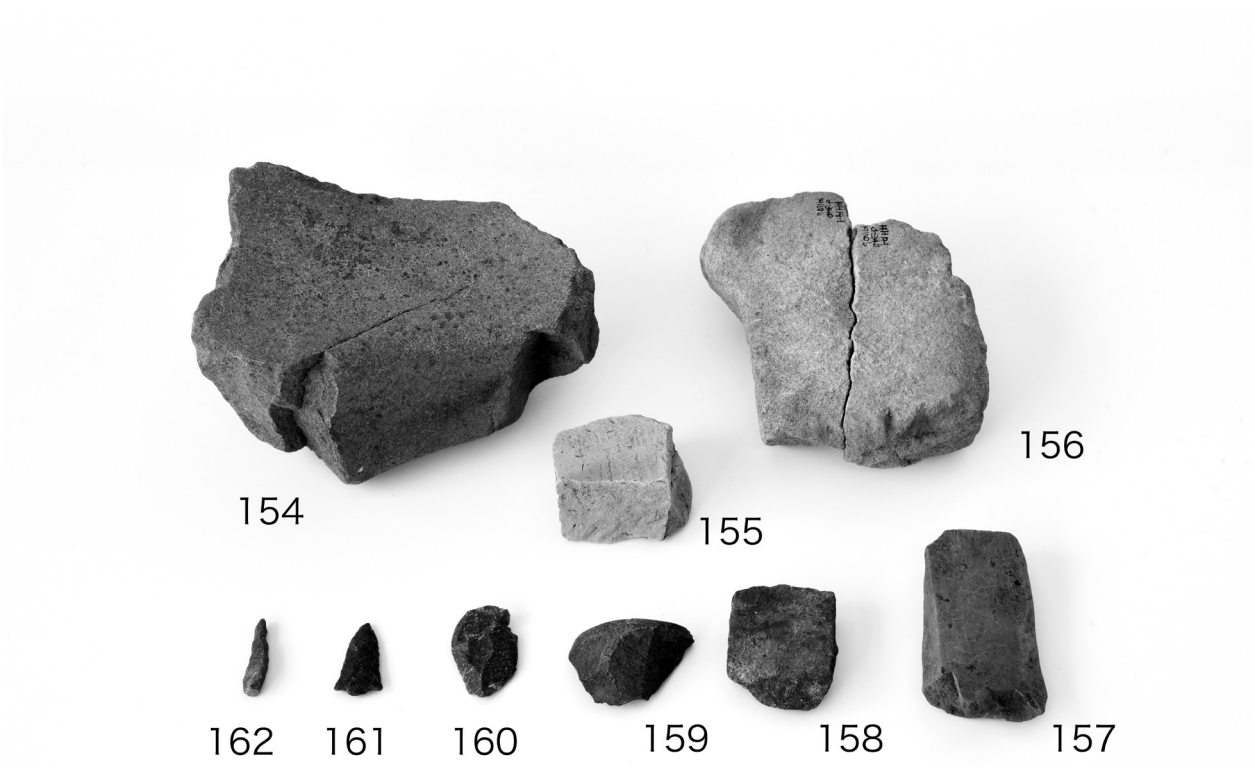
1 地点出土遺物（17）

149

150

152

153

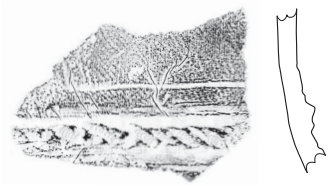


1 地点出土の石器

1 地点出土遺物（18）

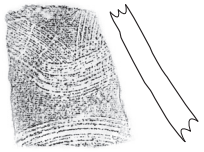
遺構観察表

遺構番号	グリッド	遺構	法量（cm）			平面	断面	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ				
001	2C8g・2C9g・2C8h	SX	(385.1)	278.0	34.7	不明	逆台形		
002	2C8g	SK	(199.2)	(153.8)	26.4	長方形	逆台形		
003	2C8f	SK	(181.5)	(116.5)	27.1	不明	逆台形		
004	2C8g	SK	166.8	(80.9)	53.8	長円	U字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
005	2C8g・2C9g・2C8h・2C9h	SK	371.7	(170.6)	32.9	不明	逆台形	10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂　混貝砂層	貝殻（まったく圧縮されていないものと圧縮され破砕されたもの）を大量に含む
006	2C9h	SK	(107.0)	(40.5)	23.5	不明	逆台形	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂　混貝砂層	貝殻（まったく圧縮されていないものと圧縮され破砕されたもの）を大量に含む
007	2C8g	SK	92.0	73.8	32.2	楕円	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
008	2C6c・2C7c	SK	(301.8)	(222.2)	56.6	不明	逆台形	10YR4/6 褐色中粒砂と 10YR3/4 暗褐色中～粗粒砂の斑土　混貝砂層	貝殻（まったく圧縮されていないものと圧縮され破砕されたもの）を大量に含む
009	2C6b・2C7b	SK	143.0	122.6	27.1	楕円	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂　混貝砂層	貝殻を大量に含む
010	2C7c	SK	(107.2)	76.4	47.1	不明	U字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土　混貝砂層	貝殻を大量に含む
011	2C6b	SX	(124.6)	(101.2)	38.0	不明	逆台形	10YR4/6 褐色中粒砂と 10YR3/4 暗褐色中～粗粒砂の斑土	粘土貼り遺構残欠
012	2C6c・2C7c	SK	144.0	85.6	46.8	楕円	U字		
013	2C5a・2C6a・2C5b・2C6b・2C6c	SK	1098.5	(344.2)	34.8	不明	逆台形	10YR4/6 褐色中粒砂と 10YR3/4 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
014	2C6c	SK	65.4	63.0	23.5	円	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
015	2B5s・2B5t	SK	(306.6)	(124.1)	32.7	不明	逆台形		
016	2C6a・2C6b	SK	209.5	(101.2)	10.1	不明	逆台形		
017	2C7c	SK	(219.6)	(59.3)	36.5	不明	U字		
018	2B5t・2C5a	SK	(88.4)	84.9	31.0	不明	逆台形	10YR2/2 黒褐色中粒砂	
019	2B4r・2B5r・2B5s	SM	519.4	79.8	-	長円	-	貝層	ほとんど破砕のみられない純貝層
020	2B4r・2B5r・2B4s・2B5s	SK	124.6	75.9	23.1	長円	U字	10YR4/6 褐色中粒砂と 10YR3/4 暗褐色中～粗粒砂の斑土	破砕された貝殻を含む
021	2B5r	SK	93.2	(56.1)	40.0	不明	U字		
022	2B4r・2B4s	SK	(209.2)	95.8	35.0	不明	U字		
023	2B5s	SK	50.8	37.3	32.8	楕円	U字		
024	2B5s	SK	(44.3)	38.3	16.7	楕円	V字		
025	2B5s	SK	49.7	35.6	38.9	楕円	V字		
026	2B5s	SK	39.6	(27.1)	37.6	楕円	U字		
027	2B5r・2B5s	SK	47.8	(20.3)	12.3	不明	U字		
028	2B5s	SK	46.0	(38.9)	29.7	楕円	V字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
029	2B5t	SK	45.1	29.2	35.5	長円	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
030	2B5t・2C5a	SD	(390.1)	64.0	17.9	-	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	
031	2B5t	SK	119.2	59.3	37.9	長円	U字		
032	2B4r・2B5r	SD	(312.0)	142.4	26.4	-	U字		
033	2B5t	SK	(89.2)	(28.6)	13.8	不明	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中～粗粒砂	
034	2C6c	SK	111.4	(83.0)	27.8	不明	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂	貝殻（まったく圧縮されていないものと圧縮され破砕されたもの）を大量に含む
035	2C8g	SK	36.9	34.0	9.1	楕円	U字	10YR3/4 暗褐色中粒砂と 10YR3/3 暗褐色中～粗粒砂の斑土	
036	2C8f	SK	44.3	34.2	15.2	楕円	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～粗粒砂	破砕された貝殻を含む
037	2C8f・2C8g	SK	41.6	34.5	16.7	楕円	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中～細粒砂	破砕された貝殻を含む
038	2C8g	SK	48.6	34.5	23.4	楕円	U字	10YR2/2 黒褐色中粒砂	破砕された貝殻を含む

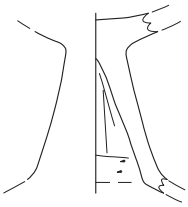


001：d-055
弥生土器壺

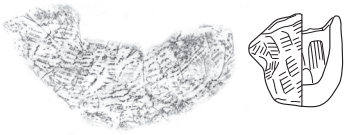
002：d-054
弥生土器深鉢



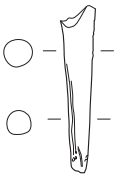
003
弥生土器壺



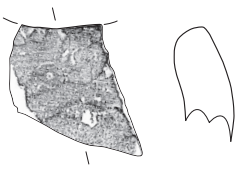
004：d-102
土師器高坏



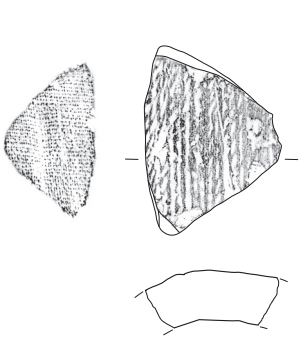
005
ミニチュア土器



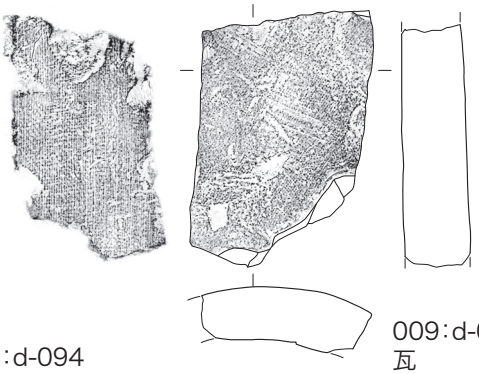
006：d-081
製塩土器



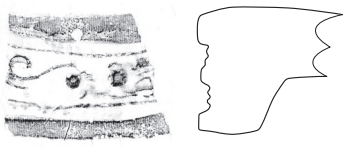
007
瓦製品



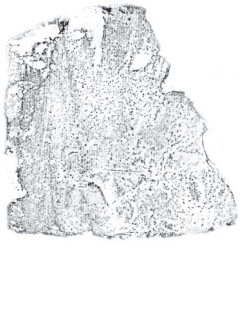
008：d-094
瓦

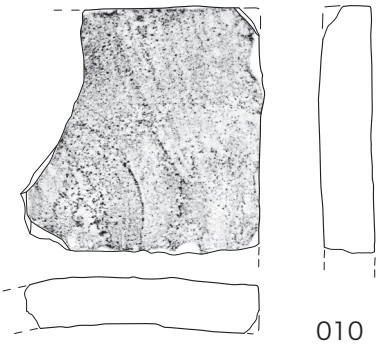


009：d-065
瓦

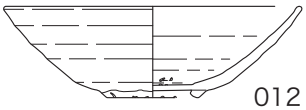


011：d-078
軒平瓦





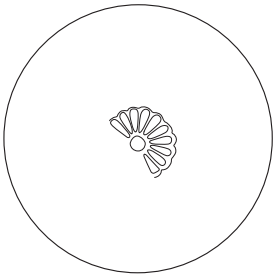
010
平瓦



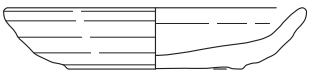
012
東濃系山茶碗

013：d-003
志野鉄絵皿

014：d-056
志野皿



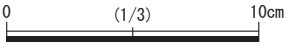
015：d-038
志野皿



016：d-058
志野皿

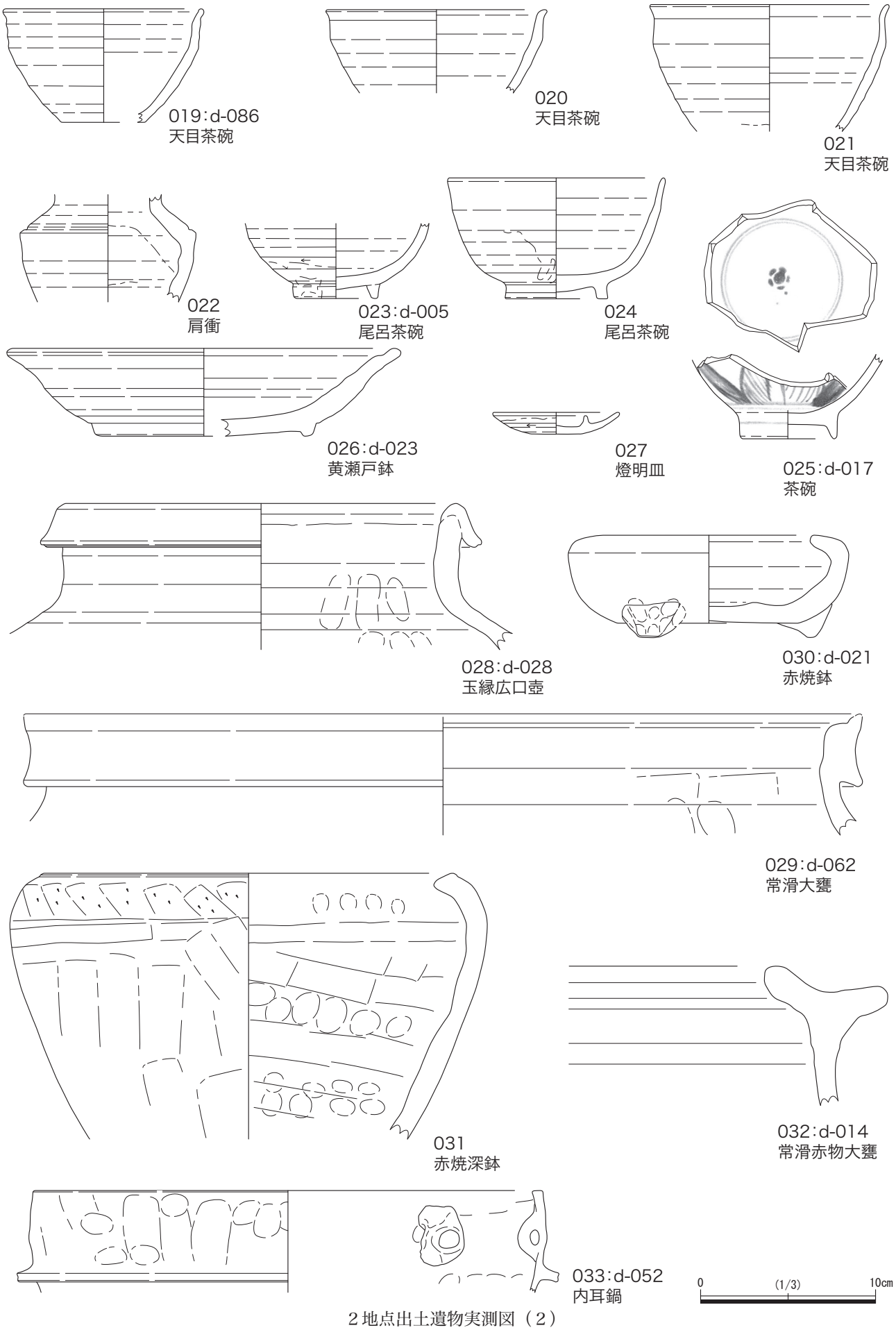
017：d-072
灰釉丸皿

018
卸皿

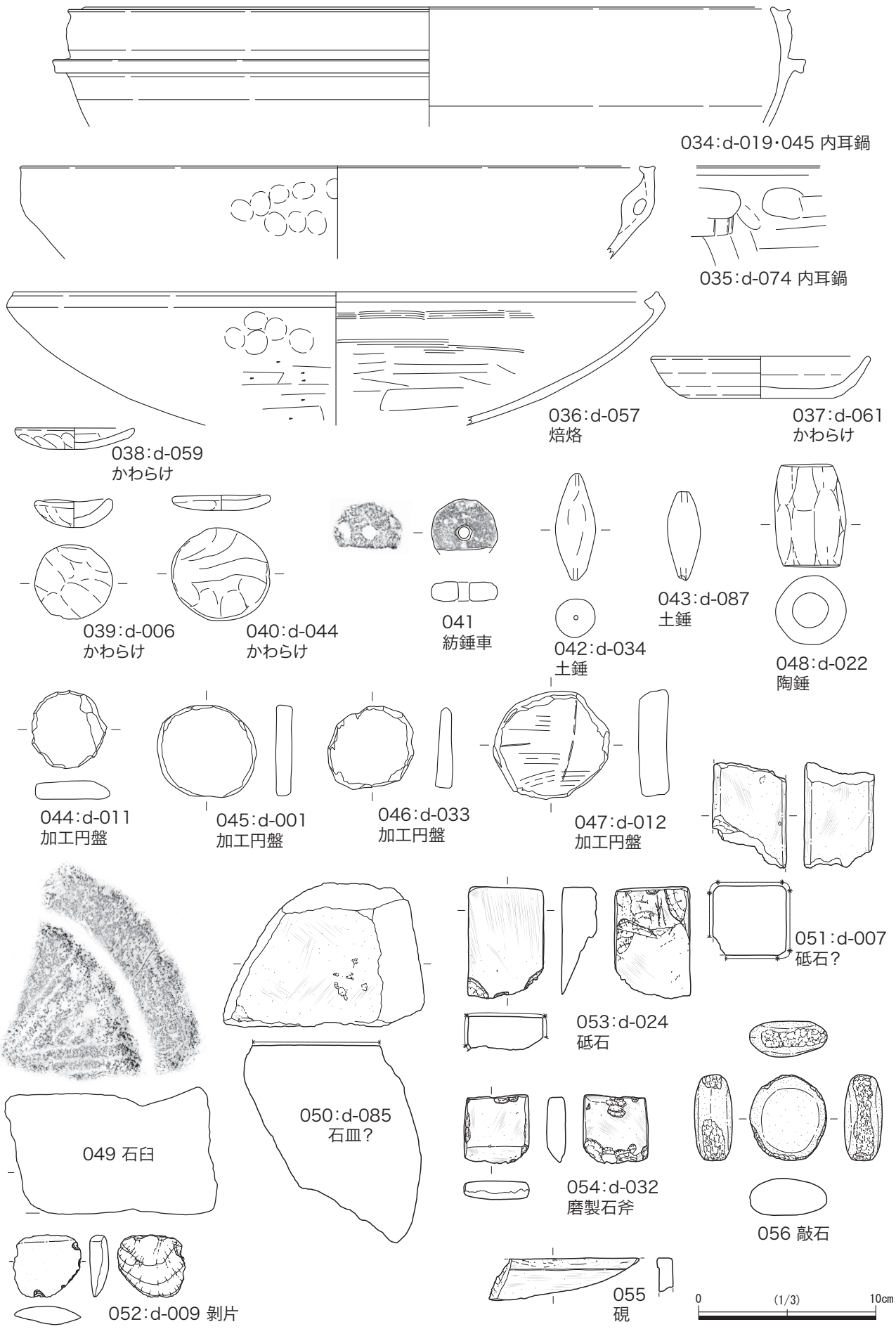


2地点出土遺物実測図（1）

図版40



2地点出土遺物実測図（2）



2地点出土遺物実測図（3）

遺物観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長（cm）	器高幅（cm）	底径厚（cm）	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
001	d-055				壺	1				ヨコハケ	ナデ	密	橙	7.5YR6/6	弥生中期	
002	d-054				深鉢	1			-3.3	条痕文		密	にぶい褐	7.5YR5/4	弥生中期	底部近く
003		003SK			壺	1				ナデ　指あと		緻密	褐灰	10YR4/1	中期古井式	ササラ文様
004	d-102			土師器	高坏	3				板ナデ	マメツ	密	赤橙	10R6/6	古墳時代	
005			検出	土師器	ミニチュア土器	口6 底12	3.8	3.7	2.0	オサエ、ハケ	オサエ、ハケ	やや粗、礫を含む	にぶい黄橙	10YR7/4	古墳時代か	
006	d-081			土師器	製塩土器	2					ナデ　擦痕	緻密	にぶい黄褐～橙	10YR5/4～5YR6/6	古代	知多式 4A
007		005SK		瓦	瓦製品	1					ヘラミガキ　指ナデ	緻密	灰白	10YR7/1	中世	
008	d-094			瓦	平瓦	1				布目	ムシロ目	緻密	灰白	10YR7/2	平安末～鎌倉	
009	d-065			瓦	平瓦	2				布目	ケズリ　ナデ	緻密	橙	7.5YR6/6	中世	
010			検出	瓦	平瓦	2				指ナデ	指ナデ	緻密　砂礫を含む	にぶい黄橙	10YR7/2	中世	
011	d-078			瓦	軒平瓦	2						密	灰	N 4/		燻し瓦
012			検出	東濃系	山茶碗	口4 底6	11.8	3.6	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	灰白	5Y7/1	大洞東段階	モミガラ痕
013	d-003			瀬戸美濃	志野鉄絵皿	口5 底5	11.6	2.2	7.5	ロクロナデ、鉄絵	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	灰白	2.5Y8/2	登窯1～2	外面にトチン痕、施釉　志野鉄絵皿（紅葉文様）
014	d-056			瀬戸美濃	志野皿	口4 底8	11.0	2.4	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	明赤灰	2.5YR7/2	登窯2	施釉（長石）、削り出し高台
015	d-038			瀬戸美濃	志野皿	口4 底4	11.2	2.3	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	淡赤橙	2.5YR7/4	大窯4後半から登窯1	施釉（長石）、削り出し高台
016	d-058			瀬戸美濃	志野皿	1	12.0	2.4	7.0			密	灰白	2.5Y8/2	中世末	削り出し高台
017	d-072			瀬戸美濃	灰釉丸皿	口10 底12	10.9	2.5	5.8	ロクロナデ、菊花文16弁	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	灰白	5Y7/2	大窯2	施釉（灰釉）
018			検出	瀬戸	卸皿	1				ナデ　格子線刻	ナデ　糸切痕	緻密	灰白	10YR7/2	中世	灰釉（一部）5YR6/6　橙色　緋色
019	d-086			瀬戸美濃	天目茶碗	口3	11.4			ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	暗赤褐	2.5YR3/4	登窯3	施釉（柿天目）
020		017SK		瀬戸美濃	天目茶碗	口2	12.6			ロクロナデ	ロクロナデ	密	黒褐	10YR3/1	登窯2	施釉（鉄釉）
021			検出	瀬戸美濃	天目茶碗	口2	13.6			ロクロナデ	ロクロナデ	密	黒褐	10YR2/2	登窯2	施釉（鉄釉）
022		017SK		瀬戸美濃	肩衝	底1		体部径10.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	黒褐	2.5Y3/2	登窯5～6	施釉（飴釉）
023	d-005			瀬戸美濃	尾呂茶碗	底12			4.8	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	黒褐	7.5YR3/2	登窯7	施釉（飴釉）
024			検出	瀬戸美濃	尾呂茶碗	口1 底12	12.4	6.9	5.8	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	黒褐	2.5Y3/2	登窯5	施釉（飴釉）
025	d-017			瀬戸	茶碗	底12			5.5			密	灰白	7.5Y8/1	登窯9～10	絵付け　広東碗系
026	d-023			瀬戸美濃	黄瀬戸鉢	口12 底12	22.6	5.0	12.3	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ、ナデ	密	灰白	5Y7/2	登窯1～2	施釉（黄瀬戸）
027			検出	瀬戸美濃	灯明皿	口6 底12	7.2	1.7	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	浅黄橙	10YR8/3	登窯11	施釉（灰釉）
028	d-028			常滑	玉縁広口壺	口3	25.2			ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ	密	青黒	5B2/1	常滑6b型式	
029	d-062			常滑	大甕	口2	(49.0)			ロクロナデ、板ナデ、指オサエ	ロクロナデ	密	黒褐	7.5YR3/2	常滑9b型式	
030	d-021			常滑か	赤焼鉢	1	12.0	5.8		ヨコナデ	ヨコナデ	密、礫含む	赤褐	10R5/4	中近世	3足付、スス付着、最大径16.0㎝
031		010SK		常滑	赤焼深鉢	口3	23.8			ロクロナデ、板ケズリ、指オサエ	ロクロナデ、板ケズリ	密、礫を含む	赤	7.5R4/6	17世紀	
032	d-014			常滑	赤物大甕	1				ロクロナデ	ロクロナデ	密	明黄褐	10R6/8	18世紀後半	赤焼
033	d-052			土師器	内耳鍋	口2.4	29.2			ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4		スス付着　内耳4方向
034	d-019 d-045			土師器	内耳鍋	口3	38.8			ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗灰	N 3/		スス付着
035	d-074			土師器	内耳鍋	口1	35.0			ロクロナデ、板ナデ	ロクロナデ、指オサエ	密	にぶい黄橙	10YR7/2		スス付着
036	d-057			土師器	焙烙	2	37.2			ロクロナデ、ハケ、板ナデ	ロクロナデ、指オサエ、板ケズリ	密	にぶい赤橙	10R6/4		スス付着
037	d-061			土師器	かわらけ	口1 底3	12.4	2.4	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	にぶい橙	5YR7/4		
038	d-059			土師器	かわらけ	口8 底8	7.0	1.2		板ナデ、ナデ	ナデ、指オサエ	密	にぶい橙	5YR7/4		型押し
039	d-006			土師器	かわらけ	口12 底12	4.4	1.6		指オサエ	指オサエ	密	にぶい橙	2.5YR6/4		手づくね
040	d-044			土師器	かわらけ	口12 底12	5.5	0.9		ナデ	ナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4		手づくね
041			検出	土製品	紡錘車	12	3.7		1.0		ナデ？	粗	にぶい橙	7.5YR7/4	中近世	欠損
042	d-034			土製品	土錘	12	最大幅2.3	6.0				密	にぶい橙	7.5YR7/4		孔0.2㎝
043	d-087			土製品	土錘	12	最大幅1.8	5.0		マメツ	マメツ	密	にぶい橙	7.5YR7/4		孔0.3㎝
044	d-011			常滑	加工円盤	12	4.4	4.2	1.0			密	にぶい橙	5YR7/3		片口鉢底部

遺物観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長（cm）	器高幅（cm）	底径厚（cm）	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
045	d-001			瀬戸美濃	加工円盤		5.2	5.6	0.9			密	赤褐	10R4/4		擂鉢
046	d-033			瀬戸美濃	加工円盤	口 12 底 12						密	暗赤褐	10R3/2		擂鉢
047	d-012			瓦	加工円盤		6.1	6.6	1.6			密	暗灰	N3/		燻し瓦
048	d-022			土製品	陶錘	12	2.8	5.9	3.1		指ナデ、ヘラケズリ	密	暗灰	N3/		孔 1.7㎝

石器観察表

図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	種類	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量(g)	備考
049			検出	花崗岩	石臼	12.0	11.4	7.15	2,325.0	
050	d-085			砂岩	石皿？	6.8	8.8	11.7	1,280.0	
051	d-007			土製品	砥石？	5.6	4.2	3.9	103.8	土製品？
052	d-009			泥岩	剥片	3.5	3.9	1.1	18.0	泥質頁岩？
053	d-024			凝灰岩	砥石	6.4	4.2	1.9	64.9	
054	d-032			ハイアロクラスタイト	磨製石斧	3.9	3.6	1.0	29.2	
055			検出	緑色凝灰岩	硯	8.3	2.4	0.8	21.9	小破片
056			検出	石英岩	敲石	4.8	4.3	2.0	62.8	石器製作用敲石

図版 44

001

011

005 ミニチュア土器

012

013

2 地点出土遺物（1）

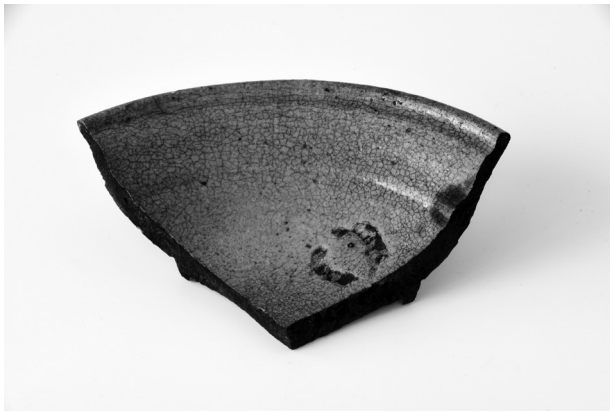
014

015

023

024

025



026

027

028

2 地点出土遺物（2）

図版 46

029

030

039

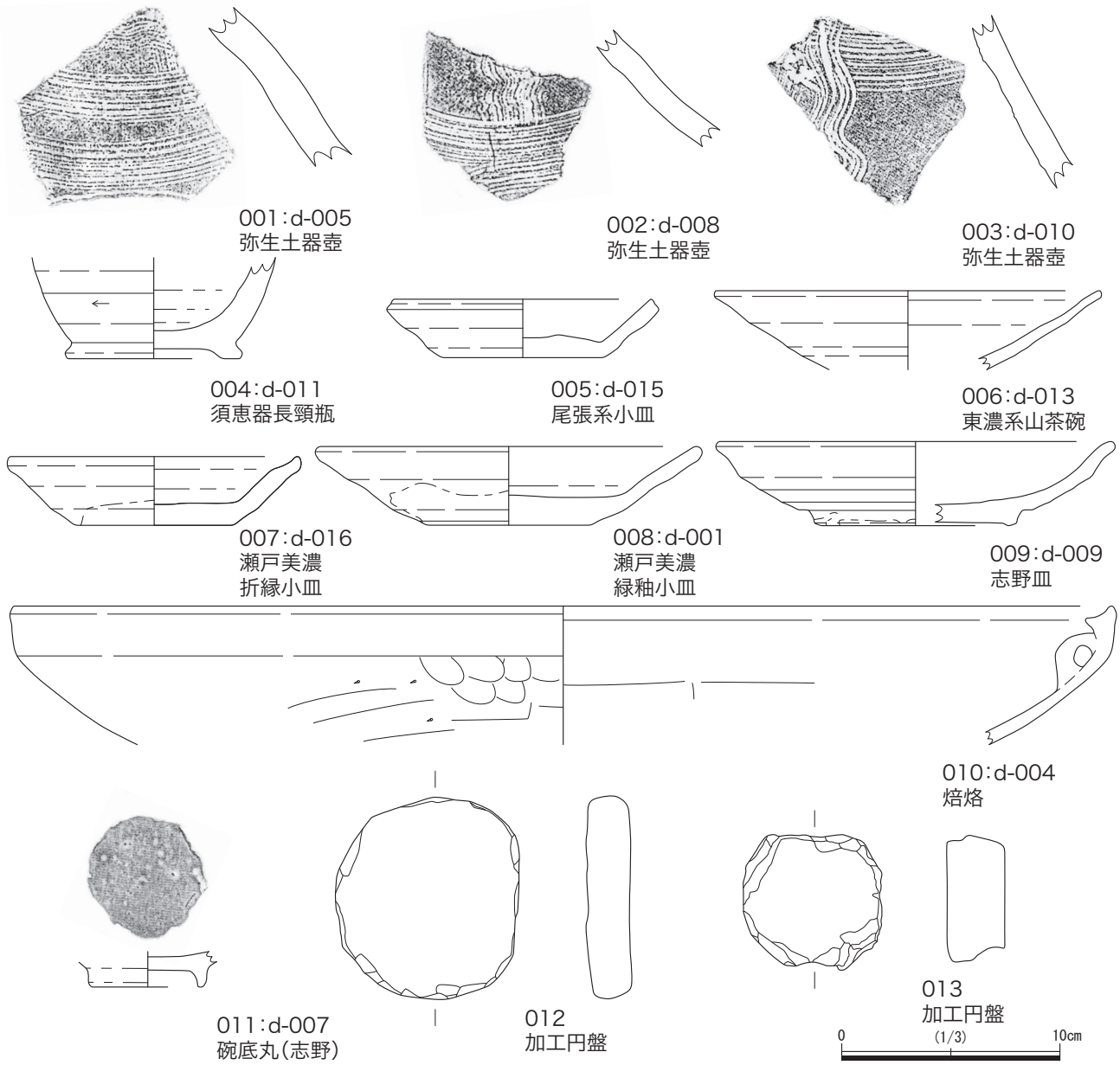
048

２地点出土遺物（3）

遺構観察表

遺構番号	グリッド	遺構	法量（cm）			平面	断面	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ				
001	3B4h	SK	(143.2)	(32.0)	37.8	不明	U字	10YR6/4 にぶい黄橙色中～細粒砂	
002	3B3i・3B4i	SK	174.7	124.1	22.4	長方形	逆台形		
003	3B3i	SK	188.0	52.3	92.2	不明	V字		
004	3B3i・3B4i・3B4j	SK	109.2	83.3	12.4	楕円	皿	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
005	3B4h・3B4i	SK	82.3	(76.0)	87.1	楕円	U字	10YR6/4 にぶい黄橙色中～細粒砂	
006	3B4i	SK	43.7	42.8	21.0	円	U字	10YR3/3 暗褐色中～細粒砂	
007	3B4h	SK	63.3	41.7	17.1	楕円	U字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
008	3B4h・3B4i	SK	62.2	53.6	14.5	楕円	U字	10YR4/4 褐色中～粗粒砂	
009	3B3h・3B4h	SK	74.3	59.8	88.0	方形	U字		
010	3B3g	SK	74.1	44.4	54.9	長円	V字	10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂と 10YR4/4 中粒砂の斑土	
011	3B3f	SK	85.0	73.4	48.0	方形	U字		
012	3B2g・3B3g・3B2h・3B3h	SK	(141.3)	(86.9)	22.0	不明	U字		
013	3B3g	SK	44.8	35.3	11.6	楕円	皿		
014	3B2g	SK	(48.9)	(30.7)	24.7	不明	V字	10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂と 10YR4/4 中粒砂の斑土	
015	3B3g	SK	43.9	41.7	47.7	方形	U字	10YR3/3 暗褐色中～細粒砂	
016	3B3i・3B3j	SK	78.7	27.9	19.9	不明	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂	
017	3B4h	SK	78.8	64.5	30.9	楕円	U字		
018	3B3g・3B4g・3B4h	SK	(395.2)	(88.2)	21.3	不明	逆台形		
019	3B4h	SK	33.5	20.3	19.7	楕円	U字	10YR3/3 暗褐色中～細粒砂	
020	3B4h	SK	82.1	28.8	61.1	長円	V字	10YR3/3 暗褐色中～細粒砂	
021	3B4h	SK	34.1	30.9	60.1	丸	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂と 10YR4/4 中粒砂の斑土	
022	3B3j・3B4j	SK	71.7	42.1	26.1	不明	U字		

図版 48



図版番号	取上番号	遺構番号	層位	産地材質	器種	残存率(1/12)	口径長(cm)	器高幅(cm)	底径厚(cm)	内面	外面	胎土	色調	色調記号	時期	備考
001	d-005				壺	1				ナデ	ササラ文様	密	灰黄褐	10YR4/2	中期古井式	
002	d-008	010SK			壺	1				ナデ	ササラ文様	密	灰黄褐	10YR4/2	中期古井式	
003	d-010				壺	1				ナデ	ササラ文様	密	にぶい黄橙	10YR5/3	中期古井式	
004	d-011			須恵器	長頸瓶	6			5.4	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ、ナデ	密、礫を含む	褐灰	10YR6/1		自然釉付着
005	d-015	021SK		尾張系	山皿	口1底12	8.3	1.8	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密、礫を含む	灰白	N7/	第7型式	自然釉付着
006	d-013			東濃系	山茶碗	4	11.8			ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰白	5Y7/1		
007	d-016			瀬戸美濃	折縁小皿	口4底12	9.0	2.1	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	浅黄橙	10YR8/3	古瀬戸後期Ⅰ	施釉（灰釉）
008	d-001	018SK		瀬戸美濃	緑釉小皿	口4底12	11.8	2.4	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切痕	密	にぶい黄橙	10YR7/2	古瀬戸後期Ⅰ	施釉（灰釉）
009	d-009	018SK		瀬戸美濃	志野皿	口1底5	12.2	2.6	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	密	灰白	10Y7/1	大窯4後半	志野小皿
010	d-004			土師器	焙烙	3	33.8			ロクロナデ、板ナデ、指オサエ	ロクロナデ、板ケズリ、指オサエ	密	にぶい橙	2.5YR6/4	近世	
011	d-007	011SK		瀬戸美濃	碗底丸	12			3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰白	10Y8/1	登窯1～2	志野小碗
012			検出	常滑	加工円盤	12						密、礫を含む	橙	2.5YR7/8	常滑12型式	片口鉢Ⅱ類
013			検出	瓦質	加工円盤	12						密	暗灰	N3/		瓦

3地点出土遺物実測図、遺物観察表

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんど　はたま・ひがしはたいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	令和元年度　畑間・東畑遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂野俊哉・早川由香里・石黒立人・新美倫子・㈱パレオ・ラボ・樋田泰之
編集機関	株式会社四門　名古屋支店
所 在 地	〒453-0014　愛知県名古屋市中村区則武1-19-13ＫＳビル　　Tel 052-451-5531
発行機関	愛知県東海市教育委員会
所 在 地	〒476-8601　愛知県東海市中央町一丁目1番地　　Tel 052-603-2211
発行年月日	2021年3月31日

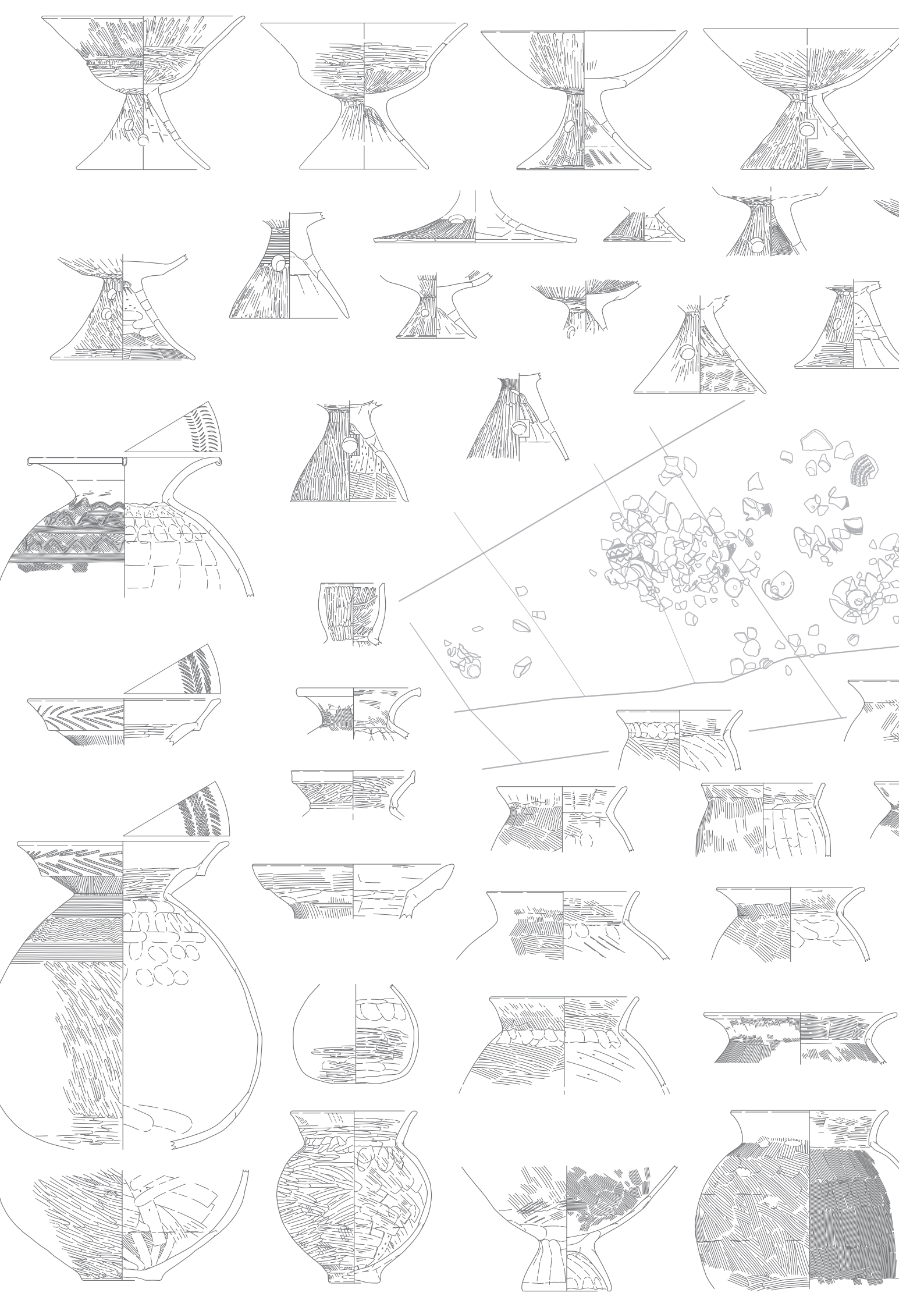
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ハタマイセキ 畑間遺跡	アイチケン　トウカイ　シ 愛知県東海市	23222	43050	35 0 59	136 53 46	20190819～20191217	740㎡	土地区画整理
ヒガシハタイセキ 東畑遺跡	アイチケン　トウカイ　シ 愛知県東海市	23222	43052					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東畑遺跡 (1地点)	集落跡	弥生・古墳・古代・中世・近世	住居址・溝	弥生土器・S字甕・須恵器・中世陶器・近世陶磁器	古墳時代前期の住居と土器集積・奈良時代の住居と須恵器 中世の区画溝
畑間遺跡 (2地点)	集落跡	中世・近世	溝・土坑	条痕文土器・土師器 中世陶器・近世陶磁器	近世の粘土貼り遺構と大規模貝層
畑間遺跡 (3地点)	集落跡	中世・近世	溝・土坑	弥生土器・ 中世陶器・近世陶磁器	柱穴と近世のタタキ跡

愛知県東海市

令和元年度

畑間・東畑遺跡発掘調査報告

令和 3 年 3 月 18 日印刷
令和 3 年 3 月 31 日発行

編　　集　株式会社　四門　名古屋支店
〒453-0014　愛知県名古屋市中村区則武1-19-13
TEL 052-451-5531
発　　行　愛知県東海市教育委員会
〒476-8601　愛知県東海市中央町一丁目１番地
TEL 052-603-2211・0562-33-1111（代表）
印刷・製本　西濃印刷　株式会社
〒500-8074　岐阜県岐阜市七軒町15番地
TEL 058-263-4101